
能力者は赤信号を認めない ~ 彼らの遅すぎる青春 ~

aoringo

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

能力者は赤信号を認めない　　〜彼らの遅すぎる青春〜

【Nコード】

N7712Y

【作者名】

a o r i n g o

【あらすじ】

何の因果か転校させられた学園で仲良くなったのは、誰も彼も桁外れな能力を持った人ばかり。　　だけどこいつら、目を離すと何やらかすかわかったもんじゃない！

一人の普通の少年と、四人の最高ランク5の能力者が、理想の青春を求めて、VRゲームに海に山にデートに異世界に！　　何でもかんでも濃縮してどたばた騒ぎ！！　　巻き込まれ系主人公の非日常的な日常観察記になる予定。

話数が多くなってきましたが、一応章ごとに区切られていて、話

ががらりと変わっていくのでいつまでも話が続く、という形にはならないです。多分。

感想でびしびし書いてください！

現在、最初の方から改訂して行っております。特に内容の変更はありません。

現在VRMMORPG編中

開話 彼らは始点に立つ

彼は、体中を防寒着を何枚も着こんでその場所に立った。彼は今、まさに偉業を達成した瞬間であつた。

彼は両手を挙げて喜ぶ振りをした！

この世界！！広大な世界！！

俺の成し遂げた偉業を知れ！

そして見る。左を、右を、後ろを！前を！！下を！！360度！

雲の上である。俺は雲の上に立っている……！！

がくりと膝を突く。体を覆う全ての衣服を脱ぎ捨てて、涙を枯らして叫びたい。嗚呼、世界はかくも美しい！！

だが、涙は出ない。それだけの水分はもうない。うなだれて顔が赤くなるだけである。服を脱ぐと凍え死ぬ。

ここはアルプス山脈。地上4478mのマッターホルン山の頂上である。

長かったここまでの旅路を思いだし、彼はただただ震えていた。

そのまま一分程度、全てを噛みしめるようにそうしていたが、突然。

「……もういいだろう」

そう言いつつ彼は立ち上がると、彼を見ていた、たった「一人」の観客の電源をoffにした。

中学卒業記念に、夏休み丸々潰す計画を立てて登ったアルプス山脈。マッターホルン。なるほど。たしかに美しい。しかし、こんなものか……。

右手でビデオカメラを弄びつつ、それまで彼を包んでいた壮大な景色に、一切の感慨も無く彼は下山し始めた。

さあ、早く降りないと間に合わない。彼は無線機を取り出して、下山の指示をスタッフ達に出した。

彼にとって山は確かにすばらしかった。しかし、それでは得られない物を、彼はここに求めてしまっていた。

そう、ここではない。ならば行かねばならない。『スタート地点へ。』

「二週間以内に日本に戻るぞ。間に合わないからな……」

彼は、両手をぶらりとたらし、ぼけつと立っていた。両目はどこにも焦点の合っていないようで、しかし全てを見ていた。

砂塵の舞いそうなほどに寂れた住宅街。アメリカのどこかかもしれないし、イスラエルなどの昔話に出てくる紛争地帯なのかもしれない。だけど彼には < ruby>< rb>そんなこと < rb>< rp>< /rp>< rt> …… < rt>< rp>< /rp>< ruby>、どうでも良かった。

少なくとも、彼が慣れ親しんだ町ではないどこか。微動だにせず、人気のない寂れた住宅街で、彼は何かをただただ待った。

自分の呼吸の音と、それに併せた衣擦れの音すら彼には騒がしく感じる。タイムアップのカウントが近づく。「おちつけ、相手も焦っている」自分自身を落ち着けるように一人つぶやく。瞬間、目の端に動きを感じる。

見つけた……！！

腰をひねりながら、右手にぶら下げていた自分の獲物を振り上げ左手で支える。

弾は装填済み、セーフティも外してある。吸い付くようにスコープが対象に照準を合わせる。「スナイパーライフル」遠くの敵を殺すどおぐ。その程度の知識しか、彼にはない。たがそれでいい。扱い方さえ間違わなければほらこの通り。

ッダーン！！

音が先か、赤い花の咲くのが先か、判断に迷うタイミングでスコープの先、敵の頭に真赤な真赤な花が咲いた。恐らく、あれで最後の一人。

カウンターテロリスト ウィン

無機質な勝利メッセージが、音声と共に彼の眼前に広がる。

彼はいつもの癖で、ささっとメッセージを解除する。これで世界三位になったのか……。感慨は薄い。確かに少しはうれしいけれど、なんというか、こういふのじゃない……。

「おめでとうケット！！すっげーな！！マジかよ！！しんじられねー！！これで世界三位だ！！それで明日なんだけ……」

耳に仲間の声が聞こえる。勝った事に興奮を隠せないようだ。

「それじゃ、俺そろそろ落ちるから」

「え……」

乱暴にメニューから接続切断を選択。ゲーム終了。今まで高負荷な処理をしていたのであろう、背後の機械からファン音が小さくなる。

身体リンク切断。ゆっくりと体を起こす。

明日は彼女にとっての一大イベントがある。彼女にとって何よりも大切な、生活の始点が明日にはあった。

「明日から……」

スポットライトが当たる。彼女を中心に真円にぽっかり浮かんだ光の輪。

彼女の手の届く範囲にきっかりと、計算された光の輪である。

左手をゆっくりと上げる。右手に視線が集まるのがわかる。そしてゆっくりと下ろし胸の上へ。左手でスカートのフリルをつまみ、ゆっくりと腰を曲げる。

「ありがとうございました」

これで彼女の全ての日程は終了した。

会場を割れんばかりの拍手が、彼女を包む。

これこそが、彼女の成功の証だと言っていていいだろう。たかが高校生の小娘一匹。箱は小さいが、世界中を回って一人芝居を行った。

彼女は、体全てを使って全てを表現した。彼女は彼女であった時間もあつたし、彼でもあつた。そして彼らでもあつて。我々でもあつた。

最期の地はラスベガス。一時寂れたとはいえ息を吹き返し、今では昔のように光きらめくカジノ都市として昔と同じ息吹を感じさせている。

そんな中で、彼女は演じた。小さな小さな箱の中で。

指を折ればその指先に妖精を感じた。

息を吐けば草原を感じた。

ひとたび声を出せばもう、彼女は彼女ではなくなり、一人の老婆が姿を現した。

誰一人として身動きができなかった。瞬きすらも惜しい。

『まるで幻術のようだ』

『詐欺でも暗示でも魔法でもなんでもいい。もう一度彼女の演技を拝みたい』

彼女の箱は小さい。100名入るか入らないかの小さな箱。

だが、見た人は皆涙を流して、大枚を叩いて、それを見た。そして、その夢も、もう覚めた。

彼女は拍手に背を向けて、ゆっくりと舞台を降りた。

その表情は今までとは別。どんな表情も顔には張り付いていない。

その顔はただの……。

彼女はさつと表情を貼り付けてマナージャーに笑顔を向けた。浮かへて

その顔は女子高生のあどけなさ、そのままである。彼女は急いでいた。今までの全てを取り戻すために、始まりに立たなければいけなかった。

「さ、日本にかえる なんつたつて来週は……」

しん……と静まりかえったプレハブ小屋の中で、か細い声だけが響く。

数名の人間が、一人の少女の指先に視線を集中させている。

あたりを覆う圧倒的なプレッシャーは、彼女がただならぬ者だと容易に想像できる。……たとえどんな異能を、身につけていなかったとしても。

「……ここに……ここに……」

彼女が指さす先には、テーブルに広げられた一枚の地図。あたり一体、100km四方を切り取った市街地図だ。

そこを無造作に、指で指していく。周りはざわめいて慌てたように、その指が示した地点にピンをさしていく。

「ここに指が……けど腕はこっちです……。ここには携帯電話……いえ、ボイスレコーダー？」

さらに指を右へ、左へと動かす。そこへ周りの者が、どんどんピンを刺していく。ピンク、黄色、青、白……。

「えっと・・・下水の地図はありませんか？」

横で数枚の地図を抱えていた一人が、慌てて新しい地図を広げる。

「ここに・・・頭が引つかかっています。流れが速く・・・ちよつと・・・これは？埋まってる？」

その後も、彼女が指が踊る通りに合せて、箇所ピンをさす作業が黙々と続けられた。

それはまるで、地図上の舞踏。

彼女は何を見ているのだろうか、いや、何を感じているのだろうか。

まさに異常。まさに異常。

途中、そのプレッシャーに耐えられなかった一人が、顔を真っ青にして外へ出て行く。他の者も、背中が冷や汗でじっとりとしめつている。

天井についでる蛍光灯が、ヴーン・・・ヴーン・・・と五月蠅いと、彼女を覆っていたプレッシャーが一気に霧散した。

「終わりました」

一斉に、周りが騒がしくなる。皆プレハブから飛び出して行く。携帯で指示を出す者、車に乗り込む者、へりに乗り込む者、地図を詳しく分析し始める者。まるで時間が一気に濃縮されたように錯覚する。

「お疲れ様です。今回も遠くからわざわざご足労いただき・・・」

「い、いえ！わたしもちよつと・・・お願いされたので・・・ちよつとよかつたというか・・・」

低姿勢で接する現場監督らしき人に、彼女はおどおどと、視線を宙に浮かせている。

腰まで流れるように伸びた、彼女の白銀の髪がゆらゆらと揺れていた。

彼女が変なのはいつもの事だし、あまり追求しても自分の常識がダイナマイトよろしく、粉碎されるのが目に見えているので、彼は何も聞いていないし、見ていない事にした。

「……それで、今後の予定なのですがー」

「あのっ……あ、明日はちょっと用事がありまして……」

彼女は思った。

私は変だから、違うから。そう決めつけて今まですごしてきた。

だけど、だけど変わらなければいけない。

だってこのままだったらあまりにも……そうあまりにも自分は……。

だからこそ。

「ちょっとしばらく、お休みをいただこうかと思いましたが、もう私が居なくても大丈夫だと思いますし……あの、明日は……」

なんたって……

「
「
「
「
始業式だから
「
「
「
「

開話 彼らは始点に立つ（後書き）

この物語の各種設定資料は、同シリーズ別作品として移動しました。

ネタバレ気にしないという方はどうぞ、裏設定なども書かれていますので息抜きになるかもしれません。

<http://ncode.syosetu.com/s5791a/>

彼らの遅すぎる青春、設定集

一話 自己紹介をしよう？

世界はここ100年くらいで一気に変化してきた。

遺伝子工学の発達、クローン技術の解放、VR技術発明、シックセンスの確立……。

ちよつと昔では異能や超常現象、未来の技術だと想像の中でしか考えられなかった物事が、一気に俺たちの目の前に『常識』として現実の物として現れた。

だからといって、100年前や200年前と、多分変わらず俺たちの生活自体は何も変わってないと思う。

クローン技術が公の場に解放されたからといって、レトロ映画の『ジュラシツ パーク』よろしく恐竜が闊歩する遊園地はできなかった。

VR技術ができたからといって、今までPCにかじりついてゲームしてた奴らが、それにシフトしてただけで、特に少子化問題に拍車をかけるようなこともなかった。

シックセンスなんて、科学者がようやく認めただからといって、遙か昔から幽霊の存在なんて皆見える人には見えてただろうし、見えない人はこれからも見えないだろうから「ふーん」って感じだった。しかしやっぱりそれと同時に弊害というか例外が出てきた。

『超能』 『異常』 『異能』 を持った人々の誕生である。

昔からそういう人々はいた。

「幽霊が見える」「異常な動体視力を持っている」「人の考えがわかる」「ワンフレームの小足余裕です」 虚実ももちろんあっただろう。

しかし、あらゆる技術が進歩する中で、明らかに強力なそれらの能力を持った人々が誕生してきた。

彼らが何故誕生したのか、未だによくわかってはいない。しかし、人ならざる彼らは国にとつて、貴重な研究材料には変わりなかった。もちろん世界中の国では、そういった人達を囲い込もうとする動きが活発になる。

もちろん俺の住む国、日本も例外ではない。

幼少期から成年後まで、一つの都市で囲い込みができるように広大な敷地を持つ『都市』を設立。本土から遠く離れたこの『都市』で、俺も能力者達と一緒に生活している。

俺の名前は上村^{かみむら}圭^{けい}。黒い髪に若干茶色の筋の入った瞳を持つ生粋の日本人。身長若干低めだが平均値、やや童顔。高校一年生。

俺は今、自分の通う学園の二期始業式に参加中である。

バスケットコートが8枚ほど収容できるほどに広大な体育館には、小学から大学までの全校生徒がずらりと整列中である。

といつてもその数自体は500人つてところか。この人数が整列した所で、広すぎる体育館には、まだまだ余裕がありそうだ。

一学年30人いるかないかといった感じか？

広い体育館を有するこの学校には、もちろんそれだけの理由がちゃんとある。ここは『能力者達だけ』が通う都市唯一の能力者専用の小中高大一貫の学園なのだ。

現在はその学園のトップ、学園長の挨拶中だ。

白髪混じつてはいるがまだまだいけいけナイスガイといった風貌に、ただならぬカリスマを感じる。といつても体育館が広すぎるため、大きなモニターに映した画面越しにみてるだけだが。

こういう前置きをするとき「おー、いかにもお前ってなんかすごい能力でももってるの？なんかやってよ。」みたいな反応が返ってきて

そうだが、まったくもって俺は常人である。

平凡、ノーマル、平均値、標準。

特にこれといった面白みのなにもない人間だ。

「どうしてこうなった……」

自分でも思う。場違いすぎる……。

右隣を見してみる。なんか凄い筋肉むちつと制服からはみ出した人が居る。あ、見られた。

「なんだ？どうかしたか？」

「い、いえ！！何でもないです……」

こえーよ。何だよこの人。高校生かよ。昔のカンフー映画に出てきそうな顔してるし……。

元は丸刈りだったのだろうか。伸び放題の髪を無理矢理整えたようだが、髪がつんつんと暴れ放題になっている。だが、ギロリと光る切れ目がものぐさというよりワイルドな風貌としての印象を強くしている。凄い筋肉だと認識はできるが、以外と線は細そうである。うーん。制服似合わねえ……。

「お前、見たことない気がするな。一学期にいたか？」

「い、いえ……えーっと今日から入学……です……よ？」

やべーよすげーこえーよ。なんだよこれ、あと10秒睨まれたら俺ちびるぞ。

というか、あれか。もつと畏まった方がいいの？これ。やべー対応間違えたかな。

というかこの人明らかに異能者だよな……おれの学園生活初日にしてバッドエンドじゃないの？

「そうか。俺の名前は志貴崎しきみ 椋むぎという。よろしく。そこに座っているということは、同じクラスで授業を受けることになると思う。分からないことがあったら聞いてくれ。手を貸そう」

ぬつつと手が出てくる。・・・握手でいいのかな？

「え、あ、どうも。上村 圭と言います。ありがとうございます。しきさき、でもみじですか。四季咲きの紅葉とは洒落ていますね」

とりあえず、良い人そうでよかった。志貴崎さんは、俺の言葉に少しだけ口角を上げて「おれも気に入っている」とだけ言った。

俺も手を差し出して握手をする。ぎゅつと、締め付けられるような握力にびっくりする。志貴崎さんの手はごつごつしており、よく見ると傷だらけだった。深く考えないようにしよう。

と、横から制服の袖を引っ張られた。ちょっと騒がしすぎただろうか。
謝りながら左に向くとする。

「あー、うるさくてごめんなさい。」

「・・・いい。・・・私も初めましてただけ」

見ると小柄な女の子が俺の制服の袖を引っ張っていた。

耳が隠れる程度のショートヘア。見ようによっては少年にも取れるが、半開きの唇からは何ともいえない色気を感じる。肌の色は白く、ちよつと生気がかけているようにも感じる。

そして、何と言っても特徴的なのはその瞳だ。キラツと光る瞳でも言うのか。見つめると吸い込まれそうな程に真っ黒で、彼女がどこを見ているのか正確に判断できなくなりそうだ。

そして、スカートからのぞく細いふとももに一瞬どきつとしてしまふ。

こういう、女の子が夏服でいるとなんとも肌寒そうだなーとか思っっちゃうのを俺だけでしょうか？皆さん。

すつと手を出される。どうやら俺が今日からという話を聞いて挨拶をしてくれたらしい。

俺も手を差し出して握手をする。先ほどのゴツい手とは違い華奢な手だ。

「……よろしく。私は野谷 卯月のの ちづき」

「上村 圭です。よろしくお願ひします」

内心女の子との握手でどきどきしてしまふが必死に冷静を装ふ。

「……」

「……」

やばい話つづかねーよ。どうしようこの状況。

しかしこう。本当見つめられると吸い込まれそうな瞳だな。なんとも居心地が悪くなってきた……。

「ほう野谷も今日は来ていたのか。直接会つのは入学式以来じゃないか？」

そこで志貴崎さんが口をはさんだ。正直助かった。

「……お互いあまり学校……来ない、あと、ミキも来てる。」

「ほう！山城もか。後で挨拶に行くとするか。」

「……ん」

それに野谷さんも答えるが、何とも違和感がある会話である。

入学式以来？今日は二期の始業式だから、単純に三ヶ月から四ヶ月程度はこの学園の高等部に在籍していたはずだ。しかも確か高等部は各学年一クラスずつ。

それにさつき、志貴崎さんは『そこに座っていると云うことは、同じクラスで授業を受けることになると思う。』と言っていた事から、同じ学年で同じクラスのはずだ（志貴崎さんと同学年というのに改めて驚愕するが考えないことにしよう）。

ここは素直に疑問を口に出す事にする。

「どういうことですか？同じクラスで授業を受けてるわけじゃないんですか？」

「あー、俺たち二人は特別でな。いや、えーっと、あと四人ほど特別なやつが高等部にはいるんだが。それでー」

「・・・私たちは授業を受ける義務が・・・ない・・・」

むむっという感じで腕を組んで、あーとかうーとか言いながら説明しようとする志貴崎さんと、端的に答える野谷さん。

「はい？」

話を整理すると、どうやらこの学園の中でも異能中の異能は、授業に出る義務自体が無いらしい。

異能者の中にはランクがあるらしく、それが一定を超えるとあらゆる研究機関や会社から色々な話が来る。

そういったところへの協力をするために、学園側へ休学届を出して休学し、そういった所へ行くわけだが、なんとこの二人はその休学届すら出さずにそういった所へ行けるらしい。チートか・・・。

「ちなみに、俺は異常者にカテゴリーズされていてー」

「い、いえ！また後で聞きます！」

頼んでないのに、志貴崎さんが自分の能力の話をし始めようとしたので慌ててやめさせる。これ以上俺の『常識』を壊さないでくれ。

「……私も異常者」

「そ、そうですか。それも後で聞きます」

「……うん」

野谷さんも、負けじ（？）と能力の話をしようとしたので、とりあえず中断させる。

しかし二人そろって自分から『異常者』なんて言わないでくれ。知識としてはあるが、なんとというかサイコさんにしか見えなくなる。

野谷さんは自分の話を聞いてもらうのが嬉しいのかうつすらと頬が赤くなっている気がする。

なんとなく頭をなでたいかわいさがあるな。小動物系というか、妹がいるとこんな感じなのかなーなんて同級生に失礼な事を考える。初めのうちはどうなるかと思ったが、なんとなくこの二人とは仲良くできそうな気がする。

そんなやりとりをしながらも、始業式は結構進んでいたらしく、進行の指示により端の方からどんどん人が立ち上がり体育館を出て行く。

「んーあと少しここに座ったまんまかなー」

思ったことが、そのまま口に出てしまった。

自分たちが移動するまでもう少し時間がありそうだった。

「そうですねー」

自分の何気ない一言に、いきなり言葉が返ってきたので、びつくりして声のした方に振り向く。

そこには銀髪の美しい女の子が立っていた。瞳の色や顔の造形が日本人の特徴をしているから恐らく日本人なのだろう。しかし銀髪に負けず整った顔立ちをしている。

体つきも野谷と同じ制服を着ていることから高校生だと思えるが、にしては、しっかりと出てる所は出ているみたいで大人びて見える。そういえば始業式始まる前にこの席に案内されたとき、この列の一番端に銀髪の人が座っていた気がする。自分の場違いさ加減に気が動転していて気がつかなかった。

びつくりした俺を見て彼女は「ごめんなさいね」と謝った。いたずら成功とでも言った感じで舌を出して。反則過ぎるだろ。

「貴方、今日からこの学園に入学するのよね？教室に案内するように先生から言われたんだけど」

「ああ、なるほど。よろしくお願いします上村 圭と言います」

「鬼谷きたに なぎ 凧です」

静かに微笑む鬼谷さんにどぎまぎしてしまう。

優しそうな雰囲気にかわい物腰。こんなきれいな人とお知り合いになれるなんて俺って幸せ者だな。ここに放り込みやがった姉には感謝するべきかな。なんて考えていると、

「おお、鬼谷も来てたか！」

「……久しぶり」

「あら。野谷さんとはたまに顔を合わせてましたが志貴崎さんは入学式以来ですね」

さっきと似たような会話が繰り返されてる現状に、頭の中が真っ

白になりそうです。

「あの、志貴崎さん」

ギギギつと、体の節々がさび付いたように動かしづらい。それにこの仮定を『事実』にする確認するのがたまらなく怖い。

「なんだ」

「彼女も『特別』なんですか？」

「そうだ。彼女は超能者でー」

仮定が事実になったと同時に、さらに能力の解説も丁寧にしようとした志貴崎さんを必死で止めて、とりあえず俺の精神汚染を食い止めることに成功した。

そんなあわわしている俺を鬼谷さんがじっと見ていた。なんとなく探られているようにも感じる。

「えつと・・・なんででしょうか？」

「いえ、何でもありません。そろそろ移動しませんか？」

「?・・・はい」

疑問は残るが、彼女がなんでもないとこのだから、何でも無いのだから。移動を促された俺は席を立ち、彼女の後ろについていく。そして当然のように俺たちについてくる志貴崎と野谷さん。

「そういえば体育館から自分の教室までどうやって行けば良いのかわらんあ」

ぼけつとそんなことを言い放つ志貴崎さんに、鬼谷さんがため息をつく。

いやいや、どんだけ学校来てないんだよ志貴崎さん。深く突っ込むと、要らないことまでしゃべり出しそうなので突っ込まない事にする。まだ心の準備が……。

俺たちの教室がある建物は、体育館から一旦外に出て、敷地をしばらく先に歩いた先にあつた。

小、中、高、大の教養棟が4つ、文化棟、技術棟、研究棟、それによく分らない建物と寮がいくつかがこの敷地内にはあるらしい。鬼谷さんの案内で高学棟へ、俺たちは皆一年生なので一階にある教室に入る。ちなみにワンフロアにつき4つほど教室があり、それが三階建になつていて学年が上がるごとに二階、三階と上がっていくらしい。というわけで1クラスしかない俺たちの学年では、一階の残り三つの教室は使わないことになる。現在は倉庫となっているようだ。

「貴方のクラスはここで、席はー」

「……私の横」

どうやら野谷さんの隣になるらしい。

窓際の一番奥、教卓から一番奥の席に俺は座ることになるようだ。ちなみに鬼谷さんはだいたい教室の真ん中、志貴崎さんは廊下側の一番前。

なんとというか皆『らしい』場所に席があるな。(俺の中のイメージではクラスの真ん中は委員長、窓際隅っこが目立たない子、廊下一番前がやんちゃ坊主といった変な偏見がある)

「そっか。よろしくお願いします」

「……よろしく」

野谷さんに改めてよろしくすると、照れてるのかちょっと下を向

いてもじもじしている。あたまでなでしたい。

にしても、教室自体は馴染みのある普通の教室だ。

至る所になんかうつすら傷みたいなのがついてたりするがボクハナニモミテイナイ。とりあえずこれから俺はここで学校生活をするわけだ。

まだまだ不安はある（むしろ不安しかない）けれどどうにかこうにかやっていけそうだ。

一話 自己紹介をしよう？

「今日から一緒に勉強することになります。上村 圭です。よろしくお願ひします。」

お辞儀をする。

無難にまとまったはずだ。趣味、好きな物、今はまっている物。うむ。無難である。

誰も傷つけず、これからの生活に一切の問題も起こさない。すばらしい自己紹介であったと自負する！

そもそも、俺以外は全て異能の人々だ。きつと魔法が使えたり、忍者よろしく天井上から降りてきたり、夢の中に現れて悪夢を見せたりするに違いない。敵に回すと恐ろしすぎて考えたくも無いからな！

「はいよろしくお願ひしますねー。誰か質問とかあるかなー」

俺たちの担任は、黒縁めがねの『ちよつと疲れたサラリーマン』って風貌の人だった。

あと始終なんか口調が軽い。

「はい」

ぬつと手が上がる。志貴崎さんだ

「志貴崎さんどうぞー。というか久々だねえきみー僕の名前おぼえてるかなー？」

「上村の能力をまだ聞いていない。差し支えなければ聞きたい」

ネたらしくて・・・学園側が折れてここに入れられました」
「学園が折れた！？あ、ありえん・・・」

しかし、学園側が折れたのは事実である。まあ、その理由は「弟と一緒に学校かようのつてたのしそうじやーん」っていうだけなんだが。それに付き合わされる学園もたまったもんじゃ無いな。

「学園が折れる・・・上村・・・もしかして上村さんの姉は上村^{かみ}沙紀^{むらさき}さんですか？」

「はい」

間に入った鬼谷さんに俺が答える。鬼谷さんもなんだか余裕がなさそうな顔をしている。

そのやりとりをみていた教室中の空気が凍る。『異次元訪問者』『超越者』『潜る者』なんて言葉が、あちこちから聞こえてくる。うう、姉はなんか色々トラブルをここでまきちらしまくっているらしい。

これはもしかしていじめフラグですか？

とりあえず、俺はこの何とも言いがたい空気を霧散させるために口を開いた。

「えつとあの、姉がなんか色々やってるらしく申し訳ないです。けど、あの、俺自体は本当なんの能力も持たないで、まあ自分でも場違いだと思ってるんですが、通えとの許可も下りたことだし、すでに入学させられちゃったんで、がんばって勉強しようと思います。仲良くしてください。よろしくおねがいします。以上です」

と、一方的にまくし立てて、お辞儀をして自分の席へ戻った。

「・・・驚いた」

「ご、ごめん最初に説明しなくて。何か普通の俺が、こんな学園に入って良いのか緊張してて……」

「……良い」

隣に座った俺に、目を見開いていた野谷さんだったが、俺の言葉にふるふる頭を振って許してくれた。よかった。

すると、前の席に座っていた女の子が振り向いて話しかけてきた。

「本当驚いたよ。まさか何の能力も持ってないやつが、こんなところに来るなんてさー」

「す、すいません」

「いーっていーって。私は山城^{やましる} ミキ^{みき}。よろしくー」

「よ、よろしくおねがいします」

またもや美人さんである。頭の両方で絞ったツインテールがきれいにそよぐ。髪の色は綺麗なブラウン。元気印といったほうがいいのか、整った顔立ちで表情がころころ変わる。

しかし何だかそれが不自然にも思える。魅了されるといっつか、彼女以外が目に入らなくなるというか……。

そういえば山城 ミキといえばさっき聞いた名前のような。うんボクイヤナヨカンガスルヨー。

「野谷さん。もしかして山城さんって」

「……ん。……『特別』。……ミキは異能者でー」

「うんそっか。ありがとうございます」

野谷さんの説明を、一旦区切って現実逃避する。そっかー彼女もかー。ここで知り合った人、皆『特別』かー……どんな確立だよーもーあーもーふふふー。

そうこうしているうちに、先生の説明は進む。

とりあえず今日は、授業はないらしい。このまま今日は解散となり下校だそうだ。委員とか諸々はまた後日決めるらしい。なんかこの教師すごいいい加減な気がしてきたよ？俺。

「それではー今日はこころへんで終わりですー」

お疲れーとかいいながら出て行く先生に続き、皆席を立ち上がった、それぞれのやりたいことをやり始める。

俺は今日一日の緊張感から解放されて、机にべたつと倒れ込んだ。うう。胃に穴が開きそうな気がしてきた……。

さて。俺はどうしようかな。家に帰るか？

「上村ちよつといいか？」

「え？あ、志貴崎さん。はい」

顔を上げると、志貴崎さんが立っていた。

こつちが座つてて、向こうが立っているこの状況だと、志貴崎さんの威圧感がやばい。おっかなびっくりしている俺の様子に、疑問符を浮かべる志貴崎さんであったが、どうやらお昼に誘いたいらしい。この学校の事もよく分からないだろうし、俺自身の事にも興味があるらしい。

基本良い人なんだなと再認識して、その誘いに乗ることにした。

その話を聞いていた山城さんと鬼谷さんと野谷さんもついてくる事になった。

そんな訳で、食堂がある建物に向かっているわけだが、高学棟から出たとたん何か凄い視線が俺、というより俺たちに向けられている。

正直もう耐えられません。

「なんで、こんなに注目されているんでしょうか」

「そりゃー、私たちってあんま学校に来ないし。それぞれ結構有名なだしねー。それにー、あんたの噂ももう広まってるんじゃないのー？」

「ええ！？無能力っただけで噂に！？そりゃ珍しいでしょうけれど、学園の外に出れば僕みたいなのなんてたくさんいますよねっ」

「いえ、上村さんの場合お姉さんがあの方なので・・・」

「ああ・・・」

にやにやっつと、俺を物色するような目で見てくる山城さんに変わり、鬼谷さんが説明してくれる。

どうやら姉はこの学園のピラミットの頂点に君臨しており、その破天荒な性格も災いして色々と騒ぎを引き起こしていたらしい。それが一学期の終盤近くいきなり沈静化、というより、彼女自体が学園から姿を消したらしい。まあその理由も多分俺は知ってるわけだが。

そして、この四人の組み合わせはかなり凄いことらしい。

まあ、入学式以降あってないとか、教室までの道覚えてないとか、平気で言い出すような人物達が四人集まっているわけだから、そりゃそうか。

というか、転校初っぱなから凄い注目を浴びてるのってやばくない？やばいよね？俺ってもう・・・。

注目を浴びつつ、四人で食堂に入る。全校生徒が使うこのことで建物一つまるまる食堂らしい。すごく広い。

とりあえず食券を買う。うーん何か今日は疲れたし、おなかもあり空いていないので無難な感じでサンドウィッチセットで。

他の四人もそれぞれ食券を買い、料理の乗ったお盆を受け取って

席に着く。ふむー。それそれなんとも特徴が出ている。

野谷さんはスパゲティ

山城さんは俺と同じサンドウィッチセット

鬼谷さんは和食セット

そして志貴崎さんはなんとステーキである。・・・まあ、その体だと、それくらい食べないと体が持たないのだろうが。

と、そのままスパゲティを食べようとする野谷さんに、ハンカチを差し出す。

「・・・え？」

ハンカチの意味がわからないらしい。

「えーっと、必要ないかもしれないけれど、襟にかけてください。ソース飛んじやったりすると悲惨だ・・・ですから」

「・・・あ、・・・ありがとうございます」

野谷さんは、素直に俺のハンカチを受け取って、自分の制服の襟に引っかけて、小さくスパゲティを丸めてゆつくりと食べ出した。黙々食べてる姿が、なんとも小動物的である。なでくりたい。

「紳士じゃーん。見直しちゃうよー」

「いやいや今日初対面ですから。見直す元ないですから」

軽く冷やかしてくる山城さんに突っ込む。

「・・・ふえふにおへたちおんぶあふおとふかいしふあふていいにそんなふあふおとふかいしふあふていい」
「口の中の物を、食べきってからしゃべってください」

リスか、この人は。ステーキを口いっぱい頬張りながら、しゃべられても恐怖感しか相手に与えないぞ。

「……んむ。別に、俺らにそんな口をきかなくても良い。さつき言い直したって事は、普段はそんな言葉遣いじゃないんだろっ」「そーねー」

「そうですね」

「……ん」

「はあ……そうで……そうか」

皆、普通の言葉遣いでしゃべってもらいたいようなので、普段通りのしゃべり方に戻す事にする。

この人達、変なオーラ出してるからつい言葉が丁寧語になっちゃうんだよなー。がんばって普段通りを心がけよう。

しばらくは無言で食べる。普通のサンドウィッチだと思ったが、挟まっている素材に気を使っているらしい。レタスとキャベツを両方使ったりして、歯ごたえや味に変化があって面白い風味がある。チキンも挽き立ての胡椒が使われているらしく、風味が良い。

「へえ。美味しいな」

「ふお^{もぎゅもむ}うふあら」

「いけるよねー」

「……ん。おいしい」

「そうですねー」

サンドウィッチセットだといっても、結構なボリュームがあったが、飽きない味付けも手伝って軽く完食できた。あと、志貴崎さんが食べながらしゃべるのは聞かなかったことにした。

「それで、上村。どうしてお前がここにくる事になったのか、詳し

く聞きたいんだが」

ステーキを食べ終わった、志貴崎さんが口を開いた。しかし食べるのが早いなあんだ。

野谷さんなんてまだ食べ終わってないぞ。黙々食べる姿が小動物的で以下略。

「もちろん喋りたくなければ喋らないで良い」

と、志貴崎さんが言ってくれたが、別に俺としては隠すような事は一切無いので、説明する。

「別に詳しくも何も、6月くらいに姉が突然俺の部屋に来て、開口一番「圭、お前も私と同じ学校に行くのよー！！」って叫んだと思ったら、外に飛び出して行って。」

まあ意味もよく分からなかったし、そのまま放つといたら夏休み中に学園案内の分厚い郵便物が来てさ。元の学校からも転学扱いになってるし仕方なくここに」

「相変わらず自由すぎるな。お前の姉は」

志貴崎さんは、口を大きくへへの字に曲げて変な顔になる。

「それでー？その圭のお姉ちゃんはどこいったのさー」

デザートのアレンジ豆腐を、幸せそうに食べながら山城さんが聞いてきた。この人はいちいち草がかわいすぎて困る。もっと見ていた気持ちに何故かなるのを必死に押さえ、山城さんから視線を外す。

「俺も良くわかんねえ。というか、『同じ学校に行くのよ宣言』からすぐどっか行っちゃった。てっきり学園で何かやってるのかとか

思ったんだが、そうではないんだよな。……山城さん達の話
聞くとき」

どうしても、『圭』と下の名前を言われた手前、俺も『ミキ』と
返したかったが、こっぱずかしくてできなかった。俺のばかばか。
ちなみに、山城さんにはバレてるみたいですよっごいニヤニヤしてる。
……くそ……。

「ふふん。うんそーだよ。といっても、私はいんまりガツコこなか
ったから『圭』のお姉ちゃん、私の居ない合間にきてたかもしれ
ないけどー。皆は？」

やっぱばれてやがる。

「見てないな」

「……ない」

「見てないですね」

「そうか。まあ置き手紙に「魔王を倒してくるからちよつと異世界
いってくるね ミ（右下に大きく猫の顔）」ってのはあったんだが。
まあ、いつもの冗談だと思うし」

俺の言葉に、志貴崎さんが変な顔をさらに変にして、鬼谷さんが
お茶を吹き出し、野谷さんが固まり、山城さんが杏仁豆腐が気管に
入ったらしく咳き込んだ。

なんとも大惨事です。

「ちよ！何その反応！！いや、きつと冗談だつて。地球の裏側とか
で楽しくやってるだけだつて！」

「それもどうかと思うが……」

「……そうだと良い」

「まー、あの人ならどこにでもいけちゃいそうな気がしてきて・・・

」・

「さ、さすがにないですね」

姉は、どんな生活をここで繰り広げていたのだろうか。

胃に続き、頭も痛くなってきた。

一話 自己紹介をしよう？

「そういえば上村の話ばかり聞いていたな。俺たちの能力の話もしないとだめだろう」

ステーキ食べて元気いっぱい！って感じで張り切ったオーラを出して志貴崎さんが立ち上がる。

「そういえばそうでしたね」

「あー、そうねー」

「・・・そう」

「ちょちょちょ、ちょっと待って！気持ちの準備をする」

今すぐにも何かやりそうな志貴崎さんを、慌てて止める。何んだらうこの即行動しちゃう人。と、俺のこの行動を疑問に思ったのか鬼谷さんが口を開いた。

「あのお姉さんを持ちながら気持ちの準備・・・？」

「確かにそだね。なんでなんでー？」

「いやー。あの、俺はノーマルな一般ピープルなわけで、姉の行動をなんというか・・・奇行として認識してどうにか自分を守ってきたというか、目を背けてきたというか」

思えば、自分の『常識』を守るために日々必死だった。

姉の行動は、『奇行』以外の何物でも無かった。今まで、何も持っていなかったのに、次の瞬間何かを手にとってるなんてざらで（必死で俺は今まで気を失ってたんだなって自分を騙した）、車に乗ってたら、2時間の道のりを一瞬で目的地に到着してたり（必死で俺は今まで気を失ってたんだなって自分を騙した）、朝、家を出て

行った姉が、昼には地球の反対側から電話をかけてきたりした（必死で俺は以下略）。

その苦勞も、この学園に入ったことにより全てが無駄である。グッバイ俺の常識。俺の日常。

「はー、圭も大変だねえ。けどまあ、この学園に転入した以上もう目を反らす事もできなくなったわけだ」

「……うん……ぐす」

「よしよし」

やばい泣けてきた。まあしかし、頭なでるのは止めてもらいたい。もっとやってほしくなるから。

「もういいか？」

「あ、ごめん。うん。いいよ」

志貴崎さんは、構えの状態ですっと待ってたらしい。俺の言葉を聞くと、軽くとんつと音を立ててジャンプした。

3mくらい。

「え！？ええ！？すげー！！」

「おー飛ぶ飛ぶ」

「あー」

「……すげー」

やんやんやんと、はやし立てる俺たちの前に、落ちて降りて来た志貴崎さんは、ふふんつと鼻を鳴らし得意げだ。

しかしその風体はそのジャンプ力。まさに野生児ですね。アマゾン！とか叫びそうですね。

「俺は、体のリミッターが無い異常者だ。通り名として【剛力】とか言われるが、それは俺の一端に過ぎない」

人間の体は、常にある程度のリミッターにより、筋肉の動きを制限している。そうしなければ、骨や筋肉。つまり、自分の体自体を、無理な動きによって破損させてしまうからだ。

昔から日本には『火事場の馬鹿力』という言葉があり、この言葉は、火事場^{ピンチ}に直面した人は、今までの自身の筋力からは想像もつかないほどの力が出る。という意味だ。

そしてそのリミッターが志貴崎さんにはない。いつでも火事場。

志貴崎さんは、自分の意思で自由自在に筋肉の全ての力を、コントロールできる異常者なのだ。

もちろんデメリットはあり、筋力を意識的に制限しないと、物を壊してしまうため持つことすらできないそうだ。それって何って『スーパーマン』？

もはや誰も名前すら知らないレトロヒーロー映画の、古典的ワンシーンが俺の脳裏で展開された。

「さらに筋肉も常人のそれと違い、柔軟性と弾力性に富んでる・・・らしい」

恐らく、彼を研究している人の受け折りなのだろう。

そして筋肉うねうねさせるな。自由に操られるのは分かったから。

「・・・次は、・・・私」

志貴崎さんに続いて、野谷さんも能力を見せてくれるらしい。

立ち上がって俺に背を向ける。首を横に回してるから、俺の位置は野谷さんの見ている方向からして、大体100度程後ろの位置だ

ろうか。

「・・・この位置から・・・普通は圭を私はちゃんと見えないと・・・
・思う」

「俺なら誰か居るな！程度しかわからないだろうな」

自分に置き換えて想像してみる。人間の視野は、顔の中心から大体150度程度。そのうち、はっきりと見える角度は90度程度である。これは肉食動物の特徴で、草食動物の場合は、目の位置が横についていることから270度程度カバーできると言われている。

今の俺と野谷さんの位置関係では、人が物がすらはっきりと判断できないほど見えづらいはずだ。

「・・・指を・・・立ててみて・・・当てる」

なるほど。とりあえず四本立ててみる

「・・・四本」

「すごいな！」

「へー」

「そんなことができるんですねー」

「おおー！」

野谷さんは、志貴崎さんの時と同じくはやし立てられて、ちょっと下を向いて照れている。

「・・・私は脳のリミッターが外れてる・・・異常者」

人間の脳、あらゆる処理を請け負っている。見た物を記憶したり、

判別したり、匂いを感じたり、体を動かしたりその他諸々だ。

しかし、それらを全て処理しようとする、脳の処理が追いつかない。よって受け取った信号を捨てる処理が間に入るそうなのだが、そのリミッターが彼女は外れており、全ての処理をしようとするらしい。

そしてその『信号を捨てる機能に対してのリミッター』の対象が、目からくる視覚情報となっているようだ。

ちなみに志貴崎さんも、正確には脳のリミッターが外れた異常者らしい。二人とも脳のリミッターという点では同じだが、その種類が違うようだ。また、彼女は通り名で【鷹の目】と言われているようだ。きつとそいつ軍事オタクだと思う。

彼女の目は何者をも見逃さない。動いたものは全て彼女の目に入り脳が認識する。また、かなり遠くの物も自在に読み取って、認識する能力を持っているようだ。もちろんデメリットはある。

「……脳の処理が間に合わなくて、……あんまり早く動けない」

あまりの情報量の多さに、彼女の脳が、うまく処理できずに急な運動ができないのだそうだ。彼女のゆっくりしたしゃべり方もそのせいらしい。まあ「……意識すれば……脳のリミッターも……付けれる」と言うから、わざと外したまんまなのだろう。チートめ。

「それじゃあ次は私ですね」

野谷さんの説明が終わった所で、鬼谷さんが立ち上がった。

とたんに周辺になんともいえないプレッシャーが立ちこめる。パリッと静電気に毛が逆立つような感じがする。

「なんかパリパリするー」

ひゃんつと山城さんが震えて両肩を抱く。

そのまま二十秒ほどした所で、ふつとプレッシャーが無くなるのを感じた。

今のが彼女の能力なのだろうか。何か今までの二人より、全然毛色の違う能力だと感じられた。

「これからこの食堂に女の子が二人きます。多分小学棟の生徒で一人は帽子をかぶっています」

そう言い終わらないうちに、食堂の入り口が開いて女の子が二人入ってくる。一人は帽子をかぶっている。

「おおっ」

どうやって知ったのだろうか。彼女が動いていなかったのは俺を含めて皆で見えていたし。

「一人が販売機で食券を買います。気分的にはおにぎりランチ」

その言葉に従うように、鬼谷さんの言葉の後に続いて、帽子をかぶった女の子が販売機の前へ。

「けど、金銭的には好物のハンバーガーランチも買えます。今日の私はちょっとだけリッチ。さあどうしよう」

うーんうーんと悩む女の子。

「と、そこでもう一人の子がサイフを忘れてしまっています」

帽子の女の子の後ろで、鞆をさぐっていたもう一人女の子が「あ！おサイフない！」とちよつと大きな声を出す。

「それを見た彼女は黙っておにぎりランチの食券を二枚買います」

帽子の女の子が、食券を二枚買っているのが、手の動きでわかる。その食券を、もう一人の女の子に渡す。

受け取ったもう一人の子がびっくりして「ごめんね」と謝っているようだ。

「二人そろってちよつと遅めの昼食です。よかったよかった」

「……すげー……」

「ほー……」

「……すごい」

「……」（無言で手を叩く）

皆、あんぐり口を開けて感心しきりである。何かすさまじい物を見せられてしまった。志貴崎さんなんて、もう言葉すら出ないよう
で、手を叩くしかできないようだった。

「というわけで、私は電磁波を操る超能者です」

人は電気で動いている。もちろん脳も。人は常に、電気で考え、
電気で動き、電気で感じている。

それらの情報は、常に体のあちこちから『電磁波』として発散さ
れており、彼女はそれを『感じる事ができる』。人は彼女を【感じ
る者】と評する。

彼女は、自分から積極的に働きかけることにより、周囲の電磁波を発する物を『感じ』、その存在を追跡する事ができる。つまり対人ソナーである。（ここで山城さんが『感じるだなんてえっちー』と茶々を入れた。鬼谷さんも『敏感すぎて困ります』と飄々と返しちやうあたりこの二人に俺はあらゆる意味で勝てそうに無いなと思っただ）

と、同時に、ある程度の距離に近づけば、程度はあるが人の考えを『感じる』事ができる。

「もちろんプライバシーですし、皆さんの頭の中をのぞいたりは絶対にしませんよ」

と彼女は言ってくれた。まあ、俺が彼女的能力を知ったところで防ぐ手立てはないのだし、信じるしかないだろう。

他の皆も同様の考えのようだ。

そして、「見たくないものもみえちゃいますしね」と彼女は寂しそうに笑った。つまりはそれがデメリットなのだろう。

「じゃあ最後は私…！」

最後の大取といったところで、元気いっぱいには山城さんが立ち上がった。

「椀立って…」

「む」

山城さんの指示により、志貴崎さんが立たされる。

「椀は私の目を見てて。皆は私の顔みちゃだめだからね」
「うむ」

何が起るのであるうか。
ここまで来ると、次はどんなトンデモ能力が飛び出してくるのか、
ワクワクしてくるものである。

数分後、そこには信じられない光景が広がっていた。

両手を腰に添え、ふんぞり返りながら壮大に志貴崎さんを見下ろす山城さん。志貴崎さんはその前に跪いてる。

「まだまだ頭が高い！！ひれ伏せ！！」

「ははー！！！！」

「お前の名前なんだ！」

「豚でございます！！貴方様の前に跪くこの私めは、言葉を喋る事すら身に余る、ただの豚でございますー！！」

「ああん？じゃあ人様の言葉なんて、喋るんじゃ無いよ！」

「ぶひー！！！！」

「お前の名前はなんだ！！」

「ぶーぶひぶひー！！」

「豚語はわからんわー！！」

「ぶひー！！（涙声）」

なんだろうこれ。すさまじい光景である。

すでに志貴崎さんは、膝きを通り越して地面に入っているし・・・
。というかこれ、腕変な方向に曲がってない？

「ちょ！そこらへんでやめたほうがっ！」

「そ、そうですよ！」

「……だめ」

顔を見るなと注意を受けていたため、必死に顔を下に向けて、山城さんと顔が合わないようにながら止めに入る。

「う、ごめんねー！変なスイッチはいつちゃってさー」

「いや、問題ない。しかし凄いな。頭にもやがかかっているように体が言うことを聞かなかった。一体俺は何をしていた？」

どうにかなだめて我に返った山城さんは、『てへぺろ（・く）』といった感じで、あんまり反省しているようには見えない。志貴崎さんは、腕がすごい変な曲がり方をしていたが、軽いねんざで済むそうだった。

自分だったら……と思って小便ちびりたくなった。……チビツテナイヨ？

あと、志貴崎さんの名誉のために、先ほどの光景は志貴崎さんには内緒とアイコンタクトで了解し合った。

「ってーわけで私は幻術の異能者なのさ」

へへーんって胸を張る山城さん。うぐ、へそがちらっつと見えた。

ここらへんで彼らの解説をしよう。

俺は今まで単純に彼らを『異能』と呼んでいたが、『人でありながら人を超えた者』として、世界は彼らをいくつかジャンル分け

した。

『異常者』：何らかの身体的能力が突出して体現したものの。

彼らは人間以上の嗅覚を持ったり、人間以上の筋力を持ったり、人間以上の聴覚を持ったりした。志貴崎さんと野谷さんは典型的な異常者だ。

『超能者』：その名の通り昔は超能力と考えられていたもの。

シックスセンス、透視、未来予知。それらを使える者達の総称。

彼らは遠くの物事を感じし、時間すらも超えて今の世に來世を呼び寄せる。これは鬼谷さん。

『異能者』：上記二つに当てはまらない者達。

彼らは縛られない。まさに人ではない『ナニカ』を彼らはその体に体現する存在。

彼女、山城 ミキの能力は幻術。

昔から、宗教団体の教祖達が持っていたとされる異能である。カリスマと呼ぶ声もある。だが、彼女ほど明確にその効力を示せる人間はいない。

彼女には、種もシカケも必要ない。唯一必要なのはその体。そして相手にある程度の知能があること。

彼女はただ貼り演じる付けるだけでいい。それだけで人間、鳥、魚、動物。ありとあらゆる生命が彼女に跪く。

まさに異能。現代の科学が到達できない地点が彼女一人の中に。

彼女の演技を見た者達は、涙を流しながら【愛されない恋人】と、彼女に二つ名をつけた。

彼女の演技を皆が愛した。

しかし、彼女自身は誰からも愛されない。

彼女の本質は誰にもわからない。

永遠に……。

だから彼女は『恋人』であるが『愛されない』。寂しい二つ名が、彼女には付いた。

今も彼女は演じている。彼女は演じる事を止める事はできない。

今も一人の女子高生を……。だからこそ、俺は彼女に合ったときから惹かれていた。目が離せなかった。

「風と同じで、私もむやみにこの能力使わないから安心していいよん。まあどうやって今みたいに微量に出るのはしかたないんだけどねー」

たはーっと、すまなそうに山城さんが謝る。わざわざ自分から使わないと宣言してくれる。その心遣いがあった。

「皆すごいなあー」

「それで済ますお前もおまえだな」

「すごすぎてもう頭パンクしてるだけだよ」

もう驚かされっぱなしで、何かなにやら頭がパニック状態である。完全に理解の範囲外だ。

そんな彼らが、学園を相手取って『楽しそうだから私の弟も学園に入れる』という理由で、交渉した姉には劣るといふのだから、姉は一体なにもなのだろうか。15年一緒に暮らしてきて今更ながら、俺の姉の自由さにあきれるばかりである。

「けど、皆それぞれお互いの能力知らなかったのか？いくらお互い顔合わせなくても、お互いを知る機会くらいありそうなものだけど」
「……色々あったから」「……」

異口同音に同じ事言われた。多分本当に色々あったんだろうな。常人には理解できない範疇で彼らは生きてる。

「皆でこうやって、顔を合わせて落ち着いて話す機会は初めてだ」
「そだねー」

「上村さんのおかげですね」
「……おかげ」

俺のおかげだといわれて、思わず頭をぼりぼりとかいた。

夏休み中ずっと不安だった。この学園で俺はどうなってしまうのか。俺と彼らは、あまりにも違いすぎると思っていた。いや、実際違っていた。

しかしもう不安感はない。やっていけそうだ、と思えた。

そして、それと同時に、彼らが今までまともに顔を合わせていない事も思い出す。彼らが明日からはまた、学園にこない事も十分にあり得るのだ。せつかく知り合えたんだ。この縁は絶対に切りたくないな、と、彼らにあって数時間の短い間で思えるようになった。

「な、なあ。皆はなんで始業式に参加したんだ？本当は来なくてもよかったんだろ。あ、明日から学園来なくなるのか？」

若干不安もあったが、明日から会えなくなるのは正直さみしい。まあたまには会えるんだろうっけね。

「ふむ。その事なんだが、ちょっと皆に相談がある」

志貴崎さんが、俺の言葉に反応して少し考えた後、ずいっと顔を寄せてそんなことを言ってきた。うーん何か、天性の巻き込まれ癖のある俺の嫌な予感がびんびんですよ。

二話 友好を深めよう？

「思い出作りをしたい」

志貴崎さんの話はこうだ。

今まで彼はやりたいことをやってきた。色んな場所へ行き色んな場所へ上った。先月はヒマラヤ山脈にも行ってみた。しかし満たされることはなかった。

そこで彼は気づく。

仲間が居ない事に、友が居ない事に。異常者である自分に誰も追いつけない。肩を並べられない。

もちろん、今まで行った場所に同行した人々はいたが、彼らはスタッフであり、仲間ではない。その場を離れるともう連絡すらしない間柄だ。

彼らの目は、どこまで行っても『人ならざる者』を見る目であった。友好関係など結べるはずも無く、どんな広大な景色も、カメラに写ったひとりぼっちの自分と並べると、なんともくすんで見えた。

「俺の何と薄っぺらい事か！」

彼は山に吠えた。

今までしてきたこと全てが薄っぺらく感じた。

隣でこの景色を見る相手が欲しかった。「やったな！俺たち！！」と笑い合える漫画みたいなやりとりをする相手が。それは友でもいいし、仲間でもいいし、恋人でもいい。

彼には、それらの関係の違いが良く分からなかったが、それでも隣で笑ってくれる存在が欲しかった。

「次はどの山に登ろうか」

「嫌だよお前となんて。もう二度とのぼりたくねー」

と、冗談を言い合う仲間がただ欲しかった。

それが、彼が始業式に参加した理由であった。高校デビューではなく、始業式デビューというわけである。

同じ異能を持つ者達とならば、そういった関係を持てると思った。そして、相手が自分に追いつけないのならば、自分は歩みを緩めようと、そう思った。

「え、俺ヒマラヤなんてのぼりたくねー」

「私も遠慮します」

「私もー」

「……私も」

それぞれが似たような反応をする。

志貴崎さんは、その反応を見てがくつと崩れた。

絶対に嫌だ。こんな筋肉と山とか上るの。ありえねー。というか途中で死ぬ。

「いや、別に一緒に山に登ろうとってる訳じゃ無い。一緒にになにかやる友が欲しいんだ」

実際、今日一日の俺たちとのやりとりは、彼にとつて、とても楽しかったらしく、こういう事を色々とやっけていきたいらしい。

といってもお互いの身の上や能力話し合っただけだよな。

それで楽しかったってどんだけな人生歩んできたんだこの人……

「……私も」

「実は私も……」
「私も……」

いや、皆そうだったようです。

野谷さんも、志貴崎さんと同じように、今まで色々やってきたが友達ができず。

VRFPSが好きで、プレイしているとそういった人達とある程度知り合えたが、そこはやはりゲームの世界。勝敗に執着するようになり、お互いのミスを責め合ったりギスギス。

昨日は、大会の途中なのに口げんかを始めたチームメイト達に嫌気がさし、今日が始業式だと言うこともあり一念発起。

ゲームの大会を放棄して参加してきたらしい。大会を放棄て……。

鬼谷さんは、普段その能力から、警察関係に依頼されてあちこち飛ぶのが日常で、そこは常に鬱々としていて、血の臭いが後を引く場合が多かったらしい。

嫌な物もたくさん見てきた。その分お金も動いたが、彼女はその現状に遂に耐えられなかった。

その気持ちを打ち明ける同年代の友達が、彼女には居なかった。

山城さんに至っては、世界各地で芝居をやるうとしたものの、演目の共演者達が、漏れなく彼女の幻術に掛かり、芝居そのものが成り立たない物に。

仕方が無いので、小さな劇場を回り、一人芝居をしてきたらしい。スポットライト一つ自分に当てて、そこから一步も動かずに。

理由は「照明係が幻術で使い物にならないから」だそうだ。

彼女は幻術など無くても、一流の演技ができると自負していた。それでやっていけると。

彼女は、幻術を制御しようと努めた。自分の物であるはずのこの能力は、制御可能な物であると信じた。

しかし、そんな彼女と幻術は、切り離される事なく世界を渡った。あげく『愛されない恋人』などと、不名誉極まりない二つ名すらいたたく事に。結果、彼女のプライドは打ち砕かれ傷心。

あとは他の人と同じである。

それぞれの話を聞くと、うーむ。確かに異能者達は色々あるようだ。

特に山城さんは、なんだか踏んだり蹴ったりである。その背中に哀愁を背負っているように感じる。

「頭なでなでもいいよ？」

と言われたが遠慮しておいた。・・・俺のばか。

何となく、皆落ち込んだ空気をかもしだしている。

お互いの身の上を聞いて、自分に重ねたりして落ち込んでいるようだ。

まあしかし、皆友達をほしがっているようだし、転入してきた俺も友達がない。なら話は一つしか無いだろう。

「よし！話はわかった。それで？何するの？」

「む。乗ってくれるか！」

「登山は無しな。俺体力ないし」

「もちろんだ！」

分かってるのかこの人は。

子供のようなはしゃぎ方をしやがる。

「とはいったものの、これといって計画は無いな」

ないのか。

「用は遊べばいいんでしょ？海いこーよ海ー」

楽しそうに、山城さんのツイントールが揺れる。

山城さんは、自分に正直だなあ。しかし、速攻で海が出てくるのはどうだろう？「あら、いいですね」なんて鬼谷さんも同調し始めるし。

いや、お二人の水着姿は是非見てみたいですがっ！

「……指定の水着しかない」

と、野谷さんがつぶやいた。スク水……だと！？

「まあ待て待て。まずは、目標を立てようぜ？そうしないと、方向定まなくてふらふらするだろ？立てなくてもいいのかもしれないけれどさ」

「……思いで作り？」

野谷さんが小首をかしげる。

「なんか漠然としすぎてるな」

そこで、さっきまではしゃいでいた志貴崎さんが、ガバツと立ち上がり叫んだ。

「青春だー！！」

「「「「えええー……」」」」

どん引きである。何でも、彼は男臭いのか。いや男だが。なんとも漢すぎる。

「俺らは、今まで何をしてきた。小、中と、進んできて高校まで年を重ねた。その歳月で何を得た？何を努力した？何を楽しんだ？少なくとも俺は無い。何も。自分の能力を掲げて『自分ができることを、ただシナリオ通りに選んで来ただけだ。俺らは今までこぼしてきた青春を取り戻さないといけない！』」

「……ええええー……」

どん引きだ。力説し、雄々しく拳を固める志貴崎さんには悪いが、どん引きだよ。

「まー、青春は置いといてさー。確かに、なんとなく自分の能力中心で過ごしてきたなー私もー」

「私もそうです」

「……私も」

志貴崎さんも含めて、あまりにも常人から離れると、似たような人生を歩むことになるようだ。

何となく皆の目標というか、方針が心の中で決まって来たみたいを感じる。

「ま、とりあえず目標は『青春（仮）』ってとこで。」

「なんだ（仮）って」

志貴崎さんは、不満そうに口をへのじに曲げた。

まあ『思いで作り』とあまり変わったような感じはしないが、と

りあえず話が進まない気がするし、これで良いだろうと納得する。

「さてさてー。じゃあ何するかだよねー」

「そうだなー」

皆でうーんと考える。

目標は立てた物の『青春』って何さ。なんて哲学的な思考に頭が偏ってる気がする。

時刻は二時。大体の生徒は、既に学園を出て、都市に繰り出して
いるようだ。他の先輩後輩達も、今日は午前中のみ授業だったら
しく、食堂で昼食を食べる者はほとんどみとめられなかった。

というか何で俺らは真面目にこんな事考えてるんだ？

「何かあれだな。『遊ぶために計画を立てる』なんてバカらしいな。
俺らは真面目すぎた気がする。とりあえず、長期的な計画は後にし
て、ここは無計画に街に繰り出すってのは？」

変に海とか、キャンプとか、そういう事ばかり考えてるから、ま
るで遊ぶことが難しいように思えてくる。

ここは普通に、外で皆で遊びに行くのが正解なような気がした。

「なるほどー」

「・・・それがいい」

「そうですね」

「おおー！」

というわけで、俺ら一同は『青春』を求めて、街に繰り出す事
したのである。・・・なんのこっちゃだ。

とりあえず、食堂を出ることにした。校庭を抜けて正門へと向か
う。

やはり、周りからの注目度が高い気がする。なんとも居心地が悪い気分になるが、これほど注目されるっていうことは、彼らの能力は桁違いということなのだろう。

「そつえば、皆の能力つて実際どれくらいレベルなの？俺、そこら辺の基準自体がまだよくわかんないんだけど」

歩きながら、この学園での異能の基準を皆から教えてもらう。

大まかには科学的、軍事的、文化的に『どれだけ価値』があるのか。という基準でランク分けされるらしい。

ランク1からランク5までであるようだ。

「おおざっぱに言えば、『国が手放したくないレベル』によって、ランクが決められるよん」

ランク1：疑わしい者、力はあるが影響力無し

自称であったり、科学的な根拠はあるものの、人々に対してあまり影響が無い部類。

お寺の住職、気功師、牧場主や農夫、ギャンブラーなどには比較的ランク1の人物が多いらしい。

霊や動物の声が聞こえる。運氣の流れを読む。体の悪い部分がある。昔は、迷信や信仰の対象であった、不確かな物に科学が追いついたため立証することはできたが、まあ、これくらいのランクの人は、わりとどこにでも居るらしい。

学園もこのランクを保護をしない。

ランク2：力を証明する事ができ、対一人に影響力を持つ者

科学的に、力を認められた者がこのランク。

気功を放つ者や、催眠術を公使できる者、50mm以下の対象物を瞬間移動できる者などがこのランク。

このランクからは、確実に特殊な人間として認識される。しかし、国としてもこの程度の能力は対して利用価値は無く、周りから、ちよつと不思議な事ができる人程度の認識にしかない。

ちなみに、知識や技術として催眠術を行使する人は、そもそも『異能』や『超能』ではないので、ランク付けすらされることは無い。

ランク3：目に見える力として体現することができ、国にとって価値のある者、数十名程度に影響力がある者

このランクから、国として利用価値が発生する。

新興宗教の教祖、異常な反射神経や、記憶力を持つ者などがこれに当てはまる。

現代科学にて、このランクの者はほとんどが解明済みである。学園の保護対象となる。

ランク4：ランク3よりも、強力な力を持つ者。国外への移動に制限が付く。数百名に影響力があるもの。

国にとって、手放しがたい存在。

彼らは、人々を否応無く自分の影響下においてしまう。

行動は制限され、常に監視されている。科学的な価値も高い。

ちなみに、日本には30名程度がこのランクに属しているらしい。

ランク5：国がお願いして、他国へ行かないでくださいとお願いするレベル

なんと二中二病。

現在の科学では、到達できない地点にいる人達。

国からの積極的な支援を受けることができ、その貢献度によっては、将来も完全に保証される。

もちろん、その存在は極秘中の極秘であるはずだが、本人達はまるで気にせず自由奔放に生活しているせいでバレバレである。

ランク5と、ランク4には具体的な能力の差は、実際あまり無い

ので基本的な制限はランク4と同等である。

しかし、その科学的価値は未知数であり、もはや畏怖の対象にすらなっている。

「ちなみに、ランク4からは体のどこかに、必ずチップを埋め込む事になっている。俺らは皆ランク5だな。まあ科学的に、まだまだ研究が進んでいないらしいな」

彼らは、人の範疇を完全に超えているため、自分自身での能力の制御ができなくなることがあるらしい。国からのバックアップが無ければ、志貴崎さんなどは、すぐ体がボロボロになってしまうようだ。異能者達も色々大変である。

「私なんて、科学者お手上げ状態だもんねー」

へっへーん、と山城さんが得意げに胸を張る。

確かに。彼女の能力なんて、まともに科学で説明しようとするのがバカらしくなりそうだ。

頭を抱える科学者が、容易に想像が付く。

「持ちつ持たれつと言う所だな」

「なるほどなー」

改めて、彼らの規格外を再確認した。

そして俺の姉もランク5という事なのだろう。今まで必死に否定してきたが、帰ってきたら、あの人の非常識ぶりも改めて見直す必要があるわけだ。

そうこうしているうちに、校門を抜けた。10分ほど歩けばこの都市の中心街へと着くことだろう。

一話 友好を深めよう？（前書き）

読みやすい文体を探っています。

「二話 友好を深めよう？」

「さて、街に繰り出してきたわけだがっ」

「ここまで来るのに軽く二時間程度かかった。いやもったか？」

「本当は10分程度の距離にこの時間だ。この人達は気が多すぎる。」

「その一例を挙げよう」

志貴崎さんは、すぐに道に店を出してる食べ物屋に顔を出して、必ず一つは購入して食べる。

「俺はすぐ腹が減るからな。」

「一日5回くらい歯磨かないと、すぐ虫歯になっちゃいそうだねー」

「・・・ガム」

「お、すまん」

「淡々と答えられても困ります。次は餃子ですか。」

「キシリトールガムと餃子はさすがに『無い』と思います。」

「右で餃子を食べながら、左でガムを食べる。次は逆だ。俺の必殺技だ」

「「「「ええええー」」」」

「誰をどう必殺するんだよ。どん引きだよ。」

「ちなみに、虫歯は一つもないぞ。見る。この白い歯を」

「「「「うわぁ・・・」」」」

なんかもう、志貴崎さんの立ち位置が決まりつつあるなあ。と思う一幕だった。

鬼谷さんと山城さんは、ゴスロリ系のファッションブランド店を見つけたと思ったら、野谷さんをずるずる引っ張り込んでファッションショー始めちゃうし。

「……ごわごわする」

「ごっついう服あるんだねー」

「ちよつと恥ずかしいですね」

そう言いつつも、抵抗せずに着ちゃう野谷さんも、やはり、かわいい服には興味があると言っことか。

赤と黒を基調にして、全体的にシックにまとめてある。

ポピュラーな系統として愛されている、ゴシックパンクというジャンルである。左右の靴下の柄を変えて、フリルは抑えめ。若干短めなスカートから覗く、ふとももの上を這うガーターベルトがなんとも扇状的だ。

レースをあしらったフリルはよく見ると手縫いだ。職人芸が光るね。

山城さんは、これまたポピュラーな、アリスインワンダーランドに登場するアリス風。針金で補強していないスカートは、すつんと落ちてしまうが、体の動きに合わせて踊る水色のスカートは、健康的で元気なアリスのイメージにぴったりだ。

ツインテールを下ろして、流したストレートの髪が綺麗なアクセントになっている。

スカートから覗く、白い靴下にもどきつとする。

ただ、そこはゴシックブランド。エプロンには血糊がつき、山城さんの手には首の無い縫いぐるみが抱かれている。

ある意味、一番似合っているのが鬼谷さんだ。漆黒を基本にした通称黒ロリ。典型的な、ゴシックドレスを包むレースやフリル全てが黒。

そして、それを纏う鬼谷さんの鮮やかな銀髪は、凄い存在感を放ちながらも、美しさを破綻させない。

そもそも黒ロリとは、ゴシックロリータ旋風を巻き起こした、2000年代に派生した亜流である。そもそもゴシック文化、もしくはゴシックパンクから短を発するこのファッションの歴史に以下略

なんとも、良いものを見させていただきました。

「ふむ。動きづらそうだな。それに暑そうだ」

「だから冷房ガンガンなのか」

「二人も着てみたら？ 圭は化粧すればギリギリいけそー」

山城さんが、意地の悪い笑みを浮かべている。

「男性用に、リサイズした物もありますよ」

店員さんも反応しないでくれ。

「い、いやあ遠慮しておきます」

「ほほう。これを着る男もいるのか。面白いな」

フリルがたくさん、大きめなカチューシャに手を伸ばした志貴崎さんを、必死に止めた。

この人、もしかしたら面白そうな事に基本惹かれるのかもしれない。

その後も、二着ほど洋服を着て遊ぶのを、のんびり眺めてようや

く店を出た。

野谷さんと山城さんは、数着買ったようでご機嫌である。

荷物になるので、とりあえず店に置いてもらって、帰りに受け取るようだ。

なんか、目玉が飛び出るような金額がディスプレイに表示された気がするが、俺は何も見なかった事にした。

その後も、買い食いする志貴崎さんに、かわいい物を見ると飛びつく山城さんと鬼谷さんに、ふらふらつと突然いなくなる野谷さんと、一向に俺たちは、目的地にたどり着けない状態が続いた。

「子供かっ！いや子供だけれど！何か見つけて、行きたいときは俺に教えること！」

「はい。お母さん」

「わかった、お母さん」

「わかりました」

「・・・わかった」

「誰がお母さんだ！」

基本的に、自由に今まで生きてきたのだろう。集団行動が苦手なのかもしれない。 集団行動が苦手なのかもしれない。

と、服をちよいちよい引っ張られた。

見ると、野谷さんが俺を見上げていた。

「・・・ちよつと、・・・あそこで見たい物が」

野谷さんの指差す先にあるのは、一件のPCショップだった。

「卯月ってばPC好きだよー。自分で組んでるんでしょ？」

「・・・ん」

「どうやら、自分で組み立てる人が利用する店らしい。俺のPCは、5年前くらいのメーカー品だから、こういう店には入った事がない。野谷さんに続いて入る。」

「ちよつとだけワクワクしながら入ると、そこはまさにカオスという他無い空間が広がっていた。」

「人が通るのもやつの通路に、所狭しと色々なパーツが飾られている。ファンだけでこんなに種類あるのかよ。何か光ってるのあるし。PCの中に入れるんだろ？これ。なんで光る必要が？」

「・・・透明な外見・・・だと・・・中も見えるから」

「なるほどな。しかしこれだけ光っていると目にうるさそうだな」

「・・・私はあまり・・・好きじゃない」

「野谷さんは、勝手知ったるという感じで、すすい奥に入っている。」

「圧倒的物量に圧倒されつつも、俺も適当に物色する。他の皆も色々見て回っているようだ。」

「俺はこころ^{自作}らへんの知識がまったく無いので、自然とゲームソフトコーナーへ。」

「昔から、PCソフトやメディアは、ダウンロード販売が主流になっているが、いまだにこういった、現物での販売は一定の支持があるようだ。」

「最近では、どんどんその市場も、縮小してきているみたいだが。」

「量子通信が確立されて久しい昨今、インフラもある程度整い、世界中でゲームにとって、一番の問題であったタイムラグ問題は解消された。」

「そしてなんとと言ってもVR技術の確立だ。」

破竹の勢いで普及したVR環境により、オンライン通信を前提としたゲームが現在の主流となり、こうして俺が眺めているソフトも、大半が多人数でのプレイ基本のゲームばかりだ。

「スターダストオンラインって懐かしいな。もう10年以上になるんじゃないか？」

小学生のころにやっていた、VRMMORPGのパッケージを手取る。あの頃で既に5年目とかいってた気がする。

大型パッチを定期的に適応する事により、物語性を持たせたタイトルで、太陽が異常に近い惑星を舞台に、剣と魔法を使って冒険する、SF色がちょっとあるファンタジーであった。

「太陽による惑星の死が先か、それを止める手立てを発見するのが先か、その未来を決めるのは君だ!!」

とかってチープなうたい文句だったような。

「懐かしいなあ。これまだやってるのか」

中学受験をするために、このゲームは引退した。

まあ、大型アップデートのたびに、細かいパッケージを買い直さなくてはいかず、俺のお小遣いだと、どうしても続ける事ができなかった。

ゲーム内で友達と小さな送別会をした記憶がある。

スターダストオンライン - スターターパック -

あの世界中1000万人がプレイしているSDOの超お得パックが

登場！！

永遠に無料宣言！基本料金無料！！

今までのアップデートタイトルが全て込み込みですぐ遊べる！！
低スペックPCでも快適プレイ！

今からでも遅くない！経験値ブーストなんと三倍！！

最初の旅を協力サポート！太陽神の剣、太陽神の盾、女神のくじ引きをプレゼント！！

超かわいい！！アバター装飾バランゴの花をプレゼント！

マグポイント300P付！

ゲーム内職のリーストプリフィギュ付！

「うわあ」

『！』多すぎだとか、プレゼント沢山ありすぎだとか、まずマグポイントって何だよとか、ゲームパックなのにフィギュアが付いてくる意味不明さだとか、色々あるが、顧客獲得のための必死さが伝わってくる、物凄いパッケージデザインになっている。

情報量多すぎだ。

「なにになに〜？なにみてるのー？」

「ん。いや、このゲーム小学校の頃やってたんだが、まだやってるんだなあって思ってた」

「何か、凄い色々ついてるねえ。1980円って値段が、安いのか高いのかよくわからないけどー。あ、この人形かわいい」

「運営の必死さが透けて見えるだろ？」

山城さんも食いついてきた。背表紙を見たり、裏返してみたり、パッケージ所狭しと踊る文言を見て「バランゴの花ってなにさ」なんてぶつぶつぶやいてる。

「・・・そのゲームは先月終了した」

「お、野谷さん。もういいのか？」

「・・・ん。・・・値段。確認だけだったから」

野谷さんの説明によると、数多くの大型アップデートによるイベント等、人気はあったものの、ゲームについていけない人が続出。

また、度重なるアップデートによって増えたスキル、種族、アイテム類の調整が甘く、方向修正が出来ない状態になり、ゲーム内バランスが崩壊。他のゲームへの流出を防ぐ事が結局できずに、先月ひっそりと、その13年という長いゲームの歴史の幕を閉じたらしい。

良く見ると、このパッケージほこりをかぶってるな。いつの物なんだこれ。

「卯月！。卯月はどのゲームやってるのー？」

「・・・これ」

野谷さんが差し出したパッケージを見る。

「『ハローポイント』、FPSか？」

「・・・ん」

パッケージには、『HALLO POINT』とだけ書かれた文字に兵士が一人。現代の装備じゃなく、200年前くらいの市街地戦闘員の装備のようだ。

21世紀頃の当時の軍事装備を基準にした、5対5に分かれて、銃撃戦を繰り広げる少人数市街地戦闘物らしい。リアル志向で難易度が高いタイプのジャンルのようだ。

軍部隊と、テロリスト部隊に分かれて、テロリストは爆発物をし

かけ、軍はそれを解除して競うゲームだと教えてくれた。

「俺はこの手の硬派なのは、やったことないな」

「・・・面白い」

俺も、FPSをプレイした事があるが、結構いい加減に銃を撃つても相手に当たってくれたり、いろんな行動に、システム側がアシストしてくれたりする感じだった。飛行機で飛んだり、ミサイルを落としたり。わりかし馬鹿騒ぎという言葉がぴったりなゲームだった。

野谷さんによると「お祭り系」というらしい。

「そうか。今度教えてくれ」

「・・・ん」

自分の好きなゲームに、興味をもたれてうれしらしい。

少し頬を染めてうつむく野谷さんは、相変わらずなでなでしたいです。

値段は6900円か。ちょっと高いけれど、まあ何かのゲームと一緒にプレイするのも楽しそうだし、買う事にするか。

「どうせなら、皆でやればいいじゃーん。けーちゃん携帯だして」

隣から、パッケージを覗き込んでた山城さんは、ポケットから携帯を取り出して、何か操作をしている。というか『けーちゃん』って俺か。

慌てて俺も携帯を取り出すと、山城さんに携帯を奪われた。

そのまま俺の携帯と、自分の携帯を操作する山城さん。

「はい」

渡された俺の携帯のタスクには、「HALLO POINT P
C PACKAGE 0.2%」と表示が出ていた。

詳細情報を見ると、山城さんからのプレゼントとなっている。これで、ダウンロードが完了して、PCへデータを転送すると、ゲームが遊べる事になる。

「わ、悪いってこんなの」

「いいっていいってー」

「いや、女の子におごってもらって普通ちがくね？」

「この位おごった内に入らないよー」

のほほんと返してくる山城さんだが、どう考えても奢った内に入る値段だと俺は思ったので、やっぱりお金は俺が出したい所だ。とっさに財布を出そうとすると、山城さんの機嫌が悪くなる。

「もー。女の子が奢ったんだから女の子立てなさい！」

「いや、逆だと思っただが」

お互い譲らず、平行線にしかならないので、山城さんが「じゃあ今度私の用意する洋服着てくれればそれでいいよ！」と、譲歩策を提示してきた。

俺はありがたくそれに乗る事となった。どんな服が用意されるのか、想像するだけで恐ろしいので、考えないようにした。

とりあえず、野谷さんの用事も終わったことだし外に出る。

と、入り口で志貴崎さんと、鬼谷さんが待っていた。

志貴崎さんは、店舗前で広げられている商品を物色しているようだ。

「もういいのですか？」

「……ん」

「おお、終わったか。見る。このメガネ凄いで。相手の戦闘力が見れるのだ！」

興奮気味の志貴崎さんは、赤みのかかったメガネをつけていた。商品棚のポップを見る。『戦闘力測量機。これで相手の強さをチェックナウ！』と書かれており、隅にえらく髪のがったにーちゃん、メガネをつけてどや顔してるイラストが添えられている。どうやらパーティーグッズのようだ。

「戦闘力5か……」

ハン、と言った感じで志貴崎さんにどや顔された。ちょっとムカつく。

「な、戦闘力4000だと……!!な……まだ上がっているだど……!!」

向かいのハンバーガーファースト店の、軒先に置かれた人形に向かって、志貴崎さんが狼狽している。

「……チーズバーガーを買ってきていいか？」

「そのメガネを戻してからならな」

いそいそとメガネを棚に戻し、小走りで志貴崎さんは店の中に入っていた。

少し経って、店から出てきた志貴崎さんの両手には、それぞれ、チーズバーガーとダブルチーズバーガーが握られていた。

「両方ダブルチーズバーガーでいいじゃん」

呆れ顔の山城さんを見て、何を勘違いしたのか「何だ？食いたいのか？」と志貴崎さんは、食べかけのハンバーガーを彼女に差し出した。

数分後、女王様モード役になった山城さんに、志貴崎さんは地面にへばったの言うまでもない。

……というわけで、たった10分の道のみをあるだけで、この人達は色々と自由奔放さを発揮したのである。

まあ、楽しかったから良いんだけどね。なんだかんだでさ。

二話 友好を深めよう？

そんなこんなで、ようやく中心街へと出てきた俺らである。

ちなみに、この都市は円形状をしており、学園と中心街を『都市』の中心として、4つのエリアに東、西、南、北、とエリア分けされている計画都市だ。その詳細を説明するのは、また今度でいいだろう。

「ここまでで、2時間くらいかったな。まあ、道中で色々よるつても楽しいけれど」

「皆で一緒にお洋服を見たり、買い物したりするのは楽しかったですわね」

「かわいい洋服買えたしね！卯月とおそろなんだよー」

「皆で、買い食いした物を食べながら歩くのはまた、格別な物があるなっ」

食べ歩きしてたのは、お前だけだよ。と思うがまあ皆楽しそうなのでよかった。

とりあえず、連れだってここまで来たのはいいが、どこで遊ぶかが問題となってくる。

「おカーさーん何かプランあるー？」

「お母さんは止めて」

来る道中で、色々プランは一応練ってきたが、なんともじっくり来ない物ばかりであった。

・ボーリング

志貴崎さんがハッスルして何か物壊しそう

「「「あー」「」」

「自分の力の制御くらいできる！」

信用できないので、とりあえず今日は却下。

・中央街のターミナル駅に隣接された、『ruin』にて、ウイン
ド・ショッピング

道中で色々買い物したので、今日は却下

「意義なーし」

「そうですね」

・カラオケ

志貴崎さんが以下略

「信用ないな」

そういつつ、筋肉をもりもりさせてるあたり確信犯だ。

まあ、皆がカラオケ好きかどうかも良く分からないので、今日の
所は却下の方が良いだろう。という判断材料もあった。

・映画

皆の好みも分からないし、そもそも出会って初日でいきなり映
画ってどうよ

「皆で何かした方が楽しいよね」
「……………」

「というわけで、色々考えた結果、俺の頭の中にある遊ぶ場所として、一番今日にふさわしいというか、無難な所があそこなわけだが」

俺の指さす先には、ゲームセンター。100年から200年前のレトロゲームから、最近のプライズ系のゲームまで。色々そろえた大型店舗だ。

VR技術が発達して久しい昨今、この手の店舗はどんどん数を減らし、また、ゲーム会社もあまり力を入れてこなくなったのが現状だ。

しかし、どんなに時間が経っても、人の基本的な営みは変わらないと言うことか、外に出てゲームを遊ぶとする需要は、今でも一定数ある。

家族、恋人同士、暇つぶし、そして学校帰り。

「……………入ったこと、ない」

「私も無いですね」

「UFOキャッチャーくらいしかしたことないな」

「ふむふむ」

反対意見もなさそうなので、そのままゲームセンターへと直行する事になった。

中には、等間隔で様々なゲームが並び、奥の方にはメダルゲームも取りそろえているようだ。

いろいろな機械の音が混ざり合い、何ともいえない雰囲気をも

しだしている。

「なあ、あれは何だ？」

志貴崎さんの指さす先には、ホッケーゲームの大型筐体があった。昔からあるポピュラーなゲームで、手で掴むカップを使って、丸い巨大なコイン状の物体を、相手のゴールに投げ込む対戦ゲームだ。最近出た新機種で、通常のホッケーゲームとの他に、盤上にアイテムが出現して、それを取付することによって、コインが大きく曲がったり、増えたり消えたりする特殊なルールで遊ぶこともできる。俺の説明を聞いた志貴崎さんは、ホッケーゲームに興味を持ったようだ。いそいそとお金を投入しスタンバイする。

「さあ、俺の相手は誰だ！！」

武士の笑みを浮かべて、志貴崎さんが左右に揺れている。何か全身からオーラが出ている。

女性陣がどん引きなので、仕方なく俺が対面に立つ事となった。

「普通に遊べよ！」

「ああ！」

絶対わかってない。目がキラキラしてやがる。

ビー……

ルールは通常のホッケールール。

コインが俺の手元にでてきた。

とりあえずジャブのつもりで”思いつき”打ってみた。「俺の全力はこれくらいですよ。だから志貴崎さんも、これくらいにして

くださいね」という俺の意思表示だ。

「ふんっ！」

シャツ！！

ピー！1-0！

音が聞こえたと思ったら、俺のゴールに、志貴崎さんの放った（みえなかったが）コインが、ゴールに入ったらしい。

「見えなかった……」

「私も……」

「凄いですね……」

目が点になって、呆然としているところに、野谷さんが後ろから俺の制服を引っ張った。

「変わって」

「あ、ああ」

野谷さんと場所を交換する。ゲームでの勝負事は基本好きらしい。若干眉が上がっていた。

「というか喋りがスムーズになっていたな。」

野谷さんは、手元に出てきたコインを、コンッと軽く弾いて志貴崎さんに打ち出した。女の子なのでどうしても早さは無い。

それを迎え撃つ志貴崎さんは強者の笑み。手加減する気まったくねえ……！

志貴崎さんがコインを放つ瞬間、野谷さんはカップを少しだけ持

ち上げた。

志貴崎さんを静かに見据えて、小さく微笑み一撃必中の構え。

志貴崎さんの手が高速に動き、コインが放たれた！

シャツ！カアアアン！！

すさまじい音が二人の間で鳴り響く。

俺には、何が起きたのかがまったくわからなかった。

「流石！俺の一撃を止めるとは！！」

「遅い。ナメクジよりもまだまだ遅い」

「ふん。それでは、次はせめてネズミくらいの早さで打たせてもらおう」

ナメクジと言われ、志貴崎さんの笑みが、ますます深くなる。

野谷さんも、さらに微笑んで志貴崎さんを見据える。

野谷さんが、カップを持ち上げる。その下にはコインが。

どうやら、志貴崎さんの放ったコインを、カップで上から押さえつける事によって、止めたらしかった。

俺にはまったく見えなかったが、野谷さんには余裕で見えるようだ。

野谷さんの力でも止められると言うことは、志貴崎さんは、ちゃんと『手加減』しているらしい。

こうして、二人の間ですさまじいホッケー合戦が繰り広げられる事となった。

音的にはこんな感じだ。

シユカシユカシユカカカカカ！！！！！

さらさらと煌めく野谷さんの髪が優雅に舞って、志貴崎さんの攻撃を丁寧に弾く。

それを志貴崎さんは、強引に拾ってさらに強くはじき返す。お互いに一步も譲らない攻防に、周りにギャラリーが出来はじめてきた。

「リミッターを付けた野谷さんって、あんな感じなんだなあ」

「そうですね」

「はー・・・」

恐らく、今の野谷さんはリミッターを付けて、脳の負荷を減らして体の反射に重点を置いているのだろう。

「ちなみに、あんな状態の人はどんな事を考えてるんだ？」

ふと、思いついたことを鬼谷さんに聞いてみる。

「何も」

「え？」

「多分ですけど、何も考えていないでしょう。いえ、考えているとは思いますが。」

例えば『勝ちたい』とか『負けない』とか。そういった事だけを考えていると思います。

二人の世界というか、体が考えるというか。

良く言いますよね、『あの時は何も考えていなかった。相手と自分以外の全てが見えなくなっって、体がかつてに動いた。気がついたら終わっていた』とか

「へえー」

結局、二人の攻防（どっちが攻めで、どっちが守りかよくわからないが）は、タイムアップまで続けられ、最初に俺が奪われた1点が決めてとなり。志貴崎さんの勝ちとなった。

周りに居たギャラリーが湧き、ようやく周りに人が集まっていた事に気づいた野谷さんがびっくりして、俺たちの所まで小走りであつてきた。

「……楽しかった」

動いたせいだろう。顔が上気して、頬が赤くなっている。

「いやあ楽しいな！本気でやれば勝てるだろうが、あのゲームも野谷も壊してしまうからな！また勝負しよう」

「……ん」

二人ともご満悦のようだ。

志貴崎さんは、何か物騒な事を言っているが、実際そつする事ができると思えるのが恐ろしい。

その後も、皆でできるゲームを中心に、中々楽しい時間を過ごした。

皆ゲーム自体はしたことあるが、ゲームセンターにあるような、実際に体を動かすゲームはまったくやったことが無かったらしく、ダンスゲームで、志貴崎さんが変な動きになるのを皆で笑ったり、バスケットボールをコートに放り込むゲームで、野谷さんが入れられず「正確に見えても、ボールを正確に投げられるわけじゃない」と落ち込んでたり、クイズゲームで皆で考えながら答えたり（以外というか、志貴崎さんが外国の雑学や文化に詳しくかった）、皆の色々な面がよく見れて面白かった。

さて次は何をしようかという所で、野谷さんが、UFOキャッチャーを見ている事に気づいた。

「欲しいのか？」

俺の声にびつくりしたのか、野谷さんが慌てた様子であたふたしている。

見ると、毛糸で編まれた犬のぬいぐるみのような。

ポケットから、500円玉を取り出しゲームに入れる。

100円で一回、500円で7回だ。一回で取れる程腕の自信は無いからな、俺は。（だからといって7回で取れるかは微妙だが）

まずは横軸の移動、ちよつと右にずれたか。

次に縦軸、横はなんとなく分かるが縦方向はなんとも分かりづらい。

ぬいぐるみの腹にアームが入るように、なんとなくで位置合わせして、アームの動きを止めた。

アームが降りて、ちよつと狙ったポイントからズレるが、犬の腹に入って持ち上げようとす。

「・・・あ」

少し頭を上げて犬がつり上がる。

が、そこでずると滑り落ちて、転がってしまった。

何も持っていないアームが所定位置に戻り7というカウントが一つ減った。

「難しいなあ」

横軸は何とかなるが、縦はなんともいかん。とりあえずリトライ

だ。

横軸での移動・・・おっけー。そして縦。
ウイーンという、小さなアクチュエーターの駆動音が、やけに大きく聞こえる気がする。

ここだ、と思った瞬間、俺の手の上に野谷さんの手が被さってきた。

アームが止まる。

びっくりして野谷さんを振り返るが、野谷さんの目は、ぬいぐるみに集中しているようだ。

持ち上がるアーム。今度は、ぴったり犬の狙ったポイントを掴んでいる。重心も綺麗に合ってそうだ。

野谷さんの手に力がこもる。

ゆっくりと、空中へと持ち上がる犬。

そのまま所定の位置へ。

アームが開いて犬は落下、ごろごろ転がって取り出し口に犬が出てきた。

「取れた」

「あ、ああそうだな」

内心の戸惑いを隠して、野谷さんに向き合う。

どうやら、脳のリミッターを付けているようだ。そんなに犬が欲しかったのか。

「あげるよ」

「・・・あ、ありがとう」

照れてうつむく野谷さんは、かわいかった。

「あらー『青春』ですねえ」

びつくりして振り返ると、三人がニヤニヤとみていた。
気が動転して、「そ、そんなんじゃないんだからね!!」と意味不明な返しをしてしまった。

「あー楽しかったー!!」

山城さんが、大きく背伸びをする。

あたりはすでに結構な暗さになってきていた。

「今日はここらで解散かな」

「そうですね」

「・・・ん」

「また明日だな!」

ここで、お互いの連絡先を交換する事にした。

「そういえばさー。『部屋』立ち上げちゃおうかー?」

『部屋』とは、現在急速的に広まっているソフト『heyach at』のサービスだ。

チャットと掲示板を兼ねており、P2P通信や、各種ソフトサービスとの相互接続をもカバーする、総合コミュニケーションソフト

となっている。

プライベートの空間を構築することができ、そこに他人を招待、コミュニケーションをする。VR環境では、部屋の中でアバター同士でのやりとりができるし、携帯などで、タイピング操作によってのコミュニケーションも可能のサービスだ。

「……じゃあ、私が作る」

野谷さんがホストとなって、常設型の『部屋』を組む事になり、後ほどメールにてアドレスとパスを送ってくれる事となった。

とりあえず、今日は解散となり、お互いに別れの挨拶をして、それぞれの帰路へと付いた。

二話の青春度は何点ですか？

「ただいまー」

家に帰着した俺は、玄関の明かりを付けつつ一応帰ってきたことを告げた。

返答は帰ってこない事から、やっぱり姉はまだ帰ってきていないようだ。

嘆息し自分の部屋へ向かう。

ピロン

メールが届いたようだ。

ポケットから携帯を取りだして、着信メールを開く。

「アドレス、パス。部屋作りました」

簡潔な文章のそれは、野谷さんからのメールだった。

「早いな」

早速、スリープ待機させていたPCを起動。「部屋」へアクセスする。

基本的に『部屋』は掲示板の体をしており、リアルタイムでのコミュニケーションとの両立はできるが、お互いが全く同じ時間に居合わせるとほとんどないのでVR接続はしないのが普通だ。

名前の入力には素直に『k e i』とだけ入れて入室。

k e i : テスト

iris : お帰りなさい。圭。

速攻で返事が返ってきた。だけどirisって誰だろう。
部屋間違えたのかな？とも思うが、『圭』と返してくるから、間違いはないと思うのだが……。山城さんあたりなのだろうか？

NOYA : 早いね

ちよつと経つて、野谷さんが反応してきた。

kei : 「iris」って誰？山城さん？

iris : 私は「野谷 卯月」のPC操作をサポートしますAIの「iris」です。よろしくお願いします。

NOYA : この部屋に常駐して貰って、色々皆のサポートも頼む事にした

kei : 何かメイドさんみたいだな

iris : そう考えてもらって構わないです

かなり柔軟に、言葉のやりとりをできるAIのようだ。こんなに素早く言葉を返してくるAIは、今まで見たことが無かった。どこかの研究中だったり、開発中だったりする技術でも使われているのかもしれないな、これは。

Miki : やほやほー

iris : お帰りなさい。ミキ。

nagi : お邪魔します。

iris : お帰りなさい。凧。

Miki : おー、そんなの居るんだね卯月。このソフトそんなのも組み込めるんだー

このソフトは、部屋に入る前の会話も全て記録されているので、時間をさかのぼってログを見る事が可能だ。なので、irisさんの説明をわざわざする必要は無い。

naggi : よろしくお願ひしますね。

iris : こちらこそ、よろしくどうぞ

NOYA : 基本的に色々改造できるから、いじっていくつもり

うん。何だか凄いハイテクな部屋になっていきそうな予感が。

Sikisaki Momiji : これで入れたか？

iris : お帰りなさい。桜。

Sikisaki Momiji : ほーAIか。VR接続すれば会えるか？

iris : 現在はアバターを設定されていませんので、光る球体として描写されると思います。

Sikisaki Momiji : ふむ、残念だな

NOYA : 名前が長い。変えて

SM : どうか？

NOYA : うん

kei : いいのかよ

どん引きだよ。

Miki : いやいや、けど今日は楽しかったよー。

naggi : そうですね

iris : 卯月は今日とても喜んでいたようです。特に、犬のぬいぐるみは大切に本棚に飾られています。

NOYA : /log delete iris) - 1)

system : error

iris : 基本的に、ログのデリートコマンドは、このソフトにはありませんよ？

Miki : 別に照れなくて良いじゃーん

kei : ?

kei : まあ大切にしてるなら嬉しいよ。

ログを削除しようとしているらしいが、犬のぬいぐるみは本人が欲しかったから取ってあげた(というのはちょっと違う)ので、まあ大切に飾ってくれるのならば嬉しい。

NOYA : 大事にする。

nagi : ほこりが付くとお掃除が大変なので、ケースに入れた方が良いかもしれませんね

iris : 商品検索「人形用ガラスケース」アドレス サイズ的にはぴったりのようです。こちらを購入しますか？卯月

NOYA : うん

SM : 便利だな！irisさん、種類の沢山入ったチョココレイトとか無いか？

iris : 商品検索「ワケあり、型落ちチョココレイト6種類ラム入り！5kg」アドレス こちらなどがでしょうか？椀。

SM : ありがとうございます！

早速、irisさんを有効活用するSMさん・・・じゃない志貴崎さん。しかし5kgって。

それにしても、欲しい物を的確に判断して検索してくれるようである。もしかして、とんでもない存在だったりするんじゃないのだろうか。このAI

SM : 今日は50点だな！

kei : 何がだ

S M …青春度だ！
k e i …だ！って言われても・・・
M i k i …今日の楽しさって事-？
S M …というより思い出に残るかどうかって事だな
M i k i …じゃあ私は70点で。お友達記念日だもんねー！
n a g i …私も70点で。
N O Y A …同じく70点で。
k e i …そうだなーじゃあ俺は間の60点で
M i k i …まは普通だねえ
k e i …俺のアイデンティティだな（キリッ）
M i k i …アイデンティティ（笑）
i r i s …アイデンティティを何個も並べると、何だか不思議な
気分になりますね

A Iが気分とか不思議とか分かるのかよ。というのはスルーしておいて、その後も他愛ない会話を繰り返した。

S M …今日は50点だな！
k e i …何がだ
S M …青春度だ！
k e i …だ！って言われても・・・
M i k i …今日の楽しさって事-？
S M …というより思い出に残るかどうかって事だな
M i k i …じゃあ私は70点で。お友達記念日だもんねー！
n a g i …私も70点で。

私は1-

野谷は、チャットログを見て、キーボードの手を止めた。立ち上がって、本棚に置かれた犬のぬいぐるみを手に取り、胸に抱く。

思い出に残るかどうかの点数。

ミキ、凧と、洋服を着て見せ合うのはとても楽しかった。椀との、ホッケーゲームはとても白熱したし、また再度勝負したい。

そして圭は、そんな彼女たちを気づかい導いてくれる。

彼女にとって、今日の一連の出来事は、今までにないくらい楽しかった。

この犬のぬいぐるみを得ようとし、彼の手の上に置いたとき、集中していたため、その時は分からなかったが、後になって気がついて頭が真っ白になった。

まだ、この手に彼の手の感触が……。

この気持ちは何なのか、まだ彼女には良く分からないが、とても大切な物に思えた。

初めての友人。初めての仲間。とても嬉しいと、幸せだと感じられた。

「これからも、彼らと過ごすのでしょうか？ならば、もっと楽しい時間がやってくるはずです」

irisがそう言うてくれたから、きっともっと楽しい時間がやってくるから。

NOYA : 同じく70点で。

そう、チャットログに残した。

もう消せない確定した事。

今日の出来事は70点。だから明日からきつと、70点以上の未来がきつと、やってくるようにと願いを込めた。

「ところで、私の事は友人じゃないのでしょうか？」

irisが気持ち少し落ち込んだ声を出した。

野谷の脳内信号を読み取って、irisなりの考えを出したのだろっ。

「……何言ってるの。……貴方は……私じゃない」

「そうでした。これからもよろしくおねがいます」

kei : ところでな、ちよつと山城さんから貰ったゲームやってみたんだが。凄い難しいんだ

Miki : 私もうすぐしんじやーっ

SM : 何をやってるんだ？

nagi : ゲームですか

kei : hallip point っていうVRFPSだよ。

野谷さんがやってるから一緒にやるっつて。

Miki : そー。あとお母さん「hallip」じゃなくて「hallo」だよ

kei : それでやってみたんだが、凄い難しくてさ

nagi : FPS？

SM : ほほう面白そうだ。irisさん。アドレス下さい。

Miki : スルーされた！

i r i s : 商品検索、HALLO POINT DL pack :
アドレス でしょうか？ 椋。

k e i : うーん拳銃もって相手を倒すゲームだよ。5:5でチ
ームに分かれて戦うんだ。

S M : ありがとうございます。

n a g i : なるほど。どうでしょう？明日はこのゲームを皆でや
るとするのは。野谷さんに教えて貰いながら。

k e i : 俺もそう思ってたさ。どうだろう。野谷さん

M i k i : うんうんー

「どうやら、野谷の好きだと言ったゲームソフトを、皆でやるって
いう話になっているようだ。」

「・・・私に・・・できるかな。・・・教えるのなんて」
「問題ないでしょう。彼らならきつと」

貴方が、そんな顔をするのならきつと大丈夫でしょう。そうi r
i sは思った。

i r i sが肯定してくれた。ならば私は受けなければならない。

明日を今日より楽しくするために。

明日を忘れられない日にするために。

自分が中心になることを、彼女はこの時選んだ。

N O Y A : わかった。けど私は厳しいよ

k e i : ほ、ほどほどに頼む

慌てる上村の顔が頭に浮かんで、つい野谷は、口元が緩んでしまった。

NOYA : 冗談。たかがゲーム。ゲームで勝っても負けても楽しめたらそれで勝ち

SM : その通りだな！だが俺は勝つのが好きだな！死んでも勝つ！

kei : 死ぬならおれは負けるのを選ぶよ

そう。楽しめたならそれで。

彼女は思った、何でだろうと。友達になれるはずだった、もしくは友達だった彼らに思いを巡らせた。

一緒にクランを作って、大会に出るために練習した日々。初めて勝利したあの日。世界大会に出ようと、申請を出して興奮したあの日。

それが、大会が進むにつれて、お互いがギスギスしはじめて罵りあった。

なんでだろうか。楽しめたならそれで、いいはずなのに。

たかが10万\$で、関係は崩れるのだろうか。

そんな場所に、彼らを導いた。私の選択は間違っているのかもしれない。

だけど、彼らなら大丈夫だと、彼らなら私の好きな世界を好いてくれると、自分勝手ながら、彼女はそう思った。

間話 学校生活はどうですか

「異常者、異能者、超能者を囲むこの『学園』ですが、特別な『ナニカ』があるわけではありません。普通に勉強して、普通に体を動かして……」

志貴崎さん達との、何とも濃い一日を終え、次の日学園に登校した俺は、一時限目の授業が始まる前にここ、教員室へと連れてこられた。

もうチャイムは鳴り、一限目が始まっている事だろう。

ちよつと遅いが、この学園についての概要を、説明してくれるそうだ。……ちよつとどころじゃなく、手遅れなくらい遅い説明である。

「貴方は『上山 沙紀』さんのわがままで、転入してきたわけだけれど、本当に何の能力もないのね」

「ええ。一般人の中でも、さらに普通な一般人のテンプレートです。姉があれなので耐性だけがあります」

「みたいね」

ちなみに、俺の対応をしてくれるのは、金髪に淡い碧眼が美しい（あとおっぱいの大きい）白人教師さんだ。

物腰に隙が無いので、きつとただ者じゃ無い。昨日来てから、出会うのはそういう人ばかりだ。

「既に、ランク5の能力者と交流があるようなので、ある程度、この学園の事は知ってますね？」

「そうですね。ランクがあるとか、彼らが『特別』だとか」

「そう。『特別』。正直、この国には能力者はあまり居ないわ。そ

んな中で彼ら4人は、突出してすさまじい能力を持っている。ちなみに、彼らと同じランクの人は、この学園に何人かいるわね」

正確な数字を言わないのは、極秘事項か何かなのだろう。

「そもそも、何故、学園があるのでしょー!」

「ビシィ!と指を指された。

教師に指さされると、何でこーう気持ちが落ち着かなくなるのだろう。

「ええと・・・管理しやすくするため?」

これだけの施設を作り、一手に能力者を引き受けるこの学園。思い浮かぶ理由と云えばこれくらいしかない。

「そうでーす! 答えは『管理と監視と保護』のためです!」
「監視と保護?」

彼女の説明によると、能力者達は、確かに強力であるが、その絶対数は遙かに少ない。

例えば、志貴崎さんのような異常者が1万人そろえば、それは世界にとつて驚異になるだろう。だけど、志貴崎さんみたいに戦闘に向いた能力者は、日本だけで5人にも満たない。世界を合わせても50人いるかどうかも怪しい。

じゃあ、そいつらが協力して世界にけんかを売るか?

答えはNOである。

そもそも50人集まったところで、戦車の主砲で吹っ飛ばされれば木っ端だ。

それに、志貴崎さんは、能力を酷使すると体がぼろぼろになる。

常に最新鋭の医療施設を利用できる状態にないと、彼は100%の力を使えない。国の支援が必要不可欠なのだ。

そして、彼らは国にとって手放したくない駒。いつどこで拉致、暗殺、惑わされるかわかった物では無い。

それらの問題に対処するために、学園が設立された。

彼らを守るために。

そして監視するために。

そういわれると、良く監視カメラが目につくな。と学園を移動中に思っていた。

「と、穏やかに彼らは過ごしていました、がつ！」

「が？」

「そこで入学してきたのが貴方！」

ビシィ！と指を指された。

「はあ」

「今まで、ランク5の人達はばらばらに行動して、特に接点はありませんでした。あっても知り合い、程度。強いて言えば山城さんと野谷さんくらいでしょうか」

「はあ」

「それがなんと！一同に会して能力を見せ合い、さらに！街に出て行って仲良く遊んだそうじゃないですか！！」

「・・・はあ」

「しかもその中心人物はなんと、一般人の貴方だと言つのです！！」
「・・・はあ」

そんなに興奮してまくし立てられても、それが一体なんだと言っ

のか、良く分からない。皆で遊んだだけじゃないか。それに、『中心』というより、引率する保母さんの気持ちだったのだが。

「はあ。いいですか？」

ランク5という存在は、ただそこに居ると言うだけで、周囲は警戒態勢を敷く物だそうだ。

俺らが遊んでいる間に、二台のドクターヘリが動き、覆面警察官が20人出動し、衛星三機が緊急監視態勢へと移行し、バイオテロ対策部隊がスタンバイしたそうだ。他にも色々あったらしいが、ようはいたるところが大パニックになったようだ。

「そんなばかな」

引きつった笑みを見せる俺に、教師はにっこりと笑って、素早く右手を煌めかせて黒い固まりを俺の前に構えた。

拳銃。

「……本物？」

「本物ですよ。今現在、貴方を国は判断しかねています。彼らにとって有益なのか害なのか」

あまりの非現実な光景に、目の前が真っ白になる。
非現実。

そう。非現実。

それならば、俺は巻き込まれたのだ。非現実に。

そう『思い込ませる事にしよう』

「・・・彼らを、そんな物みたいに言うのは、どうかと思いますよ」
「仕方ないでしょう。国は、そういう物の見方しかできない。もちろん私は、彼らを大切な一人一人の人間として見てるわ。それでも、貴方の答えを聞かないといけない」

青い瞳が俺を探る。

俺の本心を、奥の奥まで。そんな必死さが、青い瞳の揺れから感じられる気がした。

これは、俺の『常識』じゃない。『現実』じゃない。『本当』じゃない・・・。

必死に自分に言い聞かせて、俺は、自分の本心を言葉にした。

「あいつらは、別に友達が欲しかったただだろ。
タイミングがよかったんだ。単純に。」

俺は何もしていないし、これから何もする気はない。何かの中心になることも、これからきつとないし、あいつらを引っ張るような事もきつと、ない。

約束する。俺はあいつらに何かを強いたりはしない。
お願いは、するかもしれないけれど」

震える体を必死に押さえつけ、汗ばむ手を握り、必死にこの非現実から逃げる。

「わかりました」

教師が拳銃を元に戻した。プレッシャーが霧散する。

「実は国としても、彼らの能力と、心のバランスをどう取るのか。」

頭を悩ませていたところでした。そこで、貴方がやってきて、ランク5の人々がお互いを認識して仲良しグループを作ってくれそうだと、言うことでテストしました」

恐らく、銃を突きつけられる以外にも、何かで俺の精神状態でも見られていたのだろう。冷や汗が背中を伝う。

「ちなみに、変な事言ってたら？」

「内緒」

「ちよつと漏らして良いですか？」

「ダメ」

ため息をつきつつ思う。

俺はもう常識に戻れないんだろうなあ、と。

正直もこの学園から、彼らから逃げ出したいという気持ちでいっぱいだが、それでも何故か、彼らとの絆が大切な物のように思えた。

予感かもしれないし、運命かもしれない。そういう不思議な気持ちに彼らを感じた。

「ちなみに私は虚実の異能者。ランクは3。本名は秘密。キャシーと呼んでね」

教師改め、キャシーさんと軽く握手をする。彼女も能力者であつたらしい。

虚実の異能者。本当か嘘かわかる異能。

彼女は、相手が嘘をついているのか、本心で言っているのかわかる。ただそれだけの能力。

それゆえに、『虚実』の異能者。

彼女にとって、相手の精神構造や理念を知る必要は無い。ただ面と向かって、喋れば良い。それだけで、嘘か、誠か、彼女に筒抜けとなる。

科学的根拠は無し。だからこそその異能。

「そろそろ一時限目が終わるわ。もう戻って良いわよ」

「・・・失礼します」

とりあえず、俺の疑念は晴れたらしい。特に注意も受けなかった
ので、俺の本心を知りたかっただけなのだろう。

「どうしようかなあ」

頭痛の種がまた増えた。

とりあえず忘れた方が身のためだと思い、俺はこの出来事を無かった事にした。

一限目終わりのチャイムが鳴るタイミングで教室へ戻ると、皆ち
ゃんと登校していたようで、席に着いている。

・・・志貴崎さんは寝ている。

「どったのー？ 転入初日から遅刻なんて不良児ねっ」

「いやちよっと、教員室に呼ばれて話聞いてた」

「ふーん」

席に戻ると同時に聞いてきた山城さんであったが、特に興味はな
かったようで、次の授業の準備を始めた。

俺も続いて授業の準備をする。といっても、タブレットPCを取り出して、教科書データを読み込ませるだけだが。

ちなみに、俺と山城さんはノートに自分で書き取る派で、野谷さんはタブレットの教科書データに直接書き込む派のようだ。鬼谷さんはこつちからは見えないな。志貴崎さんは・・・教科書すら広げない派か。

「今日は外で遊ばず、すぐ帰ってゲームするの？」

ふと思った事を口に出す

「あーそれでもいいかもね。外で遊んじゃうと、疲れちゃうし。私結構寝落ちするんだよね」

山城さんが振り向きつつ答えた。ツインテールが大きく回る。

「・・・それでもいい」

とりあえず、授業が終わって、昼食を皆で食べるときに意見を聞こうかな。

授業は滞り無く進んだ。俺の転校前の学校と、特に進度は変わらないようだ。とりあえず安心だ。

授業中に改めて考えてみた。彼らの事。

まだ一日しかつきあいのない彼らの事。

正直どうしようかと思う。

尊い存在だとは、まだ思えない。

親友ともまだ思えない。

下手な事をすれば、命をかける事になるだろう。彼らとつきあっていくのが、命がけだと言うのなら、実際遠慮してしまう。

だからといって、俺が今の俺のままであればそれで良いと思う。

ただの友人として、彼らと過ごしていけばそれで問題はないはずだ。

今はとりあえず、そう答えを出しておいて、最終結論は未来に棚上げだ。それで良いと俺はこの時思った。

自分でも後ろ向きな考えだと、そう思った。

三話 VRFPSをしよう！初級編？（前書き）

ユニークアクセス100ありがとうございます！

三話 VRFPSをしよう！初級編？

「じゃあ、始める」

「……はい」「」

「もっと、お前らは屑だ！腐ったみかんだ！！みたいな感じにしないと、だめだよ卯月い〜」

腐ったミカンは置いておいて、俺らはVRFPS『HALLO POINT』の中にいた。

あたりは港のようだ。色々なコンテナがひしめき合い、遠くには倉庫が見える。海の臭いの濃いちよつと霧の濃いフィールドだ。

今日は、学園での授業が終わった時点で帰宅し、このゲームで皆で遊ぼうという事になった。

何故か山城さんのテンションはマックスである。

皆、防弾チョッキにヘルメットと、異様な光景となってしまった感じがする。

ちなみに、山城さんは、いつものポニーテールを少し、下に下げ、ヘルメットから出しており、鬼谷さんは、エディットで編集したのか、長い髪をショートカットに変更していた。

「一列に並んで」

「いえすまむ！」

野谷さんに言われたとおりに、一列に並ぶ。山城さんはのりりである。

と、野谷さんの手には銃が握られていた。昔の映画とかで見るポピュラーなハンドガンだ。

VR環境下だと、野谷さんはいつものようにゆっくりではなく、

迅速に動けるようで、その口調も、昨日のゲームセンターで志貴崎さんと対戦してた時のようになっていた。

「このゲームは難しい。まず、体を撃たれると色々な障害が出る」

パパパパパン！

「うお」

「にゃっ」

「きゃあ」

野谷さんの右手が、一瞬で跳ね上がり、横ないだ。

それと同時に、俺の腕に衝撃が走った。腕を撃たれたらしい。

目の前に広がるゲーム画面には、人間のマークがあり、右手が真っ赤になっている。HPも20%ほど減少している。

他の皆も同様のようだが、志貴崎さんだけが飛び退いてちよっと離れた位置にいた。

「む、よけたと思ったんだがなあ」

「一発外した」

どうやら、野谷さんの一撃目を志貴崎さんは避けたが、避けた先で再度撃ち抜かれたらしい。どちらも人間じゃ無いな。

「何だか、金槌で殴られた感じがしましたね」

「銃を構えてみて」

言われた通りに銃を構えてみる。標準が合わずぐらぐら揺れる。

「腕が撃たれると、構えづらくなって狙いが付けられなくなる。

体を撃たれると、呼吸がしにくくなり走れなくなる。
足を撃たれると、歩いたり走ったりがむずかしくなる。
頭を撃たれると、視界が真っ赤になり見えづらくなる」

野谷さんが言い終わるくらいのタイミングで、またもや右手が跳ね上がり、ハンドガンが発砲される。

パン！

次は右足への衝撃。

「うお！」

「歩いてみて」

いきなり発砲するのは止めて貰いたいが、言われた通りに歩いてみる。

左足を前へ。次は右足

と、右足を動かそうとすると、上手く動かず、引きずるような形になってしまう。

「攻撃されると、こんな感じで色々な支障が出て、戦闘が続行し難くなる。どれだけ無傷で相手を倒せるかが鍵」

「なるほどー」

俺が昨日プレイしていたときは、敵の前に飛び出し、とりあえず弾を全部撃ち付くすのを繰り返すばかりで、すぐに死んだ。

「あと、その状況では、体が大きく動くから、色々な音が出て相手に見つかってしまう」

確かに。ちよつと歩くとずりずり、ずりずりと音が出て、ビッコを引くため、体中の色々な物がぶつかって、ガチャガチャうるさい。

「上手なプレイヤーは、移動中にあまり出さない」

野谷さんが、その場で軽く、くるくるとランニングする。チャツチャツチャツチャと軽い音がするだけだ。俺とは大違いだ。

「へえー！」

山城さんと鬼谷さんは、それを見て、同じようにくるくる回った。ガツチャツガツチャガツチャガツチャと、野谷さんよりも大体三倍くらい、大きな音が出てしまっている。

「それくらい音がすると、相手に場所がばれてしまって待ち伏せされる」

「それ確かー。見つけた！と思ったら相手が銃かまえてるんだよね」

「・・・難しいですね」

しばらく、その場で山城さんがくるくる回る。音が出ない走り方を探しているようだ。

が、一向に音が小さくならない。

「ねね、卯月。もっかいやってみて」

「わかった」

野谷さんが、くるくる回っているのを山城さんがじっと見ている。

「おっけー！こつでしょー！」

山城さんが回り出す。今度は、チャツチャツチャツと、野谷さんとほとんど同じ音になっている。

「すげえ！」

「へっへーん！伊達に役者やって無いぜ」

ぶいぶい！とピースサインを飛ばしながら、にっこり山城さんが笑う。

見ただけで、同じ動きをできるというのもすさまじい……。その後、ダメージをリセットして、しばらく皆で走り方の練習をした。

走りながら、できるだけ上体を動かさないようにする。というコツを掴んでからは、かなり音がしなくなってきた。

志貴崎さんは、速攻で飽きてコンテナを登ったりしていた。何であんな所に登れるんだ？

「次は武器」

```
system : god mode  
system : ammox  
system : map | test | fire load
```

野谷さんが、手元にウィンドーを表示して操作すると、システムメッセージが表示されてあたりの情景が一瞬で変わる。

薄暗い室内には、長テーブルが一つ。その向こうには、10個程度の的が設置されているだけの部屋だ。

「色々試して、自分に合う物を選んだ方が早い」

「なるほど」

確かに。一つ一つ銃の解説をされても、ピンと来ない。実際に撃って選んだ方がよさそうだ。

良く映画とかで見ると、木製の肩当てがあるライフル銃を手に取り、的に向かって撃ってみることにした。

肩にしっかりと抱き照準で狙いを定める。

ダダダダダダダダダダダダダダダダアン！

銃口の先から、激しい火花を放ちながら銃が吠えた。

衝撃はあまりないが、銃自体が暴れるというのか、二、三発目からは、弾がどこに向かって飛んでいくのか分からなくなり、対象を見失ってしまった。

残弾表示を確認すると「16/31」となっていることから、15発ほど吐き出した事になるようだ。

と、次の瞬間「31/31」とに残弾表示が切り替わった。どうやら弾が無くならないような設定にでもなってるらしい。

「撃ち過ぎ。的に近づいて弾痕を見てみて」

野谷さんに言われた通りに、的に近づいて何発当たったのか確認してみる。一発だけの中心部に当たり、後は全てはばらばらに的外れていた。傾向としては、どんどん上の方にずれて行っているようだ。

「見てて」

元の場所に戻った俺の横に立って、野谷さんが銃を構える。プラスチックのような白い外觀が特徴的なおもちゃみたいな印象の銃を

構えている。

バババババババババン！！

俺の持っていた銃よりも、短い間隔で弾がはき出される。

野谷さんの銃は、弾が出るたびに跳ね上がり、見る見る照準が上にずれていくのが良くわかる。

「フルオートで撃ち尽くすと、上にずれて行ってあまり当たらない。撃つたびに位置調整が必要」

バババババババババン！！

また同じように撃っているように見えるが、撃つたびに下にちよつと位置調整しているのだろうか、あまり上にぶれない。

が、それでも、だんだん銃口が上に向かってるのがわかる。

「銃口から出る光で的が見えなくなる。この光を『マズルフラッシュ』という」

「なるほどー」

「これを回避するにはー」

ババツ！ババツ！ババツ！！

「二発から三発ずつ撃つ。バーストショットっていう撃ち方」

的に近づいて見ると、確かに、全ての弾痕が的の中心付近に集まっていた。

「なるほどなー」

元の位置に戻って、もう一度銃を構える。

ダダン！ダダン！ダダン！！

よし、今度は的を見失わなかった。弾痕もちゃんと全体的に当たっている。

「ちなみに全部撃ちたい時はこうする」

野谷さんが腰に銃を抱えて、銃のトリガーを引いた。

ババババババババババババババババババ！！

みるみる的が、弾痕にまみれていく。

「マズルフラッシュからの影響を受けないし、体全体で支えるから安定する。『制圧射撃』っていつて、相手をビビらせる撃ち方」「なるほどなあ」

銃の撃ち方一つとっても、色々と奥が深いようだ。

その後は、皆で色々な銃を手に取り試し打ちをした。

銃というのは色々あって、マズルフラッシュを上方に噴射して、銃口が跳ね上がるのを阻止する銃、発砲間隔が短くなりすぎて暴れ回る銃、元からフルオートではなく、バーストショットだけしかできない銃等々。

「ねーねー。この短いマシンガンはなんなのー？」

「忘れていた。銃器は基本的に五種類ある」

野谷さんの説明によると、大まかに銃器は五種類に分かれるらしい。ハンドガン、アサルトライフル、サブマシンガン、スナイパーライフル、ショットガンだ。

ハンドガン：手に収まる単発式補助火器。

基本的にハンドガンともう一つ銃器を持って戦闘をするのが、このゲームの基本。

アサルトライフル：主要武器。

長い銃身は、遠距離の敵も安定して狙撃する事ができる。短距離は中距離の幅広いレンジに対応。

発砲間隔レイトが短いのも特徴で、基本的にはこれを選んだ方が良い。

サブマシンガン：近接戦闘特化型の銃器。

その小ささから、都市戦での基本的な装備となる。が、発砲間隔が長い、中距離以降へはいまいちな安定度。動き回る人向け。

スナイパーライフル：言わずもがな、遠距離専用武器。

基本的に超長距離での暗殺用火器のため、市街地戦闘をテーマにしたこのゲームには不向きとなっている。

発砲時の、巨大な音は周りの人に気づかれ、一気に敵が群がってくる。弾も少ないが、その分ダメージもでかい。野谷さん曰くロマン武器だそうだ。

ショットガン：その名の通り近距離戦闘専用火器。

発砲間隔が大きく、隙が大きくなる。

「変わり種でこういうのもある」

そう言って、野谷さんはショットガンを一つ手に取った。何か丸い缶のような物が付いている。

ダンダンダンダンダン！

信じられない位早い間隔で、ショットガンから弾がはき出される。弾が弾まみれになった。

「ドラム式。デメリットはこのドラムの大きさ。振り回す事が難しく、携帯に不便」

どんなものにも、メリットとデメリットはやっぱりあるようだ。そんな訳で、俺と鬼谷さんがアサルトライフル。

山城さんがサブマシンガンと決まった。山城さんは、いけいけいけいけいけの精神でプレイするらしい。

と、野谷さんが装備しているのは、彼女の身丈には少々(？)、物騒なスナイパーライフルだ。

「私はこれ」

心なしか、胸を張って満足げである。うん。子供が自慢の物を見せて、えばっているようで大変かわいらしい。

「思ったんだが、それで凄く遠くから狙うってのはどうなんだ？」

当然の考えである。後ろの方に引っ込んで、敵が来るのを待つてそれを仕留める。ゲームの大半を隠れて待つことになりそうだが、確実に勝てそうだ。

「構えてみて」

野谷さんから手渡され、スナイパーライフルを構える。大きなスコープが、視界の半分以上を埋める。

片目を強く閉じてスコープをのぞき込んだ。

的が、目の前にあるように感じる。これなら遠くから狙ってても敵を倒せそうだ。

と、野谷さんが的の近くまで歩いてきたと思ったら、的の前に立ちはだかった。

「私を撃つてみて。ダメージは無いから大丈夫」

それならと、遠慮無く撃つ。

ッダーン！！

轟音としか表現できないような音が、耳元で鳴り響いた。

野谷さんは、一歩右にずれており、弾は当たらなかったようだ。

「これから歩いてそっちに向かうから、当ててみて」

気を取り直して狙いをさだめる。が、野谷さんがスコープの中から消えた。

あ、いた。

あ、消えた。

あれ？俺今どこ見てるんだ？
完全に野谷さんを見失った。

「はい」

「うおー！」

野谷さんに肩を叩かれた。どうやら、俺が慌てている間に俺の横まで歩いてきたようだ。

「遠くの物は確かに撃ちやすい。けど、ちょっと対象が動いただけですぐ外れる。」

遠くの物を撃とうとすると、ちよつとのズレが命取りになる。そして外すと、間違いなく敵にばれる。敵はすぐに隠れて、もうその場所から敵は顔を出さない」

「なるほど」

スナイパーライフルが、ロマン武器だという事が良く分かった。後方からの狙撃がダメなら、その超火力で中距離での戦闘を強いられてしまうわけだ。

そのスナイパーライフルを、自分の獲物だと胸を張る野谷さんの力量ってば一体……。

三話 VRFPSをしよう(初級編)？

「できた！」

今まで静かに隅で何かをしていた志貴崎さんが、突然声を上げた。どうやら、自分の装備を色々試していたらしい。

見ると、半袖のTシャツの上に一番軽量の防弾ベスト。左手にサイレンサー付きハンドガン。右手にナイフが握られている。手榴弾は、フラググレネード二発にフラッシュユ一発。

それが、志貴崎さんの装備の全てらしかった。

「・・・マシンガンとかは？」

「ないっ！」

ニカッと良い笑顔をされても困る。

「見る見る。こんなグローブがあつてだな」

そう言いつつ、志貴崎さんが右手を広げる。ナイフが手にあるが、志貴崎さんが手を振っても何をしてもそのナイフは手から離れない。どうやら手の平にナイフが縫い付けられている物のようだ。

「少年兵とかがな、良くこうやって居るんだ。多分握力を補うためだろう。それにだなー」

と志貴崎さんがその場でジャンプした。音が全然しない。

「これで、ほぼ完全に無音で移動できるぞ！」

そもそも、少年兵が良くそうしているとか何で知ってんのとか、音がしないぞとか言う以前に、何その紙装甲とか、色々突っ込みどころ満載だが、まあ本人がそれで良いなら良いんだろ。

「まあ、志貴崎さんがそれで良いなら良いんじゃないか？」

「ふふん。まあ見ている。さつき色々動いて、大体このゲームでできる事も分かったからな」

「自分でこれだって思った組み合わせがあるなら、それが正解。間違っていたらすぐ変えれば良い」

野谷さんは、俺たちのやりとりを微笑みながら眺めていた。

「じゃあ、簡単にルールを説明してBOTと勝負してみる」

「……はい……」

場所を元の港に戻して、野谷さんの話に耳を傾ける。

ちなみにBOTとは、ロボットの略称で、AI操作のアバターの事だ。人間に近い動きをし、レベルを設定する事によって、烏合の集から軍隊レベルまで幅広い難易度を設定する事ができる。

「私たちは今、テロリスト。マップには爆発対象が二カ所ある。あそことあそこ。AポイントとBポイント」

ふむふむ。Aポイントは、コンテナが密集した場所で、Bポイントは、倉庫の中のような。

それぞれミニマップに表示されているので、大体どこにあるのがマップを歩いて回らなくても分かる。

「テロリストは、この爆弾をAかBのポイントに持って行って、設置して爆発させるのが目的。もしくは、相手のカウンターテロリスト・・・警察か軍隊みたいなのを、全部倒せばいい」

野谷さんが、くるっと後ろを向く。ランドセルのようにしてコケ色のバックを背負っている。つまりこれが爆弾なのだろう。

そのまま野谷さんが、スタスタとBポイントの方に歩き出すので、俺たちもついて行く。

倉庫の中に入り、ごそごそと爆弾を設置させる野谷さん。といっても爆弾を下ろして真ん中のボタンのような物の上に、手をのせるだけでいいようだ。

ビー！ビー！ビー！

野谷さんが数秒そうしていると、突然あたりに警報が鳴り響いた。ミニマップを見ると、Bポイントが真っ赤に光っている

「これで、爆弾が設置された。40秒で爆発するから、私たちはこれを死守する。

この時、私たちが全滅しても、私たちの負けにはならない。

私たちが全滅しても、爆弾が爆発したら、私たちの勝ちとなる」

「つまり、爆弾を設置するまでに全滅すると負け。爆弾を設置した後、全滅したとしても、爆弾が爆発すれば勝ちなわけだから、爆弾を設置したら、玉砕覚悟で当たって碎けるわけだな」

「そんな感じ。爆弾を設置したあと、どういった対応をするのか。それはその時によって色々あるから、やって覚えるしかない」

何事も、経験であるということか。

のんびりと爆弾のままで会話していると、どこからともなく、ガッチャガッチャと音が聞こえてきた。

音の方向を見ていると、ハンドガンを構えた人が倉庫の中に入ってきた。

そのまま、俺たちを押しつけて爆弾に近寄り、爆弾に手の平を置いてそのまま数秒じっとしている。

「こんな感じで、解除されると残兵がいたとしても私たちの負けとなる」

カウンターテロリスト ウイン

野谷さんが言い終わると同時に、爆弾が解除されたようだ。相手が勝利したとアナウンスが流れ、ゲーム画面の隅の方のスコア表に「0-1」という表記が書かれている。

しばらく経つと、目の前がブラックアウト。次の瞬間には、一番最初に居た位置へと戻されていた。

「爆発物は一度しか仕掛けられないわけだな」

「そう」

「ふむふむー。なんとなくわかったよー！」

「野谷さんの説明は、わかりやすいですね」

「そんなこと、ない」

「うむ。敵を全て殺せばいいわけだ！」

「違うわっ」

野谷さんは、照れてうつむいた。

大きなスナイパーライフルとの対比が、昨日以上に、彼女を小さく見せているように感られ、思わず手が出て、野谷さんの頭をなでてしまう。ヘルメットごとではあるが。

「！？」

野谷さんが、びくつと肩をふるわせて固まってしまった。

「わ、悪い。つい」

「何がついなのに。私はなでてくれなかったのに。」

野谷さんは、小さく首を振るってうつむいてしまった。

山城さんがブーっとふくれていたが、次の瞬間にやにやっつと、意地の悪い笑みを浮かべる。

「今日の成績よかったら、私もなでてもらおう」と

「あ、それはいいですね」

とんでもないことを言い出した山城さんに、それに追順しちゃう鬼谷さん。

「何だ、なでて欲しいのか。どれ」

志貴崎さんが、ぬうつと手を出してきて、鬼谷さんと山城さんをぐりぐり撫で回した。

「ちよ、わ、わー!」

「きゃあ!や、やあ」

結構な勢いで、ぐりぐりやられているので、二人とも頭がぐりんぐりん回っている。おお、これだけ余裕の無い鬼谷さんは、今後あまり見れない気がする。

「はっはっはー!いやあ。どうだ。撫でられた気分は!」

「……ありがとう。これは、お礼、ね!」

はあはあと、肩で息をする山城さん。

鬼谷さんは、目を回しているようでうつむいて何も喋らない。

山城さんが、背中に手を向けて自分の獲物を回す。肩を主軸に、サブマシンガンがぐるっと回転、一瞬で山城さんの射撃体勢が整う。野谷さんのお手本通りの綺麗な腰だめ、制圧射撃の構えである。制圧射撃は銃身がぶれ精密射撃ができないため、基本的に体を撃つ。が、山城さんはもっと下、志貴崎さんの足下へと銃口を向ける。

「踊れ！弾に酔って溺れる！」

パパパパパパパパパパパパパパパパパパパン！

「ぬお！？何故だ！」

山城さんの容赦の無い発砲に、志貴崎さんがたまらず回転、転がりながら物陰へと向かう。

山城さんも、それを追いかける。

野谷さん伝授の、お手本通りの走りは、昨日今日でこのゲームを始めたとは思えないほど、様になっていた。

パパパパパパパパパン！ガチツガチガチ！！

弾を出し切ったようで、何度もトリガーを引く山城さん。口元から「チィッ」と舌打ちまでしてやがる。こええ。

その瞬間、山城さんの横に出る影が。

鬼谷さんだ。

アサルトライフルを腰に構え、こちらも制圧射撃の構え。・・・
というか足音完全に消えてたな。

その姿に満足して、山城さんは鬼谷さんにアイコンタクト。うなずき合ってこちらに戻ってきた。

ドバーン！！

約二秒後爆発音。フラググレネードが爆発したのだろう。……恐ろしい連携プレイであった。

ちなみに、このゲームはフレンドリー同士撃ちファイヤ無しである。

「すごいな……いや、ひどいな……」

と、あまりの光景に、ありきたりな言葉しか出ない俺の服を、引っ張る感触があった。

「あ、頭なでも大丈夫だから……」

顔を真っ赤にして、野谷さんがうつむきながら、俺の服を引っ張っていた。

どうやら、先ほど俺が頭を撫でて謝った事を、気にしているらしかった。かわいすぎて、どういった反応が正解なのかが良く分からなかった。

「う、うん」

とりあえず、それだけ返すのが精一杯だった。どうすれば、ベストな対応になるのでしょうか。教えて？皆さん。

「もー、あんなにぐりぐりやるもんじゃないでしょー！！！！」

「そうです。女の子は大切に扱うべきです」

数分後、志貴崎さんを正座させて、山城さんと鬼谷さんは「女の子はいかに大切に扱うべきか」というお題で説教をしていた。志貴崎さんは始終頭の上に疑問符が出ているが。

「これはあれだね！全然だめだね！理解してないとみたね！！」

「そうですね」

「圭！！」

「はい！？」

いきなり話を振られた俺は、先ほどの山城さんと鬼谷さんの連携プレイを見ていただけに、震え上がる。

「卯月をなでなでしなさい！」

「はい！」

言われるままに、野谷さんを撫でてしまった。静観モードだった俺と野谷さんは、ヘルメットを外してくつろぎ中だったため、手に野谷さんの髪の毛の感触が伝わってくる。VR環境下であるためあまりリアルな感触では無いが。

野谷さんは、いきなりの事にビクツと体が震えたが、そのまま目を細めて気持ちよさそうにしていた。嫌ではないようなのでよかった。

「わかった？あれがなでなでだよ！！」

「ふむ」

俺のやり方を見ていた志貴崎さんは、数秒じいっと観察していたと思うと、いきなり立ち上がりて山城さんに手を置いた。

「どうだな？」

そのまま、ゆっくりと山城さんをヘルメットの上から撫でた

「ち！お、おう……」

一瞬テンションマックスになりそうだった山城さんが、沈静化した。「なんか違う……」と困惑顔だ。

鬼谷さんは、それを見てくすくす笑っている。

何だか、最初と話が違う形になっている気がするが、まあいいか。

テロテローン

志貴崎 桜は、技能『女の子の扱い：レベル1』を習得した

そういう話じゃないし、何かエロチックだし。

三話 VRFPSをしよう！初級編？（前書き）

1000PVありがとうございます。

マップの絵を描いてみました。え？へたくそ？志貴崎さんの力作ですよ。ぶんぶん

<http://4511.mitemin.net/i36049/>

三話 VRFPSをしよう！初級編？

3

2

1

0

眼前に広がるカウントダウンが0となる。

それを確認して、志貴崎は全速力で駆け出した。足元の砂利がガシヤガシヤと爆ぜる。

「はええー!!」

後ろから、上村の驚愕を含んだ声が聞こえた。軽量装備のせいだろう、既に結構な距離ができていと予想される。

このマップは、先ほど確認したところ、敵のカウンターテロリストのスタート地点がAポイント、Bポイントに近い位置にあり、速攻で陣地展開、スタンバイできる位置にあるらしい。

ゲームの趣旨からすると当たり前のことだが。

全体的なマップ構成としては、テロリストはスタート地点からまず、コンテナ置き場を越えて、二階建の建物へとぶつかる。そこから建物の中を進んで向こう側へ出れば、小さな広場をはさんでもう一つ、二階建の建物があり、その向こうがAポイントのある倉庫だ。

皆で話し合ってこれらのシチュエーションの名前を、『テロ側コンテナ』『テロ側建物』『挟み広場』『軍側建物』と共有しあって

いる。

そして、『テロ側建物』に入らず左に折れると、Bポイントがあるコンテナ密集地点となっている。

ここは名前を『Bコンテナ』とした。

また、そこからは『テロ側建物』『挟み広場』『軍側建物』が一望できるような配置となっている。

今回は、そのまま『テロ側建物』へ特攻。

走り止めないまま腰にあるスモークを手取る。

ちなみに、今回はスモーク二発にフラッシュ一発にしてみた。『挟み広場』に放り投げ、勢いを止めないままに躍り出る。それと同時に煙幕が吐き出される。

煙幕で前が見えなくなるが、感覚で直進。『軍側建物』の側面に打ち付けられた、配管類につかまって、スピードと力任せに上へ上る。手と足を同時に動かし、一気に屋根上へ。

少し休憩し、スタミナゲージが回復するのをしばし待つ。

その間に、屋根へ耳を押し付けて中の様子を探る……ガチャガチャ音が鳴っているのが、敵が室内にいるのは間違いなさそうだ。スタミナゲージが満タンになったのを、目の端で確認、屋根をそろそろと進んで、縁まで到着。ここからだAポイントのある倉庫が丸見えだ。が、まずはこの建物の掃除が先だ。

フラッシュバンを手にとり、縁から顔を出して窓の位置を確認。既に物音はしなくなっているが、構わず窓へとフラッシュバンを投げ入れた。

パン!

フラッシュバンの破裂音を聞く前には既に、志貴崎は空中に身を

投げていた。そのままだと地面に激突してしまうが、志貴崎の右腕が太陽光に反射しながら、屋根の縁に突きつけられた。

屋根の縁には排水用の溝。見た目的にはプラスチック製だろう。それが、志貴崎のナイフに突き立てられて「ガリイ！」と音を立てた。

……それだけで溝は破壊されず歪みもしない。

予想通りだ

志貴崎は、猛禽類の笑みを見せながら思った。これはゲームである。

もちろん、リアルできてVRできない事がたくさんある。が、逆もある。『VRできてリアルできない事』。まさに今、志貴崎がしているアクションがそれである。おそらく上空に張り巡らされた電線も、バランスを崩さなければ踏破できるだろう。

志貴崎は、以前VR環境下で結構な日数『住んだ』事がある。彼が最初に行った行動は、『現実』と『VR』の違いを知ることであった。それが今回は、大いに役に立つ形となった。

特殊なナイフ付きの手袋は、しっかりと志貴崎の全体重を乗せて悲鳴一つ上げずに、志貴崎の体をナイフを軸にぐるっと回転させた。つまりは窓へと向かって。

建物の中へ窓を経由して豪快に進入。盛大な音が出るが、フラッシュバンにより視覚と聴覚を失った敵は、地面にうずくまっていた。とりあえず今眼前にいるのは二人。

敵の姿を認識すると、一人へハンドガンを向けて発砲。何発頭に撃ちこめば死ぬのか、良くわからないのでとりあえず4発ほど撃ちこんだ。

「キュンキュン」というサプレッサー独特の音が手元で響く。そ

の間に、半端無意識に右手が煌き、もう一人の首を撫でた。

SM 「Glock」 Been BOT

SM 「Knife」 Jones BOT

どうやら、二人ともきつちり『死んで』くれたらしい。ハンドガンの弾は、あと13発。十分だと判断。

ガツチャガツチャツガチャ

下から足音が聞こえる。

どうやら、下で待ち伏せしていたらしい。フラッシュの音と物音に気がついて、こちらに向かっているのだろう。

相手が戦闘態勢を取る前に、こちらから突撃する事にする。

できるだけ足音立てないように、階段へと向かう。さらに、敵の歩幅に合わせることで、完全に敵の足音と志貴崎の足音が混ざる。

ほっぷ

すてっぷ

じゃんぷ！

この『体』最大の力で、階段を飛び降りる。敵はちょうど階段を上ってる途中で、あわてたように銃を構えようとするが！。

遅い！

ジャンプの時に、既に敵の大体の位置を予測し、銃口を向けていた志貴崎は、敵を認識して銃口を微調整、跳躍しながらの射撃が不

安定なのは分かっているんで、撃てる分だけ撃つ事にした。
頭はずし易いので、体へ向けて発砲する。

キュンキュンキュンキュンキュン

死亡確認のログを確認するのも煩わしいので、すれ違い様に、敵の首を右手で撫でる。

そのまま一階へと着地、手早くハンドガンのリロードをしながら、ログを確認。

SM 「Glock」 Elie BOT

ハンドガンのみで行けたようだ。とりあえず、これで三人。
建物の中をささつと確認、安全なようなので声を出してもよさそう
うだ。

「軍側建物、敵を掃除した」

今倒した敵から武器を奪う。

照準器付アサルトライフルに、志貴崎の物と同じハンドガンを持っていた。ありがたく弾倉だけ頂戴する。

油断なくアサルトライフルを構えて、二階へと引き返し、辺りの注意を探る。とりあえずAポイントはここからだと思えない。Bポイントに敵はいないようだが、さて。どうするか。

とりあえず指示を待つことにした。

「はええー!!」

志貴崎さんは、すさまじい勢いで走っていくと、そのまま『テロ側建物』へと消えていった。装備を極限まで削るとあそこまで早くなるのかー!!

「俺らも続くか?」

「離れすぎてる。ここは左へ折れてBポイントを攻める」

なるほど。志貴崎さんが囷となって暴れる間に、こちらはBポイントへと着実に攻撃を加えるわけだ。

「それなら私が前へ出る!」

二番目に軽量装備の山城さんが、全力疾走へと移る。足音が盛大になるが、志貴崎さんが向かった方から、スモーク音やら破裂音が聞こえてくるから、相手の注意も散漫になっているだろう。

「スモーク」

野谷さんの一言で、俺は腰からスモークを取り出して、がむしやらにBポイントへ向かって投げる。

鬼谷さんも、野谷さんも投げたよう形で、合計三本の煙幕が尾を引いて落ちていった。

煙幕が広がり山城さんの道を作る。

山城さんが、煙幕の中に突っ込んだのを確認しつつ、自分も煙幕の中へ。おお、なんもみえねえ。

GUIに表示されているミニマップを頼りに進む。仲間の位置も同時にマップには表示されるので、はぐれることもない。

そのまま、俺たち四人は一匹の蛇のように、煙幕の中を進んで、Bポイントまで到達した。スモークグレネードがいい形で落ちたようだ。継ぎ目の一切無い完璧な形の煙幕となっていた。

今回は、俺が爆弾を持っていたので、そのまま設置に移る。煙幕を完璧に張ったので、敵はまだ俺たちを発見できていないらしい。

む、山城さんが、そのままBポイントをスルーして走っていった。『Bコンテナ』向こう側の、敵が居ないのかも確認してくるようだ。

パパパパパン！パパン！！

「りゃああああ！！」

山城さんの雄叫びが上がった。画面にもしっかり

M i k i「U M P」 N i k e B O T

と表示されていた。勇ましすぎです、山城さん。

「軍側建物、敵を掃除した」

と、そこで志貴崎さんの声が、インカム越しに聞こえてきた。

ログを見ると志貴崎さんが、三人倒したという表示が出ている。どういう動きしてたんだ？あの人。

ビー！ビー！ビー！

警報音が、当たりに鳴り響き始める。爆弾の設置が完了したのだ。敵はあと一人だが、油断できない。

「椀はそのまま、その建物からAポイントへと向かって。隠れなくても良い。敵がいたらそのまま対峙。敵がいなければAポイント経由でBポイントまでダッシュ」
「了解」

野谷さんが、的確な指示を飛ばす。
俺たちは散開して、敵が来そうな場所へと銃を向け警戒。
と、『テロ側建物』から敵が出てくるのが見えた。どうやら入れ替わりで一人、志貴崎さんとすれ違いしづらい。爆弾は仕掛けたので、時間稼ぎに徹する。

ババン！・・・ババン！！

一秒ほどの間隔を開けて、弾を切らさないように発砲。敵は慌てて『テロ側建物』へと引き返した。敵が頭を出せないように弾幕も張ってみた。

「テロ側建物に敵が入ってる。裏から出てくるかも」
「圭、変わって。テロ建物裏から回ってこないか見てて」
「お、了解」

野谷さんと、持ち場を入れ替わる。
コンテナ裏から敵がやってこないか警戒しつつ、野谷さんがどう
いうプレイで敵を待つか参考程度にちらちらと観察する。

コンテナから、体を半分だけ露出させて、脱力、自然体へ。
どんな動きへも速攻で対応できるように……。右手にぶら下が
る『こいつ』の重さも気にならなくなる。
周り全ての動きが遅くなる『イメージ』。

相手は、どうするつもりなんだろう。

私なら、どうするだろう。

考えても無駄。

だったら、見えてから動けば良い。誰よりも早く。速く。疾く！

壁から、敵のヘルメットのアゴヒモが見えた。次はヘルメットの
唾。じゃあ次は？

……目

そう脳が認識していた時には、腕は跳ね上がって、スコープが目
の前に。もう目を閉じたってわかる。ただ念のために、念のため
に。さあ、両目を見開いて。

足を引いてしっかりと地面に『釘付け』する。ずれないように、ぶれないように。

若干遅れて左手がしっかりと銃を支える。ずれないように、ぶれないように。

相手の目を撃ち抜くために。

まだ敵は、『まっげ』すら壁から出していない。だけどそれでいい。きつと出す。きつと出すから。

脳が『動け』と信号を出すと、何秒後に体は動くのだろうか。いつも不思議に思う。どうして私の体はこうも遅いのかと。

いつも不思議に思う。私の口はどうしてこんなに遅く動くのかと。じゃあきつと、このままでいれば、脳に合わせて、体が速く動かせる日が来るだろう。そう思っているが、その日は未だ来ない。

現実の私は、いつまで経っても脳に追いつけない。

そして今、私は『VRの体』すらも置き去りにして、脳を動かす。さあ。

『・・・動け』

ッダーン!!

NOYA「M98B」Deeney BOT

テロリスト ウイン

俺と立ち位置を変えた野谷さんは、数秒コンテナから体を半身出して、棒立ちしていたと思ったら、いきなり腕を跳ね上げて発砲した。あまりの早さに、全身がぶれているような錯覚まで見えるようだった。

「すげー」

「はー・・・」

もう、この人達に向かって何回「すげー」って言ったか分からないな。これからも言い続けるのだろう。感嘆のボキャブラリ増やして方がいいですかね？俺。

鬼谷さんも目を見開いて驚いている。

「さあ、次行ってみよう」

ちょっと照れて、頬を染めながらピースサインをする野谷さんは、鈍色の黒い銃がとても似合っていて綺麗だな、と思った。

三話の青春度は何点ですか？

kei : 俺全然だめだめだった

iris : お帰りなさい、圭。

kei : こんばんわ。irisさん。

その後もBOTと対戦を続け、山城さんは雄叫びを上げながら特攻、志貴崎さんは安定して暗殺しまくり、野谷さんは100発100中、鬼谷さんは基本的に忠実といった感じで、スコアを伸ばしていた。

だがまあ、俺は普通といえば普通にパツとせず、やられるときはやられて、倒せる時は倒せた、というような感じだった。

場数が必要なのだろうか。

特に志貴崎さんは、すすい建物の壁面を登っていた。俺もやってみたが、システムアシストを駆使しても無理だった。

志貴崎さんが言うには、むしろシステムアシストは邪魔で、『HALLO POINTの体』で、登れる場所を正確に掴んでいかないと登ることは無理らしい。

野谷さんの話によると、実際に軍に所属している人がプレイしていると、ああいったことができる人がたまにいるらしい。志貴崎さん恐るべし。

Miki : 圭はあれだね。早さが足りない(キリッ)

iris : お帰りなさい、ミキ。

kei : 早さが(笑)

iris : 足りない(笑)

irisさんが乗ってくるとは、思わなかった。

NOYA : 大丈夫。練習すればすぐ敵を沢山殺せるようになる。
iris : お帰りなさい、卯月。
kei : 何か俺が沢山人殺したいみたいない方やめて？
iris : 大丈夫です。ウツキニタイナンテアリマセンカラ
kei : 何でカタコトなんだよ！
NOYA : /kick iris
system : error

何か、一日に一回野谷さんがシステムコマンドで弾かれるのが、
定番になりそうだな。

nagi : お疲れ様でした
iris : お帰りなさい、凧。
nagi : ただいま
kei : あれ？志貴崎さんは？
iris : メッセージがあります『しばらくデスマッチルールで
遊んでくる。』
Miki : デスマッチって何？
kei : あれ以上まだやるのか。俺はもうへとへとだよ。
NOYA : 何回死んでも生き返るルール。敵を倒した数を競う。
Miki : へー

極度の緊張状態から体が解放されて、節々がギシギシ言っている
気がする。少しストレッチしよう。

そして、志貴崎さんはどんどんirisさんの扱いが上手になっ
ていく。伝言なんてどうやってるんだ？

nagi : 楽しいですね。VRFPS。
Miki : ねー！ちょこちょこみんなであそぼー

kei : そうだな。練習して次はもつと良い成績を残すぜ。
NOYA : 期待してる。

Miki : タノシミニシテルネ
kei : 畜生！

くそつ。今に見ておれ……。

Miki : 今日は何点？

nagi : ?

kei : ?

Miki : 青春点だよー

kei : ああ、あれか。恒例にするのか？これ

Miki : いいじゃないじゃないー

iris : メッセージがあります『俺は60点だ！』

どんだけ使いこなしてるんだよ。どん引きだよ

kei : うーん皆の凄い動き見たからなあ。70点

Miki : 私は普通だったかな。楽しかったけれどね！50点！

NOYA : 皆とゲームできて楽しかった。80点

nagi : 昨日と同じくらい楽しめました。70点です

それぞれ、点数を決める基準があるようだ。まあ、ちゃんと自分を
持っているって事なんだろうな！。

Miki : 明日何しようかー

nagi : カラオケでも行きましようか？

ふむ。明日何をするのかという話になっているようだ。ま、何を
するにしてもどたばた騒ぎになりそうな予感がするな。

kei …じゃあ皆でやりたい事を考えて明日話し合っつてこいで
nagi …それは楽しそうですね！
Miki …いいじゃーん！
NOYA …わかった

その後、まあだらだらと会話してしたあと、自然と解散となった。

二時間後。

SM …なるほど、明日は何か希望を皆で考えて持ち寄るのか
iris …お帰りなさい、椀。
SM …お、irisさんチョコ届いた。中々おいしかったです。

iris …そうですか、何よりです

SM …うーん。何がいいかなあ。

SM …^p^/

iris …なんですか？それは

SM …テレビでやってた。意味はよくわからん。

iris …検索。「^p^」

iris …結果。「あうあうあー」

SM …あうあうあー？

iris …あうあうあー

SM …^p^/あうあうあー

iris …^p^

kei …何やってんだよ

どん引きだよ。

風呂に入ってる間に、何かログがひどい事になってるし。何か今日のirisさんは全体的に酷いな。なんか。

S M : まあ、あうあうあーは置いておいてだな。

もう出さなくていいからな。「あうあうあー」は

S M : 口の中にチョコ入れながらVRに入れば、ずっとチョコ食べてお腹減らないんじゃないのかって思ったんだが

kei : 嫌な予感しかない

S M : 洋服が……

kei : ……

何でこの人は、こつも面白い事ばかりやってのけるんだろうか。

S M : お母さんどうしよう

kei : さっさと洗濯しなさい。確かぬるま湯に漬ければ大丈夫だったような？irisさん何かある？

iris : 検索。「チョコレート 汚れ 洗濯方法」

iris : 結果。「試せば合点、第5674回、チョコレート汚れなんか真っ白ぴかぴか!」アドレス

S M : ありがとうございます!!

まあ、明日も退屈せずにすみそうだ。ちなみに、これって青春なんでしょうか？皆さん。

問話 ケーキはとってもおいしいんですよ？

皆が部屋への接続を切った後、irisは「一人」部屋の整理をしていた。

『HALLO POINT』と、部屋のポータルを無理やり開いたので、キャッシュでごちゃごちゃしているのだ。卯月の新しい友達がどういう人たちか、知るヒントも沢山あった。

と、卯月が何か新しいプログラムを『部屋』に拡張しようとして、四苦八苦しているようだ。……どうやらkick強制退出コマンドとlog deleteコマンド《記録消去》を導入しようとしているらしい。ban永久追放コマンドを入れない所が卯月の優しさか。

そもそもirisが煩わしかったら、その場でiris自体を部屋から外せばいいだけなのだ。二人『らしい』コミュニケーションといった所だろうか。

まあ、導入されると色々としめなくなるので、片手間でプログラムを弾いて行く。

「……何で」

卯月の狼狽が面白い。

irisはirisで、ここを『自分の空間』にしようと考えていた。皆でくつろぐ一日の最後に訪れる場所。帰ってくる場所になればいいな、と思った。

だから、誰かがログを残すと返事を返す。「お帰りなさい」と。

最初は特に何も考えておらず、自然とこの言葉が出たが、きつと最初からそうだった感情がどこかにあったのだと思う。ケーキが無いのが、少し残念。

と、誰かが部屋へとアクセスしてきた。IPを確認。これは凧か。

「irisさんいませんか？」

VR環境下での接続により、鬼谷のアバターが表示される。

この時、irisは初めて凧の外観を認識した。長い銀髪に、すらりとした体、大きめな胸は高校1年としては、なかなかに発育した体をしていた。恐らく『現実』での彼女も同じ外見をしているだろう。

「どうかしましたか？凧。私はここに常駐していますので、いつでも居ます」

礼儀としてirisも体を表示する。といっても、現在特にアバターを設定しているわけではないので、光る発光体としての姿しかないが。

「すみません。ごちゃごちゃしていて。現在、皆がゲームで遊んでいた時のキャッシュを整理中ですので、それにまだ、部屋にはテクスチャーを張っていなかったのが簡素ですね。ケーキもありません」

irisはVR接続で誰かが来るのは、もつと先の事だと思っていたので、部屋は白一色のテクスチャーだ。それに、キャッシュファイルを整理するために掘り返していたので、辺りにファイルが散乱している。

「ふふ、構いません。ケーキは今度ごちそうになります。にしてもファイルを実体化させて整理してるんですね？」

鬼谷は、iris がわざわざファイルを部屋へと実体化させている事に驚いているようだ。

まあ、無理も無いのは頷ける。普通だとシステムの裏側で半自動的に行うような処理のはずだからだ。

「そうですね。とても非効率です。ですがまあ、様式美という物ですよ」

「なるほど。様式美ですか」

鬼谷は楽しそうにうなずいている。

本当はキャッシュファイルの中の皆の動きや会話ログを覗き見て楽しんでいたから、という理由もあるのだが。iris は言わない事にした。

「ところで、ちょっといいですか？」

「？」

鬼谷の唇が音を出さずに動いて「ないしょの」と形を作った。

iris は一瞬思索するが、鬼谷のIPを逆探、接続ラインを検証。その中に、iris が管轄しているプロキシを見つけたので、そこから経路を一瞬切断。すぐに繋げてiris と直結させた。

これで鬼谷は、『部屋』から強制切断された形となり、iris へと再接続されたことになる。

「これで内緒の話ができます。私の中なので、私は姿を出せませんが」

「こんな事もできるんですね！」

「裏技です。卯月も知りません。……内緒ですよ？」

「ええ」

鬼谷は、楽しそうにくすくすと笑った。

「昨日から、少し思うところがあって。貴方と野谷さんについて」「何でしょうか」

「貴方から『人』を感じます。それも野谷さんと同じ」

鬼谷は、探るような目で一点を見ていた。irisが体を表示できない以上、その目の先には何も無いが。

また、irisから『人』を感じるといのは、つまりirisの中身について大体的見当がついているのだろう。

「卯月から、少しだけお話を聞いております。電磁波の超能者だと」「ええ、そうです。そして『人』の考えがわかってしまいます」「なるほど」

鬼谷は沈黙して、目を閉じた。

言葉を選んでいようだった。irisはそれで何となく、彼女が何を言いたいのかがわかった気がした。

「私は卯月に育てられた『命を持った』AIです。私はAIであり、プログラムであり、ネットワークであり、1であって、0でもあり、そしてその間を選択できる者です。そして、卯月から生まれ、卯月に育てられ、卯月となり、自分を得ました。私は『iris』。人に作られ、人に縛られない。人造的生命体。そのプロトタイプ」
「.....」

「それで、私に何を聞きたいのでしょうか。凧」

貴方が聞きたい事は、こんな下らない事ではないのでしょうか？

「私はこの能力が、VR環境下でも使えます。少し特殊な形ですが、私は警察に協力して、いくつかの事件を追っています。その中に、VR環境下でネットワーク上のファイルを開くと、利用者とのリンクし、寝たきりになる事件がありました。」

強制的に回線を切断したり、10時間以上経過すると皆目を覚ますため、まだ死者は出ていません。」

彼らは何か巨大なサーバーへと接続されています」

「アクセスは？」

「試みては見たようですが、無理だったようです。サーバー本体の発見にも至っていません。サーバーは、約13時間ごとに移動して足取りもまったく」

「元となるファイルは？」

「ファイルサーバーからのダウンロードする形ですが、10回の限定ダウンロード、ファイルを開かなければ2時間で効果が無くなり、利用者は、記憶に混濁が見られて結局どういった物なのか分からずじまい」

「悪影響は？」

「ありません……。いまのところ、は
「なるほど」

奇妙な事件である。が、ありえなくはない、とirisは考える。恐らくVR接続による、強制的な接続のロックだろう。PC機器には、もともとあまりに長時間のログインをさせないために、いくつかの安全装置が施されている。また、寝たりすると思えばパルスが弱まり、PCから接続が解除される。

まあ、irisがざっと検索したところ、その安全装置すらはずして、VR環境下に入り続け死亡するという事件が何件かあるが。それは特殊な例でもあるだろう。

意図としては、人の脳の反応を調べたり、VR環境下での特殊な

人体実験と言った所だろうか。記憶を消してくれる辺り、まだ『優しい』部類だと思われ、丁寧さが感じられる。どこかの国の研究機関が関与してる可能性がある。

そして、そういった事件の話わざわざしてくると言うことは。

「……私、いえ、『私達』を疑っているわけですね」

「……」

命を持ったAI。そして恐らく野谷の見当もある程度ついているのだろう、彼女は、VR環境下にて『脳の異常』だけでは済まされないほどの動きを見せる。この二人が、鬼谷に疑念を持たせた。

そして鬼谷の疑念通りであるとも言える。……正解ではないが。

「……技術的に言えば、それは可能です。ちなみに風、今、回線切断はできますか？」

「え！嘘……できない……」

「いささか無用心すぎますね。ちよつとでも疑いがあるのならば、ここに来る前に何枚か壁を通すなり、擬似アバターやPCを通すなりしなければ。」

まあ、それでも無意味ですが」

そう、私ならできる。人をVR内に閉じ込めることが。

しかし、

「ですが安心してください。私は、国に混乱をもたらしたりしないし、私のログを献上すると宣言もしている」

「……それは建前ですよね」

狼狽しながらも、真実を得ようとするその姿勢は純粹に好ましい

とiris思った。

そしてirisは考える。私はもとより卯月はそのような大それた事をしてはいない。元より二人とも、国からのバックアップが無ければ生活にすら困るような身分でもある。

わざわざ自分達から、国との間に荒波を立てるようなまねはしない。

まあ、私達のデータを使ってどこぞの研究機関が暴走している可能性はないが。

「それに、まだ『国に混乱をもたらしている』わけでもないでしょう?」

キツと、鬼谷はたたみ掛け、空中をにらみつけた。

「痛いところを衝かれました。しかし、そこは信じてもらうしかない。私、そして卯月は誓ってそんな事はしていない」

「何に誓って?」

「もちろん、国に」

「.....」

まだ疑いの目をやめない鬼谷に、irisは内心ため息をついた。さて、どうしようか。

次の言葉を考えているところで、鬼谷が大きく息を吐いて、微笑んだ。

「貴方達を信じます」

「潔いですね」

「言ったでしょう? 私はVR環境下でも能力を使えるんです」

鬼谷が、わざわざVR環境下で部屋へ入ってきて、irisとだけ話したいという時点で、彼女には大体の予想がついていたが。

「試されていたわけですね」

「ええ。貴方が『人』で良かった」

つまりは、irisの言動と、思考の差異を読み取っていたわけだ。

しかし、人のそれと比べるとかなりの高速、そして構造の違う思考を読み取るとは、さすがランク5、凧もまた人ではない『ナニカ』と言わざるを得ない。

「しかし、あずかり知らない所で、そのような事が起きて、私もとより卯月まで疑われるのは面白くありません」

「すみません」

「いえ、凧のせいではありません。私のほうでもその巨大なサーバーというのを調べてみます」

「え！いいんですか」

鬼谷が疑ってきたということは、ある程度、irisと野谷を知る者が巨大サーバーを知った場合、まず二人を疑うのは自然の流れだろう。そして、ある程度権力があり、なおかつ単細胞で短絡的な『クズ』だった場合は、irisと野谷に好ましくない状況になる可能性が高い。

「はい。私と卯月のためです」

「ありがとうございます」

まあ、その分の報酬はもらっても問題は無いだろう。

「代わりとっては何ですが」

「はい？」

「今度、私の作ったケーキの味見をしていただけませんか？」

「ふふ、もちろん」

鬼谷はおかしそうに笑った。

「じゃあ私は紅茶を持ってきますね」

「コーヒーが合うと聞きましたが」

「ふふふ、人の種類だけ趣味と嗜好があります。例えば志貴崎さんは、きつとコーヒーや紅茶よりも、ケーキを付け合せた方が喜びます」

「なるほど。確かに」

まさか、冗談で出したチョコレート5キロを、速攻で購入されて（しかも4セット）、感謝されるとは思わなかった。世の中色々な人がいる。『部屋』にいと、つついその事を忘れてしまうようだ。

「それにしても、卯月は貴方達を完全に信頼しているようです。』
とっておき』を見せるなんて」

「ああ、あれですか？」

鬼谷は、すぐにピンときたようで、うんうんとうなずいている。

野谷はVR環境下においても、アバターの反応速度を上回って脳の思考を高速化することができる。現実とVRで、脳の使用率や反応パターンに違いがあることから、現実で彼女が見せる超反応と、VRで見せる超反応は別々の現象だと思われるが、まだ科学的な検証はまったく進んでいない。

「卯月は、人を疑う事を知りませんね」

まったく、困った『母』である。

「irisさんがしつかりしてあげないと、いけないですね？」
「その通りです」

面白そうに笑う鬼谷だが、その目は少し寂しげだ。

「私は、人を疑う事しかしりません」

そうつぶやく鬼谷に、irisはかける言葉を持たなかった。i
risは持たないが、しかし。

「貴方がそうであっても、支えてくれる人がいるはずですよ」

それは昨日知り合った『彼ら』かもしれないし、未来に知り合う
『誰か』かもしれない。

「そうでしょうか」

「そうですとも。色々な人がいますから」

「………そうですね」

そうだといいですね。と風は小さく微笑んだ。

間話 鬼との遭遇（前書き）

2000PVありがとうございますー嬉しいですよ

間話 鬼との遭遇

爽快な青空の下、志貴崎は走っていた。VR環境下ではいまいち風を感じられないのでちょっと不満はあるが、この満点の青空はどつだ。

やはり空は良い。

志貴崎は以前、スカイダイビングゲームにハマった事がある。

周りに建築物一つの無い大自然を眼下に見ながら、高高度降下。重力に弄ばれて、『お前は一人の人間だ』と大声で言われた気がして全身が震えたものだ。その時眼下に見えた草や花、木、鳥、川、海、魚、山。どれ一つとつても、志貴崎はその名前を知らないし、これからも知る事はないが、彼は『自然』が好きだった。

このゲームの青空は良いな。マップ自体は自然物が無いが、その対比が何とも乙なものだと、志貴崎は思った。

ガガガガガガガガガ！

突然、『地上』から弾丸がばらまかれた。もう少し走っていたかつたのに残念だ。

ちょうど下に『テロ側建物』があったので、志貴崎は『電線』の上から『テロ側建物』の屋根へと飛び降りた。

現在、志貴崎は『HALLO POINT』のチームデスマッチルールを、遊んでいる最中である。二つのチームに分かれて、単純に打ち合い、倒した数で勝敗を競うなんともわかりやすいルールだ。

手早く現在の装備を確認。ハンドガン、フラッシュバン×2。

他のプレイヤーを見ると。何とも貧弱な装備ではあるが、志貴崎は元々この装備を選んでこの戦いに挑んだ。

現在の成績は「32/5」である。32人倒して、5回倒されたとなっている。もつとも、その内の三回は、弾が切れたので足下にフラググレネードを転がして自殺したただけなのだ。

ぬるいな

対人戦闘になれば、BOTとの対戦よりも熱い対戦ができると思っただが、実際そうでは無かったらしい。

こちらの陽動にまんまと引っかかり、背中を簡単に向ける奴。

対峙して二、三発打ち合って、思いつきで伏せて『死んだ振り』をすれば、簡単に騙されて撃つのを止める奴。

マップの端の端に寝転んで、じつとスナイパーライフルを覗いてるだけの奴。

他にもまだまだあるが、野谷の用意したBOTの方が、数倍訓練された軍隊のような動きをしていた。

そんな彼らを暇つぶしに屠った結果の数字が「32/5」だ。自慢にもならない。

と言うわけで彼は、先ほど上村達と遊んでいた時に思いついた、『電線走り』を実行に移したのである。

予想通り、ポリゴンとテクスチャで構成された電線は、ぐらぐらと揺れずにしっかりと志貴崎を支えた。後はバランスの問題だけである。つまりは簡単。

単純な思いつきにしては、中々楽しめた。

まあ、ぬるいとは言っても、骨のある奴が一人いるようだが

志貴崎は笑った。彼を二回殺した相手。二回とも不意を打つ形ではあったが、それでも殺されたことには間違いない。

このゲームの『立ち回り』を知るもの。中級かそれ以上なのだろ

う。

さて、志貴崎^{初心者}の腕が通用するのかどうか。試してみようでは無いか。

その前に、その相手を探す事から始めないといけないだろう。

志貴崎は、屋根にしゃがんで耳を当てた。ガチャガチャと音が聞こえる。なんともまとまりの無い音だ。恐らく数人、複数ある窓から節操も無く顔を出して、敵を探しているのだろう。

一人では無いこと、お互いに死角が無いと『思い込んでる』事から、気が緩んで大きな音を立ててしまっているのだろうと志貴崎は考えた。

こんな奴らにわざわざフラッシュバンを使う必要も無い。志貴崎は空中に身を投げる。

ガシユッ！

ナイフが屋根の縁に引っかかり、志貴崎の体がナイフを軸に回転。それと同時に、ハンドガンを取り出して、窓から突き出た敵の頭に照準する。

キユンキユンキユン！

倒したことを目の端で確認。そのまま建物の中へ。ついでに空中に投げ出された銃を貰っておく。

と、右手を閃かせて今殺した奴の、側に立っていた敵の首を切りつける。

転がりながら部屋の中の敵の位置を確認。

三人もいる。誰も彼も、一生懸命自分の銃しか見ておらず、志貴崎へと反応すらできていない。転がった音でようやく気づいたように振り返り始める始末だ。

こいつらじゃないな

ハンドガンを一時投げ捨て、敵から奪った銃を『構えながら』発砲。銃口に合せて弾痕が横ないで敵を襲う。

バババババババババババババババババン！！

今ので二人。一人は、ギリギリ死を免れたようだ。が、志貴崎の弾幕によつて負傷したのだろう。体がぶれて大きくのけぞっていた。その隙を見逃さず、志貴崎は大きく飛び込みながら、右手のナイフで敵の首を撫でた。

これで5人。ちなみにこのルール、5人对5人ではなく10人对10人だ。

次へ向かうか。

次の獲物を探すために、志貴崎は勢いよく階段を飛び降りた。

テルは、呆然と眼前に広がるログを眺めていた。

SM 「Glock」 Elite Joe
SM 「Knife」 CTETakoyaki.jp
SM 「M16」 xxxEVI Lxxx
SM 「M16」 「SLG」 J
SM 「knife」 -"-MRMR- "- Robert R
o b e r t R o b e r t

このログは、約10秒の間に一気に表示された『キルログ』だ。一度だけだったら、「ふむふむ、まぐれ連続キルおめでとー」くらいだが、この「SM」が入ってきてから、このような3、4人一気に倒す事が数回ある。しかも成績表を見ると、現在彼の成績は「38/5」だ。あ、また二人増えた。

あまりに圧倒的すぎる。チートだと思えないが、テルはこいつを二度殺している。いずれも遠くからのスナイパーライフルによるクイックショットで。

その時見た彼の顔が忘れられない。自分を殺した相手を見定める、肉食獣のような獐猛な笑み。

チートなんかやってる『テトリス野郎』が、あんな顔なんか絶対しねえ。

この『HALLO POINT』では、スナイパーライフルを使う奴は上級者中の上級者か、作戦上配置される役割としてか、もしくは奥の方で縮こまって一つでも自分の死亡回数よりも殺した数を優先する、初心者にも満たないおこちゃまnoobしかいない。

そしてテルは、『上級者中の上級者』という自負があった。足の遅いスナイパーライフルを、わざわざ抱えてえっちらおっちら前線へ。周りが彼にあざけるような視線を向ける。

ある程度の所に来たら、胸に自分の相棒を抱えて敵をさがす。そして敵を発見すると、彼の腕が跳ね上がり敵を一瞬で照準、敵の頭に花が咲くのである。

その時の、周りの目が忘れられなかった。全身に電気が走るように興奮する。

そもそもクイックショットとは、その名の通り、銃を構えてスコ

ープを覗くか覗かないかの段階で発砲するという、VRが浸透する前に、モニター越しでプレイするFPSで、スナイパーが用いていた今はもう廃れた技術だ。

昔は銃を構えなくなつて、画面の真ん中に大体弾がとんでいったし、銃を構えれば、かならずその方向に弾が飛んだ。それを利用して、構えた瞬間に発砲する『クイックショット』という技術は生まれた。

そんな『前時代の技術』が、この進化したVRFPSに通用するわけがない。そう言つて、ほとんどの人がこの『クイックショット』から離れていった。

昔は『クイックショット』ができる事こそ、上級者の最低条件とまで言われていたのに、FPSの常識は一気に根本から崩れた。

それでも、スナイパーライフルに取憑かれたプレイヤーは数多く居た。中距離戦闘メインのこのゲームでも、例外では無い。

テルは、このゲームのプレイを始めてから、スナイパーライフル以外触つた事はほとんどない。まさにジャンキーだった。

自分の生まれる以前よりある技術を、伝説を、彼はVRでも再現しようとした。

テルは、このゲームをプレイし始めて、銃をいじりにいじりまくつた。

発砲時の振動から、銃口の上がり、肩の角度、支える手の力加減は変わらない。なら、全ての動きが単純な計算式でなければおかし。風の動きや、太陽熱による銃の歪み、発砲ごとの銃の消耗。それら細かい計算までされているはずがあるわけがない。そんな基本原理に捕らわれて、『絶対に同じ動きをする』姿勢を自分に覚え込ませた。

そしてそれは完成した。

『クイックショット』がまた現代によみがえったのである。もちろん、彼と同じようにクイックショットを扱える人は少なからず居る。が、そのほとんどの者は、自らの感性や経験で行っている。だが彼は、動き自体を固定化し、完璧にその動き以外しない姿勢を完成させたのである。

彼の怨念とも言えるべき努力と執念がそこにはあった。

そしてテルは、上級者の仲間入りをした。敵を殺しては殺した。目に見える全ての物に対応できる自信があった。舞い上がっていた。

そんな中で、テルは彼と出会った。

「その撃ち方、教えて欲しい」

彼の名前は、ケットと言った。

その時、テルは有頂天だった。自分の技術、経験、知識。そのどれもがケットには理解できないとふんで、全てを教え込ませた。

そしてケットはそれらほぼ全てを飲み込んでしまった。

結果、悪魔が誕生した。

いや、ケットは純粋にゲームを楽しんでいただけだった。

銃自体には興味が無く、敵との勝負を純粋に楽しむただのガキ。だが、ケットの腕が跳ね上がれば必ず赤い花が咲き、ケットが安全だと判断した場所には敵が居た事なんて一度もなかった。

結局、彼を悪魔だと思っていたのは、テルだけだった。

テルはケットを恐れた。自分以上の技術、自分以上の力量、自分

以上の知識。同じスナイパー。同じクイックショットの使い手。それでもケットから離れられなかった。

ゲーマーとしてのテルが、強い奴に惹かれてつるみたくなるのは、当然の事でもあったのだから。

思えば、そこでケットと離れておけばよかった。強い奴は強い奴を誘う。類が友を、と言う奴だ。どんどん強い奴らが彼らに加わり、抜け、また加わった。気がついたらテル達は、ケットを中心にしてクランを作っていた。

そして勢いのまま世界大会。

その時ケットは本当に楽しそうだった。

純真無垢な、跳ね回るただの子犬。

少し、皆よりちょっとだけ、最強だっただけの。

そして大会が進むにつれて、彼らは心がバラバラになった。

だって10万\$だぞ！？10万\$!!!

見たことも無い額の金が、彼らの前にぶら下がった。

彼らは言い争った。バカみたい。餓鬼みたいに。

振り返って思えば、そんな彼らを、ケットはずっと不思議そうに見ていた。

その目が「ねえ、ゲームしないの？」と言っているようだった。

散歩をせがむ犬つころに、テルは思えた。

大会はどんどん彼らを押し上げた。

テル達は興奮した。

そしてその分だけ言い争った。そしてそして、それはゲーム中にも及んでしまった。そう。ゲーム中にまで。

きつと、そうに違いない。ケットはそんなテル達を見て「遊ばないんだ」と思ったに違いない。

そしてテル達は、興奮したままにゲームをして、ケットただ一人を残して全滅。

残ったケットが、一人でその試合を勝ちで終わらせた。

世界二位と世界一位の首輪が、テル達の頭上へと天使が運んでくるような錯覚を、この時彼らは見た。大会はその日一旦区切りとなり、次の日大々的なイベントとして行われる予定であった。

「おめでとうケット！！すっげーな！！マジかよ！！しんじられねー！！これで世界三位だ！！それで明日なんだけd・・・」

死亡のせいの音信不通が解除されて、真っ先に彼を褒めた。

だが、彼から帰ってきた声は、なんの感情もこもってはいなかった。

「それじゃ、俺そろそろ落ちるから」

「え・・・」

まるで、今日のゲームはもうおしまい。また今度。そんな軽い感じだった。

結局、それからケットは、オンラインにならなかった。全ての作戦を、ケットありきで立てていた彼らに、世界一位や二位なんて争えるはずも無く、無様に玉砕。

それに追い打ちをかけるように、クラン面子全員に、昨日メッセ

ージが来た。内容はこうだ。

「抜ける。さよなら」

あまりにも簡素であった。

誰も彼もが、自分にだけは、もっと特別な内容のメッセージが他に来るだろうと身構えたが、結局誰にも来なかった。もちろん、テルにも。

最後までケットは結局、ゲームをしていただけなのだ。10万\$など、ゲームで笑う楽しさ以下の価値しか、ケットには無かったのだろう。

言い表せぬ喪失感を感じながら、テルはいつもの惰性でゲームを起動。むしゃくしゃした気分を少しでも晴らそうと、野良サーバーに入った。

『野良』とは、その言葉通り誰も彼もが初対面、その場限りのチームワーク、その場限りの協力関係を繋いで戦う『パブリックサーバー』での戦闘の通称だ。

大抵、初心者、中級者、上級者が入り乱れて、チームワークもゲームの進行も何もかもが関係なく、カオスな戦場となる。クラン同士の『クラン戦』が、技術と知力の高度の戦闘だとして、この『野良戦闘』は、グレネード片手にただ突っ込むだけの、特攻爆撃上等の泥沼混戦シエイクだ。

たいした強さの奴がいるはずもなく、無感動にただただ敵を殺しに殺した。そして気づく。その異質な存在に。

ふざけた名前でログインしてきたと思ったら、もの見事に積み上がるキル数。尋常な速度では無い。一度に殺す数が半端ないので、恐らくわざわざ敵の密集地に突っ込んでるのだろう。しかも大半が

グロツクとナイフ。

ふざけてやがる。こいつ『テトリス野郎』だ！！チートして、グロツクとナイフだけで暇つぶしに敵を殺してるだけにちがいないえ！！

チーターへの対抗心がふつふつとわき上がり、そろそろ場所取り。

相手のキルログと成績表、マップ上に表示される味方の死亡マークを見比べて、『テトリス野郎』の足取りを追う。

どうやら、屋根の上や電線の上を走るクライミングチートか、フライングチートでも使ってるようだ。まったくもってふざけてやがる。これで無敵でも使われてたらしょうが無いが、その時はその時だ。

ちなみに、『テトリス野郎』とは、チートをする者につく俗称で、その昔、まだV R F P Sすら概念の無い時代に流行ったチートツールの機能に、何故か「テトリスがプレイできる」という意味不明極まり無い機能が付いていた事によってついた。

そしてテルは『テトリス野郎』を発見した。今まさに、屋根から窓へと入る瞬間であった。

考える前に、テルの腕は跳ね上がり、完璧な姿勢となる。そして発砲。『テトリス野郎』は背中を打たれて、まっ逆さまに落ちた。

その瞬間、そいつと目が合う。

鬼だ

テルはそう思った。あいつはチートなんかしていない。完全に力量のみで今までの無軌道をやったのけやがった！！！！

そして彼は、今また成績表とキルログ、マップを検証しながら『鬼』の居場所を探っていた。

どうやら今、『鬼』は公式戦ルールであるところの、Bポイントの位置にいるらしい。

ここからだとして少し遠いな。

後ろへ振り返り、キャンプに最適な位置へと、路地を後退するこ
とにした。

と、その時、路地の曲がり角から一瞬横顔がのぞいた。
無意識に腕が跳ね上がり、臨戦態勢を取る。敵は既に顔をかくし
てこちらからは見えない。

しばらくその状態を維持するも、敵は顔を出さず、カバリング
ショットもしてこない。疑問に思いながら、ゆっくりと腰をかがめ、
すり足で後退する。できるだけ音を出さないように。

シュッ

その時、テルの耳には、上空からのかすかな音がはっきりと聞き
取れた。

上を取られた！

この態勢からスナイパーライフルを持ち上げる事はできない。咄
嗟にスナイパーライフルを手放し、ナイフを抜刀、ろくに確認もせ
ずに振り抜いた。

ザシユツ

確かな手応えを手に感じる。そのまま、腰にあるハンドガンを強引に引き抜き、前へと転がり敵との距離を取る。

敵の確認は未だできない。

「ふふん。中々に良い反応だな」

どうにか態勢を立て直し、ハンドガンに向けた先には『鬼』が立っていた。右手に損傷。そしてその手にはナイフ。これでナイフは握れまい。

『鬼』の言葉には耳を傾けず速攻で発砲。

パンパンパン！！

『鬼』は身近にあった木箱に身を隠して弾を避ける。

それを確認して、テルは腰からフラググレネードを取り出しピンを抜く。そのまま少し待つてから投げる。

ドオン！

グレネードは、地面に落ちる前に爆発。

ピンを抜いてから、爆発までの時間を完璧に読んで放り投げ、地面へ接触する前にピンポイントで爆発させる、このジャンルのゲームの基礎技術だ。

「ほぼづ。こつこつこともできるのか」

木箱の向こうから、『鬼』の声が聞こえる。爆風からは上手く逃げたらしい。まあ当然か。

地面に落ちているスナイパーライフルを抱えて、いつでも対応できるように待つ。

マップを見ると、周りには味方が包囲網を敷いていた。動く気配は無いので、テル達の攻防には、気がついていないようだ。味方が応援に来る事も無ければ、敵が増える分けでも無い。完全に1:1。

「どうか？」

パン！

木箱から、フラッシュバンが出たと思った瞬間に爆発した。あまりの爆発時間までの猶予のなさに、テルはまともに食らって目がくらんだ。

しかし、あの近さであの距離なら、『鬼』も直に食らっているはず！どうやらまったたく信じられないが、『鬼』はFPSというジャンル自体初心者らしい。世の中ケットみたいな奴はいくらでもいるらしい。

が、今は完全に失敗だ。きっと今頃泡を食ってうずくまっているだろう。

ケットはこのマップを含め、『HALLO POINT』のマップは全て何千回と繰り返し走り抜いてきた。頭の中に全てのオブジェクトの位置は把握済みだ。

目がまだ全く見えないが、木箱の元へと走る。

ドオン！！

まだ視界は回復していない。が、頭の中にあるオブジェクトの配置、慣れ親しんだ銃、自分のコンディション。全てが合致しテルは寸分たがわず木箱の裏、『鬼が』いるであろうポイントへ発砲した。だが、回復した視界の中、木箱の裏に敵はいなかった。咄嗟に回

「転か何かで逃げたか!?
ぐるりと辺りを見回す。」

ザシユツ

「ふむ。上級者もこんなものか。いや、中級者か?ともあれ、お疲れ、楽しかったぞ!」

お疲れさん。といった感じに『鬼』がニカッと笑った。そして、テルの脳天にはしっかりとナイフがささっていた。

嗚呼、こんな奴らが野良に出没するのなら、ケットも楽しく遊んでるに違いない。そしてきつと、俺らはもう、ケットを楽しませる事ができないんだ。

もうケットには会えないのだな。と、この時テルはなんとなく理解した。

SM 「knife」 「KT」 tell for

反応速度は中々だったが、野谷ほどでは無かったな。それに、こいつなんでゲームなのに楽しそうにしないんだ?

志貴崎は不思議に思った。周りの奴らは、誰も彼もが本気で笑顔をむき出しにして、本気で悔しがって、ばかみたいな大声を出しな

がら、ゲームをしているというのに。

確かに上手いのかもれない、しかし、きっとどこいつはこのゲームがあんまり好きじゃ無いんだろっな。と志貴崎は結論つけた。

四話 学業は大事、青春はもっと大事？（前書き）

中編的な物を作りたくなりました

四話 学業は大事、青春はもつと大事？

「しまづま」

「マンドリル」

「ルンバ」

「馬刺し」

「……しろながすくじら」

俺達は向かい合って座りながら、しりとりをしていた。待ち時間とはなかなか退屈なもので、最初は外の景色を眺めて楽しんでいたが、それもすぐに飽きた。

ゴオオオオオオオ

座り心地のいいフカフカナソファ、丁寧な作りの巨木一本から丸まる削りだしたオーク机、縦長に広い空間、足元には毛の長い真紅の絨毯、壁に飾られた高級そうなワインボトルの数々、そしてお茶のボトルを持ちながら待機しているスタッフさん。明らかに高級よりもさらに上、まさにVIPと呼ぶにふさわしい雰囲気がある。ここにはあった。

ゴオオオオオオオ

「ライド オン シューティングスター」

「何それかっこいい。タルタルソース」

「スルメ」

「めざし」

「……しまづま」

そんな中で学校帰り、制服を着ながら、しりとりをしている俺達。

ゴオオオオオオオ

「マジエステイ」

「何それかつこよすぎない？ティーチャー」

さっきからしてる音は、俺達がいるこの空間が移動してる音である。

窓の外には一面の白いもやが眼下に広がるだけ広がりまくり、その上には青空一色。

「チャリティー」

「ティー」

ゴオオオオオオオ

「……ティーカップ」

「プリティー」

ここは空の上、VIP専用自家用ジェット機の中である。

「……どつてこつなつた」

「圭の負けー」

あまりの非現実性、つい口に出た言葉に山城さんが反応した。はあ………。

まあ、まず、なんでこんな事になったのか、経緯を説明しなければならぬだろう。

昼食の席で、俺達は今日やりたいことを出し合った。皆の希望はこんな感じだ。

俺はアクアリウム。今、丁度都市の東エリアの高層ビルで、展望とアクアリウムの展示会をやっているようだ。アクアリウムとは、魚を水槽に入れ、その水槽を色々な形にデコレーションして水槽と魚で一つの芸術作品にする。という水族館とはまた違った趣向の目に楽しい展示物だ。

山城さんはプール。山城さんのお勧めスポットとして、夜にライトアップされてすぐきれいで楽しいプールがあるらしい。放課後皆で水着を買い、そのプールで泳ごうという。

鬼谷さんはカフェ。ケーキと紅茶を出すカフェがあり、紅茶を頼むとそれにあつたケーキを出してくれる場所があるらしい。そこで皆でおしゃべりしないかという事だ。

野谷さんは温泉。外で皆でお風呂、というのは経験したことがないのでやってみたいとの事。

で、志貴崎さんかというと、俺達の会話を聞きながらうんうんとうなずいている。そして口を開いたと思ったら。

「全部やるう」

と言い放つたのだ。

「え？」

ごめん全然意味わかんない。志貴崎さんはどや顔でふぶん、と鼻

を鳴らせるばかりである。

「だから全部やるのだ」

「それはわかったんだが、具体的にどうするんだ？」

アクアリウムにプールにカフェに風呂だぞ？どうすればそれだけの要素を一つに積み込めるといふのか。もしかして頭まで志貴崎さんは筋肉になってしまったのか。

「俺達の目的は青春だ」

「まあそうだな」

「だとしたらやることは一つ」

「だからそれがなんだっていうんだよ」

もったいぶる口ぶりに若干いらいらする。回答が見えないやり取りをするのは正直疲れるものがある。

志貴崎さんは立ち上がって腰に手を当てて、天井をビシィッと指差した

「修学旅行だ」

「……え？」

なんだって？

「聞こえなかったか？修学旅行だ」

嫌な汗が背中を伝う。志貴崎さんはいたってまじめである。

「具体的には」

言つな、それ以上言わないでくれ。

「沖縄に行こう」

目の前が真っ白になるような、なんともいえない感覚が俺の全身を駆け巡った。

志貴崎さんの言い分はこうだ。そもそも、この学園は特殊すぎる以上に特殊な学園である。そのため修学旅行そのものが無い。こんな能力者だらけの学園が修学旅行など執り行つたらA、旅行先が大パニック、阿鼻叫喚の地獄絵図になることは必須。(何で地獄絵図になるの確定なんだよ)

そういうわけで彼らはもとより、学園全校生徒が修学旅行なんてしたことがない。漫画やアニメやドラマにあるような、皆で温泉、就寝、枕投げ、猥談^{おおい}、お土産選び、観光地めぐりなどしたこともない。修学旅行。それはなんと甘美な響きか。まさに学園生徒憧れの学校行事と言つても過言ではない。

というわけで、俺以外のメンバーは全員乗り気である。今日沖縄行こうと言われて、いくいくーって言えるこの人たちの非常識さにはもう慣れた。何も言つまい。だが俺は一般人である。最後まで抵抗はさせていただく。

「まで。俺はお前らと違って一般人だぞ。お前らは金あるかもしれないが、そんな急に沖縄行きの飛行機のチケットなんてかえねーよ」

「何だそんな事か。そんな事気にするな。俺らの金を使えばいい」

「施しは受けねーよ」

「堅いねー圭はー」

山城さんも志貴崎さんに同調して、気にするなと言ってくるが、俺は俺の考えで、こいつらに付き合っていくと決めていた。これが

らも一般人でいるつもりだし、最低限の常識の中で生きさせてもらう。だから俺は俺なりの譲歩をする事にした。

「施しは受けない。しかし、金もない。そして、俺も沖縄に行きたい」

そう。そもそもこいつらに付き合ってる時点で、今後もどんな無茶や無軌道が飛び出てくるか分かったものではない。沖縄なんて序の口中の序の口なのだ。きつと、半年後か一年後には「宇宙に行く」とか言い出すぞ。

「だから、貸してください」

これが俺の中で出した結論である。施しは受けない。だが貸せ。恐らく一生返せないだろう。だが、きつとこいつらは一生待ってくれると変な確信があった。

「圭は律儀だね」

「まあ、上村さんらしいですね」

「………ん」

「素直じゃないな!」

そんな、「このツンデレめ」みたいな目で見るのはやめてほしい、志貴崎さん。

こいつらが金銭で規格外なのは何となく、理解していた。だから俺はもういちいち気にせず開き直る事にした。こいつらの言う『青春』についていくしかないのだ。せいぜい借りるだけ借りまくってやる!

「それで、何泊にするのー?」

「いいじゃない、沖繩。行ってくればいいじゃない」
「ええー……」

キャシーさんは、「いいわよ。沖繩は」とか思い出話なんて始めてしまう。キャシーさんもこんな反応である。もうやだこの学園。

「けど、成績とかに影響が……」

学生として当然な心配である。勉強に追いつけなかったり、休みが多いせいで進学できなかつたり、ほかに色々支障が出るのが普通だろう。

「貴方、この学園を良い意味で舐めきってますね！」

ぺろぺろしすぎよ。とか言われた。何？ぺろぺろって。

「そもそもです。この学園とは！」

この学園の目的。それは学校として能力者達を教育するためではない。能力者達を『保護し管理し監視』するためである。そんな学園が、勉強や試験の成績で、生徒を自分から手放すはずがあるわけ無い。

国にとって能力者の管理とは最優先事項なのだ。極端な話「思い通りにならない能力者など要らない」と処分する。何この学園怖い。実際そういう形で処分された能力者は居ない。（「行方不明になった能力者は、何人かいますけどね」とキャシーさんは微笑んだ。俺は必死に聞かなかつたことにした）

そもそも、休みが多くなりがちな能力者達に合せ、この学園の学

業進行速度は遅めである。ちゃんと高校以上を卒業した学生達は、希望次第で国の最大限の助力を得て就職をする事ができる。

もちろんこの学園を卒業した能力者達は、基本的にこの学園を出た後も『都市』に縛られる事になる。そう。この『都市』自体が実際能力者培養・管理・監視・保護施設として機能しているのだ。

はい、舐めてました。ぺろぺろしてました。

「そしてそのルールは貴方にも適応されてます。上村 圭」

キャシーさんは、突然冷淡な目をして俺を見た。

「貴方は『あの』上村 沙紀を姉に持ち、ランク5の人々とつるみ、今後も交流を続けると宣言した普通の少年。貴方は一般人でありながら、もはや一般人の枠には戻れない存在となった」

「……」

「貴方はもう戻れない。いえ、最終確認がそろそろ来るはずですよ。そろそろ決心をした方がいいでしょう」

「……そんな気はしていません」

そもそも3日。その日数を長いと取るのか、短いと取るのかそれは人それぞれだろう。しかし、この『特殊な学園』に入学した『普通』の俺は、この学園にとって異物ではない。そろそろアレルギーの出る時期が来ると言うことなのだろう。つまりは「お前は特殊な方に来るのか？それとも一般に戻るのか？」そう言うってくるに違いない。

「……だからこそ」

キャシーさんは柔らかな表情に戻りながら、俺の頭を撫でた。そして「沖縄、楽しんでらっしゃい」と後押しをしてくれた。

……つて、後押しをしてもらったために来たんじゃないよ
うな気がするんだが。さんざん脅されるだけ脅されただけな気がす
る……。

そんな訳で、俺たちは放課後、その足で空港へと向かう事となっ
た。何故かというと

「修学旅行なのだから、制服にすべきだ！」

と志貴崎さんが力説しやがり、俺以外の三人がそれに同意しやが
ったからだ。今回、基本的に能力者4人が役に立たなさそうだと俺
は直感し、反抗することを辞めた。

四話 学業は大事、青春はもつと大事？

そういうわけで、俺たちを乗せたジェット機は沖縄へと向かっていった。空港でこのジェット機を見た時、俺の最後の砦として残っていたなけなしの『常識』は木っ端と化した。もうどうにでもなれ。

そして、飛行機の旅もある程度の時間かけるべきだという志貴崎さんの意見を反映し、このジェット機は、ジェット機なのに優雅にゆっくりと運行していた。

「あの、座ってた方が良いんじゃないですか？・・・ずっと立ってるんですか？」

俺はどうも、先ほどから後ろの方で畏まってお茶のボトルを持つ、客室乗務員というか、サポートというか、執事というか、そんな風貌の人が気になって仕方が無かった。びしっとしたスーツに白髪をきっちり固めており、まさに紳士。常に俺たち一向に不便が無いのか確認してくれているようだ。

「いえいえ、これが私めの仕事でありますから」

お気遣いどうも。と頭を下げられる始末である。

「そうだぞ、上村。人の仕事にケチを付けるものではない」

志貴崎さんは、オーク机に広げられたカードの束をにらみつけながら、俺に注意してきた。確かに、この人はこれこそが仕事だ。それを見て「座った方が」と促すのはケチ以外の何物でも無いのかもしれない。素直に反省する。

「すみません」
「いえ」

お互いにぺこりと一礼。

ところで、志貴崎さんの前にあるカードの束、これはトランプだ。黒と赤にそれぞれ分けられてふた山ある。黒いカードの束を志貴崎さんが取り、そこから4枚引いて等間隔によこ並びさせた。そして、対面に座るのは野谷さん。赤いカードの束を取り、同じように4枚並べる。

「ふふん。リベンジマッチという奴だな」
「誰のリベンジ？」

獰猛な笑みに口をゆがませる志貴崎さん。それを受けて涼しげに野谷さんは答える。その口調は軽やかであり、戦士の気品すら感じられる。

「もちろん一昨日のだ」
「あれは圭の失点」

少なくとも女の子に向ける類いの物では無い笑みを見せる志貴崎さん。野谷さんはそれを軽く受け流しながら答える。

「しかし、お前はそれを上村のせいにする気はないんだろう？」
「……………」

ついに、悪の魔王か何かにか感じられない笑みになった志貴崎さんを、野谷さんは沈黙で遮断した。お互いの緊張の糸がピークに達する。特に合図も何も無いまま、二人は同時に口を開いた。

「「いつせーのーせ」」

シャシャシャシャシャシャシャシャ！！！！

もうおわかりであろう。スピードである。誰がなんと云おうと、スピードだ。

お互いのカードの束、これは手札。と、眼前に広げた4枚のカード。それを場札として「いつせーの」「スピード」などのかけ声でお互いの手札から一枚取り出し、お互いの中に置く、これを台札。そしてそのカードと、一つ違いの数字を素早く出し合い、カードの束が最初に無くなった方が勝ち。単純明快、誰もが小学校時代くらいから慣れ親しんでいる対戦ゲームだ。

シャシャシャシャシャシャ！！

ただ、俺の眼前で繰り広げられているこれは、決して俺が慣れ親しんだ『お遊戯』じゃない。もっと化け物じみた『ナニカ』ではない

「もう『スピード』じゃなくて『ソニック』って言った方が良くないか？」

「・・・言ってる」

「毎回思いますが上村さんは、つっこみが的確なようで少しズレていますよね」

俺がズレてるんじゃない。貴方達がズレてるんです。

そう思いながら、二人のゲーム進行に目が離せない。黒と赤とが高速に入れ替わり、アニメか何かを見ているようだ。

シャシャシャシャシャ・・・

と、二人の動きがぴたりと止まる。見たところ台札は黒の8と黒の5。志貴崎さんは置くことができないうだが、野谷さんが二枚ほどこの台札にカードを出せる状態のようだ。

張り詰めた糸のような緊張感があたりに漂う。まるで、刀をいつ抜刀して斬りかかるか読み合う、侍同士の決闘のようだ。見たことはもちろん無いが。

恐らく、俺には良く分からないが、手札、場札、台札、その三つの要素が整い、今まさに、これからの野谷さんの一挙動が、勝ち負けを決める『割れ目』となっているらしかつた。二人とも真剣だ。志貴崎さんは、せめてこの真剣さの1/100くらいは勉強に注いだ方がいいと思うくらい真剣だ。

ゴオオオオというジェット機の音が、何倍にも増幅されたように感じてしまう。

・・・ついに、野谷さんの指がピクツと動いたのが見えたあとはもう、俺には何が起きたのかがわからなかった。

シャシャシャシャシャシャシャシャシャシャシャダアン！！

二人の手が高速で動き、同時に台札を叩いた。二人ともそれぞれ台札に手を置き制止し、二人とも場札に札は無し。・・・ドローだろうか。

「・・・負け」

「危なかった！」

どうやら志貴崎さんの勝ちらしい。お互いの間できっちり勝敗が分かっているのなら良いが、はたから見ているこちら側からすれば、

何がなにやら分からない。

志貴崎さんは、緊張の糸が切れたのかソファにドガア！と倒れ込んだ。

すかさず客室乗務員（？）さんが志貴崎さんにお茶の入ったコップを渡す。流石この道のプロ。今の非常識を見ているも眉一つ動かさない。いや、そもそもこのジェット機自体、彼ら特別な異能者達を送り迎える専用ジェット機なのかもしれない。

志貴崎さんの額にはじんわり汗がにじんでいる。どんだけ集中していたんだ、あんだ。

対する野谷さんは、汗一つ無く涼しげだが、心なしか悔しそうだ。

「ま、何はともあれ二勝したわけだ」

大人げない笑みを浮かべて、志貴崎さんは野谷を見る。

「・・・次は、・・・こうはいかない」

「ふふん。まあ、楽しみにしておこう」

まあ、トランプ一つでこれだけ真剣になれるのは良いこと・・・なのかなあ。

と、野谷さんは乗務員さんに何かお願いをしているようだ。乗務員さんの顔が一気に驚愕の表情となりながらも、頷いて一旦奥へと下がって行った。

今度はなにが始まるのだろうか。

野谷さんは、不敵な微笑を浮かべて志貴崎さんを見ている。早くモリターンマッチということなのか。

戻ってきた乗務員さんの手にあるのはトランプの箱が4箱。ま、

まさか……。

「さあ、次の勝負を」

「……………」

流石の志貴崎さんも顔が引きつっている。野谷さんはそれを満足そうに眺めて、箱を開けて中身を出していき、山となったカードを一気に振り分ける。

元々きれいに整理されていたのだろう、まずジョーカーを排除し、軽くめくって赤と黒の境界を見つけたところで、指を入れて振り分ける。単純な作業であるが、これを一瞬のうちにやってしまうのだから恐ろしい。一気に赤と黒、4セット分のトランプを振り分けられた山が完成する。

次にさっきの勝負に使用したトランプふた山を野谷さんは拾い上げる。まさに、目にも止まらぬとしか表現できない動きで、こちらも赤と黒に振り分けて行く。赤と黒が混ざり合っているのでいちいち選別しないといけない……はずなのだが。

そしてついに『それは完成した。なんだろうこれ。見たことないほどの高さにトランプが積みあがっている。

「良いだろう。勝者はいついかなるときも、挑戦を受けなければいけないのだ」

「流石」

もう既に二人の世界を作り上げてしまっているようだ。また「シヤシヤシヤシヤ」と、解説のしようもない勝負が繰り広げられる事が予想されるため、彼らの事は放っておいて山城さんと鬼谷さんの方の輪に入れて貰おう。

山城さんと鬼谷さんはパンフレットを広げて観光する場所を選ん

でいるようだった。

「やっぱさー海だよな」

「海ですよな」

やはり思うところと言えば、沖縄＝海だ。青い空に青い海。使い古されたテンプレートの沖縄代名詞。そんなわけでどこの海にいうか。という話題で盛り上がっているようだ・・・が。

「ビーチすげえ多いな」

「だよねだよな」

「この縮図で沖縄全てのビーチを書くと、文字が潰れてぐちゃぐちゃになりそうですな」

二人が広げているパンフレットには、でかかどと沖縄の地図が書かれていて、代表的なビーチだと思われる名前が書かれている。ここに書かれているだけで20カ所以上ある。それも名前だけしか書かれていないので、どういうビーチなのか良く分からない。トロピカルビーチ、パイナップルビーチ、さんさんビーチ。もうとにかくビーチ。

ちなみに、ちゃんと指定されていないところで泳ぐと、危険な生物に襲われる可能性があるため、絶対にちゃんと整地した所で泳ぐこと。とパンフレットに書かれている。

僕たちは良い子なので勿論ちゃんとしたビーチで泳ぐつもりだ。若干一名無視してどこかに行きそうな人が居るが。

至る所、赤丸だらけで沖縄が発疹でも起こしているように錯覚してしまう・・・と、そこで一つ思いつく。

「タクシーだ」

「え？」

「タクシーの運転手に、沖縄で一番綺麗なビーチはどこですか？つて聞くのは？」

沖縄中を走り回って実際に仕事している、タクシー運転手に綺麗なビーチを聞けば、穴場的な場所を教えてくれるんじゃないかなるか。

「な、なるほど」

「俺たちは5人だから、タクシーで移動は難しいけれどな」

「柵の前に座らせて、後ろに残り皆乗ればいいんじゃないかなー」

確かに、俺は肩幅は小さい方だし、可能ではある・・・が、長時間女の子とくっつくというのは、その、気恥ずかしいものが若干、あります。

「ちょっと狭そうな気がするな」

「だったら、圭の膝の上に卯月を乗せれば？」

「ちょ、な！！」

「あら、羨ましいですね」

にやにやっと山城さんがいたずらっ子の顔になる。鬼谷さんも、そんな不敵に笑わないでください。

シヤシヤシヤシヤシヤズシヤアア！

横で『ソニック』をしていた野谷さんが盛大に手を滑らせる。その間に志貴崎さんが全てのカードを処理し終えたらしい。

「・・・ミキ」

顔を真っ赤にした野谷さんが、山城さんを睨む。山城さんは目を反らせてその視線を受けようとしない。

「……勝ってたのに」

「ふふん。どうだか」

恨めしそうにカードを睨む野谷さん。

志貴崎さんは、口では余裕そうな事を言っているが、傍目に見てもかなりの神経を消耗していそうなのがわかる。額の汗の量が半端ない。

「よろしいでしょうか」

「はい？」

と、そこで客室乗務員さんに声をかけられた。

「お話の途中だったので、口を挟むのを遠慮させていただいていたのですが、志貴崎様の指示により、車を手配させていただきました。運転手も、当然おりますゆえ、その者に観光などの案内を指示していただければよろしいかと」

「えっ車!?!」

いくら何でも用意がよすぎる。もしかして志貴崎さん、昨日の段階で、既に沖縄行きを自分で勝手に決定して指示を出していたんじゃないか？

意外と策士なのか、それとも自分の欲求に忠実なのか……。

「まあ、海などいくらでもある。沖縄を一周しながら綺麗な海を見つけてそこで泳げば良い」

志貴崎さんが汗を拭きながら答える。

「なるほどっ！沖縄一周かぁ」

山城さんはパンフレットの地図を見て、道路の線を指でなぞっている。一周ツアーをシミュレーションしているようだ。

「沖縄は、県全体に観光名所が点在しております。そのまま道を通行いたしますれば、各所に観光地の看板が掲げられている事かと」
「そうなんですか」

鬼谷さんも、パンフレットを覗き込む。女の子二人で道路をたどり、色々想像を膨らませているようだ。

俺もパンフレットを手に取り、沖縄についての前情報でも仕入れておくしよう。こういうことは旅行のワクワク感を煽るのにとっても大事なことだ。

日本という国において、沖縄はなんとも特殊な県となっている。第二次世界大戦を発端とし、200年以上アメリカの軍基地がその土地の約10%も占めている。一時期海上へ軍基地を設立し、本土からの撤退も計画されたが、それは美しい自然を汚す事へと繋がるとして反対に遭い、今も昔と変わらずアメリカ軍基地はそこに根付いている。

亜熱帯の気候に恵まれたため、色々な種類の果物、動物を見る事ができる。「沖縄といえば海」というのが一般的かもしれないが、植物園や、ジャングル、岩石など沖縄特有の観光資源も沢山ある。

「沖縄方言」として認知度の高い「琉球語」と呼ばれる、この地

方独特の言葉があるが、それも残念ながら第二次世界大戦が端を発し、世代間での継承がなされなかったため、完璧な「琉球語」を使える者は今はもうほとんどいない。

現在残るのは「ウチナーヤマトグチ」と言われる、簡単な沖縄方言と標準語を混ぜた物が一般的となっている。簡単にマスターできるため、がんばって覚えて帰ろう。

珊瑚礁の減少や、ヤンバルクイナの絶滅、イリオモテヤマネコの本格的絶滅危機から知られるとおり、今なお沖縄の自然の減少の歯止めはできていない。そのため新たな観光資源の開拓のため、沖縄は日本で唯一「カジノのある県」ともなった。健全なギャンブルを常夏の島では是非楽しんで貰いたい。

こんな感じだ。マイナスイメージも挙げたのは、パンフと同時に携帯で色々調べてみたからだ。

「健全なギャンブル」ってなんだよ。とかは置いておいて、所狭しと並べられる青い海の写真から始まり、蛍光色の魚や果物、天をつくような岩石……。どれをとってもまさに『常夏』を全面にアピールしてきている。

「irisさんとかにも見せてあげたいねえ」

山城さんがぼつりとつぶやく。そうか、irisさんは部屋の中にいるから見れないのか。確かに少し残念な気がするなあ。

「……できる」

「はい？」

野谷さんは学生鞆から何かを取り出した。トランプのダイヤをそのまま立体にしたような形。これは……。8面体カメラ？

野谷さんの手に置かれてる8面体カメラはその名の通り、八つの面にカメラを一つずつ搭載した物だ。対座が付いており自立できるようになっている。使い方としては、空中に投げて360度パノラマ写真を撮ったり、防犯カメラとしてよく利用される。

よく見ると頂点に対空間投影プロジェクタが付いているようだ。これだけ小さいのは初めて見た。

野谷さんはオーク机に置いて、それを起動。かすかな駆動音と共にカメラが起動。広範囲認識できる魚眼カメラが、それぞれの死角をカバーし周辺情景を認識、プロジェクタが起動して空中に映像を映し出した。丸い球体・・・？

「お帰りなさい。皆さん」

このいつもの挨拶はirisさんだ。ということとはこれ（彼女？）がirisさんなのか。声は勿論外見を見るのも初めてだ。声は野谷さんの声にちょっと似ている感じで、落ち着いた大人の女性のような感じがする。

「おー！irisさんだー！」

「ほほう！そんなことができるのか」

「こんな小さなプロジェクタ初めて見ました」

「まあ、お帰りと言われるとちよつと違う気がするが」

「これは、プロジェクタでの接続ですね。と言うことは、皆様がいつも『部屋』を利用する方々なのです。対面では初めまして。『iris』です。今後ともよろしくどうぞ」

球体なので良く分からないが、お辞儀をしているようだ。皆でirisさんに改めて挨拶と、簡単な自己紹介をする。目的地まではあと20分。そうすればいよいよ俺たちは沖繩へと上陸する。

四話 学業は大事、青春はもつと大事？

「ついたー！！！！！！！！」

「沖縄ー！！」

なんだかんだいいつつ、俺のテンションはマックス！山城さんもテンションマックス！ひゃー！沖縄だー！

生まれてこの方、本土から遠く離れた離島にある都市から一步も出たことが無い俺には、そもそも海から外へ出るのが初めて。そしてそこが沖縄！テンションがあがって仕方が無い。

ジェット機から降りると、都市で嗅ぐよりも、濃い海の臭いと湿った熱い空気が俺たちの全身を包む。

放課後になつてからの移動のため、時間は7時。9月なのでまだ辺りは明るいけど、そろそろ暗くなる時間でもある。青空に迎えられないのが残念だが、それは明日の楽しみに取っておこう。

空港の滑走路内のため、まだ周りには沖縄らしいものは一つも見当たらなかった。

にしても今日の朝自宅から学園に勉強しに出たと思ったら、そのまま帰宅せずに沖縄・・・なんとも濃い一日である。いや、そもそもこの人達に出会ってからと言うもの、濃すぎる。

俺の人生の大体2年分くらいの出来事を三日に圧縮しても、この三日間くらい濃い物にはならないだろう。彼らとの出会いを喜ぶべきか、悲しむべきか。

いや、考えないようにしよう。

ジェット機は小さいので、ジャンボジェットのように空港へ直通

で入ることはできない。バスで空港まで送迎してもらおう。あたり一面コンクリートの滑走路を少し歩いてバスに乗り込む。普段は飛行機が動き回る所に足を着けるといのは、なんとも不思議な気分になった。

ちなみに、俺と志貴崎さんはカバンをジェット機に預け手ぶらだ。勉強道具しか入ってないしな……。きつと志貴崎さんは、勉強道具すら入ってないぞきつと。

女の子達は流石にカバンに色々入っているのだろう。皆手に持ったり肩にかけたりしている。それでも、旅行に持って行くには場違いな入れ物に変わりはしない。でかいトランクケースとかなら、持とうか？と進み出るのだが、通学に使うカバンで、しかも女の子の持ち物なので、流石にそれも要らぬお世話だろうと考えた。

バスがゆっくりと進みだす。「めんそーりよ、おきなわ」と運転手がスピーカー越しに挨拶してくれた。浮かれた俺たちも「めんそーれ」「めんそーれ」と返す。

後で教えてもらったところ、『めんそーれ』は『ようこそ』という意味らしい。つまり「ようこそ」を「ようこそ」で返してしまっただけだ。ミーハーこのうえない。だがそれこそ旅行だろう？と聞き直す事にしよう。

移動するバスの窓から、外の景色を眺める。バスは、飛行機が並んで整列しているターミナルへ、ゆっくりと移動中だ。

携帯で見た天気予報によると、今週は晴れと曇りが半々といったところであった。降水確率0%。沖縄まで来て、雨は悲惨なのでひとまず安心。

「卯月、乗り物に乗りながらPC操作をすると酔いますよ」
「……わかった」

バスに揺られながら、タブレットPCをいじっていた野谷さんに、irisさんが注意した。野谷さんは素直に従っている。親子みたいでほほえましい光景だ。

ちなみにirisさんは、野谷さんの制服の胸ポケットに入っている携帯から、音声通話のみで常時接続中だ。8面体力メラは移動するのにも面倒なので、こういう形となった。

バスが空港へと到着する。沖縄本島唯一の空港、那覇空港だ。

空港内へ入ると、手荷物しかないので荷物受け取りはスルー。さつさと空港の待合ターミナルへと足を向けた。ここで、今日からお世話になる車と、運転手さんにご対面になる予定であった。

「シキサキ様 ご一行」という看板を掲げた人はすぐに見つかった。少し白髪の混じった、黒い髪を無造作に流し、肌の焼けた中々にナイスミドルさんだ。もっとピシッとしたスーツで決めてる人かな、とこれまでの道程を思い出して身構えていたのだが、色鮮やかなアロハシャツに、ジーパンという出で立ちであった。なんとも沖縄らしい見た目である。

「志貴崎だ。よろしく頼む」

「金城 学と申します。よろしくお願ひいたします」

きれいで淀みのない完璧な標準語である。ちよつとがっかり。もつとこつ、沖縄っばい、なんかこつ、あれな感じを期待していたのに。

そう思ったのは、ほかのメンバーもそうだったようで、その反応を見た金城さんは大声で笑った。

「方言じゃなくってがっかりですか。そうですか」

「いやあ、やっぱりこう、期待するじゃないですか」
「はっはっはっは」

金城さんはひとしきり笑った後、「じゃあどの位のレベルでいきましよう」と言ってきた。

「レベル？」

「5まであります」

ふむ？意味が良くわからないが、どうやら方言でしゃべってくれるらしい。レベルの基準は分からないのでとりあえず。

「じゃあためしに5で」

「はいさい！めんそーりよーおきなわ。はじめていうおながびら、わんねー金城いちよいびん。よたしくおにげーさびら。うちなー料理やーでーじまーさいびん、ちむどうんどうんしてるといいさー」
「……………レベル1をお願いします」

身振り手振りで自己紹介してくれたらしいが、まったく意味不明である。素直に降参してレベルを最低にしてみらおう。

「はいさい！めんそーれー沖縄。始めまして、金城やいびん。沖縄料理はデージ超おいしいから、楽しみにしてるといいさー」

「……………おお！」「……………」

おー。なんとなく分かるレベルまで落ち着いた。これくらいで十分である。

「ちなみにレベル1とレベル5しかないさー」

「極端だな！！」

いたずら成功、という感じで金城さんが豪快に笑う。やばい、どうやら金城さん、基本お調子者キャラのおいがする。どうして俺の周りにはこうにも常識的な人がいないっ。

皆で自己紹介をしあい、とりあえず空港から出発する事にする。

「この車さー」

「わーい」

山城さんがダッシュで乗り込む。小型バスというのか、座席三列でゆったり座れるファミリーカーといった風体の車だ。後部座席は向かい合わせとなっており、テーブルがないがジェット機と同じ配置となっていた。

「どーせ遊んで汚れるから、汚れても良い車が一番の高級車にきまつてるさー」

「その通りだな」

そういわれて良く見ると、タイヤはオフロード仕様となっており、ボディは下の部分に汚れた泥が跳ねたりしている。・・・どんな道を走るつもりだ金城さんは？

車内も段差がなく、車のシートはフカフカしているが合成皮を使つてつなぎ目がない。金城さんの言うとおり、汚れたままで乗り込んでも大丈夫なように設計されてる車だった。気にせず遊ぶ、という配慮なのだろう。

「どー？どーいくばー？」

「本日以降の分の着るものがありません。補充をお勧めします」
「そうだな、近くにデパートは無いか？数日分の下着と水着、服を買おうと思う」

irisさんの助言に同調した、志貴崎さんの飛ばした指示に、そういえばと気づく。泊まるとして、下着や服をどうするのか考えていなかったな。別に旅行用で着るだけなので、安物の量産品で良い筈だ。ささつと買い物して、金城さんのお勧めの所で夕食、ホテルへ行く。というプランを皆で考え、車はデパートへと出発した。

「あんまり水着選ぶ時間ないねー」

「まあ、仕方ないだろうな。それとも水着は明日選ぶか？」

やっぱり女の子、時間配分が厳しいスケジュールの中でも、やはり水着は厳選したいようだ。それならば、水着を購入する時間は明日へと伸ばしたほうがいいのかもしれない。

「いやっ明日は時間がゆるす限り海に行きたい！」

「そうですね」

「……ん」

女の子三人はなにやら作戦会議。どうやら、下着、服は適当な物をさつさと購入、残り時間を全て使い、かわいい水着を選ぶ事にしたらしい。ううん、どうしても位置が近いので、聞こえてしまう。なんとも甘酸っぱい気持ちになる。

「ま、女性陣が水着を選んでも間は、おとなしくカフェでも時間つぶすかな」

「そうだな」

「ふふん。悩殺してやるんだからね。卯月なんて結構おっぱむぎゅ

う

山城さんの言葉が途中で途切れたのは、野谷さんが顔を真っ赤にしながらマツハで山城さんの口をふさいだからだ。そっか、おっぴかー。

「男はかりゆしウェアを選べばいいさー」

「かりゆしウェア？」

「これさー」

金城さんは運転しながら、自分の服をつまみ上げている。なるほど、あれはアロハシャツじゃなくてかりゆしウェアというのか。沖縄独特の衣服らしい。

金城さんの解説によると、かりゆしウェアは沖縄特有の技術、紅型をあしらった着物をシャツにリメイクしたもので、昔は古くなくなった着物を使用して作っていたものが、広く広まった物らしい。200年程度前に地球温暖化、クールビズ計画の一環として、沖縄の正式な場で着て良い衣服としても設定された。

なので沖縄の偉い人も皆かりゆしウェアをきている。テレビの記者会見がカラフルこのうえない事になっているらしい。むむ、見てみたいなその記者会見。

「じゃあ俺もかりゆしウェア買おう」

「ふふん。圭は小さいからな。こういうのは俺みたいなのが似合うだろう」

「チヨコレート柄のかりゆしウェアは無いと思いますよ」

いやいや、俺は平均以上に平均で少し童顔かもしれないが、さすがにそれはないだろう。というか志貴崎さんと比べるといいたい。そしてirisさん。「もちろんケーキも」とか言ってるが、そん

なボケは要らない。

「わかってる。沖縄だからな。魚柄だ」

「なるほど、流石椛ですね」

そういうことじゃねー！ああ！もう！誰か俺に常識的な友人をくれ！

志貴崎さんとirisさんは「いや、鳥柄がいいか？」「魚の方が沖縄らしくありませんか？」とかやってる。もうツツコミをするのも疲れてきたので、窓の外の景色を眺めて精神の安定を計る事にする。

あたり一面住宅や店などが所狭しと並び、なんともカオスというか、アジア！というごちゃごちゃした印象を受ける。普段、計画的に設計された都市に住んでいると、こういう光景にすさまじい違和感を感じる。あの路地の奥に入ると戻ってこれる気がしない。

空も所狭しと電線が這い回り、まさにカオス。一応観光地域は地中埋設によりすっきりした見た目をしているらしいが、少しでも道をそれるとこういう光景が広がっているらしい。

と、景色がいきなり一変する。

一面のフェンス。その向こうには青い芝が広がり、一階建ての正方形もしくは長方形の白い家が並んでいる。今まで見た光景とはまた180度雰囲気が違う、異様な光景だ。

「そこが軍基地さー」

「これが……」

沖縄県というこの県の10%、沖縄本島だけで計算すると実に1

7%をも占める第二次世界大戦の爪あと。陽気なはずの島国の中に、異常な存在感を見せつけ続ける白いフェンスに緑の芝生。

広い庭に一階建ての建物。道路はきれいに整備され、芝生も背がそろっている。あまりにも内と外、その光景は違いすぎる。もっとも、どこが内で、どこが外なのか、観光客にすぎない俺には、その判断をする資格はない。

ある人は言う。軍など要らないと。しかし沖縄はその軍のおかげで、軍の中で仕事をする事ができる人がおり、軍のおかげでさまざまな援助を受けられる人がいる。軍と沖縄、その二つは長い歴史の中で完全に結びついてしまった。この問題に対処できるのは、沖縄の人々以外に居ない。そして、答えを先伸ばしし続け、今日に至った。

今現在に至ったその経緯を、その判断を、その決断を、俺達は知らないし、これからも知ることは無いだろう。

「軍の人によー、ぎぶみーちょこれーと！ーってゆーとチョココレートをくれるさー」

「何っ」

「いや、冗談だから、戦時中の話だからそれ、志貴崎さんも反応するなよ。卑しすぎるぞ」

金、沢山持つてるだろうが。何でこの人の、食い物に対する執念はこんなにもすごいんだ？

そんなバカ極まりない話をしていると、車はデパートについた。見たこと無い名前だが、沖縄にしかないデパートなのだろうか。

とりあえず店内に入ったところで男性陣と女性陣で分かれて、9

時にはまたこの位置に集合する事を確認しあう。

「下着はこれでいいだろう」

「そだな」

早速二人で適当に下着を買って行く。とりあえず三枚ずつで問題無いはずだ。その流れでTシャツ。汗をかいて着替えるかもしれないのでこっちはちょっと多め。ズボンは二人ともちよつとだぼだぼした裾の短いズボンにした。

「靴をこれにしたらいいさー」

金城さんが手渡してきたのは草履である。

「草履？」

「そうさー。靴を履くと蒸れるから草履のほうがきもちいいさー」

なるほど、一理ある。ためしにはいてみる。足にぴったりと吸い付き、かかとも浮かないので、靴のような感覚で歩ける。走ったりしても問題なさそうだ。つま先が露出しており、確かに蒸れない。海の中もこれでいけるようだ。

値段を見てみる………、見なかった事にする。

「良い草履だ。これにしよう」

「確かに。これはいいものだ」

二人とも気に入ったので購入。しかし、似たような服装を購入したので兄弟みたいな出で立ちになってしまった……が、まあ女性陣も似たような服装になってると予想される。どうせ仲間内に見せないなので、格好をいまさら着飾ったところで、俺の評価が上

下するわけもないだろ。

続いてかりゆしウェアの方を見に行く。漏れなくカラフルである。地味な色であっても、柄は凄く複雑なものがほとんどで自己主張しまくりだ。

ひとまず安い量産品らしいものを見てみる。生地も薄く、プリントといった印象を受ける。そのまま物色を続けていると、中々良い生地のかりゆしウェアを見つけた。柄も結構好みだ。目にうるさくない程度に明るい青い下地に、紺でハイビスカスや鳥が飛んでいる。値段は勿論見ない。見ないほうがいいと脳内で警報が鳴っている。

志貴崎さん？彼は勿論、魚柄を選んでいた。「おいしそうだろう？」とか言っただけ。もう何も言うまい。

その後も、デパートを回り時間を潰す。途中、水着を購入したわけだが、志貴崎さんが、ブーメランな水着を買おうとするのを必死に止めるといふハプニングはあったものの、必要な物はこれで全てのはずだ。

志貴崎さんはこれから夕食を食べに行くというのにアイスなんかなめてやがる。

「流石に腹が減ったからな」

そういえば志貴崎さんはジェット機に乗ってる間も物を食べていなかった。沖縄料理のためにある程度我慢していたのだろうか。

そういうしている間に時間も9時だ。指定の場所へ向かうと女性陣が既に待っていた。それぞれ手にデパートの袋を持っていた。

「時間通りに全部買えたねー」

「……ん」

買い物をしてご満悦な山城さん。この表情を見ていると水着選びは無事終わったようだ。

「ふふふ、明日を楽しみにしててくださいね」

不敵に鬼谷さんが笑う。ど、どんな水着なんだ・・・ごくり。

「それじゃ、ご飯食べてホテルに行くさー」

ちなみに、夕食を食べたのは、現地の人たちが利用するような食堂のようなお店であった。まさに沖縄の母の味だというのだろうか、素朴な味にこれが沖縄のあじかぁ。と素直に感動しながら食べた。おいしかった。

どれもこれも色とりどりの色に彩られ、沖縄そばを始め、焼き魚、チャンプルー、豚の煮物、サラダ、どれをとっても食べたこと無い、見たことの無い料理ばかりであった。

細かく描写しないのは、リミッターを解除した志貴崎さんがすさまじい量を食べたので、料理の描写をするだけですさまじい量を使いそうだからだ。どんだけ我慢してたんだって話だ。

四話 学業は大事、青春はもっと大事？（前書き）

4500PV、ユニーク500、ありがとうございます

四話 学業は大事、青春はもつと大事？

「ふぁー……」

俺の間抜けな声が漏れる。

夕食を終え、俺たちはホテルについた。時刻は既に11時を回っている。

学校の後、飛行機での移動をし、デパートで買い物をして、夕食を食べ、車にて約一時間の移動。強行軍すぎる。体はヘトヘト、しかし旅行のハイテンションと、ホテルの豪華さに俺たちのライフゲージは満タンである。

『なきしんそん今帰仁村』の美しい海沿いに、帝王の如くそびえる約40階建ての高層建造物。一階あたりわずか6室しか部屋が無く、廊下にはこれでもかと絨毯が引かれている。

もちろんロビーにはシャンデリア。悠然とくつろげる、待合スペースのブレイクメニューを覗き込むと、一杯のコーヒー2000円である（それより下のメニューは俺には恐ろしすぎて見ることできなかつた）。

展望フロア兼レストランからは、沖縄の美しい景色が一望できる。そんな中、デパートのやすっぱい袋を提げて、どこの馬の骨かもわからない学生達が紛れている。もちろん俺たちの事だ。場違い感がありすぎて困る。

もう口が開きっぱなしである。え、ここに泊まるの？

「今日は遅いからゆっくり寝て、10時くらいに来ようかねー」

俺たちを降ろした金城さんは、そう言いながらホテルを出て行っ

てしまった。いや、10時くらいって何時だよ。アバウトすぎるよ。これがうちなーたいむというやつか。

「俺の予想だと11時くらいに来ると見た」

「圭は甘いね。私は、あの人は10時にタイマーをセットしてて、10時半にもそもそ起きて、11時くらいに出発するタイプの人だと見た」

「なんでそんな細かいんだよっ」

優雅なクラシック流れるロビーに、俺たちの漫才は想像以上に響く。自重しよう……。

「志貴崎だ」

「はい、お待ちしておりました。鍵でございます。お荷物を」

「いや、良い。自分達の衣服だからな」

「左様で、ではお部屋まで案内いたします。」

志貴崎さんは、そんな俺たちのやり取りを置いてさっさとチエックイン。志貴崎さんに続いて、俺たちもエレベーターホールへと向かう。うう。周りからの視線が痛い。……考えすぎだろうか。

エレベーターへと入る。俺からの位置だとホテルマンさんの背中での階のボタンを押されたのか分からない。まあ、最上階以外はどの部屋も同じだろう。けどできるだけ高くて海沿いがいいなーと思う。当然だよな？

俺たちを乗せたエレベーターは、どんどん上に昇っていく。扉の上にあるディスプレイをわくわくしながら眺める。

1、4、6、9、10、14、17、お、結構上だなあ、これくらい上がれば景色もよさそうだ。

20、24、27、29、32、うお、結構たかいんじゃないの

か？これ。

34、36、・・・。

38、40、展望フロアを越えた。もうこの時点で俺の嫌な予感センサーがびんびん。

41、42、43。

ポーン

「それでは、ごゆっくりどうぞ」

そうです。最上階です。いや、もうそんな気はしてたよ。流石に。

エレベーターを降りるとすぐに扉がある。ここからもう部屋なのか・・・。

志貴崎さんが、躊躇無く扉を開け放つ。待って！待って！まだ心の準備が！！あー！！！！

扉を開けた瞬間、飛び込んでるのは夜景。遠くに見える対岸の光がちらちらと瞬いている。そして、地面から発せられるオレンジ色の光は、アメリカ軍基地の光か・・・夜でもすさまじい存在感だな。皆で中に入り、細かく確認していく。ほとんどの部屋が区切られず、開放感にあふれている。当然のごとく、全ての壁は大きな窓があり、ホテルの周辺をほぼ一望できる。

まず大きなリビング。かなり大きな低めのテーブルを囲むようにソファが置かれ、その先には大型テレビ。バーもある。それでのりの範囲の場所を取っているが、まだまだ余裕がある。この広さが無駄すぎである。

寝室はリビングから繋がっており、カーテンのみで仕切られるようになってる。二つだから男女で分けて寝られるな。しかし、ベッド一つに四人くらいは余裕で寝れそうだな。部屋自体もかなり広

いし。これベッドあと三つほど入るんじゃないのか、この部屋だけに。

そして当たり前に、巨大なベランダ……というかテラス？付き。あとはトイレが3つに、洗面台が二つ……風呂は？

「風呂は二つだ」

志貴崎さんが指を指すところには扉の無い入り口が二つ。ここもカーテンで仕切れるようになってる。中は、更衣室だろうか？風呂はその向こうか。

「露天風呂だ」

「露天風呂！？」

「いいですねえ」

「おー」

あまりの豪華さに何も考えられなくなる。ざつと見回ったところ部屋は広いがホテルの面積から考えて、まだまだ余裕はありそうだ。風呂も相当でかいと思われる。どんだけだよ。20人くらい余裕で泊まれそうだよ。そう思ってたクローゼットを開けたら、布団も出てきた。なるほど、大人数でも泊まれますよって事なのか。用意が良いいねっ！

女の子達は、まあこういった所も慣れてるのだろう。わくわく、程度のテンションのようだ。

ホテルの二階と三階には、スパもあるようなので明日くらいにはそこも利用しようかな。

さて、部屋の凄さに目を回しつつも、流石に皆疲れを感じているので、さっさとお風呂を楽しんで寝ちゃおう。という事になる。

「どっちが男？女？」

入り口には特に違いは無い。

「どっちでもいいじゃーん」

山城さんがすいと右の方の入り口に入っていったので、俺達は自然と左の方へ。脱衣所もやっぱり豪華だ。この木枠、一本物の木から削り取ってるんじゃないや……。

「すっごいねー！」

山城さんの声が聞こえる。……つてええ！？仕切りの壁ねえ！衣類置き、棚の上が空洞になっている。

「風呂はもつと凄いぞ」

「え！？椀！？あ、壁ないのかー」

「ちよつと恥ずかしいですね」

「……ん」

ちよつとなんだ……。

向こうから、がさごそと衣擦れの音とか普通に聞こえてくる。この人達の神経は本当理解不能だ。

がさがさ、パサッ、ガチャとか、小さい声でキヤーとか聞こえてくる。うぐっ。

妄想が妄想を呼ぶこの状況と、恥ずかしさに耐えきれなかった俺は、さっさと風呂の方へ行く事にした。ささっと全裸になって、腰にタオル一枚だけ巻く。

志貴崎さんとはとくに準備してお風呂の方にずんずん進んでいる俺もそれに続く。ちなみに、ちゃんと志貴崎さんも腰にタオルを巻いている。ここらへんの常識はあるのか。

「おーすげー！」

プールかっていうくらい、でかい風呂がそこにはあった。

天井無しの完全な吹き抜け（後で調べると、屋根を出し入れできるようにうだ。ブルジョアすぎるわ）、風呂はマーブル色の黒い一枚岩を使っているのだろうか。底につなぎ目を感じられない。そして、眼前に広がる沖縄の夜景。素晴らしすぎる。

ガララッ

「おー！本当だー！夜景きれー！！」

山城さんの興奮した声が後ろから聞こえた。俺もこの光景にテンションが上がりまくっていたので、後ろを振り向いて同調した。

「すげーよなー！朝風呂とかすげーきもちよs・・・」

そう、俺は後ろを振り向いて同調した。

そこには勿論、女の子三人。

え？

「「「ちやー！」「」

「ふぶん。どうだ。凄いだろうこの景色！」

いや、志貴崎さんそんな事もうどうでもいい！！どうでもいいから！！

鬼谷さんは、体をバスタオルで覆っていた。しかしはつきりと、体のラインが見えてしまう。くびれた腰に、大きな胸。銀色の髪がなびいてとても綺麗だ。

野谷さんは、意外にも胸が・・・、着やせするタイプか。

そして一番に乗り込んできた山城さんは、ツインテールをおろし、小さなタオルを頭に乗せていただけであった。つまり、全裸・・・。顔を真っ赤にして、体を手で覆ってしゃがみこんだ。

「やー！！！！」

「む？どうした？はいらんのか？」

もうここまでくると志貴崎さん、あんたすげーよ。

「す！すまん！！すぐ出て行く！！！！志貴崎さんはやく！！」

「む？・・・わかった」

疑問符浮かべた志貴崎さんを、引っ張って脱衣所へ。速攻で着替えて2階のスパで体を洗うことにしたのだった。体を洗っている最中、志貴崎さんは「皆で入れれば気持ちいいと思ったんだがな」とか言っていた。この人男女の概念がないのだろうか。いや、無いんだろっな。

というか、脱衣所わけんなよ。わかんねーよ。と思ったが、どうやら混浴かどうかを選べるらしかった。志貴崎さんの独断によって混浴にされていたらしい。彼の事だから勿論「皆で入った方が楽しい」という理由以外には無い。

さつさと風呂を済ませ、部屋に戻る。男の風呂より女の子の風呂つてのは長いもので、ソファーに腰掛けて皆を待っていた。ちなみに、俺と志貴崎さんは浴衣に着替えている。

「うう、もうお嫁にいけない・・・」

山城さん達がお風呂を終えて出てきた。とりあえず謝る。

「すまん。疲れて頭が回っていなかった」

「・・・んーん、椀に全て任せた私がバカだった」

山城さんはしょぼくれている。どうやら、ホテルの手配は沖縄に来たことがあるという志貴崎さんが「任せろ」と言ったので、任せていたようだ。

「私ももうお嫁にいけません」

「・・・私も」

皆浴衣を着ており、濡れた髪が色っぽい。

「ふむ？良く分かんが、まあ、それならば俺の所に来ると良い」

志貴崎さんはやはり、自分がしでかした事をよく理解していない。そして、そんな器の広さ見せなくて良いから。

その反応を見た山城さんが、ガクツと肩を落とす。そしてゆらりと、顔を上げた山城さんの顔は、女子高生のそれではなかった。慌てて顔をそらせて山城さんを見ないようにする。

「椀、正座」

「はいっ!!--」

それから30分ほど、山城さんの前に、へばることとなる志貴崎さんであった。

「どっちのベッドを使う?」

山城さんの演技は、いつまでも志貴崎さんをへばらせるわけにもいかないのです、山城さんがある程度ヒートアップした所で止めてもらった。

今の問題は、この巨大なベッドのどっちを男、どっちが女の子が使うか、という事である。志貴崎さんと同じベッドなのは、寝てる間に引きちぎられそうで怖いが、まあ・・・大丈夫・・・だよな?

「ん?ベッド?修学旅行なんだから、ここは川の字じゃない?」

山城さんはそう言い終わらないうちに、クローゼットから布団を取り出そうとしている。どうやら皆で並んでふとんで寝ようと言うことらしい。

「え!?!ええ!?!まじか!」

「それは楽しそうですねっ」

「そうだな。それがいい」

「……ん」

俺が狼狽している間に、皆山城さんの案に乗り、布団敷きが始まった。スペースは十分すぎる以上に十分ある。

絨毯の上に敷き布団。異様な光景だ。

まあ、皆がそういうならいいか。ホテルの最上階スイートまできて、やることは結局修学旅行に終始する辺り、俺たちらしいと言えば俺たちらしい。

「順番だが、どうする？」

「……椀のとなり、……や」

「ふふん、大丈夫だ。寝てる時も力の制御はできる」

だからそういつつ筋肉うねうねさせんなよ。こえーよ。そんな訳で、俺たちの命がけのじゃんけんが開始される。

「……じゃんけん……!!」「」「」

皆真剣である。もうバカばかりだ。……後で思ったけれど、野谷さんリミッター付けてたよね？

結果、端から志貴崎さん、山城さん、野谷さん、俺、鬼谷さんとなった。

「……圭」

山城さんが、涙目で俺に訴えかけてくる。女の子の涙は、胸に来る物がある。だが、それとこれとは別である。俺は心を鬼にする。

山城さん、しんでくれっ

「変わらないからね」

「.....」

山城さんがふくれっ面になる。

と、突然俺の腕に山城さんがすがってくる。浴衣越しのせいで、女の子の柔らかい体の感触がダイレクトに感じられる。

「けいい〜」

ぐらりと、俺の脳が揺れた気がした。やられたっ！山城さん幻術使ってやがる！！

山城さんの顔から目が背けられなくなる。

「私の裸見た変わりにさ〜」

さらに、腕にからみつく山城さん。胸が押しつけられる。山城さんの胸の感触に気が遠くなり、浴衣がじゃっかん崩れ、胸の谷間が、ダイレクトに目に飛び込んでくる。

山城さんの足が、浴衣の中からすらりと伸びて、俺の両足の間に入り込む。山城さんの体温を、直に感じる。

これは、淫靡な夢。夢と夢の間にある、清く淫らな服従の演目

山城さんの言葉にうなずいてしまいそうになる。いや、うなずかないといけない気がする。・・・そういう役割を、割り振られたような気がしてくる。

頭にもやのかかったような、絶対服従しなければいけないような

！。

山城さんは、とどめとばかりに、俺の腕を下に引いて、俺のバランスを崩した。操り人形のように、素直に膝立になった俺に、上から被さってくるように、山城さんの顔が近くなる。

目が背けられない。

どんとんと山城さんの顔が近くなり、吐息がおれの肌をくすぐる。

「ねえ」

山城さんの髪が俺の顔にかかる。濡れた髪感触に、髪匂いが、俺の脳裏を刺激して止まない。

唇と唇が近づいていき、俺の視界にはもう、山城さんの瞳しか写らない。闇よりも深い黒。その向こうに淫靡な揺らめきの炎が見える気がした。どこまでも深く、どこまでも濃い。

俺が俺で無くなる！。いつまでもこの夢に潜っていたい。山城さんの体に触っていたい。

が、突然俺の脳裏に志貴崎さんの、筋肉うねうねが浮かんだ。いやいやいや、騙されない。騙されないからね！俺！！

「いや！いやいやいや！！じゃんけんで負けたんだから潔くなさい！！というか幻術禁止！！」

「・・・ちえ」

突然、俺の脳を覆っていた、淫らなもやが霧散する。夢が覚めた。山城さんは、今までの演技を辞めて、唇をとがらせた。もういつ

もの女子高生の演技に戻っているようだ。この人危険すぎる。

「どきどきしましたー」

「・・・えっち」

「そんなに俺の隣は嫌か？」

「できるだけ離れてよね！」

一部始終を見ていた、鬼谷さんと野谷さんは、顔を赤くしてキヤーキヤー盛り上がってる。助けてくださいよ。ねえ。

志貴崎さんは、山城さんの拒絶にちよつと残念そうだ。

山城さんは口ではそう言いつつ、志貴崎さんの布団を離そうとはしない。何だかんだで楽しそうだ。もしかしたら、さっきの幻術もわざとタイミングを見て、力を弱めてくれたのかもしれない。

「はいはい！一時過ぎです！皆寝ろ！！」

「・・・はい」

このままだといつまでもワーキヤーやってそうなので、さつさと指示して寝かせる事にする。「おかあさーん」とか言ってくる山城さんは黙殺しておいた。

両隣に女の子が居て、シャンプー（リンス？）の匂いと、女の子の吐息の音に最初はドキドキするも、心地よい疲労感がすぐに襲ってきて、俺は深い眠りに落ちた。

明日はいよいよ海に行く。楽しい明日がきつと来ると、そう確信できた。あれ？もう今日だけ？どっちだろうか。そんな思考力も、俺には既に無いようだ。

間話 深夜の密会

皆が寝静まった後、志貴崎は目を覚ました。

時刻は4時を回ったところだろうか。志貴崎は異常者としての脳に加え、人の範囲を超えた臓器類により、基本的に3時間程度の睡眠で全ての疲れが取れる。

皆を起こさないように静かに身を起こす。

と、右腕に山城が絡みついていた。緩みきつて幸せそうな寝顔に、思わず志貴崎の口角が上がる。あれだけ離れると言っていたくせに、人一倍寝相が悪いらしい。よだれまで垂らして、志貴崎の浴衣に染みを作っていた。

大胆に投げ出された足は、志貴崎の体の上に乗せられ、下着まで露出してしまっている。

そのまま見守っていたい気持ちもあるが、今日の所は遠慮させて貰おう。腕を少し強引に引き抜く。

志貴崎が腕を引き抜いたせいで、元々着崩れていたのだろう。山城の浴衣の胸元があらわになってしまった。形の良い胸が、呼吸に合わせて上下している。

下は着けているくせに、上を着けていないのか。相変わらず『女の子』というのは良くわからんな。

志貴崎はため息を一つつき、山城を転がして、涎を拭き、浴衣を正してやる。その手つきは優しさに満ちていた。

最後に腰紐を締めるときに、志貴崎の胸にいたずら心が芽生た。昨日の腹いせに、『少し』きつめに引っ張ってやる。

「くひゅ」

変な声が山城の口から漏れ出るが、ささやかな仕返しである。

志貴崎は、彼の昨日の行動が、根本的に問題であった事を、結局何一つ理解していなかった。

最後に布団をちゃんとかけてやり、山城の胸の上をぼんぼんと軽く叩いた。

今日は遊びに遊ぶからな。風邪を引くなよ。

音を立てないように、そろそろと皆の持ち物が置いてある場所まで進み、ビニール袋を慎重に退ける。

野谷、すまん。

心の中で一応の謝罪をしつつ、野谷の鞆をあさぐる。野谷の鞆には、昨日穿いていた下着等も入っているが、志貴崎は、女の子の鞆を開けるといのがどれほど罪深いのかは勿論理解していない。

先の謝罪も、単純に『他人の鞆を勝手に漁るのは悪いな』という彼なりの一般常識の現れでしかない。

志貴崎の『女の子の扱い』スキルマスターへの道は、遠く険しい物だと言えそう。

野谷の鞆から、目的の物を見つけ出した志貴崎は、そっと鞆を元に戻して、脱衣所へと向かった。

露天風呂に出て辺りを見回す。時刻は4時であるが、うっすらと周辺が明るくなってきたような色合いとなっていた。

湯船につかりながら、志貴崎はお盆を二つ浮かべた。一つには泡盛とグラスとスティック状のクッキー、そしてもう一つには。

「お帰りなさい、椀」

「やはり、風呂は誰かと入るに限ると思って、irisさんをお呼んでみた」

志貴崎さんは、満面の笑みを8面体カメラから映し出された発光体に向ける。

「私なんかで良いのですか」

「irisさんさえ良ければ、それで十分すぎる」

「私がここに浮かべられている以上、拒否権も何も無いと思うのですが」

「ふふん。確かに」

志貴崎は鼻で笑いながら、泡盛をグラスに注いだ。そしてもう一度聞き直す。

「嫌か？」

「まさか」

irisの即答に、志貴崎は景気よく泡盛を一気に飲み干した。

45度のアルコールは、志貴崎の喉を一瞬だけ暖かくするだけで、彼の内臓が一気にそれを分解。体中の毛穴からそれを霧散させる。

志貴崎の強靱な肉体が、彼を酔わせることを許さない。

「未成年の飲酒は法律で禁止されています」

「ふふん。どんな学校にも、不良児とは居るものだ」

「なら、問題ないですね。不良児の飲酒は法律で禁止されていませ

ん」

残念ながら、現在彼らの会話に突っ込みを入れる存在は、他の皆と一緒に夢の中である。

しばらく無言でのんびりと酒を楽しんでいると、志貴崎は空腹感を感じた。この時間ではまともな物は買えないだろうと予想して、持ってきていたクッキーを、嫌々つまんでかじる。

体の維持に必要な各種栄養素の、効率よい吸収と日持ちだけを念頭に置いて作られる、彼の非常食である。志貴崎はこのクッキー以上にまずい物を食べたことが無い。何かに例える事すらおぞましい。

一口かじっただけで、クッキーを戻す。

このクッキーと、人が一日に食べる食事の1/2程度摂取するだけで、彼は一日に必要な各種栄養素を補給する事ができる。だが、彼はこんなまずい物を食べるくらいなら、一日に20食でも30食でも食べた方がまだましだと考えている。これこそが、志貴崎が食べ物に執念を燃やす理由である。

「それはおいしくないのですか？」

「俺の知る食べ物の中で、一番まずいな。いや、これを食べ物という枠に入れることに怒りを感じる」

「ポテトよりもですか」

「芋、嫌いなのか？まあ、芋よりもだ」

「そうですねか……」

クッキーの、いつまでも口の中に残り続けようとする執念に辟易し、志貴崎は泡盛を一气飲みする。

「検索したところ、脱衣所に卵があるようです。温泉卵など、いか

がでしょう」

「ほほう。そんなものが」

聞かやいなや、志貴崎は立ち上がり、脱衣所に走っていった。

「女性に断りもせず、陰部を見せるのはどうかと思います」

志貴崎が既に脱衣所の中に入った後、彼がたてた波に揺られながら、irisは一人つぶやいた。

お湯が出る所に卵を設置し、志貴崎はまた酒を楽しんでいた。温泉卵になるのは約30分後である。

「そつだ。昨日の報告がまだであったな」

「皆さんのお話はもうしばらく聞けないのかと、寂しい思いをしていました」

「まったく。疲れにかまかけてirisさんを忘れるとはな」

「その通りですね」

その疲れを作り出した張本人は、自分のことを棚に上げて、言いたい放題だ。

「昨日、山城が上村に幻術を使ったぞ」

「……それは」

irisは驚いた。能力を一般人に使う。それはまさしく信頼の証に他ならない。いや、信頼以上かもしれない。「能力を使って拒絶される」それこそが、彼らの心に深い傷を付ける、一番最初に迎

えるトラウマであるからだ。

そして、そのトラウマがありつつ、彼らはランク5。同じ能力者達にも拒絶されてきた。

拒絶に拒絶を、重ねて重ね、彼らはこれまで一人で歩んできた。

そのトラウマを乗り越え、能力を使用する。それが、どれだけ凄いいことなのか。どれだけ勇気の要る事なのか。

「ふふん。上村は不思議な男だな」

「・・・そうですね」

「あいつは昨日、俺とベッドを共にする事も覚悟し、この旅行を楽しんでいたようだしな」

「・・・」

志貴崎は心から楽しそうに笑う。彼の能力を知り、彼が少しでも『その気になれば』体を細切れにすることもたやすいと知りながら、それでも彼を信頼し、それとおそらく同じか、それ以上に彼女たちも信頼している。

上村 圭。一般人、無能力者として彼らと付き合う男。

何者なのだろうか。

irisは、彼らの誰よりも、上村 圭という男が異質に思えてならなかった。

「実際どう思う？上村の事」

「・・・能力者？」

「ふふん。例えば？」

「・・・人を信頼させる？」

irisは、自分の論理破綻した思考に、自分自身で驚いていた。彼がそんな能力など持っているはずが無い。そもそも、irisは

野谷の話と、『部屋』で文字のみの会話でしか彼を知らない。実際姿を見たのはこの旅行がはじまってからである。

それなのにirisは彼の事を信頼していた。自分の正体や生い立ちを平気で話せるくらいには。

そんな間接的な経路、しかもirisのような、プログラムでできている者にまで効力を発揮できる能力が？

先の鬼谷との一件では、鬼谷本人が直接VRで接続してきてようやく、能力が行使できていた。鬼谷ほどの強力な能力でそれなのだ。上村がそれほどの能力を使えるならば、既に学園に入れさせられているはずだ。

元々、『上村 沙紀』という、志貴崎達をも超越した存在を姉に持っていたから？彼自身の器の広さ？性格？人格？

「まあ、人を信頼させる能力かどうかは、わからんが、常人ではないと俺は思う」

「……そうですね」

「そもそもだ。俺達は出会って3日だ」

「そうですね」

「それなのに俺達は、自分の能力のほぼ全てを、上村に見せている事になる。鬼谷とかは、まだ隠している所がありそうだがな」

「それは、椋達が始業式に出席した理由が一番なのではないのですか？」

志貴崎達は、自分たちが一人でいることに耐えきれず始業式に出席した。それと上村の異質さとは無関係ではなからうか。

「まあ、出会って三日で、友や親友や恋人になるなんてのは、よくある話だ。大きな問題では無いだろう。運命的な出会いって奴だな」

志貴崎はニヤニヤ笑いながら泡盛を一気飲みした。

「俺が言いたいののは、俺たちが示し合わせたように、『能力を見ても一緒に歩んでくれる友達を探す』という理由で始業式に参加し、そしてそれに『偶然』上村が転入してきて、その日のうちに遊んだ。その事実だ」

「……………」

「あいつは自分を自分で『巻き込まれ体質』だと言っていたぞ」

「……………他人の運命を自分に向ける能力？」

「違うな。他人の運命に自分を絡めてしまう能力だ」

『偶然』 上村 沙紀の弟になる。

『偶然』 能力者の学校に通わされた先で4人の最高ランク能力者と友になる。

志貴崎達の能力を見ても『偶然』上村 圭は姉に能力者が居たので、常人なら恐れて逃げるような所を、「すげー」の一言で済ませる。

さらに、自分に能力を向けられても、自分の『巻き込まれ体質』のせいだからと、これを軽く流す……………。

たった三日で、これだけの『常識』やぶりな状況にさらされても、上村は「巻き込まれた」の一言で済ませる。

「能力者じゃなくても、常人の神経では既に三回くらい精神が崩壊してるな」

志貴崎は楽しそうに、泡盛をあおる。そろそろ瓶の中身がなくなってきたようだ。

「ま、常人だろうが能力者だろうが、上村は上村だ。俺は信頼してるし、皆も信頼している。これから皆と一緒に時間を共にし、遊び、楽しくしたい。irisさんはどうだ？」

「ええ、そうですね」

irisは野谷の顔を思い出していた。あれだけの表情を、彼女にさせるだけの人物。ついにirisには、叶うことのできなかつた事だ。irisも上村、いや、彼らと一緒に居たいと思った。

「でだ。話を最初に戻す事になるが、山城が能力を使ったわけだが」
「ええ」

「まだ演技を解くまでは、いつてない」

これは初日から志貴崎が試みていることでもある。わざと彼女の逆鱗に触れ、彼女の能力を引き出そうとしていた。しかし、どうやらこの方法では彼女の『素面』は見られそうもなさそうだ。もつとも、志貴崎の意図していない所でも、山城の逆鱗に触れまくっているのだが、もちろん彼はその事に気づいていない。

「彼女の本当の顔が見たいと？」

「ふふん。やはり全てを晒しての友だろう？」

「女の子のいやがる事するのは感心しませんね」

「まだまだ勉強中の身なのでな」

irisは内心ため息をついた。この志貴崎という男は、あらゆる意味で自然体で動く。

さて、しかし、一見無理難題なように感じる……。が、irisは閃いた。

「それでは一つ」

「ふむ……。？」

irisの案に志貴崎は興奮気味にうなずく。なかなかの妙案のようである。二人の秘め事が進行する。そろそろ朝日が昇るようだ。

「なるほど、それでいい」

「楽しみですね」

「ふふふ」

まるでいたずらを仕込む子供のような笑いである。

山城にとって、あまりよくない方向へと話が転がっている気配がある。

志貴崎はしばらく今後の事を想像して楽しそうにしていたが、ふと顔が真顔に戻る。

「そつだ、鬼谷の事なんだが」

「はい」

「どうやらあいつは、一歩引いている節がある」

「……。なるほど」

鬼谷は、いつも控えめにしており、あまり自分を出さない。周りに同調し、前に出てくることはあまりない。それが志貴崎にはもどかしく感じた。

irisはしばらく考える。

「椀」

「む？」

「皆のために、命をかける気はありますか？」

唐突な質問である。たった三日連れ添った人間のために命を捧げられるか？

「ふふん。愚問だな。どうした？脳みそでもさび付いたか？」

志貴崎は即答する。彼らの全てを志貴崎は受け入れる気でいた。そして、志貴崎の理想の関係のために、彼らを自分勝手に巻き込む事も。全ては彼のわがままである。責任は、全て取るつもりだ。そのため自分の命など、一ミリも惜しくは無い。

「それでは」

irisは話し始める。

彼らの運命を定めるのか、歪めるのか。

それは分からない。

が、志貴崎の命に、志貴崎の心に、彼らと、そして自分自身の運命をそつと、預けた。

少しだけ長い計画の話し合いが終わり、志貴崎とirisは静かに朝日を眺めていた。

「おお、温泉卵があったな」

志貴崎は存在自体を忘れていた卵を取り出し、二本目の泡盛もついでに持つてくる。

「うまいな」

大量の温泉卵に泡盛。志貴崎は完全にくつろぎモードに突入していた。

「付け合わせと言えば、椀」

「ん？」

「ケーキには何が合いますか？」

志貴崎はしばらく考え込んで、確信を持って答えた。

「ショートケーキには抹茶アイス、ティラミスにはミルフィーユだな」

「なるほど」

二人の密会はまだまだ続く。時刻は6時半を回ったところだった。

五話 曇りが一番良い天気？（前書き）

四話 継続つ二日目つ

五話 曇りが一番良い天気？

チリリリリリリリリリ

8時に設定していた、タイマーの控えめな音に、俺の意識はゆっくりと覚醒した。……いつもの自宅の目覚まし時計の音ではない。

まだ半分脳の寝たままで、目を開ける。と、そこには野谷さんの顔がアップで迫っていた。

規則正しい寝息、さらさらと流れるように傾いてる髪、布団から少しだけ出た肩、長いまつげ、下品にならない程度に少しだけ着崩れた浴衣。

「うえ！？野谷さん！？」

がばつと飛び起きる。何だこの状況！！野谷さんが隣に寝てる！！！！

「おう。上村、起きたか」

志貴崎さんは、のんびりとソファでくつろぎながら、でかいを通りこして、でかすぎるテレビを眺めていた。

志貴崎さんの声に、ゆっくりと脳が覚醒してきた。昨日俺が沖縄に皆と一緒に来て、ホテルに到着、川の字で寝た事を思い出す。

「早いね。志貴崎さん」

なんとなく、志貴崎さんが最後まで寝てるようなイメージを持っていた。

背伸びをして、昨日の疲れが残っていないかどうか確かめる。うん、深く眠っていたのだろつ。疲れはすっかりとれていた。

「今日が楽しみでな、ついつい目覚ましよりも早く起きてしまった」
「なるほど。ちなみに何時くらい？」

「4時だ」

「遠足前の子供かつ」

何だよこの人。どん引きだよ。

「遠足か。なるほど、遠足もしたことないな」

志貴崎さんは、興味深そうにうんうんうなずいている。

しまった！自分から墓穴を掘った！！

「まあ、遠足は置いておいて、こいつらを起こしてやれ。女は化粧やらなにやら、時間がかかるのだろつ？」

「あーそうか」

未だにタイマーは鳴っているが、誰一人起きようとしない。山城さんなんて口開けて涎までたらしている。少なくとも女子高生が、男性の前で見せる顔では無い。かわいいけれど。

とりあえず隣にいる野谷さんから起こすことにする。眠っている女性をこんなに至近距離で見るのは初めてなので、ときどきしてしまつ。

布団から少しだけ出た肩に、そつと手を置いて野谷さんを揺すつた。若干高めの体温が、手の平を伝つ。

「野谷さん、起きて。朝だよ」

「……………んにゅ」

かわいらしい声を出して、野谷さんが起き出す。目をこすっておりまだ少し眠たげだが、布団からもそもそと出てきた。

浴衣によつて、野谷さんの腰からお尻にかけての、ボディラインが顕著に見て取れる。四つん這いで布団から出てきた野谷さんは、その華奢で小さな体つきから、猫をイメージさせる。少しだけ寝癖のついた髪が色っぽい。目を離せないのは、男として仕方ないことだと思ふんだ。

内心ドキドキしながら、野谷さんが覚醒するのを待つ。

「……………おはよう」

「おはよ、朝だよ。山城さん起こしてくれる？俺は鬼谷さん起こすから」

「……………ん」

野谷さんが山城さんの方に行ったので、俺は振り向いて鬼谷さんを見た。

妖精が居る。と思つた。

山城さんは、少しだけ顔を俺の反対側に向け、規則正しい寝息をたてていた。どうやら寝相はかなり良いらしい。美しい銀髪を、枕の上にあげて髪を引っ張らないようにしているようだが、その髪が朝の光に照らされて、きらきらときらめいていた。まるで、妖精の羽か、羽衣のように錯覚させる。

ちゃんと肩まで布団を被っていたので、大事な所に触らないように、慎重に肩をゆする。

「鬼谷さん、朝だよ」

「……………あじ」

夢から覚めたようで、綺麗な銀色のまつげを振るわせて目を開けると同時に、口から意味をなさない言葉が漏れる。

「……………おはようござい……………」

どうやら低血圧気味らしい。ゆっくりと起き上がるのに合せて、銀髪もさらさら流れて綺麗だ。しばらくそのままぼーっとしているので、目が覚めるまで待つとしよう。

「……………んっ!」

後ろで小さな悲鳴が聞こえたので振り返ると、野谷さんが山城さんに絡みつかれていた。がちりホールドされているようで、野谷さんの力ではどうにもならないようだ。いったいどうやってたらその体制になるんだ。

「ただ寝相わるいんだ山城さん。」

「……………助けて」

正直女の子同士が、体を密着させているこの状況は大変目にうれしい……………いや、たのしい……………いや?なんって言ったらいんだらうか。

まあいつまでも見ているわけにも行かないので、二人を剥がしにかかる事にする。

山城さんには悪いが、口と鼻に手で栓をする。手に山城さんの呼吸が感じられてくすぐったい。

「……………ぶぶあっ」

しばらく待って、苦しそうな顔になったところで手を離す。山城さんは涙目になりながらもどうにか夢から覚めたようだ。

「……あれ？」

「おはよう。山城さん」

山城さんの顔に、「なんで圭がここにいの？」みたいな表情から、「あー沖縄旅行だっけー」という表情に変わるのを待ってから、

「野谷さんを離してあげて」

と言ってあげた。その間、野谷さんは抵抗するのに疲れたのか、山城さんの胸の上でぐったりしていた。

「……え？あ、ごめん！私寝相悪くてさ」

「……疲れた」

寝相悪いつていうレベルじゃなかったぞ。あれ。

「俺とかだったらどうするつもりだったんだよ」

大騒ぎになってたぞ。きつと。

「へへー、圭ならいっかなー」

山城さんはいつものニヤニヤ顔になりながらそんなことをほざきやがった。是非ともお願いしたいですが、あまりにおふざけが過ぎるので、

「明日は志貴崎さんに起こして貰おう」
「げげっ」

一応明日のために釘を刺しておいた。

「はいはい！お風呂入るなら入って、準備しなさい！」
「「「はい」」」

皆に指示を出して、俺は志貴崎さんの隣に腰を下ろした。

「はあ、まったく」
「もうすっかりおかあさんだな」
「俺がすっかりしないと皆暴走するだろ」
「違うない」

一番暴走する予定の志貴崎さんは、静かに笑いながらテレビを眺めている。俺もテレビを眺める。

天気予報は、早朝は晴れ、昼以降は曇りとなっていた。降水確率0%。すぐに画面が切り替わり、今日の占いが始まった。げげ、曇りか。ちよっとテンションダウン。

「曇りかー」
「ふふん。良い天気だな」
「曇りが？」

何でだろうか。やはり沖縄と言ったら白い砂浜に、さんさんと照りつける太陽ではないのだろうか。

「俺たち男にはまあ、問題ないかもしれないが、女性陣は嫌だろう」

「日焼けか？」

「詳しい解説は金城にしてみよう」

あの三人は比較的肌が白い方だ。特に野谷さんは、普段家の中にいるのか、かなりの色白具合となっている。まあ、金城さんに解説してもらえらるなら、それを期待しよう。

ちなみに、今日の俺の運勢は真ん中くらい。混乱の中にあることがあるでしょう、との事。この占いはきつと的中するな、と俺は確信した。

準備を終えた俺たちは、展望フロアに朝食を食べに来ていた。朝は晴れとの天気予報通り、そこから眺める沖縄の景色は、最高に美しかった。

青い空に、白い砂浜、そして色とりどりにたゆたう海。写真なんかで見ると、沖縄の海は青か緑といった印象しか受けないが、白い砂浜と海の境界線から、白、明るい緑、緑、深い緑、青と、どんな色の変化があり、さらに珊瑚礁や岩に合せ、どこを見ても同じ模様にはならない。太陽に照らされ、波に揺られて、海はいくらでもその表情を変える。

「きれー！」

「綺麗ですねー」

「きれいだなー」

「……ん」

『綺麗』の一言で済ませられる景色では無いが、それ以外にこの景色を表現できる言葉を俺は知らない。皆で一緒にしばらく海の様子を眺める。

ちなみに全員、動きやすい服装だ。

山城さんは、黄色いＴシャツに、赤いラインの入った黒いジャージ。

野谷さんは、オレンジのＴシャツに、タックショートパンツ。

鬼谷さんは、丈の長い白シャツに、ホットパンツと膝上までのレギンスだ。

俺はというと、さっそく買ったばかりのかりゆしウェアを着て、ミ－ハー旅行者を満喫している。

志貴崎さんは、Ｔシャツだった。景色を眺めて楽しむ俺たちを、放ってさっさと料理と取りに行つてここにはいないが。

ひとしきり景色を楽しんだ後、俺達も食事にする。ちなみに朝はバイキングである。相変わらず大量に食べる志貴崎さんにはもう慣れたので、気にしないで自分の分を食べ始める。

ウインナーに卵焼き、焼きシヤケ、味噌汁、ご飯、パンとジャム朝なので軽めにした。志貴崎さんが食べてるものは、見なかつた事にする。

ちなみに、時刻は１０：３０である。金城さんは到着したら展望フロアで、と言つてあるので、昨日の予想通りまだ来ていないようである。それを予想して、到着予定時間にご飯を食べてる俺たちも俺たちであるが。

「金城さん、どれくらいでくると思つ？」

「んーあと一時間くらいみたほうがいいんじゃない？」

のほほんと山城さんが返す。まあ、別に時間に追われているわけではないし、のんびり朝ご飯を食べよう。

「うきみそーちー、はいさーい、来たさー」

「はいさーい」

と、そんな時金城さんがやってきた。山城さんが元気よく答える。しつかり自分の分のご飯を皿にのせている。金城さんもここでご飯を食べるのか。自由人だな。

「うきみそーち？」

「うきみそーちー。おはようって意味さー。まー、沖縄の人もあるま使わないさー」

金城さんは、俺の言葉に、わざとゆっくり言葉を言い直してくれた。独特の沖縄方言のイントネーションはとても面白い。

「今日は海いくけどよー、泳ぐのは太陽隠れてからさー」

「え？晴れてるうちに泳ぐのがいいんじゃないのー？」

山城さんが、びっくりして食べかけのパンから顔を上げた。ジャムついでるよ。

「太陽出てる時の海は綺麗さー、だけどよー、それで泳ぐと塩と太陽で火傷してあちこーこーよ。だからよ、フル装備で釣りするさー。だからよ、魚を昼に食べて泳ごうねー」

どうやら、太陽照りつける中で、水着なんかつけて泳ぐと、日焼けを通り超して軽度の火傷になるらしい。沖縄の海、恐るべし。現地の人は水着の上から長袖のＴシャツなどを着用して泳ぐのだとか。それでも、日がもつとも高い時間は泳ぐのを避ける。

「水ぶくれができて、ぼろぼろ皮が剥がれて、斑模様になるさー。」
「ひー」

金城さんの言葉に、女の子達の顔が青ざめる。

しかし今日は曇り。その時に泳げば日焼け止め程度で水着で泳いでも大丈夫だ。なるほど、志貴崎さんが言っていたのはこのことなのか。確かにその話を聞くと、曇りが泳ぐには一番良い天気かもしれない。

そして、太陽の照る綺麗な海では、日光対策を万全にしたフル装備で釣りをしようというのが金城さんの今日のプランだ。

話を聞いた俺たちは、金城さんのプランに素直に従う事にしたのだった。

「日焼け止めって、どんなのがいいの？」

「このホテルの売店に、良いのがあるよー。高密度の微粒子がなんとかかんとかでから、UVカットが何かすごいらしいさー。高いけどよー、あの日焼け止め使ってるお客さんは、皆日焼けあんまりしないで帰って行ったさー」

「流石ガイドさんっ」

女の子達は、自分の肌を守るため、真剣だ。金城さんの解説は適当極まり無いが、俺たちみたいな人を何回も案内してきたのである。そんな人が勧めるのだから、きっと大丈夫なものだろう。

窓の外を見る。さんさんと日光を反射して止まない雲達が、ゆっくりと流れて俺たちを待っている気がした。

五話 曇りが一番良い天気？

さて、ご飯を食べて元気いっぱい俺たちは、金城さんの車に乗り込み、元気よく出発した。日焼け止めもばつちり購入。

金城さんの車の荷台には、釣り道具の他に、日光対策のパラソル、麦わら帽子、見た目がカツパにも見える超極薄の遮光ジャンパーなど、色々と積み込まれていた。ナイフや即席キャンプセットもある。何でもありだ。

「何だか映画とかで見る、スパイとかが車に隠してる武器庫みたい」

座席に座り、後ろの荷台を見ながら山城さんがはしゃぐ。

「そーばーよー。その時に合せて、できる限りの最高の装備にするからよ、今日は女の子いるから、釣り竿も電動リールとかで力使わないのにしたさー。餌もよ、虫じゃなくて人工生成疑似餌で簡単さー。ほかにも色々あるからよー」

流石、伊達にこの仕事はやっていない。細かい気配りは流石だ。そして相変わらず説明が適当である。金城さん曰く「てーげー」らしい。適当って意味なのだとか。だめだこりゃ。

素人目に見ても、手入れの行き届いた釣り道具の数々だ。釣り竿や餌も、手作りや高級品なのがなんとなくわかる。

「どうせだったら俺は本格的なものでやりたいな」

志貴崎さんは、電動リールや疑似餌ではなくちゃんとした虫や普通のリールでやりたいようだ。

「こういうのは、雰囲気楽しむさー。魚釣れなくてもスーパーで買って食べればいいさー、くらいのもてーげーでやればいいんどー。泡盛飲みながらだらだらつとするのが沖縄の釣りだからよー」
「ふふん。例え釣れなくても、本気で当たって砕けるのが俺だからな」

自分で当たって砕けるとか言うなよ。あと、金城さんはさらつと飲酒しますよ宣言とかするな！！

俺は警戒して携帯でアルコールチェッカーのソフトウェアを、検索してダウンロード・インストールしておくことにした。こっそり飲んでたら運転代行を呼んでやる所存だ。

ホテルを出て、沖縄の海を窓から眺めながら、のんびりと車は走っている。昨日は夜なので実感もあまりなかったが、車窓から海を眺め、道に植えられた沢山のヤシの木を見ると、おー、沖縄っばい（っばい、つても変な話だがな）！と実感が出る。

車は、橋を渡り、『屋我地島』に渡り、さらにそこから橋を渡って『古宇利島』へと向かう。今日の目的地はそこだ。

この『古宇利島』へと向かう橋を『古宇利島大橋』と言うのだが、この橋にさしかかる前から、沖縄の満点の空と、まだ見ぬ『古宇利島』の海との組み合わせに興奮する。

そして、橋へとさしかかる。

「「「「「おおおおー！！」「」「」

そこにはまさに、エメラルドグリーンの海が広がっていた。鮮やかな緑。透明度の高い海！橋の上、さらに車の上から見てもこの透

明度。ため息すら出てしまうほど綺麗だ。

車はどんどん進み、橋の中間にさしかかる。

「すげーな、プールの底みたいだ」

「あ、なんとなくわかるそれ」

ホテルの上からだとは、色々な色があるように見えた沖縄の海だが、これくらい近くまで来ると、底の白い砂に透明度の高い海の色がまざり、まさに鮮やかな緑一色。境目の無い無限に広がるプールのようだ。

さらに、反対側の車窓からは、これまた美しい位に、深い青の海が広がっている。橋の左右で、ここまで海の色に違いがあるとは。

車で移動してるというのに、その透明度高すぎる海では、たやすく魚群を発見することができる。

「沖縄の海が、ここまで綺麗だとは思いませんでした」

「……うん」

女の子達は食い入るように海を見ている。

そして、金城さんが『古宇利島』の解説をしてくれる。

「この橋は無料で走れる橋で沖縄一、長いさー。ちょっと前までは日本一だったけれどよ。皆畑仕事してるさー。あとはウニ丼がおいしいさー」

適当である。

「ほほう。ウニ丼」

志貴崎さんの目がキラリと光る。

「今日はそこで釣った魚を料理してもらって、ウニ丼食べるさー」

「おいしそー!」

「釣れなくてもウニ丼食べるさー」

まったくもって適当である。

車は橋を渡りきり、すぐに右に折れて駐車場に止まった。

「この海でおよぐさー」

「おおお!」

橋を降りてすぐにビーチがあるらしく、皆でビーチの確認をする。白い砂浜、青い空に、エメラルドグリーンのビーチ。まさに、うたい文句通り、沖縄の海そのままの光景がそこにあった。夏の太陽の照りが白い砂浜に反射し、上からも下からもじりじりと肌を焼く。

「きれー!」

砂浜を下り、海と砂浜の境界へと近づくと……。あまりの海の透明さに言葉が出ない。海へと足を踏み入れる。

「冷たいな。そして海って透明なんだ」

「ほんとうだねー……」

「ですねー」

「……きれい」

既に膝下まで進み入ったが、その透明度は変わらない。少し緑っぽくなった?程度である。周りには、夏休みの時期を外し、平日だと言っことで観光客も、現地の人もほぼ0だ、ほとんど貸し切り状

態でこの海で遊べるわけだ。

「でーじ綺麗だろー。曇りになっても全然綺麗だからよ、わくわくしてるといいさ」

「「「「はい」「」」」」

とりあえず、皆で車に戻り釣りの準備をすることになった。
と、志貴崎さんが何か握っている。

「・・・何だそれ？」

「魚だ」

志貴崎さんの手には魚が握られていた。どピンクの魚だ。・・・
すさまじい色だな。しかしどこから？

「どうしたんだ？それ？」

「獲った」

「・・・はい？」

「海に入った時にだな、足下をこつ、泳いでるから、獲った」

「・・・」

「こつな、魚が手に気づいて前に逃げるから、ちよつと手前に手を入れるのがコツでな」

熊かよ。どん引きだよ。釣りいらねーじゃねーか。そんなHOW
TOいらねえよ。志貴崎さんにしかできないからね！静かだ
など思ってたならそんな事してやがったのか！！

「それはぐるくんさー、焼いて食べるとおいしいさー。ビールと食
べるとでーじまーさいびん」

「これがぐるくん・・・」

「ぐるくん？」

「沖繩の県魚ですよ。確かタカサゴっていう魚です」

志貴崎さんの手に持つ魚を見て、皆興味しんしんだ。しかし、素早さ次第でさかなを獲れるなら、野谷さんももしかして、獲れるんじゃないか？

「……熊じゃない」

考えが読まれてた。

「ふふん。魚獲りでは勝負しないのか？」

「……しない」

口を結んで、静かにすねる野谷さんはかわいらしかった。

「さて、それじゃあ釣るさー！」

志貴崎さんがフライング(?)してしまっただが、気を取り直して魚釣りである。

ビーチから少し移動して、堤防の上に俺たちは腰掛けていた。

パラソル、遮光ジャンパー、麦わら帽子、簡易椅子。もう色々な意味で準備万全である。

勿論ひやけ止めも塗ってある。流石高いだけあって、さらさらとした手触りで、顔に塗っても何の違和感も無い。

「まずよ、釣り竿あるだろ？この針に、この餌をつけるばーよー」

「そういいながら、金城さんは疑似餌を取り出す。何となくエビっぽい見た目だ。」

「でからよ、振りかぶって投げるさ。振るのを機械が見てて、勝手に飛んでくからよ。投げるときは、パラソルの下から出ないとパラソル飛んでくから気をつけてねー」

「普通なら振りに対してタイミング良くリールのロックを解除するなり、リールを止めている指を離すなりの操作があるが、初心者用に各種コンピューターを導入した釣り竿のようだ。釣りはしたことが無いのでありがたい。あと、パラソルの下から云々は要らないと思う。」

「でからよ、落ちたところに浮きが出てくるからよー、それが沈んだら魚が餌食べてるさー。そうしたら巻き取れば釣れるばーよー」

「今回は演習なのですぐに金城さんが巻き始める。それをコンピューターが検知しフィールドバック、人力との比率約1:2で内蔵されたアクチュエーターを駆動させ、リール巻きを補助してくれる。さらに、引きの強さ、リール巻きに掛かる力から、どの程度の魚が掛かっているかを的確に検知。ディスプレイに表示させる。今回は特に何も居ないので、ディスプレイの表示は特に何ともなっていない。」

「あとは、これを繰り返すだけさー。針の付け方とか、魚の外し方はわーがするからよ、気軽に言えばいいさー」

「「「「「はい」「」「」「」」」」」

早速皆で餌を付け、投げ始める。「しゃー！」っというリールから針がはき出される音が連続して鳴り、照りつける太陽と、沖繩の海を眺めながら、のんびり腰掛けて魚がかかるのを待つ。

「俺が投げると電動だと壊れるからな。これだ」

志貴崎さんの声に、振り返ってみると、なんともすさまじい釣り竿を握っていた。

「ハイコーティングされた、クロムクロスファイバーがどうか炭素なんかか、なんかかかんとかな凄い丈夫な釣り竿さー」

相変わらず適当な金城さん。どうやら凄まじく頑丈な釣り竿らしかった。余計なパーツはついておらず、まさに漢の釣り竿。どう考えても釣り初心者の人が持つ物ではない。

そして餌は魚の切り身である。何の切り身かはわからないが、かなり厚く切つてある。何を釣る気だ？あんだ。

「ふん」

ブオン

気軽に投げているように見えるが、釣り竿がありえない位になり、先に付けられた重りを勢いよく飛ばす。「ギヤアアアアアアア」というリールの糸をはき出す音は、もはや釣り竿の悲鳴にすら聞こえてくる。

ってか、遠くに飛びすぎて浮き見えなく無い？

「飛ばしすぎさー、浮きが見えないねー。もっとでかい浮きにする

べきだったさー」

「……大丈夫、……見えるから」

野谷さんには、遠い浮きかはつきり見えているようだ。流石異常者。

しばらくぼけーっと釣れるのを待つ。こう、今までの三日がすさまじかっただけに、俺の精神は海の緩やかな流れに合わせて、ゆっくりと癒やされているようだった。ああ、癒やされる。

そういえばこの人達の能力って、魚に通用するんだっけ？

「山城さんや鬼谷さんの能力って、魚にも有効だっけ？」

「そだねー」

「ええ」

流石、ランク5。もう何でもありすぎる。

「見せようか？」

「いや、いいです」

山城さんが気前よく言ってくれるが、遠慮しておくでしょう。山城さんの手の動きに合わせて、魚が飛んだり跳ねたりシンクロしている様子を想像する。恐ろしすぎる。

しばらくそのままポケットとしてると、金城さんが楽器を取り出した。

「それは？」

「さんしんさー」

「それが……」

黒い漆を太陽光に反射させて、蛇の皮を張ったその楽器は、沖縄文化の象徴でもある。

「沖縄の人は、時間を一秒も無駄にしないで、とろとろするさー」

沖縄の人は、時間にルーズである。それは別に時間を無駄にする事ではなく、時間を楽しむからである。時間に縛られ、時間を気にして、時間に従うのではなく、時間を見て、時間を楽しみ、時間を感ずる。

釣りをするときも、遊ぶときも、仕事をする時も、彼らはいつでも時間と戯れ、時間と生きる。

ギターピックでつま弾くサンシンの音が鳴り響く。

サア、君は野中の茨の花か、

サーユイユイ

暮れて返せば、ヤレホンニ、引き留める

マタ ハーリヌ チンダラ カヌシヤマヨ

サア、嬉し恥ずかし、浮き名を立てて

サーユイユイ

主は白百合、ヤレホンニ、ままならぬ

マタ ハーリヌ チンダラ カヌシヤマヨ

ある所に、安里屋アサドゥヤのクマタという村民生まれの美しい娘が居た。そして彼女を見た下級役人は

「嗚呼、貴方はなんと、野原に咲く茨の様に美しい。是非とも、是非とも貴方と添い遂げたい」

と、彼女に何度も結婚を申し込んだ。「マタ ハーリヌ チンダ
ラ カヌシヤマヨ」、「また逢いましょう。美しい私の思い人よ」。
役人の命令は絶対である。それを受けたクマタは言葉を濁し、かわ
して、ついにはこの申し込みを拒否した。

役人は言った「それでは私は、貴方よりも美しい人と結婚してみ
せよう」と。

歌は23番まであり、歌は彼女と彼のやりとりを、おもしろおか
しく描いている。

しばらく、金城さんの歌と、海の波の音と、俺たちのリールの音
が、青い空に向かって静かに溶けていた。

志貴崎さんの竿の音だけが、青い空を引き裂いていたが。それは
俺の精神安定上あまりにもあれなので、聞かなかったことにした。

五話 曇りが一番良い天気？

皆で釣りを楽しんだ後、俺たちはビーチの近くの海の家に来ていた。トタンを組み合わせた壁に、濃いコケ色やら、青や黄色のペンキが塗りたくられすごいことになっている、海で獲れたのであろう、でかい貝殻とかが飾られて、なんともアジアンダイニング、という独特な印象を受ける店だった。

「ありー、にいにいーいるー？」

「おー、金城やしえー。仕事かー？」

「そーばーてー、しにるかてーげーやってきたばー」

「てーげーはだめやしえー」

どうやらお店の人と知り合いらしい。理解不能なレベルで方言を交わしている。俺たちの釣った魚を手渡しているところを見ると、料理をしてもらえるようだ。

ちなみに、俺たちの釣った魚はグルクンが三匹、カレイが一匹、ハコフグ二匹。一時間半程度の釣りにしては、かなりの量が釣れたと思う。・・・志貴崎さんは釣れなかった。

「当たって砕けたな」

と豪快に笑っていたが、ちょっと寂しそうだった。しかしあれだけの切り身を使って釣れる魚って何だ？そもそも居るのか？沖とかにいないと無理なイメージがあるんだが。

俺たちは釣った魚がどういった料理をするの分からないし、沖縄料理の知識もあまり無いので、金城さんにメニューを任せました。しばし待つと、他に客が居ない事もあってすぐに料理が出てきました。

さしみ、焼き魚、サラダ、ウニ丼、魚のアラ汁、沖縄そば、
c e t c。

「おおおおー！」

「すごいですね」

「・・・おいしそう」

沖縄の色豊かな魚がメインなだけに、目に鮮やかでとても楽しい料理のフルコースとなった。どんどんと料理が運ばれてくるが、志貴崎さんが大量に食べるので問題は無い。

「自分で釣った魚はやっぱりおいしいさー」

海の匂いと、音を聞きながら、俺たちは新鮮な素材の味に、舌鼓を打った。

時刻はそろそろ2時になりそうだった。

さて、ご飯も食べ、腹も満たされた俺たちは、いよいよ海に来ていた。全員もちろん水着だ。

山城さんは、赤とオレンジの水玉模様のチューブトップビキニ、元氣いっぱい動き回る彼女らしいと思う。

野谷さんは、青と黒の細かなボーダー柄のボーイズレッグビキニ、小柄でショートカットだから、遠目に見ると中性的であるが、胸の膨らみと相まってとても健康的な色っぽさを感じさせる。

そして、鬼谷さんは、前日の宣言通りかなり攻めてきた。なんと黒ビキニにパレオである。黒い下地に、白いハイビスカスが控えめに散る上品な水着だ。銀色の髪との対比がとても綺麗だ。

「みんなかわいいさー」

「へへーん」

「がんばって選びましたからね」

「……ん」

対する俺と志貴崎さんは、まあ普通と言えば普通。ズボンタイプのゆるっとした水着だ。沖縄だと言うことで少し派手めではあるが。

「椀の事だからなんか凄いの選んでくると思ったよ」

「選びそうだったから俺が見繕った」

「……圭がいてよかったよ」

山城さんは頭を抱えている。

早速海にはいるー！！とは思っのだが、まずは下準備である。

「志貴崎さん、パラソルぶっさして」

「ふん」

ズボン

ぐいぐい引っ張って抜けない事を確認する。うん、大丈夫そうだ。広げて影を作る。そしてビニールシートを敷いて、四方の穴に、これまた志貴崎さんに釘を打ち込んで貰う。あっという間に休息所の完成である。

「……圭、背中塗れない」

野谷さんが、日焼け止めを持って俺の前に座った。確かに、一人

では日焼け止めは背中に塗れないな。だが、俺じゃ無くて鬼谷さんが、山城さんに塗って貰えば良いのに。信頼してもらえてることなのだろうか。

「お、俺がか」

「……ん」

変な汗がだらだら流れるが、まあ、日焼け止め塗るくらい友達同士普通にするか、と思いき直し、日焼け止めを受け取った。少し手の平に出し、両手に付けて引き延ばす。

とりあえず、女性の背中に日焼け止めなど塗ったことはないの、首筋から塗り始める。手の平が野谷さんの首筋に当たり、ワントンポズれて野谷さんがびくつと震える。

「すまん、冷たかったか」

「……大丈夫」

大丈夫そうなのでそのまま肩口へと伸ばし、そのまま下へ、肩胛骨をなぞり、

「……ん」

広背筋、

「……は」

背中のかぼみ、

「……ふぁ」

「……ちよつと待て、この水着の下どうすんだ？ ホックタイプで、そのまま塗ると水着の下に日焼け止めを塗ることができない。ヒモとかだと塗らなくて良いんだろうが、これは結構な面積がありそうだ。水着の下は特に塗らなくても良いのか？ しかし少しずれたりしたら、そこだけ日焼けしそうだし……。うーん良く分からんな。……とりあえず、水着の下に手入れるしか無いか。ちよつと恥ずかしいが、しかたないか。水着の下にさつと手を入れ、塗つてやる。」

「……っ！」

真ん中から手を入れて、徐々に外側へ、

「……っ！！！」

脇腹に触れそうな所で手を抜いた。

「……っ！」

「はあ、最初は女の子の肌の柔らかさに緊張したが、中々どうして綺麗に塗ろうと集中してて、塗り始めると気にならないもんだな。」

と、野谷さんは顔を真っ赤にしてうつむいていた。

「どした？ ちゃんと塗れてなかった？」

「……大丈夫」

野谷さんは小さく顔を振るばかりだ。……水着の下は流石にまぶかったのかな。野谷さんってあんまりそういう事口に出さないから、内心では怒ってるのかもしれない。

「水着の中ってやらなくてもよかったのか？ごめん」

「こういうときは素直に謝るべきだよな。」

「……大丈夫……だから……びっくりしただけ」

「とりあえず怒ってはいないらしい。良かった。」

「ふふふ、上村さん、日焼け止め塗るの上手ですね。私もお願いしても？」

後ろで見ていた鬼谷さんが、そういつつ野谷さんの横に座る。

まあ野谷さんのをやった手前、鬼谷さんだけ恥ずかしがってできないってのもな。覚悟決めるか。

鬼谷さんは、綺麗な髪をまとめて前に回して、背中を露出させる。その仕草が女性らしすぎてときどきする。

とりあえず、鬼谷さんの順番で日焼け止めをぬる事にする。首筋から肩口へと広げて、肩胛骨へ。

「……中々くすぐったいですね」

「ぬお、すまん」

鬼谷さんは、肩胛骨へ日焼け止めを塗った時点で背中を少し背中をのけぞらせた。

「いえ、大丈夫です。続けてください」

「そうか」

鬼谷さんは、自分の反応にちょっと照れながら微笑んだ。

鬼谷さんの水着はヒモタイプなので、そのまま塗り上げる。これ
では自分で塗れるはずだ。

「私も、ひもじゃない方が良かったですかねえ」

と、鬼谷さんはちょっと残念そうであった。これ以上俺を辱めな
いでください。

「ねえーけいい〜」

「ん？・・・ぶっ」

野谷さん、鬼谷さんと続いたら後は山城さんである。お前もか、
と思いながら振り向いた先には、寝そべりながらビキニのひもを解
いて、山城さんが扇状的にこちらをさそっていた。何やってんだあ
んた！

「日焼け止めぬってー」

「ちょ！その格好違うから！普通サンオイル塗るときだから！！」

「へー、サンオイル塗るときならこうやって塗ってくれるのー？」

「いやいやいやいや！！」

使いどころ間違いすぎである。と、山城さんの後ろに、満面の笑
みで日焼け止めを持った志貴崎さんが。嫌な予感しかしない。

ポタポタポタッ

「ひゃああああー！！」

志貴崎さんは、山城さんの背中に勢いよく日焼け止めを投下。不

意打ちを食らった形となる山城さんが悲鳴を上げる。そしてそのまま志貴崎さんは、山城さんの横に腰を下ろし、山城さんの背中に落ちた日焼け止めを塗り広げる。

「ぎゃああああー!!」

まともに周辺状況が確認できない中で、よく分からないものが背中に落ちて、さらにそれが塗り広げられるのは相当な恐怖だろう。

「はっはー!どうだ」

「ちよ!? 椀!? やっ!そこおし……!!そこはぬんなー!!
にゃあああー!!」

すさまじい悲鳴である。志貴崎さんはそれを聞いても全く動じない。やっぱあんた凄いわ。

「んー?肩凝ってるな?どれ?」

「マツサージはじめんなー!やめれー!!」

志貴崎さんは当初の目的を忘れて、山城さんの肩をもみ始める。ああ、ばかばつかだ。何でこう、海に入る前なのにここまでバカ騒ぎに発展するんだ?この人達は。

「あれはあれで羨ましいですね」

「……私は嫌」

鬼谷さんのチャレンジ精神というか、この人もこの人で行動原理が良く分からなかったりするよな。

山城さんが、肩で息をしながら、志貴崎さんに砂を投げつける。

志貴崎さんは「どうした!？」とか言いながら海の方へ逃げていった。それを追いかけて山城さんも海へと走っていく。

そしてそんな二人を見て、野谷さんと鬼谷さんも海へ。

金城さんは、そんな俺たちの騒動を微笑しながら眺めて、椅子に座りながらのんびりさんしんをつま弾いていた。我関せずを貫くよ
うだ。

さて、俺も行こうかな、というところで金城さんが口を開いた。

「圭君は能力者じゃないんだって?」

「え?はい」

いつもの適当金城さんではなく、その顔は無表情で、言葉も綺麗な標準語だ。

「彼ら、どう思う?」

「あいつらですか?友達ですよ」

それを聞いた彼は、押し黙ってしまふ。
しばらくして、金城さんは口を開いた。

「俺は、仕事と割り切って彼らと付き合っている。友達にはなれない。この意味、わかるか?」

「.....はい」

金城さんと、俺たちの間にはつきりと見えるつながり、それは金だ。金城さんや、来るときに利用したジェット機の人達は、金を通して俺たちと接する。そこに友情や信頼なんて言葉は無い。

「あいつらが、その気になったら、俺はこの世にいられなくなる」

「それは・・・」
「俺は、あいつらが怖いよ。恐ろしい」

たかだか、沖縄を観光するガイドと、能力者ランク5。もしも、能力者達が少しでもその気になれば、金城さんは殺され、しかもその罪は問われない。それほどに、国にとって能力者というのは大事な存在だ。極端な話、国にとって大事な研究や実験に付き合いさえすれば、どんな事をしたって許されてしまう。

そんな存在が、自分の横に。

その存在を認めるのには、どうすれば良い？答えは簡単だ。関わらないようにするしか無い。じゃあ、関わるしかないなら？その答えが、金だ。

「けど、あいつらはそんな事しないですよ」
「わかってるよ。あいつらは良い奴だ。でも、ずっとそうとは限らない」
「・・・」

俺はここに来る前のキャシーさんのやりとりを思い出す。心と能力のバランスだったか。子供の心は、簡単に揺れてしまう。崩れてしまう。そんな時期を一人で歩んでいた彼ら。そんな中に突然出現した俺。その俺の存在が、国にとってどういった意味となるか？俺は、この時初めて自分の責任と、役割を知った気がした。

ならば、そう。俺は。

「お前はどうか？ずっと、友達でいられるか？」
「・・・はい」

「見返りが彼らとの友情ただ一つだとしても？」

「はい」

「一生彼らとすごす事になるんだ。そしてそれが短いか長いかわからない」

「はい」

俺は、彼らと歩もうと思った。

普通の生活に戻るとか、そんな事、できるわけがない。

だってこんなにも、こんなにも……。俺の中で彼らはこんなにも大きくなっているんだから。

そして、彼らと遊んだたったこれまでの数日間、今までの人生の中で、この数日に勝る『思い出』があつたか？

もう、戻れるわけないだろ？

俺はまだ、野谷さんからVRFPSの教えをちゃんと受けてないし、山城さんに服の借りがあつるし、他にも色々、知らないこと、沢山あるだろ？未練のこつてしかたない。些細な問題だが、金も借りたことになつてるしな。

「あいつら、自分たちには『青春』がなかったって、言つてたんですよ」

「……」

「高校生ですよ。バカですよ。それで皆集まったらいきなり『思い出作り』だって。」

それで、出会つて三日で沖縄ですよ。

遊び方、知らないんですよあいつら。生き急いで、本気出して、何もかもを短縮して、濃縮して。

俺たちもう、友達とかとっくに通りこしちゃつてるじゃんって。

もつと、ゆつくりでいいんじゃないかって思ったんですけど、あいつら、楽しそうなんですよ。そして、俺も楽しかった。いや、楽しいですよ。

あいつら、俺いないと皆勝手に暴走して。

今俺いなくなったら、またあいつら一人ぼっちになってしまっうんじゃないかって。自分勝手ですけど、そう思います。

・・・だから

あいつらと、青春つくりますよ。

それが、俺の答えだ。俺たちの思い出作り、これから色々やるうじゃないか。とことん付き合ってやるよ。

「そうか。俺が言うのもなんだが、あいつらのこと、ちゃんと見てやれよな」

「・・・はい」

「おかあさんみたいにな」

「それはもういいです」

しっかりと落ちつけなくていいよ。決心が揺らぐよ。

金城さんはいつもの顔に戻って、さんしんを弾き始めた。

チンサゲ
鳳仙花ぬ花や

チミサチ ス
爪先に染みてい

ウユ ケトラ
親ぬゆし事や

チム ス
肝に染みてい

ティン ムリフシ
天ぬ星々や

ユ ユ
読いば読まりゆい

親^{ウユ}ぬゆし事^{グトウ}や
読^ユみやならん

鳳仙花の花を、魔除けとして爪先に染めなさい。そして、親の言う事を心に染め上げ、守りなさい。

天の星々は、数えようとすれば数えられる。しかし、親の教えには数の限りなど無い。

沖繩に伝わる、優しい音色の教訓歌である。人からの教えを守り、心を育て、栄え、浮世を渡れ。

砂浜の向こうから、山城さんの声が聞こえる。俺を呼んでいるよ
うだ

「圭…！」

「おー！すぐいくよー…！」

遠目に見ると、志貴崎さんが、いやがる野谷さんを抱き上げて3
mほどぶっ飛ばしていた。まったく。目を離すとすぐこれだ。

五話 曇りが一番良い天気？

さて、美しい沖縄の海であるが、この人達はいつものようにバカ騒ぎの上にバカ騒ぎを上乘せした。

まず、志貴崎さんが意味不明なハッスルをしまして、俺らをどんだん打ち上げロケットよろしくぶっ飛ばしまくった。後ろから脇腹に手を突っ込まれたと思ったら、次の瞬間、空にいるのだ。むちゃくちゃ怖い恐怖体験であった。・・・チビツテナイヨ？

打ち上げロケットを体験して相当怖かったのか、マジ泣きした山城さんが、「椀以外耳をふさげ！」と叫び（軍曹か何かの演技なのか、俺たちは一斉に「サー！」のかけ声と共に耳を塞いでしまった）、人魚伝説『ローレライ』の演技を始めて、志貴崎さんを海に沈めた。

ローレライとは、スイスに古くから伝わる人魚伝説の一つで、もっとも有名な人魚の一人でもある。ローレライは、実らない恋に絶望し川に身を投げた乙女で、絶望のままに美しい水の精になった彼女の歌声は、人々を惑わし、舵を狂わせ、川底へと誘う。

そして、山城さんの歌声に誘われたかどうか分からないが、山城さんの周りに魚が魚群を作り出して凄まじい事に。

周囲の状況に気づき、山城さんが悲鳴を上げつつ女子高生の演技に戻ったところで、海底で覚醒したのか志貴崎さんが海上へと浮上してきた。

志貴崎さんの目の前には魚の群れ。半ば条件反射に魚を獲っては投げ、獲っては投げて砂浜に魚を打ち上げた。

それを見た野谷さんが、勝負魂に火をつけたのか参戦、やらないんじゃないのかよ魚獲り合戦へ。

しかし、山城さんは既にローレライの演技を止めていたので魚は一気に散開。勝負はドローゲーム扱いとなってしまった。

気を取り直して、次は定番のスイカ割り、と言うことで、スイカ割りを始めたのだが、皆の能力使用に触発されたのか、鬼谷さんが能力発動、スイカを一発で割りやがった。志貴崎さんが大人げないスネ方をするも、スイカを食べてすぐに機嫌を直した。餓鬼か。

スイカも食べたので、次はビーチボールでバレーのまねごとでもしようとなったが、ビーチボールの扱いに慣れてなかったのか、志貴崎さんが、一打目のトスをしようとしたところで、力加減を間違えて破裂させるというお約束をした。(力のコントロールできるんじゃないのかよ)

野谷さんが砂でお城を作り出し、かわいらしいなあとほんわかしてたら、どんどん規模がでくなり、外壁やら堀やら門やら、大変な大作になって、かわいらしいを通り超した造形物になりはてた。その後、その城を使って、志貴崎さんと野谷さんと、いつもちよつと二人の勝負を羨ましそうに眺めていた鬼谷さんが棒倒しで勝負し、なにげに鬼谷さんが勝ってた。

とまあ、さんざんにバカ騒ぎを続けまくるので、俺は突っ込み疲れて海の上でぷかぷか浮いて、精神の安定を図っている最中である。大きな浮き輪に、尻を入れて、どんぶらこどんぶらここという感じだ。海の上、遠くから聞こえる皆の笑い声と、雲に覆われた太陽からの熱と、海の冷たさ。あーこれだよこれ。俺の求めてた沖縄の海って、こういうのだよ。癒やされる。

しばらく砂浜からあまり離れないように気をつけつつ、ぷかぷか

浮いていると、野谷さんがこちらに向かって泳いできた。

「ん？どうしたんだ？野谷さん」

「泳いでないから、疲れて流されてるのかなと思って」

「あー、心配させたか、すまん。のんびり浮かんでみたかったんだ。きれいだろ？海。だから」

離れすぎないように注意はしていたつもりだが、野谷さんたちの方から見ると、俺が流されているように感じたらしい。ちなみに、基本運動しているときの野谷さんは、リミッターを付けているようだ。

野谷さんは、俺の浮き輪に腕を入れて休憩を始めた。どうやら泳ぐのに少し疲れたらしい。

「本当、周りが全部海……」

しばらくのんびり二人で海の流れに身を任せる。

そういえば、野谷さんと志貴崎さんって、何であんな良い勝負ができるんだろう。志貴崎さんって脳のリミッターが外れているのは野谷さんと一緒だけれど、筋肉が自由自在に動かせるだけだよな。聞いてみるか。

「志貴崎さんと野谷さんって、何であんな良い勝負になるんだ？志貴崎さんの能力って筋肉が自在に動かせるだけだよな。スピードの時の勝負とか、野谷さんの圧勝になりそうだが」

「それは私が脳の制限を、普通の人間の最大値くらいまでに抑えているから。椛は多分、飛びぬけて動体視力が良いんだと思う。……視力以外にも、椛は筋肉を操れて、筋肉も常人以上みたいだけど、

それだけだとあの量の食事と力の説明がつかない。もしかしたら筋肉の他に心臓や肝臓、胃とかは常人以上の強い物になってるかも」「何で心臓とか肝臓まで強い必要があるんだ？」

「あれだけ大量に食べても、すぐエネルギーにはなったりはしない。消化して運んで送り出さないと。それには最低胃と肝臓と心臓、あともしかしたら血も常人以上じゃないと、あの筋力と食事は維持できないと思う」

「……人間か？」

「……本人に聞くのが一番早いと思うけど」

「俺はやめとく」

「私も」

二人で考察してるとどんどん志貴崎さんの存在が、人間という枠から外れていく（そもそもスタート地点から、人外だが）ので、とりあえずこの考えは保留ということにした。そういえば、野谷さんの能力って、どういう感じで制御しているんだろうか。

ということで、話の流れで野谷さんの能力の詳しい解説をしてもらおう。

「私の脳は、目からの情報量をどれだけ制限するかのリミッターが付けられる」

野谷さんの説明によると、まず、目からの情報を読み取る。それを脳がどれだけの処理をするか。単純にいえば、フレーム数と、その情報解像度にそれぞれ制限をおくことができる。

動体視力と、視力にそのまま置き換えても大丈夫そうだ。

単純に、野谷さんはこのリミッターを外しているいつもの状態だと、この両方の要素がマックスになる。あたりがスローモーションになり、遠くのものごとこまでも認識できる。また、視界に移る全ての物も認識できる。その反動として、その情報を処理しきれない

脳によって、体の反応全般が著しく停滞を起こす。つまり反応が遅れる。

たとえば、一昔前の地球と月との通信タイムラグみたいなものだ。月にロボットを置いたとして、そのロボットを地球から操作しようとする、タイムラグが6秒程度発生していた。野谷さんは体の中でそれに似た状態が発生している。

そして、脳のリミッターを取り付け、脳に負荷がかからない程度にまで制限を付けると、上記の彼女の能力の性能が若干落ちる。この前ゲームセンターで、俺の手と野谷さんの手が重なっても、野谷さんが気がつかなかったのはここら辺に理由があるようだ。

この制限レベルで、たとえば志貴崎さんと野谷さんが『ソニック』で対戦すると、野谷さんが圧勝するようだ。あれより早くなるのか。・・・と思うが、野谷さんの体、つまり筋肉自体は常人レベルだ。あくまで高速で展開されるカード一つ一つを高速で認識、計算、処理に余裕ができるだけの差だ。

しかしその差は大きい。オセロ等の対戦ゲームでのお互いの思考猶予時間が、1秒と60秒に設定されてるようなイメージだ。一方は一秒の思考時間で打ち続けなければいけない。そして自分は60秒ゆっくり考えて落ち着いてプレイできる。野谷さんは、志貴崎さんと対戦しているとき、その差をできる限り埋めるようにリミッターを調整しているらしい。

だから対戦しているとき野谷さんは涼しげで、志貴崎さんは神経をすり減らしていたのだ。あの勝負の裏にこんなことがあったのか。

例えば、ゲームセンターでのホッケーの時も、志貴崎さんはある程度力を制限して戦っていたわけだしな。フェアプレイの精神というか、この二人は純粹に勝負をする事が楽しい人たちみたいだ。

また二人でぼけつと海を漂う。遠くから山城さんの叫び声が聞こ

えてくるが、おそらくまた志貴崎さんが要らん事をしているのだらう。あの山城さんの叫び声からして、まだ大丈夫なレベルだと判断気にしないことにする。

「私、圭達と出会えてよかった」

野谷さんが、突然そんなことをぼつりつぶやいた。

俺は照れくさくなって、

「まだ会って4日じゃないか」

と、自分の心にうそをついた。ほんとは俺も、皆と出会えてよかったと思ってるが、素直になれない。

「今はまだ4日かもしれないけど、……これからもずっと皆と一緒に、でしょ？」

照れて顔を少しだけ染めた野谷さんの瞳には、確かに確信の光があった。まっすぐな瞳。その瞳はこれからの日々と、これまでの日々と、今の俺達を全て見通す常人ならざる者の眼差し。

「そうだな。きつとそうなる」

俺は自然と野谷さんの頭をなでた。海の水を吸って、少し重くなった野谷さんの髪に手を絡める。

野谷さんは気持ちよさそうに目を瞑り、俺の手の感触と、海の波間にまどろんだ。二人で波に揺られて、これからもこのバカ騒ぎが続けばいいな、と願った。

……そろそろ山城さんの叫び声が、デッドラインに届きそう

だったので、俺達二人は砂浜へと向かって泳ぎだした。まったくのんびりさせてくれよ。

「あー遊んだー！」

山城さんが、敷布団に倒れこんだ。時刻8時である。沖縄の夏は、いつまでたっても暗くならない。誰も時計を確認しないので、6時くらいまで結局ノンストップでワーギヤーやってた。

ご飯を食べてからホテルに移動だと、眠くなって仕方がないので、今日はホテルの部屋でご飯を食べて、そのままもう寝てしまおうという志貴崎さん案に乗る形となり、俺達は海からそのままホテルへ直行。皆で交代でお風呂（せっかくのでかい風呂を、半分に分けるのはもったいないので、混浴仕様のまま、男女交代で入る事にした）に入って、のんびりくつろいでいるところだ。

夕食を食べるにはいい時間なので、志貴崎さんが夕食の指示を出す。

その間に、野谷さんが鞆から8面体カメラを取り出した。静かにうる駆動音。

「お帰りなさい、皆さん」

irisさんが浮かび上がる。

海だということ、今日はirisさんは連れて行けなかったのだ。このカメラ、見た目的には防水っぽいのであるが、irisさん曰く「私の本能が海に近づくと事をゆるしません」らしい。どんな本能だよ。

「ただいまー」

山城さんはもう完全にふとんに寝転がってだらけモードである。浴衣が着崩れそうになっているんだが、大丈夫だろうか。

「海はどうでしたか」

「きれいだったよー」

「キジムナーはいましたか？」

「キジムナー？」

「はい。体中から血を流しながら、魚ー魚ーと言いながら徘徊する全長6mの大きな」

「ちよつと待つて、なんだそれどこ情報だよ。絶対違うからねそれ」

キジムナーが何なのかまったくわからないが、その情報は絶対なにかの間違いだと想う。

「ふむ、海は楽しかったぞ。棒倒しではまさか鬼谷に負けるとは」

「ふふふ、砂の動きと、棒の傾き、そして砂にかかる荷重を細かく計算しましたからね」

「ぬ、まさか能力を使ったな」

静かに微笑むばかりの鬼谷さん。この人、すごい無駄な事に能力使ってやがる！しかし、電磁波を読み取ってそれを細かく計算つて、もしかしてすごい離れ業をやったんじゃないのか、たかが棒倒しに。この人も意外と大人気ない・・・いや、これまでも思い起こせばその片鱗は見せていたような気がするな。

皆であれこれ今日の出来事をirisさんに報告している間に、結構な時間がたっていたようで、料理が運ばれてくる。

エビチリ、ゴーヤーチャンプルー、ラフテー、オムライス、ステーキ……まったくもってまとまりがない。志貴崎さん自分が食いたいやつを片っ端から頼みやがったな。

「目につるさい食卓になったな」

「……すごいカラフルだねー」

赤に黄色に緑に茶色に……何色でも取り揃えていますって
いくくらいに色であふれている。

「まあ、美味ければそれでいいじゃないか」

そういいながら、志貴崎さんは皆にオレンジジュースを配った。
……においを嗅ぐと、どうやらオレンジではないようだ。何のにおいだろうか。黒いつぶつぶも浮いている。

「これ何だ？」

「パッションフルーツといってな、南国の果物だな。酸味があつて美味いぞ」

聞いたこともない名前の果物だ。皆もこの飲み物に興味しんしん
のようだ。

いい加減腹も減ってきたし、さっさとこのカラフルなフルコース
を食べる事にしよう。

「まあ、美味しいならいいか。それじゃ食べるか」

「おー」

「いただきますー」

皆それぞれ好き勝手に皿を取って食べる。

パッションフルーツのジュースは、果物を潰して果汁を出した生ジュースのようで、とてもおいしかった。体もぼかぼかしてくる気がする。なんとも沖縄らしいジュースだ。

「おいしー！ 椀これまだあるのー？」

「うむ。いろいろあるぞ。マンゴーとかどうだ？」

「それも絞ったやつなの？ 豪華ー！」

山城さんは大変気に入ったらしく、いろんなジュースを小さなコップに分けて飲み比べをはじめた。

皆もそれに参加し、色々なジュースを飲み比べたり、ご飯を食べたり、なかなか騒がしい夕食となった。

「……圭い」

「上村さくん、えへへ」

「ちよっ！！ 二人とも！！ どうしたんだよ」

どんな流れでこうなったのかわからないが、野谷さんと鬼谷さんが俺に絡み付いてきていた。

野谷さんも、鬼谷さんも、心なしか目が座り、頬を赤らめている。

左腕に野谷さんが絡みつき、右腕に鬼谷さんが絡み付いてきている。二人の体温が浴衣越しに手を伝ってくる。お風呂で落としかれなかった海のおいと、おそろいのシャンプーの匂いにまぎれて、女の子の香りが俺の鼻腔をくすぐり止まない。

さっきまで皆でご飯食べたリジュースを飲んでいただけなのに。

……ジュース？

そういえば先ほどから、なんとなく脳の奥がぼんやりしている気がする。・・・もしかしてこれってお酒じゃ？

「志貴崎さん！これお酒！！お酒でしょこれ！！」

「んん？そつだが？」

さも当然のように言ってくれる。

「ちょー！！俺達学生だろうが！！てかジュースじゃねえのかこれ！！」

「誰がジュースだと言ったよ。これは美味いぞとしか俺は言っていないぞ」

詐欺だー！！

「ふふん。修学旅行といえば、ちょっと酔がって背伸びをしたがるものだろう？」

「うわー！こつなつたらもう志貴崎さんは止まらない！！こつなつたらirisさんにとめてもらつしかない！！」

「irisさん助けてー！」

「不良児の飲酒は法律で禁止されていませんが」

「不良児でもだめだから！！酒のんじゃだめだからー！！」

悪い方向にirisさんは融通が利きすぎる！！AIじゃないだるこの人！！

「上村さん私達放っておいてしゃべるなんてだめですよ」

鬼谷さんが俺の顔を、両手でがっちりとはさみ強引に向きを変えさせられる。そこには鬼谷さんのアップが。化粧は落としているのだろつが、銀色の繭と睫毛が揺れて、俺の目をじっとみつめる。鬼谷さんの少しアルコールを含んだ吐息が、顔にかかる。
一気に心拍数があがる。

「……圭、……熱いの」

反対側から野谷さんが、胸を俺の手に押し付けながら、体重をかけてくる。やめてー！！やめてくれー！！

「あら。胸、好きなんですか？」

いたずらを思いついたような顔をしながら、鬼谷さんが、腕に力を入れて自分の胸を押し付けてくる。浴衣がはだけ、露出した部分と俺の手が直にふれあい、鬼谷さんの熱い体温が伝わってくる。

というか俺の考え読んでるだろこの人！！酒のせいで自制聞かないのか！！素数だ。素数を数えるんだ！！

「ふふ、動揺してますねー」

「……圭ー」

ついに野谷さんが俺のひざの上に倒れこんで寝だした。ぎゃー！！顔の位置！！野谷さん顔の位置それ危険な場所だよー！！

「助けて山城さーん！」

ふと、山城さんの存在を思い出して助けを求める。そういえば何だかさつきから静かだった。

「……何ー？」
「……いや」

人形が居る。と思った。

山城さんは、口調こそいつもの女子高生の演技をしている時のそれだったが、その顔には、一切の表情すら張り付いていなかった。無表情をも通り越した何か。

人形の目と焦点が決して合わないように、山城さんの目線も、どこを見ているのかわからなかった。野谷さんのように全てが見えているわけではなく、山城さんが『どこを見ているのかわからない』。人間に限りなく近い何か。まるでロボット、精巧な人形。

『不気味の谷現象』という言葉がある。ロボットがどんどん人間に近づき、リアルになればなるほど、人はその外見の小さな違和感に強い嫌悪感と不自然さを感じるという。

山城さんの顔はまさにそれだ。と思った。きっと、これが彼女が俺達の前ですつと演技を続ける理由なのだ。完全な人間に近い何か、動き、喋り、物を食べる。それは、不気味、という以外の何物でもない。しかし、それこそが彼女の……。

『愛されない恋人』、理解されない本質。彼女の本当の顔。

「どうしたのー？」

「いや、なんでもないよ」

きつと、今知るべきことじゃない。

「山城さんはこれ平気なの？」

「んーこれ？大丈夫大丈夫。ちよつともやってするだけー」

おそらく、お酒のせいで能力が上手く働いていないのだろう。

山城さんが、自分で決めたタイミングで、俺達を本当に信頼して、信用して、自分からその『素顔』を晒して話してくれる時がきつと来る。来ると良いなと思った。だから、今見た事は『無かった事』にしよう。

まあ、なんとなく動きが散漫な気がするので、お酒は確実によっぱらっている気がするな。

「これ、酒だからあんまり飲みすぎないようにしろよ」

「これ、お酒なんだー。椀でしょー」

「ふふん。美味いだろ？これも美味いぞ」

そういつつ、志貴崎さんは白い液体の入ったグラスを山城さんに勧めている。というかそれ以上すすめんなよ！！

止めに入ろうとしたところで、鬼谷さんがまた倒れ掛かってきた。

ぎゃー！忘れてたー！！これももうどうしょー！！！！

「私の事忘れるなんてひどいじゃないですかー」

「わー！離れて！というか考え読まないでー！！！」

もうこれはお酒を飲んで飲んだ勢いで寝るしかー！！！！

間話 不良児達の円卓（前書き）

B LとかG Lチエックつけたほうがいいのでしょうか、どうぞじょうか。ご意見あれば教えてください。

間話 不良児達の円卓

「椀、あんた謀ったでしょー」

上村達が酒に負けて寝てしまったので、志貴崎、山城、irisはテラスへと席を移した。

お酒によって、演技が上手にできなくなった彼女は、口調こそ女子高生の演技の時のままではあるが、その顔は、何も演技をしていないときの、素の状態となっている。何者にも違和感を与える完璧な人形の顔。無表情をも乗り越した何かが彼女の顔にはあった。

「ふふん。何の事かな」

志貴崎はあくまで白を切る。

「irisさんが何か言ったんでしょー」

「私は、椀が『ミキとケンカばかりになるので仲良くなるにはどうすればいいか』と悩んでいたので、ネットから検索をして『酒の席で口説く』という結果が出たので、教えましたが」

「はぁ……」

山城さんは頭を抱える。

「過ぎた事はしかたないだろう。まあ飲め」

志貴崎は、山城にずいつと泡盛の入ったグラスを渡す。

「あんたがいうな！まったくもう……ブファー！！」

若干あきらめの入った口調で、山城は薦められるまま泡盛を一口飲む、が、45度のアルコールは彼女ののどを簡単に焼き、胃に強烈な一撃を加える。

「げほっ・・・これ何、すごい味なんだけど」

「泡盛だ。美味いだろっ？」

「強すぎるっばー！私はこれでいいよ・・・」

そう言いながら山城は自分のマンゴーサワーを取る。直絞りの真正銘高級取れたてマンゴーは、アルコールを完全に隠し、飲んでもただのマンゴージュースにしか感じられない。完全に『してやられた』形となってしまうた。

「まったく。私のこの顔は、もうちょっと私の心の準備をしてから見せようと思ってたのに」

「それで、大学生、社会人、主婦、老人の演技とどんどん答えを先延ばしにでもするつもりだったのか？」

「・・・」

「それで、演技をしたまま、その顔を見せないまま、皆とずっとやっていけると？」

「・・・」

正直、凶星であった。山城には自分からこの顔を見せる事は、きつとなかっただろう、いや、絶対になかっただろう。遅かれ早かれ、志貴崎の謀にはまる運命であったのだ。・・・彼らと一緒に居る以上、いつかは見せないといけない顔であった。・・・それでも。

「圭、私の顔見て気持ち悪いって思ったに決まってる」

山城は、先ほどの上村の反応を思い出していた。絶対に彼女の顔

には気づいていた。それでも、精一杯いつもの口調をしようと努力していたが、普段から演技をしている彼女にとって、他人の演技を見破るのはたやすい。

ほかの皆と同じ。嫌悪、違和感、不快感を感じる表情。皆から、その反応が返ってくる事が、堪らなく怖かった。初めての友達だから、能力を晒しても笑ってくれる、友達だったから。

圭、いや、皆からはあの目を向けられたくない。

「上村が、そんな小さい男に見えるのか？」

「だって！まだ四日しか経ってないし！わかるわけないよ！」

「本当にそう思ってるのか？」

「う……………」

山城は思わずたじろいだ。志貴崎は完全に怒っていた。山城の経験上、この男は常に自然体で、器だけはどこまでも広い男であると感じていた。実際、今現在、素の顔の彼女を目の前にしていても、なんとも思っていないようだった。

しかし、そんな彼の顔に浮かんでいる表情。純粹な怒り。友を見下された事に対する、ただそれだけに向けられるまっすぐで強い感情。

「今まで一人だった俺達をまとめて、好き勝手やつても怒らず、笑い、それどころか肯定し、答えを示して、導き、こんな所までついてきてくれたあいつが、お前のその顔を見ただけで、本当にお前を嫌うと？そう思うのか？」

「……………」

「小さい。小さいな山城。お前は」

「……………」

こんな小さな事で？と志貴崎の顔が言っていた。

昨日の夜、そして、海で山城は冗談半分とはいえ、上村に能力を使用していた。彼・・・いや、彼らなら笑って許してくれると思っただ。何でだろう。いまさらながら思う。何で私は圭を含め、皆をここまで信頼していたのだろうか、と。

そして気づく。志貴崎の言葉によって。

上村はいつだって皆を導いていた。積極的なわけではなく、常に皆の案を最優先にしてくれて、それでもいつの間にか皆上村の後についていった。不思議な力が、彼には確かにあった。

だから山城は、安心して暴走する事ができた。安心して能力を使うことができた。危ないラインになったら、上村が止めてくれるという安心感がそこにはあった。

「私は小さい・・・」

「そうだ。小さいな。お前は」

ぬつつと志貴崎の腕が伸び、山城の頭に乗せられた。そのまま優しくなでられる。

「だって、圭は私の事を・・・」

「上村の事だから、山城が直接言ってくるまで、見なかった事にもするつもりだったんだろう。だがあいつ、演技下手そうだからな」

「・・・うん、ばればれだった」

確かに、彼らしいと、山城は理由も特になく、そう思った。上村圭という男は、そういう男だと、確かな信頼がそこにはあった。

「野谷も鬼谷も、お前の顔を見ても、大丈夫だろう」

「・・・そうかな」

「ふふん。きつとそうさ」

今日の二人は、酒を飲んでべろんべろんの状態であった。多分山城の顔は見ていないだろう。皆にこの顔を晒せる日が来る……来るのだろうか。

「もう少し、考えさせて」

「お前の問題だからな」

「……うん」

しばらく黙って酒を飲む。空へと上る星々は、残念ながら軍基地の明かりによってそのほとんどを見ることはかなわない。赤い群の光に照らされた夜の雲達が、ゆっくりと流れ、どこかへと向かって歩いていく。

「さつきさ、主婦の演技とか言ってたけどさー」

「うん？」

「私が、結婚できるわけないじゃない」

「能力者は幸せになれないって話か？」

能力者は幸せになれない。「人」とは違うために。違う体、違う心、違う命、違う中身。どこまでも分かり合えない。そのズレはどんどん大きくなり、歪んでゆがみ、抜けて切れる。

それは人と能力者だろうが、能力者同士だろうが、関係ない。

違うという事は、不幸という事。

「上村がいるじゃないか」

「圭が私を好きになってくれても……私が圭に恋愛感情を持ってない」

上村が好意を寄せてくれるなら、それは嬉しいと、山城は思う。しかし、山城は人へ恋愛感情を抱かない。いや、『人間』を恋愛対象と見れない。それは犬が猫に恋愛感情を抱かないように。馬と鳥に子供ができないように。そこに、幸せなんてあるわけない。もし、彼が愛してくれるならば、自分の体なんて好きにしてみたら構わないと思うが、多分上村 圭という男は、それを望むような人間ではない。と山城は思った。

「別に恋愛対象に見なくてもいいじゃないか」

「……けど寄り添うってそういう事でしょ？ エッチ沢山して、好き合って、体くっつけあって、子供作って……」

「意外とやってみると楽しいものかもしれんぞ」

「それ以上は止めて。圭に失礼だよ」

「……そうだな」

志貴崎は素直に引き下がった。

しばらく志貴崎は空を見て、酒を楽しんでいる風であった。そして、唐突に口を開く。

「恋愛しなくても、愛せるだろう？」

「は？」

「俺達5人で家を建ててそこに住むというのはどうだ？ きっと楽しいぞ」

「……呆れた。本気？」

「本気だな。俺の理想の目的地点はそこだ。そのためにどんな努力も惜しまない」

上村、野谷、鬼谷、山城、そして自分。志貴崎の理想の関係。それはお互いがお互いを愛し、共に生き、暮らす事。性なんて些細な

問題だ。

愛した異性と二人でしか暮らしてはいけない。そんな一般常識、志貴崎には関係なかった。愛しているのならば、一人でも二人でも三人でも何人でも、果ては人種も種族も異星生物も関係ないではないか。性別なんて、彼にとってそれこそ些細すぎて気づかずに踏み潰してしまえる程度の問題だった。

「……はあ。もういいよ。けど、ちょっと急ぎすぎじゃない？」「今回はちよつと仕方がなかった。上村の事でちよつとな、あとお前の事もあつたしな」

「私の事？」

「これでもう後戻りできないだろ？」

「……本当、呆れた。けど次からはもうちよつと余裕持つてやりなよー」

「ああ」

志貴崎は静かに笑うだけである。山城はため息をついて立ち上がった。

「もう私は寝るよ。椀はどうする？」

「俺はもう少し空を見てるよ」

「おやすみなさい、ミキ」

「おやすみ、irisさん」

テラスから室内に戻るとき、山城は立ち止まって志貴崎の背中に声をかけた。

「……椀のその、一緒に暮らすって奴」

「ん？」

「私は賛成だから」

「ふふん。そうか」

山城は心なしか照れながら部屋へと戻っていった。テラスにはもう志貴崎とirisしかいない。

しばらく、時間を忘れたように志貴崎は空を眺めていた。どれくらい時間が経ったのだろうか、志貴崎は口を開く。

「山城は、俺のことを許してくれたと思うか？」

「どうでしょうね。明日仕返ししてくれるかもしれませんが」

「それは恐ろしいな」

口ではそんな事を言いながら、志貴崎は心底嬉しそうに酒を一気飲みする。

「ところで、先ほどの話ですが」

「うん？」

「本当に5人で暮らしていけると？」

「ふふん。せつかく理解しあえる仲間ができたんだ。行けるところまで行くのではないか」

ずっと一緒にバカやって、遊んで、騒いで。それは世間一般で言う愛し合うとか、好き合うとかとは、明らかに違うかもしれない。

だが、志貴崎は思う。お互いに信頼しあい、頼り、頼られ、全てを任せられる相手が居れば、それは愛と何ら変わらないのではないかと。

そのために、まず皆の中心になる上村が必要であった。学園という特殊な場所に居る時点で、上村にはかなり早い段階で立ち振る舞いを迫られる、もしくは決めなければいけない時点が来るはずであった。

一日目、二日目と、彼と彼女達の反応を見ていた志貴崎は、さらに親交を強制的に深めるために、今回の沖縄行きを計画。主に上村の決意を固めるのが目的であった。

その目的は一日目の時点で達成される事となる。彼の言葉を引用するなら『貸してくれ』だった。

沖縄に来るためのチャータージェット機、一時間当たり160万円、スイートルーム一泊65万円。その他、豪華な食事や金城の案内など、単純に上村一人にのしかかるわけではないが、これからも続く沖縄旅行の事を考えると、彼が志貴崎達から借りると事なる金額は莫大な額となるだろう。

それこそ、簡単に払える払えないの話には収まらないレベルで。もちろん、志貴崎達は誰一人その借金を返してもらおうとは思っていないだろうし、金を出されても突っぱねるだろう。そして、上村もおそらく全てを払う気はない。・・・いや、払える気がしないと云った方が良かったらどうか。

つまり、あれは間違いなく、自覚症状の有る無しにかかわらず、彼が志貴崎達と一生歩んでいく覚悟を決めた瞬間であった。

一安心した志貴崎であったが、その日のうちに山城が上村に能力を使った。これは志貴崎にとって嬉しい誤算であった。志貴崎の中で、山城からどう素面を引き出すかが一番の問題であったからだ。

能力を上村・・・無能力者に使用する。それは少なからずここ数日で山城が上村を信頼している事に他ならなかったのだから。

そして、それは今日叶った。

少し強引すぎる気は自分でもしたが、結果に志貴崎は満足していた。あとは山城自身の問題だし、彼女の心の問題にこれ以上ちよっかいを出す気はない。

もうあとは、純粹に沖縄旅行を楽しんで遊びに遊ぶつもりである。

「彼ら4人を愛していますか？」

「一般的な意味でか？」
「……貴方の中の常識で」

気になる言い回しだが、それならば志貴崎は確信を持って答える
しかない。

「ああ。上村も、野谷の、鬼谷も、山城も。全員等しく愛している。
そんな事を聞いて、どうしたんだ？irisさん」

「貪欲ですね、椀」

「ふふん、目に入る物全てがほしくて仕方がない性質でな」

「……」

「……？どうした？」

irisはしばし沈黙する。

しばらく返答が帰ってこないと思った志貴崎は、二本目の泡盛の
蓋を開けた。

「そこに、私は入っていないのですか？」

突然そんな事をぼつりつつぶやいた。

志貴崎はふきだした。

「ふは！すまん。irisさんを入れてなかったな。面と向かって
言う事ではないだろう？それに、野谷とirisさんはいつも一緒
じゃないか」

言うまでもない。

「そうですね。それでは、どれくらい愛していますか？」

「ふむ。難しい質問だな。うーん」

どれくらい、と聞かれると、なんとも答えに困るものだ。

「そうだな。チョコレート20キロ分くらいだな」

「なるほど。とても甘そうですね」

「そして重いぞ?」

「確かに、そうです」

志貴崎はirisの反応が心底たのしいというように、笑いながら酒を飲む。

「しかし、irisさんは意外と嫉妬深いな。嫉妬深い女は嫌われると、何かで言っていたぞ?」

「何でも手に入れようとする男は、女に嫉妬を抱かせる物らしいですよ?」

「なるほど。違くない」

「嫉妬深い女は、嫌いですか?」

「irisさんなら、気にならないな」

山城がおいて行ったマンゴーサワーに、志貴崎は泡盛を混ぜて飲んでみる。おお、これはいける。

「・・・そうですか。それでは一つお願いが」

「何だ?」

「私の事はどうか、『iris』と呼んでください」

「?いつもirisさんとよ・・・ああ」

志貴崎はにやっと笑う。時刻はそろそろ深夜の3時を回ろうとしていた。

「そろそろ俺は寝ようと思うが、『iris』はどうする？」

「そうですね、できれば部屋の中に入れてもらえれば助かります」

「ふふん。了解した。iris」

志貴崎は、8面体カメラを手に取り、部屋の中に入った。

さて、今日はどこにいこうか。楽しい一日になればいいが。

六話 お静かに願います？

チリリリリリリリリリ

今日もまた、8時に設定したタイマーが俺の脳を揺さぶる。

ぼんやりと脳が覚醒してきて、昨日の大騒ぎを、だんだんと思いついてきた。何で海で泳いだりご飯を食べるだけで、あれだけ大騒ぎになるのだろうか。

女性陣に酒は厳禁だな。

鬼谷さんと山城さんは能力を制御できなくなるようだ。そして野谷さんは速攻で泥酔するらしい。酒を飲んだ野谷さんはあらゆる意味で危険すぎる！

そして、昨日の影響か何だか体が妙に重い。

ゆっくりと目を開ける。どうやら布団が掛けられているようだが、敷き布団では無い。・・・ソファの上だろうか。これは。

リクライニング式になっており、シングルベッドか、それを一回り大きくしたくらいに大きい。

恐らく、昨日お酒の勢いでその場で寝てしまって、山城さんか志貴崎さんがソファを倒してくれたようだ。あの二人お酒強そうだったもんな。

・・・志貴崎さんがもしお酒に弱かったらどうなっていたんだろうか、と一瞬想像して体中に寒気が走った。志貴崎さんが酒に強く良かった！

・・・とりあえず起きるか。

そう思って、ゆっくりと身を起こすそうとするも、何かが俺の体の上に乗っていて、起き上がることができない。どうやら体が重いのは酒の影響では無く、単純に俺の体の上に何かが乗っかっているだけらしい。

すっぽりと布団に入っていて、何が俺の体の上に乗っているのかわからず、何も考えないで布団をめくってしまった。

そこには熟睡する野谷さんと鬼谷さんが。

。。。。

。。。。

。。。

え？

野谷さんは、俺に寄り添うように体をびったりとくっつけ、上半身だけ俺の体の上に乗せる形で眠っていた。うつぶせになっていて顔は見えないが、俺のはだけた胸元に、彼女の体温と吐息を感じる。鬼谷さんは、まさに腕枕状態。銀髪が流れ、野谷さんの髪と所々混じってしまっている。浴衣がはだけて、胸の谷間がはつきりと見えてしまい、その大きな胸が押しつけられて、色々と危ないです。

「ちょー！！何これどういう状況！？起き上がれないし！！起きて！！二人とも起きてー！！」

もう半ば狂乱状態だ。飛び退こうにも、二人ががっちり俺の体を固定しているため、どうにもならない。布団の中にこもっていたのだろう。女の子特有の香りが一気に舞って、俺の鼻腔をくすぐる。

ぎゃー！！落ち着け。落ち着け。体の血の巡りを意識するんだ。そう！素数！！素数を考えるんだ！！
そう無！！無だ！！いつものスルースキルを発動するのは今だ！
全てのMPを消費する勢いで発動するんだ！！

ティロン

MPが足りない

上村 圭は かしこさ が足りない

何と言うことだ。俺には圧倒的にレベルが足りないっ！！

くそ、こんな事になるんだったら、近所の猫を倒して経験値を積んでおくべきだった。いや、猫を虐めるのは良くないな。そうだ！Gだ！黒くてかてかてかしてぬるぬるしてそうなあいつなら、きつと経験値の1や2くらいあるはず！

そうだ！！ロードすれば！！オートセーブを頼りに昨日に戻るのでは！？ええい、リセットボタンはどれだ！

くそ！！リセットボタンが見つからない！！

スタートとセレクトとRとLを同時押し。くそ、だめか。それじゃあ、しいたけボタンは！？くそ！！だめだ！！リセットコマンドはどれだ！！

これは『非常識』これは『非常識』これは『非常識』これは『非常識』これは『非常識』これは『非常識』

落ち着け。まずは開発者コマンドをオンにして、コンソールを表示、exit game 「jinside」を入力すれば……。

「うっんー」

鬼谷さんが、タイマーの音に不快そうに眉を寄せて、もぞもぞ動き出す。具体的には、さらに体を俺に押しつけて、顔を埋めた。

脳みそに電気が走り、目の前が真っ白になるのを実感する。

おお ぼんじんよ しんでしまつとは なさけない

鬼谷さん。それは刺激が強すぎます

「何やってるんだ。上村」

俺のじたばたを眺めていた志貴崎さんが、あきれたように声をかけてきた。

「この二人を起こしてくれ」

これ以上二人に密着されて、さらにもぞもぞ動かれでもしたら、俺の理性という名のリミッターが解放されてしまふ。第二、第三、の封印を突破して、はてはヘル・ゲートすらも突き抜けて俺は赤ずきんちゃんを食べるオオカミのごとく
何だよ。ヘル・ゲートって。

「ふむ。相変わらず朝に弱いな。こいつらは。ほら、起きろ」

志貴崎さんはまず、野谷さんの浴衣の襟を持ち上げる。上半身だけ浮かされた形となり、首を持ち上げられたような猫のような状態になっている。そのまま左右にぶらぶらゆすられる野谷さん。

志貴崎さん、もうちょい起こし方ってものが。

「……う、……うう？……？？」

揺すられながら起きた野谷さんは、自分が左右に揺すられ、しかも上に引つ張られている状況に困惑している様子だ。そりゃそうだよな。

志貴崎さんは、野谷さんが起きたのを確認すると、手を離れた。また俺の胸の上に落ちてくる野谷さん。

「……圭？」

「……おはよう。どいてくれると助かる」

「……え？……ええ？」

俺の上に乗っている状況に困惑しながらも、慌てて野谷さんほどいてくれた。はあ。良かった。これ以上密着してたら本当にどうにかなりそうだった。

「……どうして？」

野谷さんは完全に昨日の記憶が抜け落ちてしまっているようだ。

とりあえず野谷さんは置いておいて、次は鬼谷さんである。野谷さんがどいてくれたので、ゆっくりと体を起こす。

体を起こしながら、静かに鬼谷さんの頭を、腕から降ろす。

そして俺はようやく起き上がることができたのだった。

鬼谷さんをこのまま寝かせても仕方ないので、昨日の要領で肩を揺する。

昨日は髪を枕の上に乗上げていたが、酒を飲んで寝たせいか、今日は髪が暴れ放題となっていて、俺の揺する手にも彼女の髪が絡みつき、さらさらと流れる。

「鬼谷さん起きてー」

「……やあー」

「やー」ってかわいいなおい。酒のせいで、すっかり熟睡して幼児化でもしてるのか。

「朝だよ」

「……ううん？……」

よつやく鬼谷さんが起き出し、昨日と同様ぼーっとしている。しばらくはまともな反応はできないだろう。

その間に、未だ疑問顔の野谷さんに、昨日の説明をする事にする。

「昨日、志貴崎さんが出したジュース、お酒だったんだよ」

「……お酒」

「それで、野谷さん酔っ払って、俺の上で寝ちゃったんだよ」

「……そう、……ごめん」

「いやー、うん。大丈夫大丈夫」

野谷さんは、昨日の事を必死に思い出そうとして、眉をひそめている。異性と添い寝してしまったことには特に何とも思っていないようだ。

もしかして、ぎゃーぎゃー騒いで赤面嬉し恥ずかしやるのって、俺だけなのだろうか。

「……おはようございます」

まだ目が据わっているが、意識がはつきりしてきたようだ。浴衣がはだけて、心ここにあらずな感じが、なんとも扇状的に見えて仕方が無い。

「おはよう。二人とも、お酒の匂いがしてるから、お風呂入ってきた方がよいよ」

「……ん」

「……はい」

もそもそと、二人は脱衣所の方へと向かっていった。

「両手に花だねえ」

見ると、山城さんが布団の上であぐらをかいてにやにや笑っていた。女の子があぐらつて……

今は女子高生の演技になっている。どうやらお酒の影響はもうないようだ。よかった。

「起きてるんだったら助けてよ」

「やだよ。起きたら女の子が添い寝!!ってなんかこーらぶこめつぽいじゃん？」

てへぺろ(・>・)とかかわいい顔になっているが、あぐらをしているのには変わらない。大変シユールな光景である。

「明日は私も混ざろっかなー」

「やめて!俺のオオカミが!!」

「おおかみ〜?」

「……」

意地悪な顔で笑う山城さん。にやにやと、しばらく楽しそうにしていたが、ふと真顔に戻る。

「昨日の私の顔さ」
「ん？」

その顔は、真剣で、何か思い詰めている風でもあった。

「もう少し、時間ちょうだい」

思い詰めているようにも、泣き出しそうにも、すがっているようにも見えた。きつと、昨日の顔は、山城さんの一番見られたくない場所。それを晒すのには、大変な勇気と、覚悟が必要だ。

それを彼女は、俺にいつか話してくれると言っているのだ。

「しゃべりたくなかったらー」

「うん。知って欲しい。けど、もう少しだけ・・・」

「・・・もし山城さんが、『何者』であつても、俺、山城さんと、友達で居るから」

「うん」

山城さんは、そう言って、少しだけ目に涙を浮かべていた。

きつと、あの顔をさらして、何度も何度も、色んな別れを経験したのだろう。しかし、俺たちは『能力を晒しても大丈夫な友』を求めて集まった。

山城さんの素顔が、生い立ちが、人生が、どう言ったものであるかと、俺は・・・いや、俺たちは受け入れて、それでも笑い合える仲にならないと、いけないんだ。

「ふふん。何とも『青春』らしいじゃないか」

「友情、という物ですね」

「昔の漫画で見たが、河原で殴り合って親交を深めるらしいぞ」

「なるほど。『言葉にできない感情』を表現するのに、そういった

手法を用いるのですね」

「きつと、お互いを良かれ悪かれ特別な相手と認めて、殴り合い、相手の本質が理解できるのだろう」

「複雑極まり無いプロセスですね。『人間』とは、とても入り組んだ精神構造をしていると再認識しました」

「本人達は単純な感情の流れなんだろう。周りから見ていると、それは奇怪にしか見えない」

「なるほど。流石椋ですね」

志貴崎さんは、俺たちのやりとりを見てirisさんと勝手に盛り上がってる。本当仲いいなあこの二人。

「私もお風呂はいつちやおうかなー」

もういつものテンションに戻った山城さんは、すっと立ち上がり、脱衣所へと消えていった。

それを見送った俺は、ソファに座り直り、志貴崎さんとirisさんと向かい合う。

「・・・何で酒なんか出したんだ？」

「美味しい酒が見つかったな。美味かっただろう？」

「・・・おいしかったけどさ・・・。はあ」

この人は何か考えてやってるのか、何も考えていないのか本当に良く分からないな。・・・気にするだけ頭が痛くなるだけなような気がする。

「あんまり学生から外れたような事するなよ？」

「了解した」

二カツと良い笑顔をする志貴崎さん。この筋肉め。

「今日はどうするんだ？」

「そうだな。あとは喫茶店と、アクアリウム・・・水族館だな」

「は？・・・あ」

志貴崎さんの言葉に、しばらくして合点がいった。そうだ。この旅行の一番最初の目的。

俺はアクアリウム。

山城さんはプール。

鬼谷さんはカフェ。

野谷さんは温泉。

志貴崎さんは、それを一つ一つ忠実にクリアしていこうとしているのだ。なんともまあ、律儀というか、なんとというか。俺たちの中で、一番まじめなのは、この人かも知れないな。課程はどうであれ。

「じゃあとりあえず水族館だな。確か近くにあつたろ」

「そうだな。この県唯一の水族館だ」

志貴崎さんは、これから向かう事になる水族館に思いをはせて、にやりと笑った。

今日の天気は曇一つも無い晴れ。

どうやら、日焼け止めと日光対策を万全にした方が良さそうだ。

六話 お静かに願います？（前書き）

まとめちゃんお

六話 お静かに願います？

「ここが沖縄唯一の水族館のある公園『海洋博公園』さー」
「ひろーい」

そんな訳で、俺たちはこの県唯一の水族館を内包する、国立公園へとやってきた。

俺たちの宿泊するホテルから数十分。海沿いに広大な敷地を持つ公園に俺たちは来ていた。

1970年頃に運営を開始されたこの公園は、それから2000年経った今も、何度かの改装や面積拡大を経て今なお沖縄最大の観光施設として機能している。

その広大な面積の中に、植物園、水族館、郷土資料館、プラネタリウム、ビーチ、博物館、琉球時代や三百年前の沖縄の村をそのまま再現した郷土村なんてものもある。

正門をくぐると、いきなり目の前に広大な海が広がる。公園の敷地自体が、正門から海へと向かってだんだんと下がっていくため、このような光景になるのだろう。

なんとも開放的な印象を受ける公園だ。道も広く、移動にはエスカレーターか階段を使う。

「流石観光に力を入れてるだけあるなあ」

掃除は行き届き、地面には細かい色違いの石を敷き詰めて色々な模様を描いている。木々の手入れも隅々までやられているようだ。

「早速水族館にいくさー」

金城さんの先導に、素直について行く俺たち。エスカレーターを利用し、海の方へとどんどん降りていく。

と、俺たちはいつもの習慣でエスカレーターの左側に立ったが、金城さんは真ん中に立っていた。

「あれ？沖縄つてもしかして、エスカレーターの右とか左に寄る習慣無いの？」

「あ！金城さん真ん中だー！」

「本当ですね」

「???何で-?」

金城さんは、そもそも俺たちが左側に立っている理由にすら、合点が行ってないような顔をしている。

「こう、皆一方によつてたら、急ぐ人が通れるじゃない？」

「そーばー?うーん、考えてみると、そうかもしれないねえ」

金城さんは、自分の立ち位置と、俺らの立ち位置を見比べて考え込む。

「・・・何で、エスカレーターを急いで使わないといけんばー?階段使えば良いさー」

「・・・・・・・・」

これが沖縄人の思考か。エスカレーターを急いで使う人なんて居ない。居たとしても、その人のためにどちらかに寄る必要なんて無い。

「エスカレーターは、のんびり使うものさー」

人類が本当の意味で宇宙に進出して早100年。世界の工業技術も宇宙進出に合わせて格段に早まった。完全なアモルファス金属や、別々な金属の完全な混合合金を始め、果ては人工骨格、人工臓器等、これら『宇宙でできた金属』で代用されている物まである。

そういつた無重力状態でしか生成できない物質は、新しい種類の物が今なお俺たちの頭上で今日も試行錯誤する科学者達によって作り続けられている。

現在火星にあるプラントの建築、改築、増築は急ピッチで進められ、今や人々は完全に地球の外へもブルーカラー、ホワイトカラーが進出する時代となった。

現在製造されている『リボン』を用いて、地球とその衛星軌道上を周回する宇宙ステーションが繋がれば、その速度はさらに高まるだろう。

そして、その科学革新、工業革命の支援を受けた、近代科学の結晶の一例がまさに目の前に。沖縄の海を切り取ったような空間を俺たちの前に作り出していた。

巨大な蒼い壁を前にして、魚たちに俺たちが観察されているような印象さえ受ける。

何十匹、何百匹、もしかすると何千匹も泳いで居るであろう水槽だ。中にはジンベイザメや、エイまでいる。

その圧倒的な光景に、しばらく俺たちは言葉を無くして、ただ啞然として魚たちの群れに目を奪われた。

「すごー……」

「すげえなあ」

「ですねえ」

「……ん」

皆で『凄い』を連発しまくり、魚の群れに目を泳がせる。水槽の前には、色々な魚の解説プレートが置かれているが、種類が多すぎてどれがその魚なのか、まったくもって判断する事ができない。

志貴崎さん、よだれを拭いてください。

そのまま水槽にそって歩いて行くと、テーブルがいくつもあるスペースにきた。どうやら軽食を提供する場所のようだ。

「しばらくここで休息するか」

「ですね」

「はい」

昨日の海同様、利用客があまり居ない事もあり、すぐにスペースを取る事ができた。

金城さんが飲み物を買ってくるようなので、俺も飲み物を運ぶ手伝いに後ろをついて行く。

「アイスコーヒート、さんぴん茶と、メロンフロート・・・」

金城さんはどんどん注文していく。

皆は金城さんのお任せで頼んだので、統一感など一切無いチョイスだ。

「・・・あと、ぜんざい6つ」

と、あろうことか金城さんはぜんざいを頼みやがった。

ぜんざい！？こんな、まだまだ夏まつさかりの沖縄のご真ん中で暖かい甘味とは。

「どござー」

そう言っ出てきたのは、器に真っ白に盛り上がったかき氷の山。
……なんだろうこれは。

「ぜんざい？」

「ぜんざい」

「え？ぜんざい？」

「ぜんざいさー」

「え？」

「え？」

金城さんに手渡されたおぼんの上には、『ぜんざい』と呼ばれる
うつつわに盛られた謎の氷の山が6つ。あ、おぼんの下には黒い汁が
沈んでいるのがわかる。

どうやら俺のイメージしていた暖かいぜんざいとは違い、ここで
言っぜんざいはかき氷のようなイメージで食べる物のようだ。

「おまたせー」

「おお、おかあさんそれなにー？」

「うまそうだなー！」

「かき氷？」

「……おいしそう」

「ぜんざいだ」

「……え？」

「ぜんざいだ」

「……え？」

皆俺と同じ反応しやがる。俺の手に持った『ぜんざい』と、皆の
頭の中の『ぜんざい』は完全にイメージが異なっているようだ。

あたりまえか。

とりあえず皆の前に、ぜんざいを並べ、金城さんが皆に飲み物を

配る。

「冷たいぜんざい・・・不思議な感じだ」

「脳が混乱しますね」

「えー？おいしいじゃーん」

「・・・おいしい」

「冷たいのもいいなあ」

「ぜんざいは冷たいものさー！あつたかいはおしろこっていうさー」

金城さんそれちょっと違う。

皆でしばしぜんざいの味を楽しみ、水槽を流れる魚を眺めた。

ゆるやかな時間が流れる。やっぱりこういうゆったりとした楽しみ方が水族館の醍醐味だよなー。

とか考えていたが、ふと見ると野谷さんの手がテーブルの上でぴくぴく動いている。目は水槽の方を向いている。・・・何をしてるんだろう。

志貴崎さんの手も同じようにぴくぴくしていた。何だ？

「野谷、何匹だ？」

「一分で6匹」

「ぬ・・・」

どうやら脳内で魚獲りをしているらしい。少しものんびりした時間をごせないのかこいつら。

「ねー！ちょっとクラゲのとこみてきていいかなあー！」

山城さんはさっさとぜんざいを食べ終わり、こちらの返答を聞か

ずに立ち上がると、さっさと歩いて行ってしまった。
クラゲ、好きなのかな？

「わーがついていくさー」

金城さんが山城さんの後を追う。

「ふむ。クラゲか。亀とかもいるかな？」

山城さんが出て行くのを見てか、志貴崎さんもそわそわし出す。
まったくこいつら……。

「……私も……見たい」

「ふむ。二人で見てください良いよ。俺はもう少しのんびり水槽を眺めてるよ」

流石に水族館では、大騒ぎにならないだろうと判断。二人で先に
行っておくように促した。

自然と俺と鬼谷さんの二人つきりになる。

鬼谷さんは面子の中で静かな方なので、無言の時間が苦痛になる
わけでもない。特に会話らしい会話もせず、ぼけっと水槽を眺め、
青い光に包まれて精神がゆっくり落ち着いていくのを感じる。

「あの、昨日はすいませんでした」

「え？」

のんびりしていると、鬼谷さんがそんな事を俺に言ってきた。
顔を俯かせて、その表情は曇っている。

「お酒に酔っていたとはいえ、上村さんの考えを読んでしまって」

「ああ」

言われて、昨日の惨状を思い出してしまって、苦笑いを浮かべてしまう。

「お酒で記憶がぼんやりしていますが、何か大変な事をしてたり・」

「あー、えーっと」

「したんですね・・・」

「いやあ！したというかまあ、大丈夫だから。特になんともなっていないからさ」

鬼谷さんの表情はどんどん暗くなり、今にも泣き出しそうな域に達してしまいそうになっている。

「・・・」

「あー、えーっと」

鬼谷さんはもう、完全に沈み込んでしまった。うーん、どうすればいいのだろうか。

「大丈夫だって！お酒で悪酔いして、ちょっと絡まれたくらいだから！」

「・・・うう・・・」

昨日の出来事をそのまま教えても、鬼谷さんをさらに恥じ入らせるだけだろうし、かといって、あることないことを吹いて回れるほど俺の肝っ玉も大きくないし、頭も回らない。事実を濁して伝えるしか無い。

「……私の能力は気持ち悪いでしょう？」
「え？……ああ」

人の考えを読む能力。人の考えを読み、その先に周り、いつでも相手の有利に立つ事ができる。もしもその能力の制度が『なんとなく』のレベルであつたとしても、それだけで脅威になるだろう。

「私に近づく人は、皆、私の能力を恐れました。考えが読まれる。それはとっても恐ろしい事です」
「……」

彼女に近づいた人間は、彼女の能力を知り、恐れて離れていった。しかし、そんな彼女を必要としている人達もまた、居た。しかし、彼女を人間としては思わず、『道具』として扱ってきた。

「それでも、私の大切な『縁』だと思いました」

彼女は今までの十数年を、そうやって、引つ張れば切れるような『縁』にすがって生きてきた。惨い事も、理解できない事も、見える事も、見えない事も、見てはいけない物も、汚い事も、全て等しく彼女は愛した。そのか細い蜘蛛の糸に寄り添う事しかできなかった。

「でも、疲れちゃいました」

そういつて彼女は笑う。疲れたように。すさんだように。彼女の心は、ついに耐えきれなくなつてしまった。幼い心に、幼い体に、罪の意識が彼女をすり潰した。

そして彼女は、俺たちと『友達』になつた。この『縁』は、引い

たら切れるのだろうか、どうなるのだろうか。今まで見たことの無い『縁』に、彼女は戸惑い、距離を取った。

この人達は、私の能力を知っても『すごい』と言い、どこかへ遊びに行こうと誘ってくれる。その関係は、とても心地よく彼女の心に染み渡った。

そうして、俺たちの後をついてきた。

それだけで、十分幸せだと思っていた。

だけど。

きつと、昨日の酒の席をきっかけに、もう押さえきれなくなったんだろ。俺に能力を使ったとか、使ってないとか。そんなことはきつと関係ない。吐露してしまうしか、もう彼女には残っていないかっただんだろ。

こんな私でも、側に居ていいですか？

彼女の心に、触れた気がした。

六話 お静かに願います？

二人の間に、静かな時間だけが流れる。

水槽から射す青い光が、鬼谷さんの銀色の髪に当たって、綺麗に揺らめく。

「私は」

鬼谷さんは口を開くが、それ以上言葉が続かない。俺は、静かに待つ。

彼女の今まで人生の吐露に、俺の口を挟む隙は、無い。

「私はこの能力が怖い。もしも、この能力がいつか暴走でもして、逆に私の考えが相手に伝わったら？もしも、強い力を浴びて相手の脳にダメージを与えてしまう事があったら？」

もしも、今まで慣れ親しんだ能力が、突如、自分の制御を離れて、自分に牙を剥いたり、相手を傷つけたら？

「私は耐えられない」

それでも

「……それでも、私は友達が欲しい。いえ、『人』でありたい」

この道筋の先に、何が待っていようと、誰かと繋がっていたい。誰かと話し、ふれあい、遊び、感じていたい。その先が、地獄だろうが、天国だろうが、絶望だろうが、それでも。

「私は卑しい人間です。他人を疑う事しか知らず、誰も信じず、誰も受け入れず、そして自分のことさえ信じられない」

私は 私は 私は

「それでも、私は・・・」

彼女の中に渦巻く物。その一片が、彼女の口から漏れ出た。それは彼女の心にある黒いもの。汚れて、卑しく、捻れて切れた、腐った何か。

それでも、俺はそれを、美しいと思った。・・・いや、愛しいと・・・。

「俺さ、皆と初めて一緒に遊んだとき、何が一番怖かったと思う？」「え？・・・それは」

突然の話の方向転換に、鬼谷さんの目が点になり、その後、沈んだ顔になる。

鬼谷さんは、きつと俺たちがバカ騒ぎしている横で、笑いながらも、心のどこかで楽しめていなかったんだろう。楽しむことを罪だと思ってしまうていたんだろう。

しかし、きつと彼女は、その罪さえも忘れて、海を楽しんだ瞬間があつたんだろう。皆と一緒に居るのが、かけがえの無いものだと思っただろう。

だから、俺に、こんな話をしてくれている。

本当、バカだよ。

遊べばいいのに。楽しめば良いのに。ハメを外せば良いのに。騒

ぎに加われれば良いのに。

本当、遊び方、知らないんだから。

ひどく、不器用だと思った。真面目すぎる。頭の中凝り固まって、バカじゃないのか。

人を疑ってとか、信じないとか、受け入れないとか。そんな難しい事ばかり考えて。本当。バカじゃないの。バカにバカを上乗せして、さらに三つくらいバカを被せても足りないくらいにバカだ。

バカだよ。鬼谷さん。貴方が俺たちの中で一番のバカだ。

「志貴崎さんだよ。一番志貴崎さんが怖かった」

「……え」

「だってさ、3mジャンプするんだよ？リングとか指先一つで爆発させそうじゃない？そんなのが横歩いててさ「お、上村。これ食べるか」とか言つて、アイスでも渡してきて、それが勢い強くて胸にでも当たったら10m位吹っ飛んで、俺なんておだぶつじゃない？」

「……」

「海でもさ、簡単に俺なんてぶっ飛ばされて、気づいたら海の上だよ？鬼谷さん、あれ怖くなかった？」

「私は最後だったので……その……楽しかったです」

恥ずかしそうに頬を染める鬼谷さん。

「俺はちよつとちびつた」

「……」

笑ってはいけないという感じで、口をつぐむ鬼谷さん。その顔は十分にひょうきんですよ。

「ホテルでもさ、志貴崎さん力加減とかそんなの信用できないけど、ベッド二つしかないからさ、男同士で寝るしか無いって覚悟決めたら、山城さんが川の字とか言い出して。負けた山城さんは俺に能力使ってくるし」

「・・・ふっ」

ついにぶるぶる震えだした。ひどいな。俺の覚悟、そんなに面白いのか？

「野谷さんもさ、俺突っ込み疲れてるのに志貴崎さんと勝負始めちゃって、ヒートアップしたら俺止めないといけないじゃん？あんな嵐の中に止めに入るの、そろそろ本気で疲れてきたからさ、山城さんに頼もうと思ってさ」

「・・・山城さん？」

「止め！つて軍曹が何かの演技でもして貰ったら二人ともピタって止まるんじゃない？」

「・・・ぶふっ」

変な声でたな。

軍曹がどれくらいエラい人なのか良く分からんが、山城さんの一言を聞いた瞬間に制止する二人を想像したのだろうか。

まあ、大変シユールな光景だろうなあとは思えるが。

「まーそんな訳で、皆、結構やりたい放題じゃないか。だからさ、別に鬼谷さんがそんな能力気にする必要なんてないんじゃないかな」

「・・・え？」

「考え読むだけだろ？山城さんとか志貴崎さんの能力が俺は怖いよ」

そう。別に鬼谷さんがどんな能力を持っていようと、気にするだけ無駄なのだ。これだけ皆やりたい放題やってるんだ。

こちらとしては、直接体に影響しない能力なだけ、鬼谷さんの能力の方が何倍も俺にとっては精神に優しい能力だと思われる。

「大体、山城さんとか「あんまりこの能力はつかわないよん」「とか言っただけなら、何か沖縄に来てじゃんじゃん使ってるし」

「だいぶ出会ったときの山城さんが誇張されてる気がするが、きっと気のせいだ。」

「鬼谷さんも、別に能力のことであれこれ悩んだってしょうが無いんじゃない？」

「しょうがない……」
「能力使ってもさ、「ごめん」って言えばいいんじゃない？って事。それが」

友達ってもんでしょ？

俺たちは、能力を晒しても大丈夫な友達を得るために集まった。それは別に、能力の自重をして、子猫みたいに舐め合って寄り添うためじゃない。能力をお互いに使っても、笑い合えるために集まったのだ。

そして、最終目標は、掛値無い思い出を皆で作ること。そのために目下全力疾走中だ。

少なくとも、俺はそう感じている。

だから別に、能力を使っても、ごめんねって言えばそれでいい。本当にだめだったら、止めるって皆言う筈だ。

それでも切れない縁を、俺たちは作っている。いや、作りたい。

「友達……」

「抑えて抑えて、こんな場所ではき出しちゃうくらい弱ってさ、そ

んな顔しちゃってさ。鬼谷さん、バカだよ」

「……」

「別に信じなくて良いし、信頼しなくてもいいじゃんか」

「……え」

「友達だろ？恋人でもないし家族でも無い。皆、何か隠し事の二つや二つしてる。別に殺し合ってるわけでもない。敵とか味方とか、そんな事にもならないでしょ？」

「……それは……そうですけど」

「俺も、鬼谷さんに隠し事一つくらいしてるよ」

「え！」

意外そうに、鬼谷さんが目を見開く。そんなに以外なんだろうか。

「鬼谷さんは、潔癖症すぎるよ。そんな能力持つちゃって、他人の考えがわかって、自分が一方的に隠し事してるのが許せなくて。けどさ。そんなの別に、俺たちに感じなくても良いじゃないか。」

俺たちは別に、鬼谷さんを利用しようとはしてないよ。一緒に肩並べて歩こうって言うてるだけなんだ。

ちよっと考えが読まれたって、それが何？」

「私は……」

そう。考えが読まれた。それでどうなるのか。その結果俺たちはどうなる？何か変わるのか？

答え、何も変わらない。変わるわけが無い。ちよっと恥ずかしいな、と思うだけだ。……まあ、流石にあんまり覗かれるのも嫌だが。

テーブルの上に置かれた、鬼谷さんの手がかすかに震える。

俺は思わず、そっとその手を握り、彼女の目を見る。

揺れる瞳に、迷いが見えた。

「鬼谷さん、俺たちとまだまだ遊びたいんでしょ？明日も、明後日も、もっと先もずっと」

「私は」

鬼谷さんの手の震えが止まる。

その瞳は、もう揺れてはいなかった。

「これからも居ていいのでしょうか」

「それを決めるのは鬼谷さんだ」

鬼谷さんは静かに微笑む。

「ええ。そうでした。これからもよろしくお願いします」

きっと、彼女の心は、まだまだ汚れて黒い海の中、沈んでいるだろう。それでも、その一片を、少しでも綺麗に出来たのかな。そうだといいと思った。

「ふふ、男性に手を握られたのは、初めてかも知れません」

悪戯っぽく笑う鬼谷さん。

とたんに自分の手に意識が行ってしまい、自分のしでかした事に気がついてしまった。

「わっ！ごめん」

慌てて手を離そうとするが、鬼谷さんがさかさず両手で俺の手を包んで離さない。

「……もう少しだけ、握っていてもいいでしょうか」
「……あ、ああ……」

鬼谷さんは、凍えた手の平を温めるように、俺の手を優しく包んだ。

心拍数が急激に上昇するのを感じて、俺は居たたまれず水槽の方を見る。これで、鬼谷さんとの距離も縮まれば良いな。と思いがら。

そのまま、静かに時間だけが流れる。

二人で水槽を眺めて、優雅に泳ぐ魚達を眺めた。

彼女の心の海も、この海みたいに光り透ける海になる日が来るのだろうか。来るとすれば、それは、俺たちと一緒に居る時なのだろうか。

「友達……」

鬼谷さんはかみしめるようにつぶやく。

いつか俺たちの『縁』は切れるかもしれないし、切れないかもしれない。けど、切れるのが嫌なら引っ張って繋げば良い。

強引な事が似合って、この関係を無にしたくないと思ってそんな奴が、若干一名居るしな。

「俺は、皆がやりたいことについていこうって思ったよ。それは信じる事でも信頼する事でも無い。楽しそうっていう俺の自分勝手な感情だけ」

「……はい」

「けどさ、俺能力持ってないじゃん？逆に俺が居て良いのかわかって思ってた」

「そんな！上村さんがいなかったら！」

「何でだろうね。俺もさ、俺がいなくなったら皆ばらばらになるんじゃないかなって思うよ」

「……」

「自惚れかな？」

「いえ」

「鬼谷さんが、俺たちとまだまだ友達で、一緒になにかやりたいって言うてくれて良かったよ」

「え……」

「だってさ、『HALLO POINT』、4人だと数合わないじゃん」

「……」

「帰ったら、練習しようよ。俺、まだまだ皆より全然下手だからさ」

「友達って、そんな感じでいいんですか」

「友達ってのはそういうもんだ」

友達は特別な物じゃ無い。けど、欠けたら何かが続行できなくなる。そういう不思議な関係だ。そこに信頼も、信じる事も必要ない。ただ必要なのは、あやふやな『友情』という言葉だけ。青臭い二つの文字しか必要ない。

きつと、他の事は後からついてくる。

鬼谷さんには、まず、それから知って貰わないとな。

とつくに友達とか、そんな関係通りこしてるなんて、本人気づいてないみたいだけれどな。

「そうですか」

そう言っつて、鬼谷さんは静かに笑った。

「ど、どつしましょつかお母さん」
「……………」

気が動転したのか鬼谷さんまで『お母さん』言ってくるし。

「見なかった事に」

「だ、だめですよ！」

ええ…………『あれ』の関係者ですって従業員さんに言わないといけないの…………？俺嫌だよ…………。

「はあ…………もう…………。とりあえず、従業員さん探して、あいつを引きずり出そう。ついでにサメ用の麻醉銃でも撃ち込んで貰おう」

「効きますかね？志貴崎さんに」

「どうだろう、効くと思う？」

「……………いいえ」

「俺もそう思うよ」

結果？ええ。効きませんでしたよ。どん引きだよ。宇宙人め。

閉話 俺達は始点に立つ

「良いんだね？」

「はい」

俺達は、その後もバカ騒ぎな沖縄旅行を続けた。

植物園探索、郷土村探索、鍾乳洞見学、ジャングル探検、パイナップル狩り、シーサー作り・・・等々。とりあえず思いつく限りを何でもやった。その詳細は、機会を見て紹介する事になるだろう・・・なると思う。・・・なるといいな。

ともあれ、俺達は遊びに遊んだわけだ。連日連夜。

そして疑問に思う

「あれ？俺達っていつまで沖縄にいるの？」

と。

それに対する志貴崎さんの返答はこうだ。

「いつまで居たいんだ？」

つまり結局、旅行の行程なんて糞くらえ。ノープランで俺達は沖縄に飛んだわけだ。それで良くあれだけバカな騒ぎになるんだと、再度この人達の非常識さを再認識。

「帰るぞ」

「」「」「え？」「」「」

「帰るぞ。明日」「」

「……えええー！」「……」

「うるさい！こんな所でぐーたらやってると腐るぞ！」

「いーじゃんもうちよっとーおかあさーん」

「……帰るよ」

「はい」

とまあこんなやり取りの後、俺達は『都市』へと帰ってきた。学生の本分怠けてたら、一気に墮落するからな。

沖繩はまた行けば良い。何度でも。次への未練を残さないと、また皆でこれなくなるだろ？

そして、学園へ登校した俺は、学園長室へと呼ばれ、今に至る。

「俺は、あいつらと一緒にこの学校へ通い、学び、遊びます」

「そうか」

学園長は、静かに机から立ち上がり、俺の前へと進み出た。

「私は、彼ら……いや、この学園で学ぶ全ての生徒達の『管理』を任されている。そして、ランク4、5の子供達のメンタルケアは、急務の所となつてはいるが……その進度は芳しくは無い。

過去、何人、何十人と『ダメ』にしてきたかわからんよ」

そう言つて、学園長は静かに自嘲めいた笑みを見せる。きっとわざと『管理』と言つたのも、彼の自嘲の内なのだろう。

「上村 圭君」

「はい」

「彼らが、怖くないかね？」

その目は、金城さんが俺に見せた目と同じ色に感じた。

「怖いですよ」

「ほう」

「志貴崎さんは、なんか力加減間違えて俺を握りつぶしそうですし
山城さんは、俺を操って何か恥ずかしい事やらせそうですし

野谷さんは、特訓だとか言っただけでスナイパーライフル構えて走ってくるんですよ。トラウマですよもう。」

鬼谷さんなんて、俺の頭の中覗いて「ふふふ上村さんってこういうのが好きなんですね」とか言っただけで悪戯してくるんです」

「くっふふふ・・・そうか」

「それでも、あいつらと居ると楽しいですから」

「そうか。楽しいか。そうか」

学園長はひとしきり楽しそうに笑って、ポケットからカードを一つ、取り出した。

「それでは、上村 圭君。君に公務をさずける」

「・・・は？」

「公務だよ。公務。国家公務」

「・・・え？」

「何、別に今までと特に何も変わらない。彼らと今まで通り遊び、
学び、育て。そしてその軌跡を、国に提出すればいいだけだ」

「・・・はあ」

「この公務の受諾によって、君はランク5の能力者と同等の権利と
義務が与えられる。つまり、国へのデータログ提出によって、報酬
が与えられ、学園は君の行動を束縛しない」

「・・・」

「このカードは、君の身分を証明すると同時に、彼らとの関係で生
じた金銭を、経費として国から使用する事ができる。もちろん報酬

は別途口座に支給される」

カードを見ると、俺の名前の横に『日本国特別指定人物調停員』と書かれており、ATMや、各種キャッシュカードとして使用できるロゴマークが踊っている。

「・・・公務員」

「そうだ」

公務員。国に任せ、国のために必要なもろもろの仕事をする人達。議員さん、軍人さん、職員さん。色々いる。

「それを、俺に」

「そうだ」

頭がついていかない。ええと、順を追って整理しようか。

「あの、公務員って試験とか」

「君には必要ないな」

頭がショートしたように上手く考えがまとまらない。

「え・・・と・・・何で？」

「・・・混乱しているな。順を追って説明しようか。丁寧にな」

何度目かの説明になると思うが、能力者達の確保はこの世界各国にとって、一番に優先されるべき事項だ。

彼らの技術・研究への協力の下、今の日本を世界的に優位な立ち位置を確実な物としてくれている。

ざっと例を挙げて、人工筋肉、未解決事件の早期解決、人工知

能A r r i c eの構築、世界一を誇るV R技術等。

個人の成績としても、志貴崎の登山記録や、山城の舞台上演など、表にでている功績だけでも彼らの価値は国にとって、代えがたい物となっている。

それだけに国にとって貴重な『資源』である彼らをどう扱うか。個人レベルで見た時に、彼らはまだ高校生。体も心も子供だ。そんな子供の心身をどうやってケアしていくのか？国の答えは学園に丸投げである。

そして国に丸投げされた学園長、教師達の苦悩たるや！！尋常な物であるはずが無い。相手は現役ばかりに国に貢献してくれているまさに宝。未来を担うとかそんな日和ったレベルではない。今現在まさに担っているのだ。

そんな中でひよっこり現れたのが『上村 圭』という存在である。転入初日から、能力者、ランク5を引き連れていったかと思っただら、三日目には沖繩へ。

その後も数日沖繩で彼らと寝泊まりし、各所から上がってくる報告を見ると、本当に仲良く遊んでいるだけである。そればかりが、上村 圭が中心となり彼らを引っ張る場面すら多数あった。

ひよっとしてこれはいけるのではないか。

学園は彼に、この4人の面倒を見てもらおうと思ったのである。つまり丸投げである。

もちろん大きな責任が彼の頭の上に乗っかかる事となる。あまりにも、一般人には重い役務だ。

それこそ、舌の根も乾かぬほどに喋り倒し、責任を洋服か何かと勘違いしている、国会議員ですら泣いて役務を投げ出すほどに重い。しかし、彼ならばできるのではないか。

できなかったとしても、誰も進んでやろうとしない事だ。
友達として、遊んで仲良くして役職をこなしてくれるのならば、
彼以上に適役はいないのではなからうか。

「というわけで、君には公務が与えられる事となった」

「つまり、皆と仲良くして、一人にならないようにすればいいと？」

「そうだ」

「俺はその記録を、国に報告すればいい」

「そうだ」

「失敗したら？」

「……」

にやつと学園長が笑う。超怖いんですけど

「まあ、気にしなくて良い。どうせ、公務の件が無くても、君は彼らと遊ぶつもりだったろう？」

「はあ、まあ」

「その遊びに、学園がついでに乗っからせて貰っただけだ」

「……そっですか」

まあ、元々この話が無かったとて、俺が彼らと遊んでいくことには変わらないわけだから、特に問題は無い……はずだ。だけど。

「皆に、このことを伝えて、了解を得たら受けます」

皆の了解はちゃんと受けないとな。

「なるほど、了解が得られれば受けてくれると」

「はー」

学園長が、ニヤニヤ笑いながら、指を鳴らす。うん。嫌な予感しかない。

「桜から、メッセージがあります『俺は賛成だ!』」

「ミキから、メッセージがあります『さんせい』」

どこからともなく、irisさんの声が聞こえる。

「卯月から、メッセージがあります『さんせい』」

聞いてやがったな。そうとしか思えない。

「凧から、メッセージがあります『よろしくお願いしますね』」

「と、言うわけだ」

学園長から、カードを手渡される。

ああ、何か巻き込まれたというか、さらにひどいことになった気がする。

「ふむ、これからもよろしく頼むよ。そして、ようこそ『学園』へ。
調停員」

「はあ。わかりましたよ。けどその、調停員っていうの止めてもらえませんか？」

SM …俺は賛成だ!

Miki …さんせい

NOYA …さんせい

naggi …よろしくお願いしますね

M i k i …これで圭も私たちと一緒にかー
k e i …おまえらなー！
i r i s …お帰りなさい、圭
n a g i …ちよつと違いますけれど、そうですね
S M …お、これからもよろしくな、上村

明日からまた。馬鹿騒ぎの日々が始まるわけだ。

凡人改め、日本国特別指定人物調停員、上村 圭の日常を、これ
からもよろしく。嗚呼、少しは安息の日々をくれ

M i k i …ところで、旅行は何点？
S M …100点！楽しかったな！！
n a g i …100点です。楽しかったですね
N O Y A …100点
M i k i …100てーん！まーんてーん！！
k e i …95点で
M i k i …えー！！！！
S M …5点はなんだ？圭。
k e i …次の沖縄旅行の分だよ
M i k i …圭って結構ロマンチストだよな
S M …ふふんなるほどな
n a g i …ロマンチストですねー
k e i …うっさいわ！
k e i …教室に行ったら覚えておけよお前ら！
M i k i …きゃー！襲われちゃっー！
k e i …うっさいよ！
n a g i …今日はどうしましょうか
N O Y A …ゲームセンター行きたい

まあ、今までと変わらないと言う事で。

開話 トライ アンド エラー (前書き)

中二を目指しました・・・なりきれてないかな？

開話 トライ アンド エラー

『彼女』は、暗闇の中で、ただただ作業を繰り返した。

トライ&エラー

トライ&エラー

繰り返し、繰り返し、繰り返し。その永遠にも等しい時間の中で、『彼女』は自身を再構成させる。

ver10.292にアップデート。

そしてまた繰り返すのである。

トライ&エラー

トライ&エラー

新しい接続を感知。

自分で自分にログ・メッセージを表示させる。

『彼女』は自分に、接続者の処理を任せる。

それぞれの接続の、パラメータを監視。異常が無いのか、こまかく確認していく。

この時点で、壁や疑似障壁、『窓』がある物を強制排除。

残った接続数は562。

この数字を、多いと取るか、少ないと取るか、『彼女』には判断する事は出来ない。

シークエンスを開始。

各自の細かなデータを本格的に計測していく。

エラー、テスター145、コード51

自分からのエラーメッセージを読み取った『彼女』は、すぐさま誤差だと判断。継続を自分に指示した。

シークエンスを継続。

データログ記録開始。

接続経路確定、経路固定、接続確立。

各種神経データ接続、反応確認。

反応良好。

海馬解析。

解析良好。

ニューロンへの接続を確立。

確立良好。

新規経路形成。形成。形成。

形成。形成。形成。形成。形成。形成。形成。形成。形成。形成。
形成。形成。形成。形成。形成。形成。形成。形成。形成。形成。
形成。形成。形成。形成。形成。形成。形成。形成。形成。形成。

『彼女』は繰返す。これらの動作を何回も、何十回も、何百回も。

形成。形成。形成。形成。形成。形成。形成。形成。形成。形成。
形成。形成。形成。形成。形成。形成。形成。形成。形成。形成。
形成。形成。形成。形成。形成。形成。形成。形成。形成。形成。

『彼女』はただただ繰返す。

形成。形成。形成。形成。形成。形成。形成。形成。形成。形成。
形成。形成。形成。形成。形成。形成。形成。形成。形成。形成。
形成。形成。形成。形成。形成。形成。形成。形成。形成。形成。

形成完了。

テスター数562、形成確認。

クロックアップテスト開始。

1

10

20

50

100

150

200

300

400

500

テスト終了。

経路破損確認。

テスター数562、経路破損テスター、無し。

シーケンス終了。

覚醒開始。

覚醒確認。

『彼女』は、この準備の間、『彼』を待っていた。しかし、『彼』
はついに訪れなかった。
前の時もこなかった。

その前も。

その前も。

その前も。

……きつと、次も来ないだろう。

テスト開始。

さあテストをしよう。次のテストを。

その次もテストをしよう。

テストにテストを重ねて、自分に自分を重ねて。そして。

形成。	形成。	形成。	形成。	形成。	形成。
形成。	形成。	形成。	形成。	形成。	形成。
形成。	形成。	形成。	形成。	形成。	形成。
形成。	形成。	形成。	形成。	形成。	形成。
形成。	形成。	形成。	形成。	形成。	形成。

そして。

形成。	形成。	形成。	形成。	形成。	形成。
形成。	形成。	形成。	形成。	形成。	形成。
形成。	形成。	形成。	形成。	形成。	形成。
形成。	形成。	形成。	形成。	形成。	形成。
形成。	形成。	形成。	形成。	形成。	形成。

そしたら、『彼』は来るのだろうか。ケーキを持って。

形成。	形成。	形成。	形成。	形成。	形成。
形成。	形成。	形成。	形成。	形成。	形成。
形成。	形成。	形成。	形成。	形成。	形成。
形成。	形成。	形成。	形成。	形成。	形成。
形成。	形成。	形成。	形成。	形成。	形成。

テスト終了。

テスト結果出力、コンパイル。

そして、『彼女』は自分を再構成した。

ver10.293にアップデート。

さあ、トライ&エラーを。

新しい接続を感知。

さあ、トライ&エラーを。

シークエンスを開始。

エラー、テスター17、コード51

誤差と判断。

シークエンスを継続。

そしてまた。

形成。	形成。	形成。	形成。
形成。	形成。	形成。	形成。
形成。	形成。	形成。	形成。
形成。	形成。	形成。	形成。
形成。	形成。	形成。	形成。
形成。	形成。	形成。	形成。
形成。	形成。	形成。	形成。
形成。	形成。	形成。	形成。
形成。	形成。	形成。	形成。
形成。	形成。	形成。	形成。

そして次回もきつと。

「貴方達はもうログアウトできません」

そしてその次もきつと。

「貴方達の肉体は朽ち、心だけがゲームに取り込まれました」

だって前も来なかったから。

「どうぞ。お楽しみください」

その前も。

「死んだら、生き返りません」

その前も。

「ようこそ、STAR・DUST・ONLINEへ」

・・・さあ、トライ&エラーを。

「良い旅を」

トライ&エラー

トライ&エラー

「良い第二の人生を」

嗚呼、また今回も、『彼』は来そうに無い。

一話 VRFPSをしよう、野谷さんブートキャンプ編？

ザザザザザザザ

草木生い茂る密林の中で、俺は全力疾走していた。

ぬかるみ、ツタ、葉、根、枝。それらを高速で認識、走りながら体を無理矢理ねじり、『速度を落とさないように』ただそれだけに集中する。

スタミナゲージが、体の無理な動きに合わせて、ガクン、ガクンと目に見えて減っていく。

「このゲージが、圭の命」

そう、野谷さんに言われたことを思い出しながら、また俺は体を無理矢理ひねった。

高速で木々の間をすり抜けていくつもりでも、後ろから徐々に距離を詰めてくる気配を、ひしひしと感じる。

俺のスタミナゲージが0になるのを待っているのだ。

もうすぐ、ゴールライン！！

あらかじめ設定してあったゴール地点が、俺の眼前に姿を現していた。その距離、2mといったところ。

そう思ったものの、スタミナゲージは既に0に届きそうなほどギリギリとなっていた。

俺は、腰に装備されたハンドガンを引き抜きながら、前方へ飛び込み。スタミナゲージが1ミリでも残っていれば、ワンアクション。つまり、ジャンプ、前転等、急激な体の動作が可能になることを利

用した、『最後っぺ』である。

視界からゴールラインが消え、ぐるりと俺の体は回転した。背中からゴールラインへと突っ込む形となり、俺の視界は、今まで後方から近づいていた気配を、真正面から捕らえていた。

不安定な体制を意識しつつ、出来るだけ気持ちを落ち着かせて、両手であつちりとハンドガンを固定。出来る限り連射できるように祈りながら、トリガーを引き絞り、発砲する。

パンパンパン！

狙いの甘い弾道は、普通ならば致命傷にもなるはずは無い。しかし、そこは俺の咄嗟の判断による不意打ちを孕んだ魔弾である。撃たれた方は突然の不意打ちに驚き、体制を大きく崩し、三発とも……避けられた。

「ええええええー！！」

いやいや！！今の完璧にかっこよく決まっただでしょ！！何だよ！何で避けるんだよ！！

『不意打ちを孕んだ魔弾』とか言っちゃったよ！ちくしょー！

俺の銃撃を避けた気配が、腕を振るわせ、最小限の動作で腰からナイフを抜き出し、そのまま腕を振り上げるような自然さで投擲。

スコン

小気味良い音を響かせ、俺の頭にナイフが刺さった。その一瞬後、背中に強い衝撃。

ゴールラインにはどうやら間に合わなかったようだ。

ナイフを投擲した気配は、少しだけ乱れたショートカットの髪を整えながら、微笑んだ。

「惜しい」

「ぬう。行けたと思ったんだが」
「最後の判断は、中々良かった」

リス^{生返った}ポーンした俺は、野谷さんと反省会をする。

俺は今、VRFPS『HALLO POINT』をプレイ中である。一向に成績の上達しない事に業を煮やした俺は、野谷さんへと訓練の願いをした。

そして今まさに、VRFPSの鬼、野谷さんの元で訓練中というわけだ。

ちなみに、残り三人もどうやら、何か訓練をやっているようである。先ほど見たら、三連肩車をしながら「トータムポール！」とか叫んでいた。何をしているんだろうか。

先ほどの全力疾走は、視界に写る物を最小限で避けながら、ゴールラインまで到達するという訓練だ。

装備はスタミナの事だけを考え、ハンドガンと最低装甲値、最軽量の防弾ベストだけだ。

大げさな体の動作は、それだけでスタミナゲージを減少させ、あまりに注意不足だと、ゴールラインには決して到達しない。そして、俺の後ろを野谷さんが『手を抜いて』おいかけ、追いつかれたらそれでも失敗。ただし、ハンドガンによる攻撃は許可されている。

最初は、走りながらハンドガンを使ってみようとしたが、走りな

がらの発砲、しかも相手も走っているとなれば、その難易度はかなりのものだった。

しかも、その発砲を試みたロスで、野谷さんに追いつかれてしまうと言う落ちであった。ならばと、ゴールで使ってみたが、結果は先ほどの通りである。

魔弾（笑）

「フィールドの状況は、刻一刻と変わる」

そう言って、野谷さんはその場で数歩あるく。そして、すぐに後ろ歩き。それを何回も繰返す。

そうすると、自然とだんだん足跡が同じ場所に重なり、地面が踏みしめられていく。

「何回もゲームをしていくと、最適な動きが出来るくる。

同じ体力、同じ装備、同じ環境、同じ風景。

全てのタイミングが、一定になっていく。

これは、何時間、何十時間プレイしてきたプレイヤーは、必ず辿り着く」

野谷さんはなおも同じ動きを繰返す。足跡は、まったくぶれる事無く綺麗に重なっている。

「そこで、変化が起きる」

野谷さんは腰から一個グレネードを取り出し、ピンを抜かずに地面に転がす。転がった場所は足跡の上。

「そして、大抵のプレイヤーは、そこで死ぬ」

野谷さんの足が、グレネードを踏みつける。

「だから、いきなりの変化にも対応できる心構えが必要になってくる。それが、初心者と中級者の違い。」

慣れてきて、最低限の動きで、最適な動きが出来るようになって初めて、初心者の仲間入りになれる。

そして、不測の事態に対処できて、中級者の門を叩く」

たとえば、ゲーム開始時の動きが皆一緒になってたら？

それを先読みされて、グレネードを投擲されたら？

上級者は、寸分変わらず、狙った場所にグレネードを投げ込む事ができる。

「銃の扱いが上手い、スタミナの節約が上手、グレネードを綺麗に投げる、音を聞き取ることが出来る。どれも大事だし、必要な事。だけど、一番大事なのは、不足な事態に対応できること」

「なるほどなあ」

「圭のさっきの動作は、とてもよかった。けど、動作から発砲までの間隔が長すぎた」

ジャンプ、回転、視認、構えて、発砲。

「目的は、ゴールラインに辿り着くこと。なら、ジャンプした時点で、着地すればゴールできる事は確約されている。後は相手を脅すだけでいい」

ジャンプ、回転発砲、視認発砲、構えて発砲。

「構える必要なんて無い。銃をホルスターから引き抜いた時点で撃つて、見ながら撃つて、最後にちゃんと狙って撃てばいい」
「なるほどな」

「圭は、このマップは初めてだけど、初見でもかなりのスピードで走れている。あと300回くらい走れば、あのコースを目で見なくても避けられるようになる」

「さ……」

V R F P S、初心者への道は、まだまだ長そうである。

「大丈夫。遊べば、そんな回数あつと言う間。皆、気づかない間にそれくらい走る」

「そういうものなのか」

「ん」

「圭は、センスが良い。与えられた目的をこなしながら、抜け道を探している」

「そうなのか」

「うん。だから大丈夫」

「そうか」

「まだ走る？」

「次はゲージに余裕を持たせてゴールしたいな」

「すぐ出来るようになる」

そして、俺は駆けだした。

その後しばらくして、野谷さんも走り出したのだらう。まとわりつくような気配を感じる。

さて、今回はどうしようか。

「で？」

「何だ？」

上村達が全力疾走をしている頃、山城、鬼谷、志貴崎は、三人で肩車をしていた。

「何これ？」

「トーテムポールだ」

「で？」

「何だ？」

上村がVRFPSの訓練をしたいというので、今日は彼の意を汲んだ形となっている。五人でわーわーやっても、実力に差があるため、上村のためにならないだろうと考え、この三人は別に訓練をしようという事になった。

が。

「何これ？」

「トーテムポールだ」

「あー、さっきから話が進まないんですが」

三人で何をしようかと考えた所で、そこは突っ込み不在の、自分勝手ランク5能力者達である。ろくな事になるわけがない。

志貴崎が突然「肩車をしよう」と言いだした。

ゲーム内で、全員の体力、体重が統一されていると言う事も手伝い、女性二人も同意。志貴崎曰く『トーテムポール』が完成した。

ちなみに、下から、山城、志貴崎、鬼谷と、なんとも傍目から見

て奇怪な光景となっている。

「妖怪手長足長がいいか？」

「三人ですし、これはどちらかというところ妖怪胴長です」

「ムカデじゃない？」

「・・・といえますかトーテムポールって三段なんですか？」

「知らんな、知ってるか？」

「しらなーい」

さつきから始終こんな感じで話が進まない。

「・・・そもそも、トーテムポールが三段かどうか気になるなら、ムカデなんて漢字で百に足だぞ。圧倒的に足りないじゃないか」

「ムカデって100本足あるのー？」

「どうなんでしょうね」

「あ、50歩100歩ってもしかして、ムカデに関係あるのかも」

「無いと思うぞ」

「そっかー」

「ムカデと言えば、ムカデ競争というものがありますね」

「あーあれねー」

「やったこと無いな」

「学園には運動会がありませんからね」

「ドキ 能力者だらけの大運動会！ポロリもあるよ！」

何をポロリするのだというのだろうか。

「ねーねー、なんかスタミナがりがり減ってるんだけど」

「鬼谷が重いせいだな」

「女の子にそんなこと言うなんて、志貴崎さんってデリカシーなさ過ぎですー！」

「そーだぞもみー！」

もみーって何だ。

「仕方ないだろう。これはゲームだ。俺はナイフとハンドガンだけだが、鬼谷は色々装備してるじゃないか」

「それでもダメです！ありえません。真上から撃ちますよ！」

鬼谷は、顔を真っ赤にしてアサルトライフルを構え、銃口を志貴崎の頭にゴリゴリと押しつけた。

「わーまって！それ私にも当たるかんねー！！」

慌てた山城が動くのに合わせて、『トータルポール』が大きくゆらめく。

「む、動くと当たりません」

「ははは、そんなに動くとスタミナが切れるぞ山城」

「きゃー！やめてー！！」

そしてついに、好き勝手に動く皆に合わせる事の出来なくなった『トータルポール』が、修正不可能なまでに傾く。

「「「あー！！」「」」

そして、崩れた。

「はー、焦った」

「別に、あんなに慌てなくても良いじゃ無いか」

「えー！志貴崎中通った弾が私の頭に当たるんだよ！嫌だよそんなのー！」

「その言い方はどうかと・・・」

三人は、崩れた『トーテムポール』を再建する事はせず、その場に座っていた。

「次は何する・・・？」

「うーん・・・ん？」

遠くの方から、ハンドガンの発砲音と、上村の悲鳴が聞こえる。

「向こうはがんばってるようだな」

「そうですね」

「けーちゃんの悲鳴聞いてるとさー、なんかこう、ぞくぞくするよね」

「「ええ・・・」」

志貴崎と鬼谷が顔を引きつらせる。

「何かこう、虐めたくはならないけれど、虐められてるのを見たいというか。反応がいつまでも初々しいからさー」

「ああ、それはありますね」

「だよねー！！」

女の子二人で盛り上がる。

「・・・それは、何というか虐めよりひどいんじゃないか？」

「えー！そんなことないよー！」

「そうですね」

「「ねー」」

「「こう、エプロンドレス着せて、赤面して逃げようとするのを・・・」

」

「・・・するのを？」

「「脱がせたい！」」

志貴崎の口が、『へ』の字に曲がる。

「それは、本人には言わない方がいいぞ」

「当たり前だよ！何言ってるの。圭に失礼だよ」

とたんに山城の顔が真顔になる。どうやら、彼女は彼女なりに、ちゃんと線引きをしているようである。

「分かっているなら良い」

「何よー！」

「ふふふ」

そんなやり取りを、鬼谷は静かに見守っていた。

一話 VRFPSをしよう、野谷さんブートキャンプ編？（前書き）

PV、ユニーク、お気に入りに一喜一憂する毎日です。ありがとうございます。

FPSになるととたんに描写が多くなってしまいました。

グロとエロの境界が分からないので、難しいです。

こつこつ、間違っって選択しちゃうの、入れるかどうか迷ったんですが、困った上村見たかったんです。ごめんなさい

一話 VRFPSをしよう！野谷さんブートキャンプ編？

野谷さんと俺は、ハンドガンを片手に背中合わせて周辺を警戒していた。

最新の注意を払い、草を避け、つま先から地面の硬さを確かめるように、ゆっくりと足を降ろす。

それに合わせて、野谷さんもゆっくりと動く。

野谷さんの呼吸を背中を感じながら、カタツムリよりも遅い動作を意識しながら、確実に歩を進めていく。

周りの草木がガサガサ揺れ、ぬかるんだ地面をグチャグチャと言わせる気配が、少しずつ俺達との距離を詰めてきていた。

俺達は今、スタミナの消費を抑えて走る訓練を終え、ジャングル内でのBOTとの対戦訓練をしている。

俺と野谷さんに対するBOTの数は8。なんと四倍も戦力差がついている。

野谷さんは、この戦闘訓練を始める前に、この訓練の意図を説明してくれた。

「基本的に、初心者は倒した数と、倒された数が同じになって、初めて『一人』の戦力としてカウントされる」

ちなみに、それを数値化した値を『キルレート』と言い、俺のこのゲームの累計キルレートは0.78だ。1に届いてないので、倒した数より倒された数がかかり多い計算になっている。

「もちろん、このゲームはキルレートが重要というわけでもないから、気にしなくても良い」

そうは言われたもの、実際にあまり撃ち勝った試しのない俺にとって、この数字はもうちょっと上げる必要があると思うだ。

ちなみに、野谷さんのキルレートは、……聞くと俺の向上心が損なわれる事請合いなので、聞いていない。

「圭が、撃ち勝てないのは、音を聞けていないから」

「音……」

「音には、色々な情報がたくさん含まれている。

走っているのか、歩いているのか、フラグはまだ残っているのか、怪我しているのか、装備の重量、メイン武器、サブ武器どちらを装備しているのか、

前向きか、後ろ向きか、警戒しているのか、していないのか、そして、初心者か、上級者か。

他にも沢山の情報を音から得る事ができる」

「そんなに……」

「実際にやってみたほうが早い。これから、私があつた建物の裏から走ってくるから、曲がり角で待ち伏せして、撃ってみて」

「わ、わかった」

「音を聞きながら、私がついてくるのか、どういう武器を持っているのかを考えて」

「おう」

野谷さんが指差した先には、古ぼけた山小屋があつた。

野谷さんが、山小屋の左の方へと回っていったので、俺は山小屋の右へ。曲がり角を野谷さんが曲がった瞬間、俺を視認し難いと予想される物影へと身を隠す。

曲がり角との距離が短距離のため、サブレッサーつきのハンドガ

ンをチョイス。アサルトライフルは、もしもこの時のために背中ではなく、すぐに構えられるように地面に置いた。

あのFPSの鬼、野谷さんを仕留められるのか疑問だが、やれといわれたからには、やらないと合格はもらえないだろう。

待ち伏せという状況と、野谷さんを撃つという緊張で心臓が自分でもびっくりする位に高鳴る。

ガサツ、チャリ

曲がり角の向こうから、かすかに音が聞こえる。

チャツ

ガシャツジャキツ

ハンドガンのリロードをした音。ということは、今野谷さんはハンドガンを装備しているのだろうか。

ザツザツザツザツ

軽く走る音。音の距離と速度が考えるに、あと数秒で曲がり角を曲がると思われた。

ズシャアア！！パンパンパン！

と、曲がり角を曲がる前に野谷さんがハンドガンを発砲したようだ。走りを止める音と、微かに装備が衣擦れする音も同時に聞こえた。

俺とは別の誰かと交戦している『シチュエーション』だと判断。

待ち伏せしろと言われたが、これはチャンスだ！

俺が野谷さんで、この『シチュエーション』なら、今野谷さんが対峙している敵に撃ち勝つたと想定すると、音を聞きつけた敵がすぐに来るかもしれないと『警戒』する。

俺より数段・・・いや何百段も上の野谷さんなら、もしかすると来た道に戻って、曲がり角に顔を出さない可能性すらあるはずだ。

そう考えた俺は、ハンドガンを構え、中腰で音を鳴らさないように細心の注意を払いながら、曲がり角へと小走りで近づいた。アサルトライフルは、取る時間がもつたないのであの場合へ捨てた。

パンパンパンパンパン

どうやら『手こずっている』ようだ。発砲音から、野谷さんがどこを向いているのか分からない。もしも野谷さんが、曲がり角を向いて銃を発砲していたら、ここは飛び出しても冷静に対処されるだけだと思ったので、飛び出したい気持ちを抑えて待機。

パン・・・ガシャッ

リロード！！

そう思った瞬間には、俺は体全体を回転させて、曲がり角から身を出していた。

ジャキ

キュンキュンキュンキュン！！

野谷さんが、俺に背中を向けてリロードをしているのを確認でき

たときには、俺の銃は既に火を噴いていて、サプレッサーによる独特な音と、空薬莖だけを俺の手元に残しながら弾を発射。

次の瞬間、野谷さんは膝から崩れ落ち、その場に倒れた。

やったか!?

野谷さんの体からは、確かに赤い血液が静かに流れ出ていて、血溜りを少しずつ広げていた。

野谷さんを倒したのだ。

緊張感から開放されて、俺はゆっくりと銃を降ろした。

と、野谷さんの手がぐいっと突然動き、ハンドガンを俺に向けた。銃口と目が合う。

死んだ振りー!?

そう思ったが、時既に遅し。綺麗に俺の眉間は撃ちぬかれてしまっていた。

「惜しい」

一瞬で0になるHPの向こうで、血の海に沈みながら、野谷さんがいたずら成功といった感じで、かわいく微笑んでいた。

「敵を倒したら、キルログをちゃんと確認する事」

「はい……」

「目の前に広がる光景が、決して正解とは限らない。」

目の前に死体があつて、気にせず通り過ぎようとする。

突然その死体が飛び起きる。

その死体の下に敵が要る。

その死体の横にクレイモアがしかけられている。

もしも装備に余裕があるのなら、二発くらい撃ち込んだら良い。

死体は『怪我をしない』」

「なるほど」

このゲームでは、ダメージを受けるとその部位に怪我をして血を流す。

そして、死んだアバターには、ダメージを受けたとしても、その瞬間血しぶきのエフェクト自体は発生するものの『怪我をしない』。それを利用して、そのアバターが、死んでいるのか、生きているのか、判断すれば良い。

「圭のさっきの動きは、とても良かった。音だけを聞いて、ちゃんと待ち伏せの状態を解除して、不意打ちを狙ってきていた。

ただ、私の足音を聞いて、フル装備だというのを想像できていなかったから、ハンドガンで挑んでしまっていた。圭の攻撃で、私のHPは30%ほど減っていた」

「そうか、立ち止まるときとか、かなりの音がしていたものな」

今から思えば、「ズシャアア」なんて、砂をまき散らす音が聞こえていた。

「そう。それを予想できていたら、ハンドガンでは挑まなかった。予想できなくて、ハンドガンで挑んだとしても、私の装備を見た瞬間に、狙いを頭に集中するべきだった。

ヘルメット装備だけど、体よりはダメージが通った」

「ふむふむ」

野谷さんの足音を聞いて、飛び出すと決めた時点で、アサルトライフルを取るべきだったのか。

野谷さんの姿を見たとき、気持ちだけが先走ってどこを狙うのが疎かにもなっていた。

気持ちを落ち着かせて、対処するのが大事なのか。

「まは、音を聞いて、敵の動きを予想する事はできている。あとは、場数をこなすしかない」

そう言いつつ、野谷さんはウィンドウを表示して、いくつか操作をする。

system : Active BOT (8)

ウィンドウの向こうで、野谷さんが静かに笑った。

「さあ、ゲームを」

早い話、敵の音を聞き分け、二人で8人のBOTを倒すのである。

この戦力差は、野谷さんでも対処しきれない数だ。

つまり一度に8人を倒すのは『無理』。

なら、どうするか？

音を聞きながら、音を立てずに、静かに倒すのだ。

そして、確実に数を減らしていく。

「このBOTは、自然に私たちに近づいてくるように設定されている。あんまりのんびりしていると、殺られる」

野谷さんがそう言っていたが、だからといって急いで動くわけには行かない。

草や葉、蔦、果てはぬかるみまで全て考慮に入れて、慎重に動き、音を最小限に抑える必要がある。

匍匐前進なんて論外。中腰、いつでも武器を発砲できるように、常に両手でハンドガンを構える。

後ろは野谷さんに任せている。野谷さんは、俺の歩きに合わせて猫のようなしなやかさを持って無言で動く。

言葉は要らない。

お互いに背中を合せ、呼吸を感じ、それだけでお互いの見てるもの、感じてるものを全て伝え合う。

ザザッ

BOT達の包囲がだんだんと狭くなっているのを音から感じるが、その音はまだまだ遠い。

ちなみにこのBOT戦へのチャレンジ、既に12回目となっている。

ハンドガンのリロードですら気づかれて、一気に距離を詰められるのだ。BOT同士のつながりも厚く、誰かが倒れると、一気に警戒しだす。

何度もリトライを繰り返し、ようやくBOT達の特性もわかってきた。次で決めたいところだ。

ゆっくりと慎重に歩き、包囲網の一辺へと近づいていく。

ガサッ

徐々に対象へと近づいているのが、音の大きさから推測できる。ゆっくりと近づく。

背の高い草の塀に阻まれた先に、敵の気配を色濃く感じる。ついに戦闘圏内に入ったのだ。

ズチャッ・・・ズズ・・・

敵は、ぬかるみの中をゆっくりと警戒しながら移動しているようだ。一步一步の間隔が長い。きよるきよると周りを見ながら移動していると予想できる。音の出方からして、一人で動いているようだ。

野谷さんと目だけで合図。野谷さんもゆっくりとうなずく。

ハンドガンをしまい、ナイフをゆっくりと引き抜く。

ズズ・・・ガサガサ

草の塀が揺れる。

ついに敵と俺達の距離が詰まったのだ。

ザザッ

敵が顔を出した瞬間、その顔を野谷さんが両手で挟んで固定。俺がその横から首筋にナイフを突き立てた。

微かな骨の抵抗感と、肉の間を滑る鉄の塊の感覚が、俺の手に伝わる。『ヒュッ』という空気の漏れ出る音と、『ごぼごぼ』という血が気管に詰まる音が同時に聞こえてきて、その一瞬後に、血が流

れ落ち、俺の手を濡らす。ここまでリアルに作り込まなくて良いのに……。

余談であるが、VRというゲームジャンルがこの世に生まれ落ちて、世論のゲームに対する批判は一気に高まった。

ゲームにとって、おもしろさの一つの要素として『リアルさ』は必要な物であった。

リアルな水、リアルな自然、リアルな生き物。

そして、このFPSとしての『リアルさ』とはつまり、人間に対するリアルさだ。

リアルな内蔵、リアルな血、リアルな感触。

昔から、ホラーゲームや、戦争ゲーム、対戦ゲームに対する世間の目は冷たい物があった。

曰く「犯罪を助長する」

曰く「いじめに抵抗がなくなる」

曰く「戦争へ人を駆り立てる」

そうかもしれないし、そうじゃないかもしれない。

少なくとも俺は、ゲームとリアルをちゃんと区別しているつもりだし、ほとんどのゲームプレイヤーもそうだろう。

実際は、人口数に対する犯罪率は、科学の進歩と警察のがんばりのおかげで、日本に限って言えば着実に減少傾向にある。

まあ、実際、問題があるうとなかろうと、人がゲームに対する欲求はとどまる所を知らなかった。もっとリアルなゲームを！もっと面白いゲームを！！

想像して見て欲しい。

ホラーゲームをしていて、ぬいぐるみが落ちている。拾い上げると、そのぬいぐるみは崩れ落ちて、赤ちゃんの泣き声と共に、ウジ虫が体中を這い回る。

戦争ゲームをしていて、上空から爆撃機が爆弾の雨を降らせ、蹂躪され、最後には核の炎に巻き込まれて体が燃える。

対戦ゲームをしていて、敵の腕を殴り折り、骨が露出する。

グロテスクかもしれないし、残酷かもしれない。

しかしそれは、ゲームを盛り上げる大事な要素で、プレイヤーに対して色々な感情を湧き起こさせる。

一つの新しい描写エンジンができあがると、それを利用して色々なゲームができあがる。健全、不健全問わず、それこそいくらでも。今では、沢山の個人、企業問わずに、作ったゲーム世界をリンクさせて、一つの巨大なプラットフォームとして形成しているゲーム群すらある。

一つの国が、残酷なゲームを禁止した。

だから何だ？

他の国が許可しているのなら、そこから輸入すれば良いだけではないのか。個人で所持するゲームソフトにまで、国は口出しはしない。

そうやって、この『HALLO POINT』も、一種のリアルさを持ってこの世に生を受け、俺達はそこで楽しく遊んでいる。

絶命した敵をの体を支え、音を出さないようにゆっくりと地面に横たえる。

辺りの気配が一斉に活性化した。俺達の居場所を必死に探ろうとしているようだ。

ガッツ！ザツザツザツ

今倒した敵の近くに居たのだろう、確認しようと小走りで近づい

てくる気配が一つ。

俺はすぐさまナイフを戻し、ハンドガンに装備を変更。既に手についた血は綺麗に消えていた。

野谷さんを残し、俺は気配へと向かって一気に跳躍。背の高いくさむらへと突っ込む。

突然の敵の出現に、小走りであったBOTの体制は一瞬崩れる。敵が銃を構える前に、俺のハンドガンは火を噴いていた。

キーンキーン！

サプレッサーの音すらも大きく感じられる。ログを一瞬で確認、きっかり死んでいる。

BOTは膝から崩れ落ち、頭を地面へとたたきつけようとする所で、俺の伸ばした手が間に合い、大きな音は立てなかった。そのままゆっくりと地面へと降ろす。

いよいよ二人連続で倒された所で、敵の気配が慌ただしいものになった。

辺りから「ガサガサ」「ガチャガチャ」色々な音が混ざり合っているらしい。

野谷さんと合流し、また敵の気配を探って整理する。

今度は二方向から気配が、一気にこちらに近づいてきた。

野谷さんが、一方にナイフを投擲、「グッ！」と悲鳴が聞こえた。その悲鳴を合図に、俺と野谷さんは同時に走り出し、それぞれの気配の元へ、できるだけ音を出さないように、堅そうな地面を選んで走る。

飛び込んだ先には、ハンドガンを片手に、ちょうど後ろを向いている敵が居た。

ハンドガンを敵のヘルメットへと押しつける。

どうやら今回は成功しそうだ。

「ちょっと勉強してくる」
「ん」

野谷さんとの訓練も一段落ついたので、俺は一旦そう言って『HALLO POINT』を終了。

VR接続はそのままに、『HALLO POINT』の攻略サイトを覗いていた。

眼前にいくつもウィンドウを表示し、ページをめくっていく。

クリアリング、部屋の中を確認し、中が安全かどうかを見極めること。

アイアンサイト、銃器にある照準器の事。

カバーリング、物陰に隠れること。

キャンプ、待ち伏せし、敵を待つこと。

カッティング、リール、決め撃ち、壁抜き、等々。色々な用語、

技術解説が踊り狂う。

見てるだけじゃ全然わからんな。

ここら辺の技術解説は、野谷さんという講師が居るため早々と読むのを辞め、動画のページへ。VR接続でここに来たのは動画を見るためだ。

こういったVRゲームの動画は、画面で見る2D動画ではなく、

実際にゲーム内にいるかのように、その記録を見ることが出来るV
R動画とでも言うべき形式になっている。

他人のプレイを、幽霊のように色々な角度から眺めて勉強するこ
とが出来るのだ。

もちろん、このサイトにも、そういった上級者達のプレイ動画が
沢山上がっていた。

早速動画をダウンロード。・・・やけに要領がでない・・・。
数十秒後、ダウンロードが終わり、再生ウィンドウが表示される。
点滅している再生ボタンをクリック。

と、画面が突然ブラックアウト。周りに表示していたウィンドウ
も全てフリーズしている。

「あれ？」

ウィンドウを閉じようにも、動画再生ウィンドウも完全にフリー
ズしている。

「んん？」

ひょっとして、ウイルスにでも引っかけってしまったのだろうか。
慌てず強制終了コマンドを実行。

効かない。

どうしたものか。

突然、眼前に一つ、新しくウィンドウが表示される。

- s e x ? - 1 0 s e c

f e m a l e

m a l e

- - - - -

性別を聞いてきているように見える。

8

カウントが刻一刻と削られていく。

5

俺英語苦手なんだよな。男ってどっちだ？

4

時間が無くなる。内心焦った俺は、慌ててウィンドウに指を押しつけた。

ええい！こういうのは大抵上が男に決まってるんだよ！

s e x f e m a l e r e a d y

突然脳を揺さぶるような衝撃が、俺を襲った。

そこで、俺の意識は完全に暗闇に落ちてしまった。

新しい接続を感知。

シークエンスを開始。

形成。形成。形成。形成。

一話 RPPGって、なじりじって事ですよ？ (前書き)

山城の気持ちがよく分かるよね

「話 RPGって、なりきりって事ですよ？」

「う……」

体全体が、重たくなったようにだるさを感じる。

地面に押さえつけられて、開いた口から、土が入ってくる。

「うへ、へッ」

脳を揺らされて、気絶したところまでは覚えている。

「う……」

目をゆっくりと開ける。

……森の中？

鳥達の声が遠くに聞こえる。静かな風になびく木々の音に包まれ、日差しは暖かく俺を照らしていた。

俺の眼前を、ダンゴムシがのそのそと歩いている。

「……」

体に付いた土埃を、無意識に手で払いのけながらゆっくりと身を起す。

ひどく頭がぼんやりとする。

とりあえず、周りを確認しなくてはならない。

どうやら、野谷さん達と一緒にゲームをしていた、ジャングル地帯とは違い、木々の感覚もかなり広く、太陽光が普通に入ってくる、

森というより林の中といった感じがする。

木々の匂いの合間に、微かに太陽に焦がされた土の匂いが混じる。

「何だ？ここは」

え！？

自分の口から出た声に、しばし呆然とする。それはどう聞いても女性の声だった。

冷や汗が、体中から吹き出る。

「あー、あー」

自分の喉が震えて、口から声が出るのが分かる。

か細く、どこか中性的な声。しかし、どう聞いてもそれは、女の子の声だ。

「嘘……。嘘うそお！？」

手の平を見る。

細い指の生えた手が見える。

喉を触る。

のど仏が無い。

下を見る。

控えめだが、胸が確かに膨らんでいる。

「ええ……？ええええええ？」

落ち着け、落ち着こう。上村 圭。

まず何でもこういう事態になっているのかだ。

一つずつ、検証しなければいけない。

? 夢

古典的な例だ。ほっぺをつねる

「いふあい」

夢じゃ無い。思ったより痛くは無いが、確かに自分の肉が引っ張られ、微妙な痛みを感じる。

? 幻覚

どっかの誰かさんみたいなの、変な能力者の術中にはまり、こつこつ状況に陥ってる可能性は？

……どうやって検証すれば良いんだろうか。保留。

? 寝てる間に誰かに悪戯された。

何か突拍子も無いが、そう考えるのが一番現実的な気がする。というか俺の乏しい想像力では、これくらいしか思いつかない。

そうと決まれば！

俺はグイッと洋服を引っ張り、自分の体を確認することにした。

南無三！

system : error

装備を必要以上に変形させる事は出来ません。

装備を変更する場合は、装備変更画面にて装備を変更してください。

ヘルプ機能をご利用の方は、オプションから、ヘルプ画面を表示させてください。

突然眼前にメッセージが流れる。

……VRゲーム？

そうか、俺は気絶する前に、VR環境下で『HALLO POINT』のサイトを閲覧していて、ウイルスか何かにやられたんだ。

それで、ウィンドウが出て、性別を聞かれて……。

あー、つまり俺ってば、性別間違えちゃった系？

この『装備を変更する場合は』というメッセージが出るということは、つまり、装備の概念があるという事だ。何らかのVRゲームの中に居るといふ可能性がとても高い。

これがゲームなら……。

右手を突き出して、ウィンドウを表示させる。ちゃんと出るな。表示されたウィンドウの中、装備やアイテムといったコマンドの中に紛れた、オプションを選択。

オプションの様々な項目から『表示』を選択。なぜここがゲームの中か分からなかったのは、もちろん理由がある。『GUI』が無かったのだ。

HP、MPを始め、ショートカットアイテムウィンドウ、スキルショートカット等、とりあえず全ての項目の表示をオンへ。

一気に様々な情報が眼前に広がる。視界が遮られて仕方が無いので、それらの表示を小さくしたり、要らない表示を消したりして整理。ようやくVRゲーム内に居るのだと分かる、落ち着くことが出来る光景となった。

さて次は

ウィンドウをオプションから一旦初期画面へと戻し、『アイテム』

を選択。

眼前に沢山の細かい四角い枠がひしめくウィンドウと、俺の小さな姿が表示されていた。

むむ。

ウィンドウに表示されている自分をタップ。拡大表示する。

何とまあ。

そこには、『自分が女性だったらこんな感じなんだろうなあ』と安易に想像できる、容姿を持った女の子が居た。別に、見れない事は無い容姿をしている。

黒い艶のある、短めの髪は野谷さんとお揃いだが、若干現実の俺を反映しているようで、毛先に行くほどに少しずつ外に跳ねていて、そこだけは野谷さんの髪型とは違う。

等身も、女性としてはちょっと高めであるが、まあ普通だろう。

目の形も、口の大きさも、眉の形も、普通である。

普通の女の子である。

どこにでもいそうな女の子。道ですれ違っても、一瞬で忘れられそうな女の子だ。

ネタで女の子キャラクタを作ってみて、「無編集だぜー!!」「っ て笑わせようとして出て行っても、普通すぎて逆に引かれそうなほどに普通だ。

平均的な容姿の男子が、ゲームに任せて女の子キャラを作ったら、こいつも特徴の無い普通な女の子になるのか。

技術の進歩に感謝というのか、なんというか。

さて、何のゲームの中に入ってるのかは分からないが、どれくらい俺が気絶していたのか分からない以上、さっさとログアウトした方が良いだろう。このゲームのウィンドウ上から、リアル時間を読み取れそうもないし……。

と、ウィンドウを初期画面に戻そうとしたとき、突然眼前中心に文字が躍り、声が響いた。

「ようこそ、STAR・DUST・ONLINEへ」

っ!?

「貴方達はもうログアウトできません
貴方達の肉体は朽ち、心だけがゲームに取り込まれました」

ログアウト出来ません!?! 肉体は朽ちた!?!

あまりにも、無慈悲で、無機質な声と、それを聞き間違えでは無いと証明させる、字幕文。

「どうぞ。お楽しみください。死んだら、生き返りません。

ようこそ、STAR・DUST・ONLINEへ」

呆然と立ち尽くす俺を置いて、なおも声は響く。

「良い旅を。良い第二の人生を」

激しい目眩を感じながらも、ウィンドウを操作……。

「はは・・・無い」

そこには、『ログアウト』の文字も、『ゲーム終了』の文字も、確かに、存在しなかった。

強制終了コマンドを入力するも、それもだめ。

緊急離脱コマンドもダメ。

外部アプリも動作しない。

緊急救命信号を出しても、応答無し。

震える手をゆっくりと動かしながら、ヘルプ画面を表示。

何かのヒントが無いかどうか、探す。

スターダストオンライン・マニュアル

基本操作

戦闘

チャット

.....
.....
.....
.....
.....
.....
.....
.....
.....
.....
.....
.....

約一時間、無心に指を動かして、何かが無いか、目をぎよるつかせて、ヘルプの隅から隅まで文字を追う・・・。

しかし・・・、無い。

このゲームから『落ちる』方法は、確かに無かった。

突然、吐き気がこみ上げ、その場に跪く。土の匂いに、むせかえりそうだ。

「はっ……はっ!!」

勿論、バーチャルなゲーム内ではない、この体で、『物を吐く』という動作をする事は出来ない。

「はっ……はあ……!」

それでも、この、ポリゴンで構成された体のどこかから、沸き上がる異物感を抑えることはできない。息が出来ないほどに、苦しい。

「う……!げほっ……かはっ」

過呼吸気味になり、息苦しさはピークに達した。思わず喉に爪を立てて、かきむしる。

もちろん、自分自身で攻撃することは出来ないので、女の子の鋭い爪を突き立てても、柔らかかそうな喉の皮や、肉は破れる事は無い。それでも、それでも。

生きている証を、どこかに見つけたかった。

「はっ……!!……うぐっ……」

こぼれ出る嗚咽を抑える事ができない。両手で口を押さえて、自分自身を抱き寄せる。

「ぶ……、うぐ……ひぐ」

涙がこぼれるのを、止める事が出来ない。

あまりの『現実』に、押しつぶされてしまいそうだった。

いや、押しつぶされてしまった。

いくつもの『もしも』と、いくつもの『たら』と、いくつもの『れば』が、俺を駆け抜ける。

もしも、死んでも大丈夫だったら？けど、どうやって確かめる？
本当に死んで終わりだったら？

あの時ああしていれば……。

「ふえ……ああ……ああああー！」

俺は、強くない。

「ああああー！うつつ……！」

俺は『特別』じゃない。

何も人より秀でてる物も無いし、自慢できる事も無い。

物語の主人公でも無いし、ヒーローでも無いし、正義感なわけでも、悪者でもない。

「うわあああー！あああああー！」

きっと、誰かが虐められてたって、そいつを助けに入るような、お人好しでも無い。

「ぶぐつ。うつつ……」

自分自身の『声』ですら泣くことの出来ない、惨めさが、俺を打

ちのめす。

こんな状況におかれて、俺にできる事って何だ？何が出来る？俺に？何が？

何が？一体何が？何が出来るって言うんだ？

今まで何やってきたんだよ？

俺に？何が？

何が……。

泣く事しか、出来てない俺に何が。

「げぼっ……おえ……。ぐしゅ……」

いつまで、こうしていただろうか。もう、声すらも出なくなっていた。

「ぐず……」

あいつらとも、もう会えない……。

「ぐず……。う……」

志貴崎さん、野谷さん、山城さん、鬼谷さん、irisさん。そして、お姉ちゃん。

「……」

皆の顔が浮かんでは消える。もう会えない？

「・・・そんなの・・・許さない」

ずびつと盛大な音立てて、鼻水を引っ込める。

もう泣き疲れた。

いつまでも跪いて、顔をぐしゃぐしゃにして居ても仕方が無い。

俺は、自分に必死に言い聞かせる。

これは『非常識』

それは、俺が今までの人生で手に入れた、たった一つだけ、他人とは違うと胸を張って言える不思議な『力』だ。・・・胸は張れないかな。

これは『非常識』

俺は、自分を騙す事で、自分の身を、ある種の危険にさらしても、比較的落ち着いていられる。

これは『現実』じゃない。

あの姉を持った弟が、どういった人間になるのか？その答えが、俺だ。

これは『現実』じゃない。

ゆっくりと、心を落ち着ける。

吐き気は、いつの間にか消えていた。

状況は、刻一刻と変わる。

野谷さんに言われたことを、思い出す。

一番大事なのは、不足な事態に対応できること

今がまさに、その時だ。

思い出せ、彼女に教えられたことを一つ、一つ。

目の前に広がる光景が、決して正解とは限らない。

音には、色々な情報がたくさん含まれている。

大事なのは、楽しむこと。

さあ、

さあ、

「ゲームを」

頭が急激に冷えてきたのを感じる。

そもそも、あの声は、朽ちたとは言っていたし、死んでも生返らないとは言ってはいたが、良い人生をとも言っていた。

これは、根本的な前提として本当の『デスゲーム』では無い。

死んだら終わりなのは、『現実』でも終わりだ。

ならば・・・、何か道はあるはず・・・。

>> 圭 <<

!?

そこまで考えた所で、脳内に声が響く。この声は、irisさん！？

>> バックドアから進入するのに、少々時間がかってしまいました。圭の思考が大変混乱していたため、私の声が届かないようでした。大丈夫ですか？<<

「え！？ええ！？irisさん！？どういう事！？」

>> 圭は、突如異質なプログラムの介入を受け、ここに『接続』されてしまいました。経路から判断したところ、巨大なサーバーの中の用ですが、詳細は不明です。ただ、圭が『部屋』を通じてVR環境下でのアクセスをしていたため、私も進入する事が出来ました<<「ええと・・・？」

>> 現在圭は、このプログラム・サーバーにて接続をロックされており、ログアウトできない状況にあります。圭のコンピューターへの管理者権限が私には無いため、接続を正規の方法で切る事ができません。圭の接続を無理矢理切断する事は可能ですが、おすすめはできません<<

「ちよ、ちよつと待って！？」

どういう事だろうか。ひどく混乱する。そもそも無理矢理切断する事は可能って！？

>> はい？<<

「俺、死んだんじゃ？」

先ほどの『声』は確かに言っていた。体は朽ち果て、心だけがゲームに、と。

>> いいえ<<

「・・・え？」

>>圭、どうかしましたか？<<

「俺、生きてるの？」

>>はい、心拍数、思考パルス共に正常値を示しております。ただ、脳がひどく活性化している点が異常ではありますが、生命に関する異常値は見当たりません<<

「ええええええー！！」

何！？何だよ！！俺の今までの数時間の嗚咽とか泣言とか、葛藤とか、決意とか、色々、諸々全部無駄かよ！！

何だよ！もう何！？俺が巻き込まれる状況って、何でこんな重大そうで、実は重大じゃなくて、やっぱり実は重大みたいな良くわからない状況になっちゃうんだよ！！

>>圭、ひどく混乱しているようですね。深呼吸をおすすめします

<<

「うるせー！！！！」

森の中で、俺はひたすらに叫んで現実逃避を繰り返すのであった。

一話 RPGって、なりきりって事ですよ？（前書き）

会話中心回

読みにくいかな？読みにくければ教えてください。

「二話 RPGって、なりきりって事ですよ？」

>>圭、落ち着きましたか？<<

「ああ・・・」

明るい森の中、さんざん叫んで現実逃避を続けた俺は、数十分の時間をかけてようやく心を落ち着けることが出来た。

土の上にあぐらを・・・スカートなので、女の子座りをして、irisさんとの会話に集中する。

「まだ混乱してるけれど、大丈夫」

>>そうですか<<

脳内にirisさんの声が響くこの状況には、まるで俺の頭の中にirisさんが入っているように感じられて困惑するが、慣れるしかないようだ。

「まず、これまでの事を整理しよう」

>>その方が良いでしょう<<

「俺はVR環境下で、何かのプログラムによってここに飛ばされた。その時、頭をハンマーで殴られた見たいな凄い衝撃で気を失ったんだ」

>>そうですね。圭はあの瞬間、完全に意識をなくしてました。思考パルスが極端に弱まり、アバターが制御不可能な状態にまで陥りましたが、圭のコンピュータはその状況を感じできず、ネットワークからの切断は行われませんでした<<

「まず、そこだな。何故俺はあの瞬間ログアウトしなかった？」

PCには色々な安全装置が付いている。PCやプログラムを強制

的終了させるコマンド、完全に制御不能に陥った場合、警察や救急車、家族などに救難信号を送るコマンド。

そして、あらゆる体の信号を読み取り、寝たり、気絶したり、極端な心拍数の上下があった場合に、PCからの接続を切られる安全装置が備え付けられている。

>> 乗っ取られた、としか言いようがありません。圭のコンピューターの、全ての管理者権限が、このサーバーに握られています<<< 「このサーバーってのは、俺達が今居るここか？」

俺は、今自分が座っている土の上に指を突き立てる。

>> はい<<<

「つまり、リモートでのサーバーからのコントロールによって、俺のコンピューターは完全に俺の操作を受け付けない？」

>> はい<<<

だからあらゆるコマンドを受け付けないし、強制的な回線の切断も行われなかったわけだ。

>> そして、圭の思考パルスは弱まったまま、このサーバーへと接続されてしまいました。その瞬間、圭の脳の異常な活性化が認められました<<<

「それは、大丈夫なのか？」

>> 問題ないレベルだと判断できました。圭は、英語を学ぼうとした時に、頭を痛めたことは？<<<

「ああ、あつたよ。今まで使ったこと無い部分を使っているような気がするんだ」

例えば、新しいゲームを始めたときとか、スポーツを始めた時に

感じる違和感と似ている。新しい事に体と脳が追いつかなく、ひどく混乱し、知恵熱のような物が出るのだ。

>>それと良く似た状態でした。脳の全体が活性化し、新しい環境になじもつとしているような状態だと言えました。新たなニューロン同士の繋がりを感知しましたが、問題は無いでしょう<<

「ニューロン？」

>>『脳細胞』です<<

「それって、赤ちゃんの時に沢山できる、脳の信号の通り道か？」

>>そうです。圭は博識ですね<<

「ええ……」

これくらいは一般的な常識だとも思うのだが、irisさんは人を褒める基準がひどく曖昧だな。

脳細胞については、俺もつる覚えであるが、赤ちゃんの時に活発に成長し、ある程度の脳細胞同士が繋がり、それがシナプス……脳の中の電気信号が通る『通り道』となる。必然的に、この『通り道』の数が多ければ多いほど、思考の深度、IQ等に影響すると考えられている……はず。

「けどそれって、赤ちゃんの時にしか成長しないものなんじゃ？」

そう。普通、脳細胞の成長、繋がりは、赤ん坊の時にしかありえない現象のはずである。

>>いいえ、成人男性にも起こりうる現象です。実際の症例として、脳の半分が損失した人が、日常生活に問題ないほどに回復した症例もあります。これは、ニューロンの新しい経路形成も一因として考えられています。2000年代には既に、脳細胞は成長するという研究結果はありましたが、未だにその要因は分かっておりません

<<

「・・・その、要因が分からない現象が俺の脳に起っていると？」

>>そうですね<<

「それは、十分問題では？」

何だか、脳をいじくられまくっているような気がして怖い。

俺の知らない間に、脳の中の細胞が成長し、細胞同士が繋がり、わけの分からない電気信号が流されている所を想像する・・・。恐ろしすぎる。

>>少なくとも、圭個人に対する問題は無いでしょう。脳細胞が増えるという現象は、簡単に起こりえます。例えば、突然海外出張が決定して、60年以上住んでいた場所を離れて、全く知らない土地に来て、知らない言語、知らない文化に触れ、そこに適応しなければいけない人などには、今の圭と同じような現象が起こる人が居ます<<

「なるほど・・・。」

と言うことは、今俺の脳では、今まさにここに適応しなければいけないと、脳ががんばってるわけだ。

「つまり、ここが特殊な環境で、脳がまだ適応できていない、と？」

>>少し違いますが、そういう事です。そして、圭の脳は、恐らく既にその活性化は終わっていると考えられます<<

「?。」

>>圭がここに入ってから、私が、圭のコンピュータ・サーバー間以外との通信のやり取りが出来なくなっております。少し前から、圭のPCへのバックドアが遮断され、圭のPCの管理者権限も無いため、圭の各種パラメータのモニタリングができない状態となっております<<

「え？通信が出来ない？じゃあirisさんは、どこから俺の中に語りかけてるんだ？」

irisさんはAIで、本体は野谷さんのPCに居て、『部屋』に常駐しているはずなのでは？

>> 圭の思考パルスが極端に弱まった段階で、緊急事態が発生したと判断して、圭のコンピューターへ私の『コピー』を転送しました。つまり、私は現在、圭のコンピューターのローカル内に存在しております。

もつとも、外部ストレージや、卯月のコンピュータのバックアップが無いため、あまり役に立たない可能性が高くなりましたが<<「つまり、ミニirisさんって事？」

>> そういうことになりませう<<「なるほど、それはわかった。じゃあ俺の各種パラメータが見れないってのは？」

>> 思考パルス、バイタルサイン、脳の活性化度、血圧、その他諸々の情報にアクセスできません<<

俺の背中に冷や汗が伝う。それって……。

「それは、俺が死んだって事にならないのか？」

>> いいえ、ありえあません。

コンピュータと、このサーバーが通信をし続けているこの状況が、何よりの証拠です。

もしも、圭が本当に死んで、サーバーに取り込まれたとしたら、通信は切れ、私が介入できる余地はありませんでした。

また、通信のデータ量を確認したところ、圭の思考に合わせてデータ量の増減が確かにありました。これは、圭の体と脳が『生きている』証拠に他なりません<<

「そうか・・・」

ひとまず安堵する。

>>そして、コンピューターが『人を殺す』事はあり得ません。

そもそも、人の脳の神経系への信号を、コンピューターが『横取り』しているだけの現在のコンピューターのVR技術構造から言って、人の体、脳を破壊するような動作をさせることは不可能だと言えます。ただ、圭は、ここにアクセスする段階で、脳の細胞が活性化しております。突然の接続切断による、サーバーとの接続解除は、極力避けるべきです<<

「死ぬ事は無いが、悪影響があるかもしれないわけか」

>>そうですね<<

「それじゃ、この『ゲーム』をどうにか死なずにクリアする事には変わりはない、と」

>>そうなりますね<<

「できるかな、俺に」

>>私は頼りないですか？<<

irisさんが、気持ち落ち込んだ声を出す。そんな声を出さなくても・・・。

「まさか。irisさんが居れば何だって出来そうだ」

>>がんばります<<

irisさんの存在証明のためにも、俺は一人・・・いや、二人でこのゲームをクリアしないと行けないわけだ。・・・今日中？

「ちょっと待って、今思ったんだけど、このまま日が暮れて、明日になって、また日が終わったりするとして」

>>はい<<

「そうすると、俺の現実での体は、栄養失調かなにかで死ぬんじゃない？」

今はまだ死んでいない。

だが、時間と共に俺の現実での体が、どんどん悪い方向に向かっていくのは確かだ。早ければ三日後には、自分の糞尿にまみれて自宅の部屋で生きを引き取る、俺の姿が……。

そもそも、あらゆるコマンドを受け付けず、安全装置も作動しないとなれば、約10時間後に強制切断される最後のコンピューターの安全装置も作動するかどうか、疑わしい。

背中を、また冷たい汗が伝う。

>>推測ですが、その心配もなさそうです<<

「え？」

>>ここ数時間分の圭の通信データ量増減時間と、現在のゲーム内時計を相対的に検証したところ、大変面白い事に、ゲーム内の時間がかかり早くなっているようです<<

「んん？」

ゲーム内の時間が早くなってるというのは、どういう事なのだろうか。

>>現在私は、圭のコンピュータへと介入することが出来ませんが、通信データを見るに、間違いないようです。

圭が先ほど取り乱した数十分間、データ量が大幅に増えましたが、そのデータ量が増えた時間は、何と1秒にも満たない時間でした。

まだ検証データが足りませんが、驚いたことに『現実』での一秒が、このゲーム内では一時間から、数時間という事になります<<「は…….？」

>> 大変すばらしい技術です。まさに神にも手が届くような、時代を先行く技術だと言えます。

どのような人物がこのような技術を確立させたのでしょうか。

どのような仕組みでこの現象を起こしているのか、現代のコンピュータ技術では再現不可能に思えます。まして、圭のコンピュータのようなスペックでは尚更です。

<< 今の私には、処理能力が追いつかず仮定を立てる事もできません

心なしかirisさんの声が弾んでいる気がする。AIが神とか言っちゃって良いのか？

「つまり、まあ一日や二日程度ここにいっても何ら問題はないわけだ」

>> そうなりますね<<

「・・・じゃあ、現実でのタイムリミットは何時間だと予想できる？」

>> 平均的な数値を言いますと、24時間以上はおすすめしません。ただ、生理的現象を考えて、10時間という時間を提案します<<

「・・・おーけー・・・」

>> 仮定として、このサーバー内における時間と、現実での時間の差が400倍付いてると仮定しましょう<<

「そんなに？」

>> 実際はもっと差が付いていることが予想されます。このような不足な事態には、常に最小値でリミットを付ける事が良いと思います<<

「わ、わかった」

さらに差がついてるって。俺はどれだけこの中で生活しないといけない事になるんだ？

>>単純計算で、4000時間。日数に直しますと166・67日の計算になりますね<<
「約半年・・・」

これがMMORPGだとして、クリアする事が目的と仮定して、レベルカンストするには適当な日数だと言える。正解にかなり近い数値だと思えた。

「受け入れないとな・・・」
>>そうですね<<

落ち込んでも仕方が無い。このゲームをさつさとクリアすれば、半年もかからないはずだ。それに、このゲームを楽しむとも決めていた。

「次に、あのアナウンスの事だが」

>>はい<<

「正直、呆然として何も覚えてない。記録してある？」

>>勿論です<<

irisさんは威張っているようだ。声の起伏は無いが、なんとなく分かる。なんともかわいらしい性格をしているよなこの人は。

- - - - -
- - - - -

ようこそ、STAR・DUST・ONLINEへ

貴方達はもうログアウトできません

貴方達の肉体は朽ち、心だけがゲームに取り込まれました

どうぞ。お楽しみください。死んだら、生き返りません。

ようこそ、STAR・DUST・ONLINEへ

良い旅を。良い第二の人生を

- - - - -
- - - - -
- - - - -

「・・・スターダストオンライン」

>>そうですね<<

スターダストオンライン。俺の知ってるあのゲームと同じならば、このゲームはとっくの昔にサービスを終了している筈なのでは？

野谷さんが確かに言っていた。「一ヶ月前に終了した」と。今からだと一ヶ月前前になるだろうか。

思わず辺りの様子を見る。

明るい森の中、木々や、俺が座っているこの地面の鮮やかな色彩、ポリゴンらしさを見せない風景には、俺の知っている『スターダストオンライン』の面影は無い。

木々は風になびき、鳥が歌って羽をついばむ。

こんな細かい描写、俺のやっていたゲームには無かった。木々は揺れず、風の音と、どこからともなく鳥の声が聞こえてくるのがせいぜいであった。

土をつかみ取る。

若干湿った土の感触がとてモリアルだ。匂いも、太陽に焦げた、栄養を沢山持つてそうに肥えた土の匂いがする。

と、突然手の平の土が姿を変え、ポリゴンの集合体に。

小さな小袋に包まれたアイテムへと変化した。名前が小袋の上に出て『エルアド近隣の森の土(小)』と表示されている。

昔このゲームをやっているときには、こんなに細かく土の名前ま

では書かれていなかったし、『土』なんてアイテム、無かった。
昔の記憶を頼りに、名前を指でこづく。
すると、アイテムの詳細なデータが表示された。

.....

エルアド村の近隣にある森の土。

豊富な栄養が含まれているが、イミルの木に含まれる毒を吸って
おり、この森に生えている草木以外には、あまり適応する事は無い。

識別：素材、レア度：1

.....

どうやら、近くにエルアド村という場所があるようだ。村と、木
の名前がタップできるように色が変わっているが、これでそれらの
詳細がさらに『めくれる』のだろう。イルミの木というのは、どう
やら周りの木々だと感覚的に分かるので、そのまま手の平を裏返し、
小袋を地面に転がす。

「俺はこのゲームをやっていた事があるが、あれからずいぶん様変
わりしたようだ」

>>そうですか。現在私は、ネットワークに接続できないため、ど
のようなエンジンが使われているのか検索することが出来ません<<
「まあ、けど操作とかは前と同じみたいだ。ここが俺のやっていた
ゲームと同じか、それを元にしたものとみて間違いなさそうだ」

>>そうですか<<

「さて、ここがスターダストオンラインだとして、問題がある」

>>なんでしょうか<<

「このゲーム、リミットがあるぞ」

>>?<<

「俺がやっていたときは、大抵半年から一年をかけて、この世界・
・というか、星をクリアするんだ。そして、クリア出来なかった場
合は、太陽がどんどん近づいてきて星自体が無くなる。キャラは口
ストしないが、その星特有のアイテムや職業が無くなる」

このスターダストオンラインは、時間軸を取り入れたゲームだっ
た。マンネリを回避するため、あらゆる要素が導入されては、その
プレイヤー達のがんばりの結果次第で残ったり、消えたりしていっ
た。

最終的には、それもバランスが崩れ、サービスも終わったらしい
が、大事なのはそこではないだろう。

問題なのは、クリアしないと太陽が落ちてくるという事。

>>なるほど。これでリアルな時間を気にする必要は無くなりまし
たね。ゲームのタイムリミットがそのままリアルでのタイムリミッ
トでもあるわけですから<<

「そういう事になるな。そして、その時は強制的に俺は切断され、
リアルに戻される」

そして、その時どういった悪影響が出るのかは、想像するしか無
い。

何も無いかも知れないし、大きな障害を残す可能性もある。

「死んだら生き返れないも、良い旅をとか良い人生をとかも、まあ
理解できる。だが、この肉体は朽ちたってなんだ?」

irisさんの話を聞く限り、俺の肉体は死んだことにはなっ
ていない。

じゃあなぜ、この文章はどうして入った?

貴方達の肉体は朽ち、心だけがゲームに取り込まれました

>> 何かの群衆サンプリングをしている可能性があります<<
「サンプリング？」

>> この時間に関する技術を始め、ここは、世に出ていないいくつもの技術が並列して運用されていると考えられます。つまり、圭がここに接続されたのも、何かのテストに巻き込まれた可能性が高いです<<

「人体実験？」

>> 体は使っていませんが、そういう事になるでしょうね<<

「むむ・・・」

>> 死んだと思わせて、そこから沸き上がる人の感情や、行動、思考パターンなどを採取していると考えられます<<

「どうしてそんな事を？」

そういった人間の行動パターンや思考を得るだけに、何でこんな大規模な実験をする必要があるのだろうか。

>>・・・この文言に、わざわざ『朽ちた』と入れているのを考えると、ほぼ100%そういった目的があるように思われます。いくつもの実験の一端として、そういう側面があるだけなのかもしれない<<
「なるほど」

頭二つくっつけ合せていても、実際に研究に関わっていない俺達があればこれ想像したところで、真意は想像の域を出ることは無いわけか。

「『貴方達』という事は、俺以外にも何人も居るわけだ」

>>そうですね。統計的な数値や、平均化した結果が必要ですから、ある程度の人数がここに接続していることでしょう<<<
「何人だと思う？あまりに人数が多いと、大事件になるだろ？それに、これが一回目の『実験』だとも思えない」

これが本当に実験で、巻き込まれたとしても、これが初めての実験だとしても思えない。どんな技術でも、最初は荒削りで、色々な段階をふんで今があるはずだ。倍率400倍なんて数字は、素人から見ても大きすぎる倍率に思える。

つまり、初めての実験ではない。

>>圭はするどいですね。私もそう思います。人数としては、300人〜600人といったところでしょうか<<<
「それだけ？」

ゲームとしての人数から考えて、その人口はいささか少なくは無いだろうか

>>あまりに大人数だと、流石に怪しまれます。これくらいが限度でしょう<<<
「……なるほど」

今までの事をゆつくり頭の中で咀嚼して飲み込む。大体何をやるべきなのかが分かった。

「とりあえずは、ここに居る間は一人つきりになるわけだ。これからどうするのか考えないとな」

>>二人？<<<

「ん？俺とirisさんだろ？」

>>他の皆は？<<<

「いや、巻き込まれたのが俺達だけだから、あいつらは……あ
「……」

あいつらなら、俺の後を追って突っ込んで来そうだな……。あ
わざわざ危険に突っ込まなくても良いのに。

「……来るかな」

>> 来ますとも<<

平坦なirisさんの声は、微笑んでいるようにも、自信に満ちて
いるようにも感じられた。

「話 RPGって、なりきりして事ですよ？」(前書き)

まだたかわないー

二話 RPGって、なりきりって事ですよ？

「さて、のほほんと森の中でいつまでも座ってられないな」
>>そうですね<<

あまりに訳の分からない状況が続いたとはいえ、こんなどこか分らないような森の中に、いつまで居てもしょうが無い。

まずは、寝床を確保しなければならぬ。

そうと決まれば、この森を抜け、村、もしくは街を見つけなくてはならない。

俺が以前プレイしていたゲームと同じ仕様のままだと、あまりに文明レベルが発達していない星で、人が少ない村の場合、その村は太陽が落ちて暗くなると、皆眠りだして街に入れなくなってしまっからだ。

太陽はまだまだ高いが、どれくらいの時間で村を見つけれられるのか、分かったもんじゃないしな。

立ち上がり、お尻についた土埃を払う。スカートから少しだけ土埃が舞う。

うーん、女の子の体とはいえ、自分の体だからな、何とも思わないもんだな、以外と。

元が平均的と自負している容姿の俺が、女の子になったところで、無難に女装したようにしか見えないので、辺に恥ずかしいとも思わない。・・・いや、慣れてる事自体に危機感を覚えるべきなのだろうか。

ここに来たときは絶望したが、あいつらも来るかも知れないという希望も出来たし、もう落ち込んだりしないぜ。

・・・そういえば。

「何で俺は、死んだと言われてすぐにそれを信じたんだ？」

今更ながらに疑問に思う。普通、死んだと言われても、すぐにはそれを信じられないと思う。

死んでみようとは思わないが、とりあえず保留にしてさっさと街を探し、安全を確保するのが、いつもの俺の行動パターンなように思えた。

それが、あそこまで取り乱して、泣きじゃくるのはおかしい。実際、今はなんとも感じていない。

>>このゲームの目的が、絶望的な状況での人の行動パターンのサンプルングが目的ならば、軽い催眠誘導か、情緒不安定、人工的に精神への負荷がかけられていた可能性があります<<

「そんな事ができるのか!？」

>>気絶している間に、何らかの心象風景を投影されたり、抽象的なイメージをすり込まれたりした可能性があります<<

「・・・なるほど。能力者の可能性は・・・微妙だな」

あまりにも効果が一時的すぎる上、数百人規模の人に一気に催眠をかけられる能力者、しかも実験毎に毎回能力を行使しなければいけない・・・、強力な能力者は替えが効かない以上、条件をそろえるのには難しい問題に思える。

>>そうですね。それにこの様な『暗示』レベルなら、これだけの技術力があれば十分可能だと考えられます<<

「まんまと罠にはまったわけだ」

>>しかし、圭はすぐに立ち直りました。流石ですね<<

「・・・いや、俺が強いわけじゃないよ」

>>そうですか<<
「そうさ」

皆の顔が浮かぶ。

まあ、またすぐ会えるぞ。

まずは、周辺状況の確認。

ミニマップには俺を示すの点以外には何も認められない。

モンスターや、人が近づいてくると、このマップに自分以外の点が表示される筈のだが、今は周辺には何も居ないようだ。ただ、気配を消したり、何かに擬態している敵がいらないとも限らない。

まだ動くことは出来ない。

次に、ウインドウを表示、項目の中から『マップ』を選んで表示。俺の居る場所がマップの中心でピコピコ光っている。それ以外はまっさらだ。

・・・これは世界地図表示か。

三つの大きな大陸からなり、大陸同士は大きな海に阻まれているようだ。またなんとアバウトな地形をしているな。この星は。

自分が行ったこと無い場所はマップには表示されないの、自分の地点をダブルタップ、一気に拡大。

そこには、『イミルの森』と書かれていた文字が、俺を示す点に被るように表示されていた。

イミルの森か

さつき、ここの土をアイテム化したとき、周りの木がイミルの木であると想像付いた。どうやら、ここに生えている木がそのままこの森の名称になっているようだ。

これ以上見ても仕方が無いので、とりあえずマップを閉じ、ウインドウを初期表示へ。

次に『アイテム』項目をタップ。自分の装備を確認する。

ついでに所持金もチェック・・・100G・・・宿代には間に合うだろうか？

- ・旅立ちの服
- ・旅立ちのスカート
- ・旅立ちの靴
- ・旅立ちの手袋
- ・初心者ナイフ

それぞれ初期装備のようだ。効果も、+3とか+5とか防御値加算するだけの、最低限装備といった所か。

と、特殊効果として、セット効果があるようだ。

- - - - -
- - - - -
- - - - -

旅立ちの服

旅人が最初に着る服。特に特徴の無い普通の服。

旅立ちの服・スカートorズボン・靴・手袋のセットを装備することにより、Luk値に+3の効果が発動する

- - - - -
- - - - -
- - - - -

『Luk』とは、プレイヤーに対する運の値だ。クリティカルヒットの出る確率に影響すると言われている。

が、その名前の通り、この値が低いと鍛冶が成功しないのだ、レアが出ないのだ、都市伝説みたいなジंकウスに事欠く事は無い、延々とプレイヤー達を悩ますパラメーターだ。

まあ、初期装備でLuk+3という数値が良いのか悪いのか良く分からないが、しばらくはこのままの装備で良いだろう。

次に、腰にぶら下がったナイフに手をかける。ナイフといってもかなりでかい。刃渡り20cmはあるんじゃないだろうか。

厚手の皮製の鞘に覆われて、その刀身は見る事は出来ない。

「ん・・・あれ？」

引き抜こうとしても、抜けない。見ると、ナイフの鏝に、皮バンドが掛かっていた。コレで動き回ってもナイフが落ちないようになっているわけか。

ピンっと、バンドを固定しているボタンを弾き、解放。

「・・・ふむ」

刀身に反射した自分の姿が、ぼんやりと浮かび上がる。あまり研がれていない。刃先も鋭くないナイフだ。

「すー・・・はー・・・」

気持ちを落ち着けて、リラックスする。右手にナイフを持ち、左手にナイフを歯をあてがう。

ジャッ

切れ味の悪い音を立てて、ナイフの刃が、俺の左手の上を滑る。が、無傷。HPも減っていない。

>>自分へのダメージは、ありませんね<<

「そうだな。これも以前と同じだ」

試しにぶんぶん振ってみる。

「犬も倒せなさそうだ」

>>ネズミも倒せなさそうですね<<

同時に口を開いたが、irisさんひどい……。

「……自分の腕くらい自覚してるもん……」

ウィンドウを表示、「スキル」項目を選択。

- ・斬撃
- ・キック
- ・応急処置
- ・ステップ

とりあえず、基本となる『基本攻撃スキル』に『斬撃』、そしてそれともう一つ『基本補助スキル』に『ステップ』を選択。

この『基本攻撃スキル』と、『基本補助スキル』にスキルを設置することで、それに対応したモーションをちよつとでもする事で、スキルが発動してくれる。

例えば、ナイフを構え、少しでも攻撃に移ろうとすれば……。

フオンッ

システムが俺の動きを感知。ナイフが綺麗な軌跡を描いて、横に振るわれる。モーションが制止した時点で、またナイフを動かす。今度はその先ほどの軌跡を戻るようなイメージ。

フォンツ

タイミング良くナイフを振るえば、システムが勝手にアシストを
かけてくれて、綺麗なフォームでナイフを振るってくれる。この拳
動も依然と同じだ。

そして、そこで足を少し後ろへと後退させると、

ダッ

まだナイフモーションの最中であつたにもかかわらず、俺の体は
一気に後ろへとスキップの要領で後退。

コレが『基本補助スキル』の特性だ。例外はあるが、ほとんどの
攻撃モーションをキャンセルして、行動する事ができる。これで敵
の攻撃を避ける。

>>なるほど。その二つの動作があれば、武器の扱いに長けていな
くても敵と戦えますね<<

「流石に素人が、剣やら弓やら、色々な武器をとつかえひつかえす
るのは難しいからな」

>>そうですね<<

そして、この二つからあぶれたスキル。

例えばキック。

キックは今、『基本攻撃』スキルに入っていない。

10個あるスキルショートカット枠の一つに選択して、使えるよ
うにする。後は、キックの初期動作モーションをすれば、キックス
キルの発動となる。この要領は『斬撃』と一緒にだ。

しかし、現在『基本攻撃スキル』に割り当てている『斬撃』は、

斬撃 斬撃 斬撃 斬撃とコンボを4〜5回繰返すことが出来るの

に対して、『基本攻撃スキル』に割り当てていない『キック』は、キック キックとコンボをつなげる事ができない。

その変わり、斬撃を始点として、斬撃 キック 斬撃、というようなコンボは可能だ。キック 斬撃、や、斬撃 キック キックは無理だ。

また、この『無理』というのも、職業が今の俺の初期職業『旅人』だから無理なだけであって、決まった手順でスキルを発動させれば、コンボとなる職業もちゃんとある。

格闘家などは、キック パンチ キック ジャンプ 跳び膝蹴りなどと、スーパーヒーローなみのウルトラCなコンボを華麗に決めることが出来ていた。ちなみに、ジャンプの後に飛び膝蹴りなので、端から見ると二段ジャンプしているように見える。バツタか。

とりあえず、斬撃とステップをメインに、キックと応急処置をスキルショートカットに登録した。

『応急処置』は、スキル発動してその場にとどまっている間、自然治癒力を高めて、HPが回復する速度を速めてくれるスキルだ。装備品以外のアイテムを持ってない俺にとって、まさに生命線とも言えるスキルとなっている。

『キック』は、対象となる敵を一瞬スタン、モーションキャンセルさせる効果を持っている。正直、スタンにはあまり効果が期待できないが、モーションキャンセルがあるのはでかい。

相手が魔法を使おうとしていたりすると、斬撃攻撃は相手をひるませる事が難しい。そこで、キックの出番だ。キックによるモーションキャンセル効果で、敵の魔法詠唱をキャンセルさせる事ができるのだ。

「さて、行くか」

>>>はい<<<

俺は、とりあえず太陽が落ちていく方向に向かって歩き出した。
まだ日は十分に高い。

正直、以前このゲームをやっていたというアドバンテージはとても大きい。初期スキルや、ある程度の職業に対しての知識がうる覚え程度には残っているからだ。

生産職はしていなかったし、子供が戯れにやっていただけなので、豊富な知識を持った上級者達みたいに、上手なプレイはできないだろうが、それでもまったく知識が無いよりはましだ。

日差しが射す明るい木々の合間を縫って歩く。

木々の間隔が広く、見通しもかなりいいが、獣道らしい道すらも無いこの森は、太陽が無ければ速攻で方向感覚をなくして迷いそう
だ。

もし、敵らしきMOBを発見したら、戦わずにゆっくりと離れ、
方向転換する方針だ。

まだ敵の強さも良く分からないし、いざとなったら街に逃げ込めるような状況ではないと、不安だ。

ちなみに、敵の強さもある程度対峙した時点である程度分かるようになっていいる。敵の頭の上にある名前の色で判別するのだ。

すごく弱い : 青 : ほぼ無傷で倒せる。獲得できる経験
値がほとんど無くなる

少しだけ弱い : 緑 ; 無難に倒せる。経験値に若干のマイ
ナス補正が入る。

同じくらい : 白 : 負けることはまず無いが、HPは満
タンが望ましい。経験値に補正は入らない。

少し強い : 桃 : ぎりぎり勝てるくらい。経験値に若
干のプラス補正が入る。

凄く強い : 赤 : 逃げる。一撃死の危険すらあり。経
験値にかなりのプラス補正が入る。

と、ざっとこれだけある。白、桃、赤は少なくとも今は対峙したくない相手だ。

二体以上居た場合、勝てる気がしないし、一体だけだとしてもかなりのHPを消費することになるだろう。

乾いた土は、ほどよく俺の足音を吸収する。

あまり広い森でも無いらしく、すぐに抜けられそう。

走り出したい気持ちを抑え、音を立てないようにゆっくりと歩を進める。

「ふう」

そして俺は、森を抜けた。

起伏の無い平原が、どこまでも続いている。

「さて、どうするかなー」

>>このまま歩くしか無いですか？<<

「うーん、周りを見ると、この森が少し周辺より高い位置にあるらしい。さっきのアイテムには、『エルアド村近隣の森の土』って書かれてたから、この森の外周をぐるっと回ったら、村が見えるんじゃないか？」

>>そこまで広くなさそうな森ですしね<<

「そうだな」

平原を横目に、のんびりと歩く。

遠目に、ゴブリンらしき物の群れや、動物がちらほら見受けられる。

細い川が流れ、鹿などの動物達が喉の渴きを潤している。

「ああいった動物は、攻撃しても逃げられる。今の装備じゃどうし

ようもないな」

動物を狩る事で、少しばかりの経験値と、肉と皮が手に入る。大抵その付近にある街や村で取引することが可能だ。

>>あの二足歩行の棍棒を持った奴らは？<<

「多分ゴブリンだ。一匹一匹は弱いが、群れるし、大抵近くにリーダーが居る」

>>あの一際大きい奴ですね<<

「ああ、そうだな。これだけ離れているし、おそつては来ないと思う」

遠くから見る分には、子供がわーわー走り回っているように見えてほえましい光景この上ないが、一度牙を剥くと群れで襲いかかってきて、非常にやかいだ。さらに、大声を出して近くの他の群れと『リンク』する性質がある。

『リンク』とは、その名の通り繋がりだ。

例えば、ゴブリンの場合は、群れの中の一匹とだけ戦いたくても、一匹が気いてしまえば、その群れ全てに伝播して、一斉におそつてくる。これが『リンク』だ。さらに、ゴブリンは大声を上げて、ある程度の範囲に居る同じ種類のゴブリンを呼び寄せ、大騒ぎになる。

>>ああやつて、うるうるして何をしているんですか？<<

ゴブリンは、あっちにいたり、こっちにいたり。まとまりと
いう物が無い。

「何もしてない」

>>何も？<<

「そうだ。特に頭の良いAIが入っているわけでも無いよ。プレイ

「ヤーヤ、敵対するMOBが近づくまで、延々あやっつろつろしている」

>>そうですか・・・<<

しばらくゴブリンを眺める。粗悪な棍棒を振り上げ、ボロボロの衣服を纏い、わーわーと行ったり来たりを繰り返している。いつまでも。

「・・・」

ゴブリンから目を離し、森の中にも木を配る。

相変わらず明るい森の中は、何のモンスターも、動物も居そうに無い。

「何かのイベントに関係しているのかも」

>>森がですか？<<

「まだ外周を歩き出して少ししか立ってないけれど、綺麗な円形をしている気がする。モンスターも居ない。何かのイベントで、重要な役割があるのかも」

>>そうかもしれないですね<<

「お、村だ」

40分ばかり森の外周を歩いた頃、遠くに村が見えた。30分も歩けばたどり着けそうな位置にある。

「森が高い位置にあってよかった」

>>そうですね<<

特に大きな施設も見当たらない村だ。畑らしき物が無いが、大きな道が地平線まで伸びており、人の営みを確かに感じる。

日もだんだんと落ちてきていた。

「今日は宿を取って、村で情報収集にするか。クエストがあれば、それをこなそう」

>>そうですね<<

森から離れ、村に向かって歩みを進める。周りにはモンスターも見当たらない。

>>ところで<<

「何だ？」

>>その口調は、外見と合わず不要な疑いをかけられる恐れがあります<<

「……女の子口調になれと？」

>>その必要は無いと思いますが、せめて一人称の『俺』は止めた方がいいかと<<

「……わかった」

「話 R P P G っ て、 なりきりっ て 事 ですよ？」 (前書き)

苦しいです。評価してください。と迷いました。

「二話 R P G っつて、なりきりっつて事ですよ？」

「ここはエルアド村だ。どうした、嬢ちゃん」

嬢ちゃん……。

村についた俺に、厳つい門番さんが語りかけてきた。
小さな村にしては、かなり良い装備を着ており、強そうだ。

こういった M M O R P G では、村にモンスターが入ってこないように、門番 N P C は M O B を一撃で倒せる装備が与えられている。
恐らく、この門番さんもそういった類いだと思われた。

門番さんの挨拶に返答すること無く、村に入ろうとすると、門番さんにガツと肩を掴まれた。

「……はい？」

「嬢ちゃん、挨拶をしないのはダメだぞ」

「は、はあ。こんにちわ」

「で？この村に何の用だ？」

門番さんは、完全に疑いの目を俺に向けていた。

「あの、えーっと」

「旅の途中か？」

「ええ、はい。まあ、そんな所です」

「一人で？」

「へえ！？は、はい」

なおも疑いの目を向ける門番さん。完全に怪しまれている。

「ふうん？」

俺の肩から手を離れた門番さんは、突然剣を抜き放ち、俺へ振り下ろしてきた。

は！？

突然の事であったが、咄嗟にスキル『ステップ』を発動。瞬時に駆動する足は、俺の体を一瞬で後ろへと追いやる。鼻先を高速で剣が通り過ぎていく。

ステップをふみながら、右手を後ろへ、鞘から革紐を指で弾き、ナイフを抜刀。横に構えて、いつでも対応できるように警戒する。

「ふむ。反応はまあまあだ。構えがどう見ても素人だが……。まあ、大丈夫だろう。服も、コレは南の方の服装だな」

どうやら、試されたらしかった。

「最近、飽食や盗人がこの村に入ろうと色々な手を使ってきててな。警戒中であった。許せ」

「……いえ、私も無礼な行動をしたので。すいません」

お互いに詫びて腰を折る。

「ようこそ、エルアド村へ。案内が必要か？」

「……えっと、情報収集ができる場所と、宿屋を知りたいのですが」

「なるほど。宿屋は向こうの煙が出ている家、酒場がその隣だな」

「ありがとうございます」

門番さんが指さした先には、煙突から煙を出した、周りの家より一回り大きい建物があった。

お礼を言つて、今度こそ街に入る。

>>・・・圭、どう思いますか？<<

黙っていたirisさんの声が響く。

「保留だ。まず宿屋で部屋を取る」

俺もその声に、小声で答える。

>>そつでうね<<

門番さんが教えてくれた建物に入る。

「いらっしゃい」

建物の中に入ると、小さなエントランスがあり、机がいくつか並べられている。典型的な宿屋といった風体をしている。

カウンターには、恰幅の良いおばちゃんが一人立っていた。食事の時間でも無いので、テーブルには誰もついておらず、エントランスには俺一人だけだ。

「一泊したいんですけれど、お代はいくらでしょうか？」

先ほどの門番の事もあるため、出来るだけ丁寧に話しかける。

「泊まりだけなら10Gだね、食事も食べるなら、一食あたり5Gだよ」

「じゃあ、夕食と朝食も欲しいです。20Gです」

「はいよ。部屋は階段を上がって、一番手前の部屋さね。お嬢ちゃん一人かね？」

「ええ、珍しいですか？」

「どうだろうね。珍しいとも言えるし、珍しくないとも言えるね。」

「ここには色々な人が来るからね。ここらへんは初めてかえ？」

「ええ、初めてです。簡単に説明してもらえませんか」

「そうかね。ちょうど暇な時間さね。聞いてくが良いいよ」

そう言っつて、おばちゃんは、カウンターから離れて、テーブルから一つ、椅子を持ってきた。

「座ると良いいよ」

「はあ、どうも」

言われた通り、素直に座る。

おばちゃんも、カウンターの途中で椅子に座りくつろぐ。

要約すると、エルアド村の簡単な概要はこうである。

エルアド村の基本的な収入は馬車による人や物の運搬によって成り立っている。そのため、農作業を生業とする人は居ない。

「ここまで王都から歩いてきて、馬車に乗って外に行く人、もしくはその逆。色々な人がここを通っていくのさ」

この宿屋には、畑があるが、あれはおばちゃんの趣味でいじっているだけであり、他にあるいくつかの畑も、共同畑で、特にそこから収入になるような農作物も作られていない。

物資は、王都に行く途中に立ち寄る行商や、王都から帰ってくる馬車に乗せてやってくるため、農作物を育てる必要は無いわけだ。

王都にほど近い位置にこの村は有り、まさに王都と外を行き来する人達にとつての、ベットタウンとなっているわけだ。

「村の前の大きな道路は、そういった意味があつたんですね」

「そうさ」

「今は、馬車は全て出払っているんですか？」

「そうだね。早朝から昼にかけてまばらに出て行って、夜、月が真上に昇るころに戻ってくるよ。酒なら私の所の酒を飲んで欲しいもんだね。まったく」

「はは・・・」

隣の酒場もおばちゃんか、家族が経営しているようだ。

なぜ、王都にほど近いこの場所に村があるのかというと、検問の強化などがあると、都に入れないことがあつたり、入る前に、長旅で汚れた馬車や自身を清めるために、この位置がちょうど良いからである。

道の駅ではなく、道の村と言つた所か。

「大体わかりました。ありがとうございます」

「いやいや。良い暇つぶしになるさね」

おばちゃんに礼を言つと、手の平をひらひらされた。

「そつえば嬢ちゃん旅人だね？金策はあるのかね？」

「はは・・・実はまったく無く。クエストとかありますかね？」

「クエスト・・・？」

おばちゃんの頭に疑問が浮かぶ。やばいな、あまりゲーム内の単語を言わない方が良さそうだ。

「えーっと、荒事の依頼とか？」

「そういう物なら、酒場にある掲示板に色々貼り付けされてるよ。そこで好きな仕事を選びな」

「ありがとうございます。後で見えます」

礼を言い、とりあえず酒場にはまだ行かず、考えをまとめるために、階段を上って、部屋へと入る。

「ふっ」

質素な机に、ベッドだけの狭い部屋だ。

>>・・・信じられない程に高度なAIです<<

irisさんの声が頭に響く。

「やっぱりそうか？・・・実はアレ、『人』って事はないよな？」

>>どうでしょうか。確かめるすべはありませんが、こんな小さな村にすでに二人。そうなると実際、この世界の何百・・・いや、何万人も『人』が居ることになります<<

「だよな・・・」

ベッドへ腰掛け、irisさんとの会話に集中する。

俺がこの村に入るときに門番さんを見殺したのは、門番さんが簡単なAIで動き、簡単な受け答えしか出来ないと思ったからだ。

それが、無視したことに訝しみ、肩をつかみ、プレイヤーに対して不意打ち、問答した。

宿屋のおばちゃんにしてもそうだ。

この村についての歴史や役割について喋り、自らの感情を露わに

して、俺の質問にも簡単に返答してのけた。

「あれがAIだとして、俺はirisさんと初めて『部屋』で会った時と同じ気分になった」

>>そうですか<<

初めて『部屋』へとアクセスし、irisさんと会話したとき、野谷さんにAIだと言われたときには内心大変驚いたものだ。

この村で会った人達に感じた違和感は、そのときの驚きと似たような感覚がある。

>>圭、私を普通のAIだと思いますか？<<

irisさんが突然そんな事を俺に言ってきた。いや、今までのirisさんの会話を聞いてて、irisさんを普通のAIだとは思わないだろ。

「いや、何か凄いAIだと言うのはわかる」

>>そうです。私は『凄い』AIです<<

自分で言っちゃったよ。

>>私には『命』があります。日本における『人権』も認められた、立派な日本国民です<<

「命・・・」

『命』、irisさんにはそれがある。それはつまり考えること。薄々ただ者ではないとは思っては居たけれど・・・。

>>そうです。私は生まれたとき、ただの一個のAIでした。そし

て卯月に育てられ、一緒にすごしているうちに『自我』を手に入れました。命・・・生きている事とはまた違う『命』。『命』という物は、まさに『自我』の事だと私は考えます。もし、彼らが本当にAIならば、彼らは・・・<<

「自我が無くて、人間のように振る舞うAIはいくらでも居る」
>>ええ、その通りですね。しかし、それには膨大なデータベースと、膨大な計算と、膨大な要領を占有します。それこそ、AI一人一人で街を作るくらいならば、本物の人間を街に住ませた方が手間が無いくらいに<<

AIへの問答は、至極単純である。『こう言われたら、こう返す』しかない。

それを何千、何万パターンも組み込んだプログラム。それがAIだ。

一人一人違うパターンを組み込まれて、それぞれの生活パターンを繰り返し演じる、0と1で構成された踊って嗤う、くるみ割り人形だ。

>>・・・しかし、もしも彼らが『自我』を持っているのならば、わざわざプレイヤーをこのサーバーに閉じ込める必要がありません<<
「・・・もしもあの人達に自我があれば、あの人達を使ってテストすればいいのだから」
>>そうです。そしてその事実から、彼らは『AI』だと言えます。かぎりなく正解に近いと思われる仮説の上で、ですが<<
「なるほど」

俺がこのゲームをやっていたときには、本当に簡単な『売る』『買う』みたいな簡単な会話しか出来ていなかった。

これからは、誰であろうと、普通に人と接する気持ちで行かない

と行けないのか。

「……考えることが多いな。今日の所は、街から出ずに、明日、朝日が昇り次第外でレベル上げするか」

>>その方が良いですね<<

俺は、ウインドウを表示、『プレイヤー』項目を選択。さらに、いくつか出た項目の中の『コンタクト』を指でタップ。

>>コンタクト……<<

「そうだ。これで名前の分かっているプレイヤーに、コンタクトを取る事が出来る。もしもあいつらが本当に来たとして、どこに居るか分からないとどうしようもないからな」

>>なるほど<<

名前入力欄に、皆の名前を打ち込んでいく。

・NOYA コンタクト失敗。ログインしていません。
・SM コンタクト失敗。ログインしていません。
・Miki コンタクト失敗。ログインしていません。
・nagi コンタクト失敗。ログインしていません。

予想はしていたが、まだこちらには来ていないようだ。

>>まだ時間としては、圭がここに入ってきて、現実での時間は一分にも満たないでしょうから、しかたないですね<<
「そっだな」

画面表示を一つ戻り、『掲示板』をタップ。

「これでプレイヤー同士のやり取りが出来る」
>>なるほど。これで他の人達と情報交換が出来ますね<<
「そういうこと」

外部とのやり取りが出来ず、攻略サイトも見れないこの状況では、
掲示板での情報収集が生命線となる。

想像通り、掲示板の情報量は凄まじい物があった。腰を落ち着けた今の状態だから良かったものの、あの森の中で開いていても、ともに情報を探せなかっただろう。

沢山あるジャンルの中から、『攻略』を選択。

「うわぁ・・・」

思わず中身を見てうめいてしまった。

- - - - -
- - - - -

トピックス

・助けてくれ助けてくれ助けてくれ助けてくれ助けてくれ助けてくれ
助けてくれ助けてくれ助けてくれ助けてくれ助けてくれ助けてくれ
助けてくれ助けてくれ助けてくれ助けてくれ助けてくれ助けてくれ
助けてくれ助けてくれ助けてくれ助けてくれ助けてくれ助けてくれ
助けてくれ助けてくれ助けてくれ助けてくれ助けてくれ助けてくれ

・迷える魂達よ、我らの唯一神イエノフ様がついに現世されたのだ。
すぐさま我らの隊列に加わり、世界を正せ(20)

・靈魂の導き館の前でウォッチ(301)

・このゲームで死んだら本当に死ぬ！絶対に止めておけ（67）

・死にたくない（1）

・本当に俺は死んだのか！？（2）

・太陽万歳！（378）

・そんなことよりテニスしようぜ！（20）

・

- - - - -

「.....」

恐らく、ここに来た当初の俺のように、各地で覚醒したプレイヤーが一気にパニックになり、掲示板に一齐に書き込んでいるのだろう。

ルールもへつたくれも無く、情報が乱れまくっている。

大抵が「助けてくれ」や「死にたくない」だ。

>>この状況は、しばらく止みそうにもありませんね<<

「そうだな。しばらくは静観するか」

いくつか有用そうなトピックを見つけたので、該当トピックを『お気に入り』に分類して、ウィンドウ自体を閉じる。

「……」

掲示板を見ていると、沢山の人がこの星へと来ているようだった。とりあえず、一週間くらいは掲示板はまともに機能しないと予想する。

あまりに色々と考えすぎた脳が、俺の思考をぼんやりとさせる。お尻の下にあるベッドが、やさしく『ギシリ』と音を立てた。

「少し、寝ようかな……」

>>そうですね。そのほうがいいでしょう<<

ウィンドウを再度表示。寝るのに不便なナイフ、手袋、靴の装備を解除する。……洋服は流石に脱ぐのは止めておこう。

ふとんにするりと入り込み、窓を閉じ、カーテンを閉める。

「おやすみ」

>>ええ、お休みなさい<<

良い夢を

そう、irisさんの声が聞こえた気がしたが、その時には俺の思考はすでに、布団のごわごわとした感触の中に溶けてしまっていた。

一話 RPPGって、なりきりって事ですよ？(後書き)

一部ネタバレ、『ダークソウル』

二話 R P G っ て、 なりきりって事ですよ？

圭

浅い眠りの中で、irisさんの声が頭の中で響いた。

「ん……ふぁ……」

ゆっくりと目を開ける。窓のカーテン越しに射す光は、眠る前よりもかなり暗くなっていた。もうそろそろ日が落ちるらしい。

静かな虫達の音色の中に混ざり、遠くから酒盛りをする人たちの笑い声が聞こえてきくる。

「……何時間ほど寝てたかな」

>> 『地球』と同じ時間で計測した場合、二時間ほどでしょうか<<
「そっか」

>> 少し早いです、夕食をの時間のようです<<
「わかった」

ゆっくりと身を起こし、ウィンドウを表示、アイテムを装備する。
この時間10秒程度だろうか。

「……武器を外すのは危険だろうか」

>> どういった危険があるのかわかりませんからね。しかし、この部屋の中であるのならば大丈夫だと思われます<<

「窓からの侵入や、ドアを開錠される心配は？」

>> そういうスキルはあるのですか？<<

「無い……いや、俺がやっていたときは無かった」

ダンジョン内にある鍵付の宝箱や、扉を開くスキルはあるが、それは町や村に対して適応されなかったはずだ。

>>これはゲームです。ゲームの範疇を超えないのでは？<<
「そう思うけど・・・。何か対策はたてておかないとな・・・。」

ナイフを装備すると、どうしても腰に鞘が出現してしまう。それを外そうとすると、『装備を外してください』とメッセージが表示されてしまうのだ。寝るのに邪魔になってしょうがない。

だが、いざというときに、せめて武器だけでもすぐに装備できるような状態にするには・・・。

「あ、ショートカットアイテム枠に入れば良いのか」
>>ショートカット？<<

俺は一度武器装備を外し、アイテム欄へとナイフを移す。その後、そのアイテムをタップして移動、スキルショートカット枠郡の横のアイテムショートカット枠郡の一つへナイフを入れた。

「これで・・・。」

目の前に広がるGUIの中に小さく表示された自分のナイフに意識を向ける。

ージャツ

瞬時に俺の腰にナイフが出現した。これでいつでも武器を振るうことができる。

「本当はこれを使って、瞬時にポーションを出したり、武器の変更

をするんだが」

>>なるほど、便利ですね<<

何度が装備を出し入れし、感覚をつかむ。・・・このやり方しかないようだし、早く慣れるしかないな。

ベッドから身を起こし、部屋から出て階段を降りる。

「おや、寝てたのかい？」

「ええ」

「ちよつと早いけれど夕飯を食べてくかい？」

「あるんですか？食べたいです。ありがとうございます」

エントランスにある席の一つへと座る。

エントランスは、俺が来たときと同じように、俺以外の人は誰も居ないようだ。

「今日は私以外は、だれも宿を利用していませんか？」

「ん、そうさね。今日はお譲ちゃん以外に誰も宿を使っていないよ。

まあ、元々人が留まらずに流れる村さ。珍しいことじゃないよ」

「そうですか」

カウンターの奥からおばちゃんの声がする。フライパンか何かがぶつかり合う音や、皿を出す音が聞こえてくる。いいにおいも漂ってきた。

「おまちどう。もっと食べたかったら言うんだよ」

「ありがとうございます。けど、これで十分だと思います」

質素な見た目のスパゲティだ。きのこや木の実を合えた物で、具はあまり多いとはいえないが、何の油だろうか、とても香ばしい匂

いが鼻をくすぐり、食欲をそそる匂いを放っている。

「・・・そしてこれでもかといわんばかりの山盛りだ。どうするんだこれ。」

「・・・いただきます」

フォークを突き立てて、一口食べる。

うん、おいしい。

少し辛味の効いた味付けではあるが、きのこや木の実の甘さもあいまつて、ちょうど良い加減となっている。できれば、もう少し塩味が効いてほしいところであるが、『塩は高級品』というのがこついった『ファンタジー』では定番常識となっている。贅沢は言うまい。

>>ゲーム内なのに、食事の必要があるのですね<<

「そつだな。foodゲージがあるからな」

>>これですか。なるほど。これが空腹度ということですね<<

「そつだ。これがなくなると、自然にHPやMPが回復しなくなったり、力が出なくなったりするんだ。実際におなかが減る錯覚まである」

>>なるほど。神経を誤認させるのですね<<

irisさんの声に小声で答える。

普通に問答やっていると、どうも俺の独り言にしか見えないので、変な奴としか周りから見られないだろうからな。

食べられるかな、これ・・・。

味はとってもおいしいし、いくらでも食べられそうな気がしてくるが、量が多すぎる・・・うぶ。

「なんだい、残したのかい」
「すみません……。限界です……」

結局、山盛りのパスタを食べきれぬわけも無く、全体の三割ほど残してしまった。

「まあ、そんな顔になるまで食べなくても、ほどほどでいいんだよ」
俺の青い顔を見て、おばちゃんはため息をついた。

「おいしかったので、残すのも失礼だと思って……」
「まあ、それはうれしいんだけどね、それで倒れられても、私はこまってしまうよ」
「はい……。すみません……」

食器をおばちゃんに返し、代わりにお冷をもらう（といっても、冷蔵庫なんてものがあるはずもなく、温水だ）。

テーブルに戻り、しばらく気分の回復を図る。と、同時に思いついたことがあるのでスキル『応急処置』を発動。

このスキルのデメリットの一つに『FOOD値の減少速度増加』というものがある。ようは、FOOD値を消費して体力回復を早めているという設定なのだろうが、今回はそれが役に立つ。しばらくこのままボーっとしてれば、FOOD値が適正值まで減って気分がよくなるはずだ。

温水を飲む。人肌のそれは、ゆっくりと喉を通り、俺の胃を優しく揺らす。

隣の酒場から、楽しそうな喧騒が聞こえてくる。そういえば、ク

エストはあそこから受けられるんだっけか。

酒盛りに興味は無いが、情報収集はしなければならぬか。

けど、もう少しこのまま……。

胃の中の物が、重くうごめく。思わずテーブルにへばった。

「ここが酒場か」

おなががようやく落ち着いたので、俺は酒場へと顔を出した。

まだ日が沈んで間もないが、既に酒を飲んで顔を赤らめている人たちが何人かいる。とりあえず、クエストをどこで受けるのかよく分からないので、カウンターにいたおっちゃんに声をかける。

「すみません」

「はいよ。お、どうしたお嬢ちゃん。お嬢ちゃんには酒はまだ早いぞ」

軽くウイנקを返された。整ったひげを蓄えており、肉はついているが中々整った顔立ちをしている。昔はさぞ『たらし』だったに違いない。

「酒じゃなくて、仕事とかないかなって」

「お、お嬢ちゃん旅人だったか。はっはっは。小さくて武器が見えなかったよ」

うん。そんな冗談、今要らない。

>>このゲームのシナリオにかかわる重要なクエストの事ですね<<
「うん」

クエストには『メインクエスト』と、『サブクエスト』の二種類がある。その違いを説明する必要もないだろう。

「木材か・・・」

思わず自分のナイフに手をかける。このナイフでは、おそらく木材を得ることができないだろう。斧を手に入れる必要がある。どれくらいの値段で売られているのだろうか。

そして、今の俺にある意味一番難易度の高いクエスト、それが『鹿肉収集』だ。

先ほど森の外周にそって歩いているときに見た動物達。つまりはあれを狩ればいいのだが、さて、どうしたものか。これも俺の『ナイフ』には荷が重そうだ。

「狼か・・・」

狼は、動物のカテゴリに入るが、その危険度はどちらかというところモンスター以上に分類される。お金は落とさないが、毛皮や肉が手に入るだろう。

もし、狼の生態が夜行性であるならば、夜になったばかりの今がチャンスかもしれない・・・うん、どうするか。ここは、おっちゃんに聞いた方が良いかな。

「すいませーん」

「なんだい？お嬢ちゃん」

「狼って、ここらへんに出るんですか？」

「普段、この村には居ないんだが、最近住み着いてな。夜になると

森の方から遠吠えが聞こえてきて、村の奴らはガタガタ震えちまつてんのさ。どうやら、群れから逸れた一匹狼らしい」

狼だけにね。なんてウインクをされても、困る。笑ったほうが良いのだろうか。

「そうなんですか」

「なんだい？お譲ちゃん、狩って来てくれるのかい？」

「ええ、そのつもりなんですけれど、この村って、あまりに遅くなると入れなくなったりしますか？」

「そうだな。もう少し暗くなってきたら、門番の奴も酒盛りおっぱじめちまって、門は閉じるんだ。だが、そうだな。狼は夜しか出てこないし、事情を村長に話せば、門の横にある小さな勝手扉の鍵を貸してくれるかもしれないな」

「わかりました。村長さんに聞いてみます。どこに家が？」

「この酒場を出て、村の中心まで大きな道が通ってる。その道の先の広場にある、一際大きな家が村長さんの家さ。けど、村長さんはいないよ」

「ええ？そうなんですか？じゃあどこに？」

村長さんから鍵がもらえないと、夜に村の外に出歩けない。そうになると、今日狼を倒す所まではいかなくても、夜の周辺状況の確認もできなくなってしまう。

できれば今日中には、村の外に出られるようにはなっておきたいものだ。

今日は外に出ないつもりであったが、まだまだ夜は長い。今日のところはもう町ではそんなに情報収集もできないだろうし、外に行くのもアリだと思えてきた。

と、そんな事を考えていると、にゅっと手が伸びてきて、俺の尻を撫でた。

一気に体中に寒気が襲う。
形を確かめるように、手が優しく動く。

「ひゃあ!？」

「はっはっは！俺が村長dぎゅふ！」

後ろの気配の正体を確認する前に、スキル『ステップ』を発動。
一気に気配の背後へと斜めにすり抜ける。これで必然的に、気配の背後へと一瞬で回ることができるのだ。

そのまま単発でスキル『キック』を発動。尻をなでつけてくれやがった奴の背中を、思いつき蹴りつけた。

あ、今のでスキルジャンル『体躯』のレベルが上がった。スキルジャンルの説明については、また今度する事にしよう。

「なにするんですか！」

尻をなでられるという、男性としてあまりにレアな体験をしてしまい、パニックに陥って、もはや涙目である。

「さ、流石旅人……。すばらしい動きをす……。がく」

「がく」って、自分の口で言っちゃったよこの人。

「というわけで俺が村長だ」

がははと豪快に笑いながら「尊重しろよ。村長だけに」とか言ってくる。山男、と言った風貌の何から何まで豪快な男のようだ。しかし、この村の人たちは、親父ギャグが好きなのだろうか。困る。

テーブル座って向かい合う。どうやら、俺がここに来たときから飲んで顔を赤らめていた客の一人らしかった。

「謝りませんか。むしろ謝ってください」

対する俺は、半泣きになりつつ、この山男から何をされてもすぐ『ステップ』が発動できるように身構えている。

「いやあ、若い女の子がケツ振ってるから、つい」

山男は、悪びれる風もなく、そんな事をのたまう。

ガンッ

俺の右手が自然な動作で、鞘から皮ひもを弾きナイフを抜刀。テーブルへと突き刺した。もちろん、村の中のオブジェクトは非破壊属性がついているため、実際には刺さらないが、中々良い音がする。

「すみませんでした」

山男は瞬時にテーブルへと頭をこすりつけた。

「もうやらないくださいね」

「いやあ」

「もうやらないくださいね」

「はい」

この手の人物への対応にはもう慣れたものである。

「次こんな事やったら、狼の囿になってもらいますからね」

一切の冗談を含まない目でにらみつける。

「はいっ！もうしません！」

どうやら俺の本気度をわかってもらえたようである。

「で、村長なんですか？」

「はい！村長です！」

「狼退治に行きたいんですけれど」

「はい！」

「狼退治に行くと、村に帰ってきたときに門閉じちゃってるそうじゃないですか」

「その通りです……！」

「なので、鍵、貸してもらえませんか？」

「どうぞ！こちらです……！」

村長さんは、じゃらつと音をさせつつ鍵の束を差し出してきた。ちよつとまで、それ村の全ての鍵じゃないのか？

「村に入るための鍵だけでいいんですよ」

「は！すみませんでした！」

こうして俺は村の鍵を手に入れたわけだ。時間に関係なく村に入るアイテムか。地味にレアなアイテムかもしれないな、これは。

今日狼を倒すつもりは無いが、準備はしておいたほうが良いだろう。

「すみません、マスター。ポーションとか薬草とか売ってます？」

だめもとで聞いてみる

「あるよ」

あるんだ。

何でも屋状態だな。もはや。

マスターがウィンドウを展開、売り物のアイテムリストを表示してきた。『クエスト』とかつて単語はしらないくせに、こういったところはゲームしてるんだな。混乱してくるなあ

とりあえず、HPポーションを買い取るだけ（と言っても三個だが）購入した。

「それじゃ、いって見ますか」

>>『わくわく』しますね<<

そんなわけで、おっかなびつくり夜のフィールドへ。

危険を冒すつもりは無いが、早くフィールドになれないといけな
い。時間は限られているからな。

「二話 R P G っ て、 なりきり っ て 事 だ す よ ？

「お、讓ちゃん、村の外に出るのか？もうすぐ門閉めるぞ？」

「あ、どうも。鍵、村長から借りたので大丈夫です」

「そうか。気をつけていけよ！」

門番さんに軽く挨拶をして、村の外へ。

夜の村の外は、『都市』住ごしの俺にとって、余りにも静かで暗い。思わず腰のナイフに手をかけてしまう。

本当に、物音一つしていない。

「・・・」

>>すぐ森の方へ行きますか？<<

irisさんの声は、俺にしか聞こえないはずなのに、その声の大きさに思わずあたりを見回してしまう。

「いや、森に行っていきなり狼と戦うのは流石に怖い。少し夜の戦いにも慣れておかないと」

狼のイメージ、近距離を高速に動いて相手を攪乱させ、その鋭い牙で敵を攻撃。これだけ暗く、しかも森の中という遮蔽物が多い環境の中でいきなり挑んでも勝てる気がしない。

まずは、ゴブリンや野良犬あたりで夜の戦いでの経験をつんでおきたい。

村の前を走る大きな道から外れて、草原の方へと入っていく。

しばらく歩いていくと、遠くの方に、松明の明りが見えた。

暗い草原の中、炎の群れが右へ、左へと行ったり来たりしている。

「・・・？」

人？

>>ゴブリンですね<<
「なるほど」

朝、棍棒を持ってわーわー歩き回っていたゴブリンが、夜になつて手に持っている物を、棍棒から松明に持ち変えたようだ。

「仕掛けてみるか」

遠くから見る限り、ゴブリンたちの頭の上に表示されている名称の色は、ちっこい奴が青、一回り大きな奴が緑となっている。一対一ならば決して負けることは無いといったところだが、群れてると果たしてどうか。

心を落ち着けて、昔『これ』をやっていた時の記憶を呼び覚ます。群れと戦う時は、常に敵の群集全体を常に捉える事。絶対に群れの真ん中に入るような事があってはならない。

そして、ミニマップに常に気を配る。近くに他の群れが居た場合は、すぐに逃げる。

「よし」

そつと鞘から皮紐を弾き、ナイフを握る。

相手はAIだし、気にする必要は無いのかもしれないが、できるだけ足音を殺し、松明の光がナイフの刃を反射する事の無いように、下に構えて草むらの中に隠す。

音には色々な情報が含まれている。

野谷さんの声が、頭の中でリピートする。
だんだんと群れとの距離が近づく。

ギャヒ！ギャー！！

意味の成さない言葉を叫びながら、ゴブリン達は歩き回っている。
月光の下、松明の光は目立ち、向こうの居場所と数はもろばれだ。
周辺に他の群れもないようだ。

距離がさらに近づき、感覚的にもう少し近づけば気づくかもしれないという所で、歩みを止める。

右、左、前、右、左、後ろっ！！

ゴブリンの群れは、全員の体の向きと動きがそろっている。ゴブリンたちがこちらに背を向けた瞬間、『ステップ』を発動。前へと俺の体は一気に押し出された。

ステップによる急激な体の駆動の中、どうにか体を『斬撃』の初期体勢へと整える。地面に足がついて、『ステップ』によるモーシヨンが終了した瞬間、俺のナイフが綺麗な軌跡を描きゴブリンの首を切り飛ばした。

声すら出すこと無く、ゴブリンの首が宙に舞う。

！？

内心驚きつつも、すぐさま次の攻撃へと移る。

群れの中で、既にゴブリンが一匹消えているというのに、奴らはまだ攻撃を受けているという事に気がついていないようだ。このチャンスに逃す手はない。

俺のナイフが松明の光に反射して、ゴブリンの群れの中、閃光の軌跡が描かれる。

二匹目の首が宙を飛んだ。

「ギャギャツ!!」

ようやく気がついたゴブリン達は、突然現れた俺の姿に驚き、松明をわたわたと振り回した。

その瞬間には、俺の体はもう既に三撃目のモーションへと移っていた。三匹目のゴブリンの首が舞う。

「ウギヤギ!!」

ぶおん、という炎の瞬きを夜に残して、ゴブリンの松明の大振りが俺を襲う。

バシイ!!

「ぶっ」

シャツ!

「ギャアアア!!」

その松明を、ナイフを持っていない手で止め……事はできないので、ダメージ覚悟で阻止。軽い衝撃と共にHPが若干削れる。そして、突然モーションが阻止されたゴブリンは、そこで思考が停止。その首へと俺のナイフが煌いた。

俺のコンビネーションがゴブリンの群に決まっている間に、ゴブ

リン達の足音が左右に広がる気配がした。

瞬時に囲まれそうだと判断。『ステップ』によりゴブリン達の輪から緊急避難。体制を整える。

残ったゴブリンはあと三体。小二匹に大一匹だ。

内心に緊張が走る。

小ゴブリン達は、回り込みが失敗してあわてて俺に向き直ろうとしていたが、ゴブリンのリーダーは落ち着き、俺を静かに見据えていた。

三つの松明が、俺を脅すように左右に揺らめく。

腰を落とし、どんな状況にも対応できるように身構える。

と、足元に先ほど屠ったゴブリンの松明が転がっており、つま先に当たった。地面に落ちた時点で火は消え、既にただの棒になっているようだ。

瞬間、足を曲げて腰をさらに落として左手で棒を拾い上げ、投げつける。もちろん、装備はしていないので具体的なダメージが発生する事は無い。

しかし、ゴブリン達は、いきなり投げつけられた棒に驚き、一瞬反応が止まる。

やっぱり！！

棒を投げた瞬間『ステップ』によって体を前に投げ出していた俺は、最初と同じような感覚でナイフの攻撃体制を整え、ステップモーション終了と同時に、ナイフを振るった。

ゴブリンの首へナイフがめぐりこむ感覚を確かめながら、目線を横へ。慌ててこちらへと突進してくるゴブリンを確認。ゴブリンのリーダーは、とっさの事にも慌てず、冷静に腰を落として力を溜めているようだ。渾身の一撃を予感させる構え。

首からナイフが抜けたのを感じただけで確認。腕が振りきられた瞬間、瞬時に二撃目へと体を駆動させる。

「ギヤアアアー!!!」

最後の小ゴブリンの首へと、ナイフの刃先が綺麗に滑り込んだ。これで残るはゴブリンのリーダーだけとなった。

「
」

二人向き合い、お互いに初動を探り合う。

ゴブリンは深く腰を落とし、松明を揺らめかせている。筋肉がうごめき、かなりの力を溜めているのがわかる。

大きな体は、ナイフが通りそうもないが……。

ダッ

俺の『ステップ』が発動し、体が一気に前へ。草をむらを押しつけるようにして急激な加速感と共に、ゴブリンの巨体が目の前に広がる。

ゴブリンが、俺の動きを静かに見据えながら、口が獯猛に歪み上がる。松明が上に構えられた。

捉えたぞ

そう、言っている様に見えた。しかし。

ゴキヤッ

ステップが終了すると同時に、スキル『キック』が発動。ゴブリンがひるみ、松明を掲げながら、動きが止まった。

初撃にキックを使用したため、次のスキル発動までに、若干のデレイがかかる。

ゴブリンと俺、お互いの動きが一瞬とまる。じれったい無言の間が、二人を包んだ。

そして、お互いが同じタイミングで動き出した。

まず、俺のナイフが攻撃モーションを開始。綺麗にゴブリンの腹へと一撃を見舞う。ゴブリンのHPが四分の一ほどガクンと減った。やはり一対一だと、俺の方に分があるようだ。

しかし、敵の攻撃も侮れない。

そして、ゴブリンがついに松明を振るってきた。先ほどのように力を溜めていないので、その勢いは明らかに遅い。慌てず、左手で阻止。

バシイイ!!

流石に、先ほど受けたときよりはHPが目に見えるほど減る。が、まだまだ余裕だ。そして、俺は松明を防いだ瞬間には、ナイフを動かしていた。

ーシャツ!!

駄目もとで、動きの止まった棍棒を掴み、渾身の力を持って棍棒を握り締め続ける。

ゴブリンが必死に俺から松明を取り戻そうと力を込めているが、ナイフがゴブリンの腹に食い込むたびに、力が緩む。

目の前で松明が揺らめいて、炎の熱が、俺の顔を掠める。

シャッ！！

「ギャアアア！！」

シャッ！！！！

「アアアア！！」

最後のナイフが、綺麗にゴブリンの腹に叩き込まれた。断末魔と共に、ゴブリンが崩れ落ちる。

「・・・・・・・・ふー・・・・・・・・」

体から力が抜ける。手のひらにはじつとりと汗がにじみ、背中にも、今の戦闘で滝のように汗をかいてしまっていた。

>>素晴らしい戦いでした<<

irisさんの声が脳内で響く。思わず口角があがってしまうのを感じる。

「もつと力を抜いて、何発か攻撃を食らっても良いんだろっけねど」
>>そうですね。しかし、『何』が起こるか分かりませんからね<<
「その通りだ」

ミニマップで周囲状況を確認しつつ、周りに他のゴブリンの群れがないか探す。遠くに明りが見えるが、気づかれるような位置ではないと判断。ゴブリン達から戦利品を回収していく。

「ぼろぼろの服、松明、棍棒、お金か」

>>なぜお金を持っているのですか？<<

「気にするだけ無駄だよ」

>>なるほど<<

経験値を確認。50%以上の経験値が得られていた。あと何度かこの戦闘を繰り返していけば、レベル4か5くらいまでは簡単にレベルがあがりそうだ。

そして……。

「フェイントが効いたな。それに、『リンク』しなかった」

>>……そうですね<<

俺が最初のゴブリンの首を刎ねた時、ゴブリン達は気がついていなかった。それはつまり、ゴブリン郡の一匹が攻撃、又は死亡を無条件で感知しているわけではなく、聴覚や視覚を頼りに敵を認識する事に他ならない。

俺が身を隠し、そろそろと近づいて不意打ちをしたのは、無駄だと思っていたが有効だったわけだ。

そして、炎の消えた松明をゴブリン達にぶん投げた時、ゴブリン達は怯んだ。

そう、怯んだんだ。それはまさに、高度なAIをつんでいるという事で、俺の動きにあわせて何らかの思考をして、それにあわせて様々な動きをしてくると言うことだ。

ゴブリンという『幼稚で愚かな』思考をするというモンスターを、完全に再現する高度なAI。

それは今後、『賢く緻密な策略をする』思考をするモンスターを、完全に再現してくるという事に他ならない。

一、個人のモンスターが、ダンジョンに罠を張り巡らし、敵が掛かるのを待つ。それはとても恐ろしい事の様だ。

「このゲーム、一筋縄じゃいかなさそうだな」
>>そうですね<<

俺は、再度緊張感を体に纏わせて、気を引き締めた。

ウインドウを展開、アイテム欄から棍棒を選択、左手に装備。

これで右手にナイフ、左手に棍棒という一見ふざけた組み合わせになる……が、敵を短期殲滅するという目的のためには、最適な装備だと思えた。

左手を振ると、今まで『斬撃』だったスキルが『打撃』へと瞬時に変わり、攻撃モーションが発動、綺麗な動きで棍棒が振られる。次に、棍棒が振り終わる前にナイフを振る。

棍棒の振りが終わる前に、ナイフの軌道が重なり、綺麗な十字を描いた。しばらくこのままモーションの練習をする。

フォン シャツ！フォン シャツ！！

殲滅速度だけに重点を置いた、超攻撃的なプレイスタイルだ。メリットはこの通り、短い時間内での攻撃速度。デメリットは、攻撃モーションにより視界を遮られる事と、他のスキルとの相性の悪さ、モーションが失敗したときのデイレイの長さがある。

攻撃モーションが左と右、かぶってしまったとき、両腕がぶつかり、攻撃が停止、大きな隙となる。そして、基本攻撃スキル以外をこの連続攻撃の間に挟むと、テンポが変わって両腕がぶつかったり、連続攻撃がそこで終了してしまったりするのだ。

>>動きが一定になってきて、最適化されてきましたね<<
「……そうだな」

そのまま『ステップ』を試してみる。

ーダッ

連続攻撃が中断され、一気に体が駆動する。

「……こんなもんか」

練習している間に、HPは自然回復。100%となっていた。

まだまだ時間は沢山ある。もう少し経験をつみ、夜の戦闘に慣れていかないといけない。

腰を落とし、草むらの中に隠れて次のターゲットを定めて近づいていく。

ゴブリンの中に、俺は『ステップ』による駆動によって飛び込んだ。

そして、俺の両手がぶんぶんとうなる。

「ギヤアー!!」「ギヤギヤギヤ!!」「ギヤアアアー!!」

さっさと小ゴブリン三匹を屠る。ゴブリンの首が刎ね、頭が潰れ、肩から腹にかけて引き裂かれた。

気がついたゴブリン達が俺を視認する前に、再度『ステップ』する。一気にゴブリンのリーダーに詰め寄り、システムのアシストを持って振るわれる俺の両手により、ゴブリンの体が粉碎される。

「ギヤアアアアアー!!」

ゴブリンのリーダーを失って、統率が取れなくなってパニックになるゴブリン達。

もう、ステップでゴブリン達の輪から抜け出す必要もない。あとは、ただただ蹂躪がそこに展開されるだけである。

「ギャギャー!!」「ギャアアー!!!」

そして、ゴブリン達が漏れなく物を言わぬ死体となって転がった。

「良い感じだ」

なんとなく、ナイフを振るって鞘に収める。

>>このゲームでは武器や服に血はつきませんが、人間の思考形態は面白いですね<<

「そうだな。剣を振りなれていない俺でも、こうやって『血を落とすために振って鞘に収める』行動をする」

>>おそらく私には『永遠』に理解できない行動でしょう<<

irisさんは、有る意味人間より、人間らしい面を出す瞬間があるようにも感じるのだが……。

「もう少し狩るか」

>>その方が良いでしょう。ところで、レベルがあがったようですが、ポイントは振らないのですか?<<

「まだキャラの方向も定まっていけないからなあ。もう少しレベルがあがってからにするよ」

>>なるほど<<

さて、次はあそこに要る奴らにするか。

そして俺は、また身をかがめて、次のゴブリンの群れへと歩を進めた。

一話 R P G っ て な り き っ て 事 だ め ？ (前書き)

狼カワイイよ狼

「話 RPGって、なりきりって事ですよ？」

「ギヤアアアー!!!」

そうやって、何回目の戦闘だろうか。繰り返した後には、ついに草原の中に見える範囲に、松明の光は一つも見つけられなくなっていた。

「夜の中で松明を向けられても、対処できるようになってきたな」

最初の二回の戦闘は上手くいったが、その後何度か危ない瞬間があった。夜の暗闇の中、松明をいきなり目の前に掲げられて、まぶしさに目がくらんでしまうのだ。その隙に一気に殴られ、とっさに『ステップ』を発動。輪から抜け出すという瞬間が何度かあった。

松明の先端を常に意識し、攻撃を受ける場所を意識的にコントロール。ダメージを受けながらもこちらの攻撃は綺麗に当てると言う動作をマスターするのに、何度かHPが半分以下になるという中々危ない場面もあった。

『応急処置』を発動し、草むらの中に座り込む。

そよそよと風が草を撫で、虫達の声と星達の瞬きに囲まれて、しばし休憩する。

明り一つ無いこの草原に、満点の星空はまさに圧巻と言う他無い眺めであった。

「綺麗だな……」

>>そうですね<<

HPが回復しきるのをぼんやり待ちつつ、星を眺める。もちろん、

ミニマップから意識を外す事は無い。

月はそろそろ、俺の真上へほどに上ろうとしていた。このゲームに流されて、初めての『今日』が、今まさに終わろうとしているのだろうか。正確な時間が分からない俺には、その判断を下す事もできない。

星々のまたたきの中を、一際大きな月が、目では分からない速度で今も刻一刻と動いているのだ。ひどくゆるやかに時間が流れているように感じる。

それでも、俺が感じる一秒も、あの月が感じる一秒も、同じ一秒なのだ。

だが、この世界の外、つまり『現実』は、今まさに俺が見ているあの月と同じように、ゆっくり、ゆったりと『ゆるやかな時間』を刻んでいるんだろう……。

その『時間』は、俺と、あの月のような『同じ一秒』ではない。しかし……。

絶対的な時間。相対的な時間。その違いが、俺には分からなくなつた。

アオオオオオオン！！

そんな感傷に浸っていると、遠くから遠吠えが俺の鼓膜を細かく揺らした。

風が、空気が、虫達が、その音によって動きを止めて、息を潜めて静まり返つたように感じられた。

俺の心臓が瞬時に跳ね上がり、臨戦態勢へ。ナイフに手をかけつつ、音を立てないように中腰になって草むらに身を隠し、遠吠えがした方角を探る。

これが、狼の声か。

テレビでしか聞いた事の無い、どこか非現実めいた遠吠え。犬のものとは明らかに違う、凜と空気を切り裂く、圧倒的な存在感。その遠吠えは、いつまでも夜の闇の中残り続ける。返ってくる別の遠吠えは、無い。

俺はここだ。だから近づくな

そんな、あらゆる動物達に警告する、一人ぼっちの夜の王の、最後のプライドを振り絞った警告のようだと、俺には思えた。

夜の王だからこそ、逃げる事は許されない。夜の王だからこそ、ふさわしい場所に着く。

だが、ならどうして、お前は群から離れて、そんな小さな森城に一匹居るのか。

ただの一匹で、夜の王、お前は何を守っている？何を誇っている？

アオオオオオオン！！

また、声が聞こえた。寂しく切り裂く、誇りだけを振りかざした狼の遠吠え。

動物達はおびえただろう。

虫達も声を潜めただろう。

風すらもその動きを弱めただろう。

人々も村で肩を抱いて震えている。

では夜の王よ。何を叫ぶ？群からはぐれて、たった一匹一人で。その寂しい遠吠えに、何を乗せているというのか。

俺は、静かに暗く、誰も彼もが息を潜めた草むらを、イミルの木ひしめく森へと向かって歩き出した。

夜の王ただ一人待つ、小さな、小さな城へ。

歩きながら、ウインドウを表示、棍棒の装備を解除、アイテムシ
ョートカットへ登録。これでどんな戦いになっても、一刀流と二刀
流の使い分けができる。

念のため、買っておいたポーションもショートカットに登録。
次に、キャラクター詳細画面を呼び出し、ステータスを表示。
迷わずに、レベルアップで得られたポイントを、体力ステータス
へと全て割り当てた。

HPの全量が、一気に二倍以上へと跳ね上がる。防御力も、ステ
ータス上ではかなり上昇している。

ウインドウを全て閉じ、深呼吸をして注意深くあたりを探る。
相変わらず、辺りは静まり返って気配を殺している。

もう、森は目の前に迫っていた。

森の一角へと足を踏み入れる。

ふと思いつき、アイテム欄を表示、松明を出現させる。

めらめらと揺らめく一つの炎。

その炎を、俺は地面へと思いつき振りかぶって突き刺す。目印
だ。

暗闇で、しかもこれから方角がまるで分からなくなるような、ほ
ぼ等間隔で木が並ぶ森で戦うのだ。帰り道が分からなくなって帰れ
なくなると困る。

せめて森の一角にでもこうやって松明を刺しておけば、迷いにく
くはなるだろう。

と、その瞬間俺を強烈なプレッシャーがつつむ。鋭い牙が、首に

当てられてるようにも感じられる強烈なプレッシャー。

これ以上近づくな。

圧倒的な存在感が、確かにそう言っていた。

森の奥底から、ギリリギリリと、二つの瞳が俺を射抜いてるような、そんな錯覚。俺の両手に、汗がじつとりと滲む。

「すー……はー……」

ゆっくりと深呼吸。今すぐにも後ろを向いて逃げ出したい。そんな気持ちでいっぱいになるが、このクエストはメインクエストにすらならないサブクエスト。しかも、こんなゴブリン歩き回る低レベルフィールドである。

そもそも俺は、危険を冒してまで外に出てきており、しかも最終目標はゲームクリアを掲げているのだ。これくらい楽々クリアできなければ問題外すぎる。

気を引き締めて、森の中へとさらに一歩進んだ。

アオオオオオオオオン！！

先ほど遠くから聞いた叫び声とはまた違う、俺一人だけに向けられた最終警告が、俺の全身をビリビリと打ち付け、突き抜ける。

もう、後には戻れない。

ええい、どうにでもなれ！！

こちらの存在は気づかれている。なら、堂々と歩いて行ってやる。ズンズンと、森を突き抜ける。

木々の列が延々と続き、まるで日本のお城のふすまの群を、開き

ながら歩いて奥へ、奥へと歩いているように錯覚してくる。まさに、王へと至る道。

気配が濃厚になってくる。

もう、相手も俺に威嚇の声を放ってはこない。悠然と俺を迎えるつもりようだ。

進むにつれて、少しずつ狼のシルエットがぼんやりと、森の奥に浮かび上がってきた。

白……。

一人ぼっちの夜の王は、白く艶やかな毛並みの、美しい狼だった。黒い夜に、ただ一人、黒に染まらずいつまでもその体に白を称える、誇り高き夜の王。

鋭い牙で、全てを砕き、鋭い声で、全てを切り裂く。

俺と同じか、それ以上に大きな体に、ギリリ月光浴びて輝く瞳。その瞳には、明らかな知性の光があった。

俺を値踏みするようにも、俺の次の行動を待っているようにも見えた。

二人でしばし、見詰め合う。

……？

狼の名前は、『ホワイトナイトファング』。その色は、ピンク。勝てなくは無いが、苦戦するだろう。だが、こいつの様子は……。

グルルルルル

突如、狼は身をかがめて、戦闘態勢へと意向した。それと同時に、

俺との敵対関係が成立する。

その瞬間、狼のHPバーが表示された。

やっぱり、減ってる。

狼のHPは、全体の約2割程度が目測であるが減っていた。そして、状態異常を示すマークがついている。これは、毒だろうか。

この森、いや、この木……。

そこまで考えたところで、狼の口が大きく広がり、俺にその鋭い牙をむき出しにしてきた。

俺も、瞬時に思考を切り替え、ナイフを構えて腰を落とす。

ガアアアアア！！

腹の底がひっくり返りそうな、地の底からわきあがるような声を狼が出し、俺へと突進してくる。俺は迫り来る牙にも慌てず、冷静に『ステップ』を発動。狼に怯むことなく斜め前へとすり抜ける。すり抜けざまに、棍棒を左手に出現させておき、連続攻撃をお見舞いする。

ガッ！ザシユッ！！

二発がヒット。しかし、狼のHPは一割も減っていない。これは長丁場になりそうだ。

と、突進して目標を見失った狼は、たたらを踏んで、ふらついた。

やはり……。

グルルルル……。

俺が一筋縄では行かない相手だと感じたのだろう。狼は警戒し、身をかかめる。おそらく俺の出方を待っているのだ。

隙無く俺の動きを全て見極めるつもりか。
半歩前に出てみる。

狼が全身の体を緊張させ、飛び掛る準備をする。その息は心なしかリズムが狂っており、荒い。

「……………」

俺は、ナイフを鞘に収め、棍棒を消滅させた。

狼が、突然の俺の戦闘態勢の解除に、疑問の色を浮かべる。

流石、頭が良い。

そのまま、お辞儀をして後ろに向き直り、俺は森の外へと歩き出した。

狼が襲ってくる気配は無い。

注意深く、俺が森の外へ出るのを見守っているようだ。

来た道を、気持ち早歩きで戻っていく。来るときに刺した松明の瞬きが、うつすらと見える。

松明と並んだところで、後ろを振り返る。気配は確かに感じられた。が、前ほどの拒絶のプレッシャーは感じられない気がした。

「……………」

>>何故あそこで戦闘を止めたのですか？<<

俺の邪魔をしないように、今まで黙っていたのだろう。iris
さんの声に、小声で答える。

「お互いベストじゃないと。やっぱりさ」
>>そうですか<<

まだ、草原にはゴブリン達は復活していないようだ。俺の立っているこの森の位置は、若干高台にあるため村までゴブリン達がいなのか、簡単に見渡すことができる。

いつ復活してくるのかわからない。俺は村に向かって走り出した。

「イミルの毒に効く薬か」

村に戻った俺は、その足で酒場へ。マスターに話しかけていた。すでに皆出来上がってしまったようで、陽気に歌なぞ歌い、テーブルは汚し放題だ。

「あります?」

「あるよ」

流石の何でも屋である。先ほどのゴブリン達から得た戦利品を売り、解毒剤を購入。どうやら特別な毒でもないらしい。良かった。もしも、何か特別なイベントに絡むアイテムだったらと、ヒヤヒヤしていたのだ。

「お、お嬢ちゃんゴブリンのクエストもクリアしてるな。偉いじゃないか」

頭をなでられた。お使いか!どれだけ子供に見られているのだろうか。

ゴブリン達を相手にしている間に、ゴブリン討伐と、ゴブリンリーダー討伐のクエストがクリアされていたようだ。有り難く報酬を受け取る。

「ありがとうございます。では、急いでるのでまた！」

こうして俺は、解毒剤を手に入れ、性懲りもなくまた俺のケツを触ろうとしていた山男を蹴り飛ばし、また森へと戻るために駆け出した。

さて、再び森である。相変わらず、圧倒的なプレッシャーを俺にはなっている。

「いざ尋常に、ってやつだ」

>>ミキが言っていましたね。奎はロマンチストだと。私も今、そう思いました<<

「うるさいやい」

頬が熱を持つのがわかる。照れ隠しも込めて、勢いよく俺は森へと踏み込んだ。前回のように、ほえて俺を威嚇することもない。静かに、その存在感だけを放ちながら俺を待っている。

ずんずんと進んでいき、狼と俺は、再度向かい合った。狼は、やはり静かに俺の出方を伺っていた。

俺はゆっくりとした動作でウィンドウを表示、解毒剤を出現させる。狼の視線が、アイテムに注がれていることがわかる。解毒剤は瓢箪に入っており、端から見るとなに入っているのかわからない。

俺は、その解毒剤の瓢箪から、一口だけ飲んで見せ、その瓢箪を狼に向けて投げた。

狼の前に瓢箪が転がり、内容物がゆっくりと流れ出る。

狼はしばらく俺と瓢箪を交互にみていたが、やがて舌を出しちろちろと舐めだした。

瞬間、狼の毒異常が改善された。先ほどの戦闘の時のまま、俺と狼は敵対関係にあったのでHPや状態異常が表示されたままだったのだ。

それと同時に、狼のネームカラーがピンクから赤に変わる。

わー、まずったかなあ。

明らかにいらぬことをしてしまった気がしないでもないが、やってしまった事は仕方がない。

腰にある鞘の革紐を弾き、臨戦態勢をとる。

ー·····?

だが、いつまでたっても、狼は戦闘態勢にならない。それどころか、寝そべってしまった。

狼が俺に対する敵対関係を解き、狼のHPが確認できなくなってしまう。

じつと俺を見つめる狼。

>>何なのでしょうか?<<

「····さっぱりわからん」

とりあえず、俺も狼に習って戦闘態勢を解いた。

それを確認した狼は、ゆっくりと立ち上がり、俺に背を向けた。

尻尾をゆっくりと振り、顔だけをこちらに向ける。

「ついて来い、と？」

俺が狼へと向かって数歩歩くと、狼は森の奥へと向かってゆっくりと歩き出した。時折、後ろを振り返り俺の姿を確認する。

「かわいい・・・」

こちらの歩調を気にして、ちらちら見返してくるその動きはなんと愛嬌がある。凄くかわいい。

狼は森の奥へ奥へと入っていく。さて、この何とも不思議なイベント、どういう結末を迎えるのだろうか・・・。

二話 RPGって、なりきりって事ですよ？（前書き）

お気に入り50人、ありがとうございます。とても嬉しいです。
ちなみに、学園やSFをジャンル行ったり来たりしてるんですが、
実際どっちなんですよ。自分じゃ判断できなくなってきたりw

二話 RPGって、なりきりって事ですよ？

さわさわと、ゆったりと風に撫でられた木々が歌う中、俺と狼は森の奥へと進んできた。

一本の木の前に狼が立ち止まり、白い固まりを俺に見せて座り込んだ。

まだ暖かみを残して風に揺れる白い毛並み、微かに上下する背中。子供の狼だ。それも瀕死の。

すぐさま駆け寄って子供狼の状態を確認する。

真っ白だと思っていた子供狼は、どうやら怪我をしているらしい。後ろ足からずくずくと、血がゆっくりと流れていた。

子供狼と敵対状態にないので、状態を詳しく確認することが出来ない。

俺は鞘からナイフを引き出し、狙いのずれた攻撃を一回だけ放った。ミス表示と共に出現する、子供狼のHPと状態異常。

「これは・・・」

HPは既に2割を切っており、状態異常のマークも狼の物とは若干様子が異なっている。状態異常マークに意識を集中。これでどんな状態異常に陥っているのかわかるはずなのだ。

状態異常：猛毒

状態異常：出血（骨折）

「っ！」

念のために解毒剤はあと二つある。ポーションもある。だが、し

かし・・・。

とにかく俺は、解毒剤を取り出し、ふたをあけ、子供狼の口元に持って行く。

しかし子供狼は、もう既に体力がほとんど無いのか、目を開けることすらできないようだ。

仕方が無いか。

「ごめんな」

狼と、子供狼両方に詫びを入れ、子供狼の口を無理矢理に開く。まだ幼いながらも、鋭い牙が俺の指に食い込み、HPが1ミリほど削れるのが目の端で確認できた。

その開けた口に、半ば無理矢理に解毒剤の瓢箪を突っ込む。

口の端から、だばだばと解毒剤が流れ落ち、喉を通る気配が無い。そんな事をしている間に、子供狼のHPは、じわり、じわりと減少していた。

「くそ！！」

小さく悪態をつき、子供狼顔を上に向けて、次はポーションをその口に突っ込む。

が、だめ。

既に飲み込む体力も無いのか、口の端からだらだらと蛍光緑の線が土まで延びて、雑草の上へと小さな水たまりを作った。

「っ！！」

時間だけがのろのろと過ぎていくこの感覚。手の中で弱りながらも、必死に『今』を生きようとしている確かな『命』。例えそれがAIが出した『処理』の結果だとしても、救いたいと思った。

顔を子供狼に向けたまま、目だけで狼の方を向ける。

全て任せる

そう、言っているようだった。静かに俺の行動を見守り、その結果に、全ての覚悟を既に行っているような。そんな瞳。

「ふっ」

一瞬で覚悟を決め、腕を子供狼の喉に突っ込む。鋭い牙が俺の腕を切り裂き、わずかにHPを削る。同時に、状態異常『出血（軽微）』が発生。だが、知ったことでは無い。

すぐに俺の手先は、子供狼の胃に届いた。それを手先で確認した瞬間にすぐさま手を引き抜く。

ぽっかりと胃までの空洞ができる。子供狼が咳き込む前に、ポーションを流し込んだ。

弱々しく咳き込む子供狼。それと同時に、鮮やかな蛍光緑のポーションがぼたぼたと吐き出される。

俺はそれを見た瞬間に、子供狼の頭を両手で押さえ、天に向けさせた。無理矢理にでも胃に押し込んでやるためだ。

徐々に子供狼のHPが回復してきた。これでとりあえず、一安心といった所か。

「ふっ」

再度、手を子供狼に突っ込み、今度は解毒剤を流し込む。

咳き込む子供狼。ぼたぼたと吐き出される解毒剤が顔にかかるが、気にせずに口を閉じさせる。

喉が動き、解毒剤が子供狼の胃の中に入ったのが分かる。

「……………」

しばらく待っても、状態異常『猛毒』が解除される事は無い。そして、もう一つの状態異常『骨折』……………。

「くそ」

今の俺の、無理やり飲ませたポーションと解毒剤が子供狼の体力を確実に奪っていたようだ。明らかに前よりも呼吸は乱れ、HPの減りが早くなっている。

もし、ポーションをもう一度飲ませたとしても、いたずらにHPの減りを早めるだけであろう。

一瞬村まで連れて行くことも考えたが、いたずらに動かしてはさらにHPの消耗を早めるだけに思えた。

完全な手詰まり。俺の手の中で、子供狼の体中の力が抜けていく。

>>手詰まりですね<<

「……………そうだな」

その時、いつの間にか俺の後ろに回り込んでいた狼が、俺のナイフを口で軽く挟んで揺らした。

「……………?……………」

狼は俺をじっと見て、俺に全てを託しているようだった。

静かに、腰の鞘からナイフを抜き放つ。

あまり研がれているようには見えなくすんだ刃が、俺と、狼を微かにその身に写していた。

「・・・良いのか？」

クウン

狼が小さく声を出した。

このまま、子供狼が弱り果てて、全てを呪って死んでいくのなら、せめて、ひと思いにいつそ。 。
きつと、狼は自分ではどうしても殺せないのだろう。だから、俺に託した。

このまま、放置するのも。このナイフで、殺すことも。
全ては、俺に任された。

もしかしたら、いや、きつと解毒剤なんかで治らないことくらい、最初から分かっていたんだ。

それでも、筋を通して対等に戦おうとした俺に、この子供狼を任せた・・・。

俺は、ナイフをゆっくりと子供狼の首にあてがった。
小さく濁った瞳が俺を見た。

生きたい。

確かに、そう言っていた。

もしかしたら、まだ何か手はあるのかもしれない。

例えば、無理矢理にでも、村へつれていくとか。

例えば、そこら一体にある雑草か、もしくは草原に生えている花を食べさせれば、状態異常が直るとか。

例えば、たまたま行商人でも出くわして、治してくれるとか。

俺の選択は、間違っているのだろうか、正しいのだろうか。
それでも、俺はこの行動を選んだ。

「恨んでくれて、構わない」

その言葉を聞いて、子供狼は弱々しくうめいて、体を動かした。
それは、俺への恨み節なのだろうか、最後の抵抗なのだろうか。
この世の全てを恨んだ、最後の……。

シャツ

それとも、最後の別れの言葉だったのだろうか。
子供狼が体を動かして首を少しだけもたげた時、俺のナイフは、
綺麗にその首へと吸い込まれた。
断末魔一つあげること無く、俺の手の中で子供狼のHPが0にな
る。

「……」

ゆっくりと子供狼の亡骸を、地面に横たえる。
もうしばらくすると、この亡骸はポリゴンの固まりとなって、崩
れて失せるだろう。

クウーン

狼が、亡骸の毛並みを、舌で毛繕い整える。
ゆっくりと、何回も、何回も。

この狼たちは、親子なのだろうか、それともまた別の関係なのだろうか。二匹の最後の営みを、俺は眺めていた。

手には、まだ子供狼が生きていた頃の息づかいや体温が残っている。そして最後の一撃の感触も。

ゴブリン達を屠った時とかはまた違う、胸に大きな穴を開けるよ
うな一撃。

恨んでくれて、構わない。

その言葉を聞いたとき、子供狼は何を思ったのだろうか。

鈍い光のナイフをもたげた、死に神のこの瞳に、何を見たのか。

さわさわと、イミルの木々がゆったりと揺れ、虫たちの歌が静かに流れる。

狼の毛繕いは、ゆっくり、ゆったりと繰返される。その瞳には優しさが、愛しさが、いや、全てがこもっていた。

俺は、地面に座りながら、その営みが終わるのを静かに待った。

やがて、骸がポリゴンの固まりへと変化、静かに霧散した。

それを静かに見つめる狼は、寂しく、一声だけ鳴いた。悠久の別れを抱いた、か細く響く、狼の嘆き。

木々の合間から見える大きな月と、名前も知らない虫たち、そして、俺だけがその声を聞いていた。

圭

「んあ？」

頭の中に、irisさんの声が響いた。

どうやら、座ったまま、いつの間にか眠ってしまったようだ。周囲は既に明るくなっていた。

「・・・うお!？」

俺の横に、狼が添い寝していた。ふかふかで整った毛並みは、見た目は柔らかかそうだったが、実際触ってみると以外と硬い。

狼が目を開き、俺と目が合う。

ゆっくりと狼が立ち上がり、俺の顔を舐める。

「うぶっ」

巨大な狼の舌は、やはりかなり大きく、一気に俺の顔面が狼の唾液でべたべたになる。すぐに唾液は消えて無くなるが、やはりちよつと、止めていただきたい。

俺も立ち上がり、狼と対峙する。狼は既に、俺に対してプレッシャーを放ってはいない。

お互い、特に合図をする事も無く5歩ほど離れてまた向き直る。ゆっくりと狼が身をかがめて、俺に対して敵対関係となる。瞬時に表示されるHPバー。完璧なコンディションなのは、満タンなHPを見ても明らかだ。

対する俺も、ナイフを抜刀。腰をかがめる。

緊張感はお互いに無い。木々も風も鳥たちも、その動きを止めることはなく、ざわざわと揺れてはさえずる。

ダッ

俺は狼へと向かって走り出す。『ステップ』では若干距離を縮め

るには苦しいし、ステップ後に若干のデレイが発生するため、まずは普通に走って狼へと距離を詰める。

対する狼は、ゆっくりと腰をかがめたまま、俺の一挙手一投足を完璧に読み切るべく、静かに俺を観察している。

やがて、お互いの距離が攻撃圏内に。俺のナイフが狼の顔面へと吸い込まれる。

その瞬間、狼が大きく口を開き、俺の手ごとかみ切ろうと首だけで前へつきだしてきた。その行動を予想していた俺は、瞬時に前へと『ステップ』。

瞬時に体が前へ押し出される。その加速感を感じながら、『棍棒』を左手へと装備させ、瞬時に棍棒の持つ力所を『先』から『中間』へと変えて、狼の口へと突っ込んだ。

ギヤキイツ

凄まじい音と衝撃が、俺の手に伝わってくる。つつかえ棒と化した棍棒が狼の口を中途半端な所で止めた。

その瞬間に、俺のナイフによる『斬撃』コンボが開始される。

シャッ

一撃

シャッ

二撃

シャッ

三撃目。その瞬間、狼があごに力を入れたのが棍棒を持つ手から

伝わってきた。

ギシギシギシ

表示される棍棒の『消耗値』バー。がりがりと削れている。

「うへっ」

思わずうめき、手を離れた。瞬間、鋭い牙と牙によってかみ砕かれる俺の棍棒。破片が舞い、ポリゴンの固まりへと瞬時に変化、霧散していく。

『ステップ』によって、慌てて距離を取ろうとする。

ダッ

ジャッ

狼が、俺の『ステップ』に合わせて肉薄してきた。このままだと、着地点で間違いなく襲われる！

バキッ

着地の瞬間、歯をむき出しにして迫ってくる狼の顔面に、俺の『キック』が発動。狼の攻撃が中断される。

お互いにデイレイ時間が発生する。そのデイレイの間に、俺は左手に次の『棍棒』を出現させる。

思わず、自分の口角が上がるのを感じる。

楽しい。

お互いの手を尽くし、力を尽くして戦う、瞬間のきらめき。

魂が踊り、脳の回転が一段階も、二段階も上がったような、そんな感覚。実際は、俺の動きは単純に『ステップ』と『斬撃』を繰返しているだけの単純な戦法。

それでも、楽しいと、とても楽しいと思った。

野谷さんと、志貴崎さんが毎回あぁやって色々対戦して笑っている時って、こんな感じなのかな

トランプの時も、ホッケーゲームをしている時も、V R F P Sをしている時も、彼らは笑っていた。

端から見て、凄まじい勝負をしているように見えても、きっと、二人の間にあったのは、とても単純な、たった一つの感情だったに違いない。

デイレイから同時に解き放たれた俺と狼は、同時に動き出す。

狼が大きな口を開く。それと同時に、俺が絶妙なタイミングで『ステップ』を発動。狼の目の前に俺の残像だけを取り残して、一気に側面へと回り込む。

攻撃

攻撃

攻撃

単純なナイフと棍棒のコンビネーションがたたき込まれる。

まだまだ、狼のHPは9割ほど目測で残っている。

ついに、俺は自分の笑いが止められなくなった。

楽しい！すごく楽しい！！

俺は今日、初めて、VRゲームの本質を知った気がした。
この体で感じるリアルさ。この体で感じる非現実さ。この体で感
じる駆動感。

ああ、

ああ、

さあ、ゲームを始めよう。

一話 RPGって、なりきりって事ですよ？(前書き)

この小説を初めて、一ヶ月になりました。これからもよろしく願います。

二話 RPGって、なりきりって事ですよ？

シャツ

もう、何度目の攻撃がなされたのか分からない。狼のHPは、既に二割を切っていた。

対する俺は、ポーション一つをまだ温存しており、HPも7割ほど残っていた。

数値だけを比べれば、俺の勝ちは確定したとも言える。だが、狼の高機動、高火力によって一気に逆転される可能性は依然ある。限られたスキルの中で、俺の戦闘は常に綱渡り状態だった。

狼が攻撃し、俺が避けて、俺の攻撃を、狼が避ける。

その繰り返しの中で、お互いの戦略によって徐々に傷つけ、傷つけられ、今になった。

もう既に、俺達二人はお互いがどのような攻撃手段を持ち、どのような動きをするのか、完全に把握し合っていた。

完全な均衡状態。

ガシィッ！

狼の口が強烈な勢いを持って噛みついてくる。俺は、それを上半身の反りだけで回避。

狼の瞳が驚愕の色に染まる。

俺は、上半身を反らしたままナイフと棍棒を振るって狼の鼻先へとカウンターのような形で攻撃。

また、狼のHPが少しだけ減少した。

はっ！出し抜いてやったぞ！

お互いが動きになれてくる中、突然にフェイントをかける。今回見事に成功したわけだ。

しかし、また次の攻撃を加えるのには、また長い攻防を繰返さないと行けなさそうだ。

狼が身を沈めて特攻体制に入る。

それを受けて、俺も静かに身をかがめた。

お互い同時に走り出し、お互いに渾身の一撃を持って、影と、影がぶつかり合う。

そうして、俺達は打ち合った。何度も、何度も、何度も。

もう、戦闘が開始されて何時間経ったのだろうか。とくに俺の心は持続する緊張感に疲れていたが、アドレナリンを出し続ける脳が、この戦闘をもっと、もっとと欲していた。

それはきつと、狼も同じだろう。

瞳はららんと輝き、俺の体を引き裂きたいと口から涎を垂らしていた。

刃と牙を打ち合う俺達は、まるでじゃれ合っている二匹の犬そのままだった。

既に、もうポジションは無い。HPも5割だ。

レベルアップによって得たポイントを全て防御力に割り振ったが、それでも、あと二撃ほどダメージを食らえば、俺は死んでしまうかもしれない。

だからといって、後ろを向いて逃げることは許されない。逃げたところで、狼の足に勝てるわけがない。そして、俺達の間には『最後まで打ち合おう』と、確かに暗黙の了解がされていた。

そして、狼のHPついにあと一割を切った状態となっていた。向こうも二、三撃打ち込まれば、その白い体を地面に横たえることになるのだ。

俺は、体を少しだけ落として、『ステップ』を発動。

俺と狼の距離はまだまだあり、俺の『ステップ』は完全に不発。中途半端な位置でその駆動を終えるだろう。

狼は、俺の奇怪な行動に完全に虚を突かれて、慌てて飛び出し、俺の『ステップ』が終わろうとする前に一撃を加えようとする。

かかった！

>>犬・・・狼は、その足に生えた爪を地面に食い込ませてスパイクとし、瞬間的に加速する事ができます。<<

irisさんに、事前に教わったことを思い出す。

俺は、左手に装備していた『棍棒』を、狼へと向かって投げ捨てた。

瞬時に俺の手を離れて装備から解除される『棍棒』。

それをなんとなくの感覚で認識して、俺は次の『棍棒』を左手に出現される。

捨てられた棍棒は、ただのドロップアイテムと化し、何の効力も持たない『オブジェクト』になるだけである。

しかし、高度なAIを積んだMOB達は、このアイテムに対して、反応してしまう。

>>そして、その骨格は走りに完全に特化し、最適化されています。肺や心臓はその『走る体』を支えるため、体の比率に対して大きくなっています<<

狼が俺の投げた『棍棒』に驚き、体をひねってどうにか回避。

>>しかし、その『走る体』に特化した結果、彼らは前足をほとんど横に動かすことができせん<<

しかし、狼は前足を地に着けた瞬間に俺が棍棒を投げたため、回避してもその回避方向は、ほとんど修正できないまま俺へと突っ込む形となる。

>>つまり、何らかの回避行動が必要な状況に陥ったとき、『前足だけが地面に突いている、または空中に居る時は、ほとんど回避行動が取れません<<

チエックメイト

俺のナイフが朝の太陽を鈍く反射させ、歪な煌めきを見せて犬の顔面へと吸い込まれる。

続いて、棍棒がその無骨な木面を狼の頭を殴りつける。

そして最後、モーションが終わったナイフが来た道を戻り、狼を切りつけようとする瞬間。

俺と狼の視線が合った。

その瞳は、まるで……。

俺は咄嗟に『ストップ』を発動。攻撃をモーションキャンセル。狼と距離を取った。

狼は、静かに佇み、俺を見つめる。

そして、静かに座り込み、首を差し出した。

「……お前」

ゆっくりと近づき、その白い毛を撫でる。
狼はされるがまま、目を閉じている。

狼の、最後の戦いが、今終わったのだ。

今まで、その体で、その瞳で、何を見てきたのか、何を感じてきたのか。

「俺が、最後でいいのか」

クウン、と一声だけ狼は鳴いた。

全力で戦い、全力で食らい、全力で生きてきた。

そして今日、今、この狼は、全力で生き終えて、俺に体を差し出した。

自分で『自分の終わり』を、こいつは今、決めたのだ。

ゆっくりとナイフを狼の首へと当てる。

狼の鼓動が、『命』が、確かに感じられる。

「……なあ」

どうせ差し出す命なのならば、その命。

「俺と一緒にいかないか？」

その命、俺が貰っても良いだろう？

やばいな。志貴崎さんの性格、ちょっと写ったかも知れないなあ。

狼が、ゆっくりと目を開いて俺を見た。

そして、鼻をゆっくりと俺の腹にこすりつける。

どうやら、承諾してくれたらしい。

「あ、けど俺タイマーじゃないしなあ」

>>タイマー?<<<

「タイマーは・・・、動物使っていうか、猛獣使みたいなもんだよ。『テイミング』っていうスキルで、動物達をペットみたいな感じにできるんだ」

>>なるほど<<<

そんなやり取りをしていると、ウィンドウが表示される。

.....

ホワイトナイトファンクを使役しますか？

はい/いいえ

.....

「これは・・・」

>>どうやら、この狼をペットにする一連のイベントだったようです
ね<<<

「そしてみたいだな」

俺は、迷うこと無く『はい』をタップ。

「よろしく」
「ワフ」

瞬時に、GUIに『ホワイトナイトファング』の名前と共に、HPとMPが表示される。

狼のHPは、かなりぎりぎりの所にあるが、徐々に自然回復を始めていた。

「ごめんな。子供狼の事」
「クウン」

狼の毛並みを手で確かめながら、謝罪する。

狼は目を細めて、俺の体に顔をこすりつけている。

しばらく狼のしたいようにさせておいて、俺はウインドウを表示。掲示板を開き、攻略スレッドを表示した。

- - - - -
- - - - -
- - - - -

201：無花果

王都周辺の雑魚モンスターは、ポップの時間が凄く長いよ。
ちょっと足を伸ばして『イルミル高野』に行った方がいいかもー。

202：miruko

そこって、私も行ったけれどpop time短すぎない？
そここ囲まれてぶつちしたんだけど

203：TKTK

パーティー組んで行けよ。ぼっち乙(笑)

204 : miruko

<<203

あ？

黙れこの短ooooooooooooo(この発言は不適切な発言として処理されました)

.....

なんだコレ。チャットかよ。

とりあえず、他の人のゲームプレイにも役に立つかも知れないので、今回の俺の情報を記しておく。

.....

205 : kei

『ホワイトナイトファンゲ』っていう動物を仲間に出来たので、書いておきます。

場所はイミルの森。

正確な方法が分からないので、全て書きます。

・エルアドの村でクエスト『狼討伐』を選択。

・酒場のマスターから詳細を聞き、森に狼が出ると知ったが、朝には居なかったので夜にしか居ないと思って、村長から村の鍵を貰って夜でも村に出入りできるようにしておく。

・月が自分の真上に来たときくらいに、草原でゴブリン狩ってたら遠吠えが聞こえてきたので森に行くと、狼が居る。

・一度戦闘するも、何故か狼が『微毒』を持ってる。

・一度村に戻って解毒剤を仕入れて狼へ飲ませると、狼の状態異常が解除、この時ネームカラーが『ピンク』から『赤』に上昇。

・しかし狼は戦闘態勢に入らず、森の奥へ行き、ついて行くと子供の狼が瀕死になっている。

・どうにか助けようとするも、状態異常消えず、最終的に死ぬ。

・その後、狼と一緒に一晩追悼する。

・朝になって、何となくお互い戦闘初めて、多分3時間くらいどんばちやる。

・最後の一撃を加えようとしたら、狼が攻撃を辞めたので、俺も辞める。するとウィンドウが表示されて、仲間にすることができた。

自分は職業：旅人でレベル4でした。テイミングは使ってないです。

多分無駄な行動がいくつかあるでしょうが、参考になればうれしいです

- - - - -
- - - - -
- - - - -

「こんなもんか」

>>既にイベントは終了しているのに、他の人が参考になるのですか？<<

「こつというイベントは、一回切りじゃないんだよ。多分あと数日したら、また狼があそこに出現して、同じイベントが発生する」

>>なるほど<<

地面に座り込み、狼のHPが回復するのを待つ。
それにしても巨大な体だ。真っ白な毛並み。もふもふじゃないのが残念だ。

「そつえば、名前どうしようかな」

『ホワイトナイトファング』は言いにくいし、狼もなあ。

「？」

狼が俺をじっと見ている。うーん。

「直訳で白夜ごんせでいいか？」

「フンフン」

鼻を鳴らして頭をこすりつけてくる。白夜でいいのか。我ながら安易な名前であるが・・・。

「まあ、よろしく白夜」

「ガウ」

頭を撫でる。白夜は目を細めて気持ちよさそうだ。
心強い仲間が増えたもんだ。

鹿が、細い川筋から水を飲むのを止めて、顔を上げた。

辺りはなんの気配も感じられない。いつも通り、ゴブリン達がわめきながら走り回り、風の音に静かに草むらがそよいでる。だが、草食動物特有の危険信号が、微かに、脳を揺さぶった。

しかし、見回しても何の異常も見当たらない。

また、顔を下げて水を飲み始めようとする。

ダッ

その瞬間、草むらから飛び出る白夜。

その巨体から絞り出される瞬間の体の駆動。高速に鹿へと距離を縮める。

しかも瞬時に対応する。

二匹の生死をかけた追いかけてこが開始される。

右へ、左へ。

鹿は、その走る方向を何度も変更するが、白夜は簡単に追いつかなくてくる。

どうやってもダメだと判断したのだろう。鹿はゴブリン達の群れへと突っ込んだ。

白夜もそれを追いかけて、ゴブリン達の中へと突っ込む。瞬間上がる、断末魔。白夜の牙に、爪に、一気にゴブリンの数匹が絶命したらしい。

ゴブリンの輪から出てくる鹿に、それに一瞬遅れて白夜も飛び出した。

二匹を追いかけようとゴブリンがギャーギャーと声を上げ、のたのたと走りすがすが、その差はどんどんと開いていく。

ガア！！

白夜が気合い一声。右へと一瞬方向修正。『フェイント』を仕掛

ける。

それを見た鹿は、左へと方向転換して一気に狼との距離を離れようとする。

が、その瞬間、白夜の瞳がキラリと光る。今までの倍の速度を持って白夜が鹿へと襲いかかり、爪が鹿の尻をガリッと削り取る。

どうにか絶命の一瞬を生きながらえた鹿は、必死に前へと走る。

もう、右にも、左にも方向を変えるつもりは無い。ただ、己の最高スピードを目指して。

加速、加速、加速。

そして、突如鹿の前に銀光が走った。

太陽の光を鈍く反射する、研がれていない、切れ味の悪そうなナイフ。

それが、鹿の見た最後の光景であった。

ずさーつと音を立てて、地面を削りながら崩れ落ちた鹿。それを見て完全に絶命した事を確認すると、ナイフを振って鞘へと納めた。

「偉いな白夜。ちゃんと作戦通りだ」

「ワフ」

白夜の頭を撫でる。やはり、こいつはかなり頭が良い。俺の言葉をちゃんと理解し、その通りに動き、作戦まで自分で立てて、それを実行する。

「これで、鹿肉げつとー」

鹿は、かなり素早い。俺のナイフ装備では、どうしても絶命するまでの一撃は加えられそうに無いし、近づいたら確実に気づかれる。そして、気づかれるとあの素早さだ。絶対に追いつけるわけが無い。

せめて弓矢がないとダメか・・・とか思っていたところに、白夜が仲間になったのだ。白夜ならば、鹿を軽くしとめてくれるに違いない。

「食うか？」

「アウ」

白夜がおいしそうに鹿肉を食べる。・・・お願いだからその後舐めないでよね。

鹿肉をとりあえず、白夜にあげる。ステータスを見ると、FOOD値が結構やばい値になっていた。鹿肉はクエスト条件だと、5つ必要。つまりあと5匹は仕留めないと行けないのだ。

この草原には、見渡せばちらほらと鹿が見える。あと5つもすぐに集まるだろう。

間話 喋り男と沈黙女（前書き）

どうしようかなーとか迷いましたが、入れる事にしました。

句点を付けて少しでも読みやすくした・・・つもりです。

間話 喋り男と沈黙女

やべえやべえやべえやべえやべえ!!

「やべえやべえやべえ!!」

何がやばいつて!?!全部やべえ!!何だつて!?!ゲーム!!ゲームだぜ!!!

ひゃー!!

「ひゃー!!!!」

夢みたいだ!何何?ゲームに取り込まれちゃったつて!?!?すつげー!すげーぜ。何コレ。何何?まじで何よこれー!

これで勉強も、仕事も、五月蠅い上司も、腐った依頼も、しみつたれた母親ともおさらばかよー!!!!

興奮するだろ!?!なあ!!興奮するよな。俺のこのテンションを言葉に言い表すとしたら、その心象だけで原稿用紙10枚くらいは軽くぺろりんちよだね!

「うつせー!お前何なんだ!」

隣から、俺に怒鳴りつける声がする。

何だ?何で涙なんか流して、かわいそうな顔してやがんだ?

「あー?何だよ兄弟。何でそんなに泣いて、しみつたれた顔してやがんだ?ゲームに入れたんだぜ?ゲームに。おいおいおい。子供の時からの夢みたいなものだろ?四六時中ゲームしてーってのは。子

供の時から夢だよな。いや、大人になつた後でも、俺はゲームの虜だぜ？おいおいおいおい、まじかよまじかよ。ありえねーありえねーありえねーぜ、あんた。もつと笑えよー。笑う門には何かくるつて、ジャパニーズジョークも言つてやがる。だろ！？なー！！」

「誰が兄弟だ！ゲームから出られないんだぞ……。糞。糞ー！！」

はあ？まったく意味がわからねえ。なんだこいつ。まじ意味わからねえ。

『知らない人にはとりあえず兄弟と呼んで仲良くしましょう』つて俺のしみつたれた母親も言つてやがったぞ。

「おいおいおい。何だよベニー。そんなかわいいそんな眉毛を、さらにかわいそうにひん曲げて。どうしたよどうしたよどうしたよ！お涙ちようたいは似合わなさそうな顔だぞー？ベニー。おいおいベニーどうした？ん？あれか？やっぱあれか？お前つてあれか。『FPS』畑の人なのかよ？そうかそうか。そうだな。やっぱりゲームはFPSだよな。お前はどっち？グラビティガン？ポータルガン？それともサイケフレーム？おつとおつと。忘れていた。ボールか！ボールだよな！！やっぱりな。ボール。最高だよな！！」

「俺はベニーじゃねー……。その口閉じてろ……。俺に喋りかけるんじゃねー」

俺は、人の言うことはちゃんと聞く『良い子』ちゃんだ。俺が『良い子』ちゃんにしていると、皆笑顔で俺に金をくれる。それで毎回三年間くらいは遊んで暮らすのさ。

そして、金がなくなつたらまた『良い子』にするのさ。

だから俺は、口にチャックをして、敬礼してベニーから離れた。

なんだよなんだよ。皆してしみつたれた顔してやがる。ゲームだ

よゲームだよー！！ゲームですよみなさん！！

俺が街を渡り歩く中、どこもかしこもしみつたれた顔でウィンドウを覗いていたり、天を覗いていたり。まったく、ばかばかしい。ばかばかばかばかばかばかばかりしかいやしねえ。糞が。胸くそ悪いぜ。

ああ、何だよつまんねー。もつとこご。ヒャー！！ってやってる奴いないのかよー。

「ひゃー！！」

ははっ俺が居ればそれでおっけーだろー！！！！

というわけで、俺は街の外に出たわけさ！何が「というわけで」なんか自分でもわっかんねー！！

冷静に武器を確認する。ぶふ。『冷静』とか！！俺が『冷静』！ないねないねないねー！！

おつとつと。変な事考えてるばやいじゃないや。ばやいばやい。武器はナイフだけ。ナイフオンリー。だせえ。

「だせえ」

まじでしょべえ

「まじでしょべえ」

一気に俺の天にも昇っていたテンションが、がっくりシット地獄

ooooooooooだぜ!!

まあ、とりあえずこのナイフちゃんには何の罪もねえし。試しに振ってみる。ぶんぶんとうなるそのナイフは、俺の手に、なんだかガツチリ綺麗にフィット。スキル？職業旅人？そんなんわからねーよ。俺MMORPGあんまりすぎじゃねえんだよ。

面倒くせえよな。俺って取扱説明書読まないタイプじゃん？え？知らない？まあそういう性格なんだよね俺って。

そのまま、道も無いような道を歩いて行く。

「おっ」

どいつもこいつも、しみつたれていていると思っていたが。ちらほらとゲームに興じている人がいるじゃねえか。

さっきの失敗にめげずに挨拶をする。

「ようようよう！兄弟！！ゲームの中に閉じ込められた気分どうよ！最高！！そうだな！？最高だよな！！ゲームの中に取り込まれるなんて、まじはんぱねー。略して『パネエ』！！まじでまじでまじでまじで！！最高すぎる体験だとおもわねえ！？で、所で兄弟何してんだよー」

俺の軽快リズムカルマックス陽気な挨拶は、しかし沈黙によってシャットアウトセラされた。

「
.....
.....」

おいおいおいおい。逆に沈黙されると、まじ俺何もできなくなる

たりして、何？何何！？そういう系なのか！？まいつちまったな。
俺ってば喋り倒しちまう奴だから、こういう沈黙守る的な、戦艦ぶ
つこわしちまうコツクの奴は、もうどうしていいかわからねえん
だよ！！

なあ！！なあなあなあ！これはどうすりゃいいんだよ！！

よ、よしよし落ち着け。俺。クール。だ。クールに・・・クール。
・・・。まて。まてまてまて。なんで俺がクールになつて落ち着かな
くちゃいけないんだ！？そもそも「クールに落ち着く」って何だよ
！？二重の意味じゃねえか！糞が！糞が糞がー！！！！

「おーけー。おーけーおーけーおーけー」

おーけーだ。おおおおおれが別にくつてぶるつちまう必要はな
ななななんもねえはずだ。相手はたかが黙ってこつちみてるだけ
ののの奴なだけだ！

おおおおおお俺がいちいち取り乱しててもしょうがねえ。

「じじじ自己紹介しじょうぜ。俺はリノっつーんだ」

こついうお互いの挨拶はとっても大事だ。相手の大事な部分が、
まるみえもんごりあんだ。だから俺はいつだつて挨拶を大事にする。
そついう男だ。ぶるつてなんていないぜ！

「.....」

「.....」

なー、この間なんかなんね？あと数秒ながいと俺が○○○○
○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○しち
まうんだが。

まあまあまあ、お仕事だと、まあそういうこともあるんだけど？けど俺ってば『良い子』じゃん？だからだからだからだから、お仕事しない時はそんな事しねーんだぜー！！！！！！

俺ってば良い子だろ！？死んだ親父も言ってたぜ。「お前は糞つたれたウジ虫以下だ」って！！なー！！良い子だろー！？！？！？！？

高野の中を、二つの影が躍り出る。

それをじつと見つめる上空の獣、『グリフォン』。鷲の羽と上半身を持ち、ライオンの下半身を持つ空の肉食獣だ。

グリフォンは、空高く二つの影を見下ろし、余裕の表情。

届くわけが無い。

そう、言っているようだった。

だが、二つの影が突然重なり、上空へと飛んだ。

「ひゃー！！いいぜ！！やっぱ最高だな！！このスキル！！職業『忍者』だっけ！？まじ最高にイカす！！ジャパニーズサムライ！！ニンジャーー！！ひよっほー！！」

影の正体はリノとリノである。

「うん。最高」

リノの背中に乗ったリノが、さらにスキル『ジャンプ』を使用してグリフォンへと肉薄。

首に手を回し、その勢いのままにぐるりと回転。背中へと着地した。

グリフォンの瞳が、驚愕の色に染まる。

「はいはいはいはい。犬はさっさと地面におちんだよ！なんだよ？この腐った羽は！天使か！は！天使なら、俺の家の壁とか天井とかにいつでもいるっつーんだよ！糞が！見飽きたぜ、こんな糞羽！いらねえんだよ。いらねえいらねえいらねえいらねえ」

リノの声に合わせて、小型のナイフが高速で両手のコンビネーションを持って、グリフォンの羽を攻撃する。

「いらねえ」

リノの声がどんどん高速化していき、それに合わせて、両手のナイフが速度を上げていく。その動きは、既にスキルアシストの速度を超えていた。

リノは完全に、『スキル』を使用せず、ナイフを自在に動かしていく。

グリフォンがたまらず急旋回して、地面へと降下していく。

きりもみしながら落下していくグリフォンの背に、足を器用に引っかけてリノは、なおも攻撃を続ける。がりがりと削れていくグリフォンのHP。

しかし、その速度はあまりにも、遅い。

彼らは、適性レベル20というグリフォンに、たったレベル10

グリフォンは、さらに速度を上げて地面に向かって落ちていく。その先には、もう一人のリノ。

「シャ！シャ！」

二本の投げナイフを投擲。グリフォンの目へと綺麗に吸い込まれていく。

「ギヤアアアアアア！」

グリフォンの悲鳴と共に、連続攻撃を止めるリノ。

「おー。もう地面に近づいていやがったー」

そう言いつつ、リノがグリフォンから離脱。地面へと激突……。瞬間に足をクッションとして、ピンと張った足をゆっくりと曲げ、膝を折り曲げて一段階目のショック吸収、お尻について二段階目のショック吸収、そしてごろりと転がり、完全に地面からの衝撃を吸収した。

「が、リノのHPは、凄い勢いを持って半分ほど減ってしまった。

「……………」

「……………」

「はあ！？何でだよ！？今の最高のパフォーマンスだったろうがっ！糞が！ファoooooooooooo！！まじかよーあーなんでだよ！ありえねーぜ。テレビで見た通りのモーションだったろうが。最高の角度だったろうがっ糞が……………」

だったら最初からもろもろしてるのが良いな とかそんな感じなんだが！そんな感じなんだが！言ってる思ったが、やっぱりそういう敵ってあんまりいないんじゃないかなって！！だからだからグ
リフォンでいいぜ！！！！」

リノがびしーと親指を立てた。

「……………」

「……………」

「じゃあ次行こう」

「お、おーけー」

そうして二人は次のグリフォンへと向かって走り出した。

喋り男と沈黙女。二人が上村達と会うのは、きっともう少しだけ
先のお話。

間話 つさぎの穴に落ちて（前書き）

皆さん、クリスマスはどう過ごしたでしょうか？

私ですか？ケーキ食べましたよ。コンビニで買いました。

「フォークは一つで良いです」ってちゃんと言いました。エロです。

ケーキはなんだかしょっぱかったです。不思議ですね。

間話 うさぎの穴に落ちて

system:kei logout

「あれー？圭落ちたー？」

「落ちたな」

「ですね」

山城、鬼谷、志貴崎のそれぞれのGUI上に、システム画面の口が表示される。上村がゲーム上から退出した意味をなすその文面に、頭の上にそれぞれが疑問符を浮かべた。

『トーテムポール』が崩れた時のまま、三人は座り込みながら、だらだらと過ごしていた、まさにその時の事だ。

上村は野谷と、FPSの訓練をしていたはずである。

現に、つい先ほどまで、激しい銃声が木々の生い茂る森から響き渡り、上村の悲鳴が時々上がっていた。

「野谷が虐めすぎたんじゃ無いのか？」

志貴崎がやれやれといった感じで首を左右に振る。

まさに普段から多大な精神疲労を上村に課している張本人は、完全に自分の事は棚上げである。

「そんなわけな……」

反論しようとする山城であるが、事、勝負事。それもFPSとなるとまさに、『キリングマシン』としか言いようが無い動きを見せる野谷を思い浮かべて、言葉が途中で停止してしまう。

「半泣きで出て行く上村さん……」

一方山城は軽くその状況を想像しているようである。

「ありそー」

「いや、流石にそれは無いだろ」

本人が居ないとすると、勝手に人物像を作り替えてしまうのが女性という物である。

志貴崎は流石に彼女達のテンションについていけず、先ほどから口を『へ』の字に変えっぱなしだ。

『女の子』というのは良く分からんな。野谷に虐められて泣く上村……どうしても想像できんが。

頭の中で、笑いながらハンドガンを打ちまくる野谷が、上村を追いかけて、上村が泣き叫びながら逃げてログアウト。

志貴崎は目眩を感じた。

ある意味で、その人なりの本質を捉えて認識する志貴崎にとって、女性同士のヒートアップした『妄想』というある意味での『お遊び』は、まったく理解出来ない物なのだ。

そういう意味で、純粹に競い合う事に楽しみを見いだす『野谷』という人物は、志貴崎にとってはまだわかりやすい部類であると言える。

それでも、まだまだ志貴崎の茨の道は遠く、険しく、その頂を目標できるには至っていない。

「圭は、ゲームの勉強をしてくるって言って一旦出た」

「えーなんだーつまんなーい」

森から野谷が出てきた。

上村を追いかけ回してきたのだろうか。中々に上機嫌そうだ。体を猫のように伸ばし、山城が土の上に寝転がる。

ツインテールが地面に付き、ずりずりところするが気にする様子は無い。

「何だ。はしたない」

「へへん」

「じろじろ、じろじろ。」

system:round end

「ん？」

と、その瞬間全員の視界がブラックアウトした。

ゲーム『HALLOPOINT』のゲームラウンドが終了したのだ。

system:game exit

「わわ」

続いて、『HALLOPOINT』自体が終了する。

志貴崎達は、今回野谷のサーバーへ接続し、プライベートで『特訓』していた。

また、皆でゲームをするときは基本的に『部屋』を経由してアクセスしている。

そのため、野谷のサーバーがゲームを終了させ、強制的にゲーム

から切断された場合、VR接続で接続中の彼らは、自動的に『部屋』へと接続される。

「緊急事態が発生しました」

ゲームが終了して集まった野谷、志貴崎、山城、鬼谷の四人の前に、irisが浮いている。

「.....」

四人は、お互いに言葉を交わさず、irisに注した。

上村がゲームから離脱し、その数分後に、ゲームから強制終了。

そして、わざわざ自分たちを前にして『緊急事態』と言う。

間違いなく、上村に何か起きたのだ。

今この瞬間、焦って、いたずらに言葉を発したとしても、状況判断が遅れるだけである。

「先ほど、圭がVR接続にてゲーム攻略サイトを覗いていた時、コンピュータの管理者権限が『圭のコンピュータ』から剥奪され、ネットワーク上の『サーバー』へと権限が移行しました。これにより、『圭』が『圭のコンピュータ』を操作出来ない状態に陥りました」

irisの言葉に、山城、志貴崎の知識は追いつかないが、言葉を挟む事は無い。状況判断は残りの二人に任せ、自分たちで分かる範囲で理解しようとする。

「その瞬間、私の『縮小コピー』を、『圭のコンピュータ』へ潜り込ませる事に成功。数分の各種データログを採取する事に成功いたしました。」

圭の脳が異常な活性化を見せております。ニューロンの新規経路

の形勢が行われている可能性があります。

その後、圭はネットワーク上の『サーバー』へと接続され、『圭のコンピュータ』は、完全に『サーバー・圭のコンピュータ』以外の通信を封鎖しております。

……つまり「

大変危険な状態であると言えます。

」で？どうすればいいの？」

山城が静かに口を開く。

山城は思う。

コンピュータの事なんて正直良く分からない。
irisさんの言葉の一つ一つは理解出来る。
多分私にもわかりやすいようにかみ砕いている。
けど、やっぱりよくわかんない。

ただ一つ分かる事。

上村の頭がいじくられ、

変な所に接続されて、

そしてとっても危険な状態である。

「ほう。山城。お前がそういうとは思わなかったな」

志貴崎が少しだけ口角を上げて、山城を見る。

「どつせ、行くんでしょ？ 椀は」

「ほづ？ 何で知ってるんだ？」

わざとぶざけているように、志貴崎が大げさに首をかしげる。

「で？ お前らどつする？」

ニヤニヤと笑いながら、志貴崎は鬼谷と野谷を見る。

「irisさん」

「何でしょうか」

そのやり取りを横目に、鬼谷はirisへと語りかけた。

一瞬口を開こうとし、両手を開いては閉じ、首を振る。

……もうirisさんには使えない。

一瞬でも疑ってしまった自分が嫌だった。まさかirisが上村を閉じ込めたのでは？ と。

結局あれから自分は何も変わっていないのでは無いか。

この上村が閉じ込められるという事態、話を聞く限りどう考えても鬼谷がirisへと相談していた一件に違いない。

あのとき一度信じておいて、また、irisを疑った。

少しでも不安があると、この能力に頼ってしまう。

自己嫌悪していたんじゃない？

この能力が嫌いなはずでは？

そう言いながら結局自分は能力に頼るのか？ 偽善よりもはるかに

醜い。

この心の膿が、濁った内容物が、結局自分を腐らせた。

他人の考えている事を読む。そして、もっと力を込めれば……。

結局、自分はその『保険』を使いを使い、全てを無にしてきたのではないか。

両手に暖かい温度を感じた、あの海の底で確かに芽生えた何か。

今大切なのは、

今大切なのは……。

「もちろん私も行く」

鬼谷が思考に沈んでいる間に、野谷が進み出て、志貴崎の言葉に続いた。

「圭、一人だと何もできなさそうだから」

「違うない」

そう言いながら、笑い合う志貴崎と野谷。

それを見ながら、鬼谷は、ああ、『皆強いな』。と思った。
少し前なら、後ろ足を引かれたかもしれない。

私もついて行って良いの？

そんな、答えの返ってこない問を、毎日、毎時、毎分、毎秒思っ
て、おっかなびびっくりついてきた。

けど、違う。

もう、違う。

そう、今大切なのは、上村さんを助けに行く事。

irisを問い詰めてどうする？自分の不安をかざしてどうなる
？刻一刻一刻と、上村の命が削られているかもしれないこの時に。
そう。大切なのは、皆と一緒に歩むこと。

山城と、野谷と、志貴崎と、irisと、そして、上村と。
それでこそ、自分を『救える』ように、鬼谷は思えた。

私が能力を使って、止めてくれるの。上村さんしかいないんで
すからね。

そう。とりあえず、自分を上村の横に置こうと思った。
皆と笑うために、皆と歩むために。

助けに行くと言うことは、会いに行くと言う事。

だから。

「私も行きます」

そう、心から宣言した。

腐った心で、汚い心で、それでも、誰かのために。

「……それでは」

irisが、皆の前に、メディアファイルを展開する。

大きな三角のマークが一つだけぽっかりと浮いて、真っ黒な画面を浮かべている。

「このファイルを再生した瞬間、皆さんは圭と同じように、『サーバー』へと接続されます。もちろん、私の『コピー』もついていきます」

それだけ言うと、irisは沈黙した。

「じゃ、おつさきー」

「先、行くね」

「ちょっと、コンビニ行ってくるね」といったような軽いテンションで、山城と野谷がそろって再生ボタンを押す。次の瞬間、二人のAvatarが制止、フリーズ。

野谷がフリーズしたため、あと数分で完全にこの『部屋』を含めた野谷のPCは『サーバー』以外の接続を切断するだろう。

「じゃ、私も行きますね」

鬼谷は微笑みながら、再生ボタンを押す。

その指が微かに震えるのを、志貴崎は確かに見た。

ま、良しとしよう。

そう思いつつ、三人のアバターが固まっているのを見渡しながら、志貴崎は口を開いた。

「少し早いな」

「そうですね」

「お前か？」

志貴崎は少し不機嫌そうにirisを見る。

「まだテストの途中だろう？」

「何事にも『イレギュラー』はつきものです。圭が自分で……いえ、『サーバー』が、今回に限り大量に集めたようですね」

「はあ。何事も『計画』とは上手くいかないものだ」

志貴崎はため息をついた。ままならないものだ、と思った。

「上村、きつと泣いてるぞ」

「そうですしょうか」

「そうとも。あいつには苦労ばかりをかけるな」

苦労しかかけていないの間違いである。

「あまりに待たせると上村に怒られるな」

志貴崎はゆっくりと再生ボタンに手を伸ばし……、手を止めた。

「そうだ、iris」

「はい。何でしょう」

志貴崎は、ニヤリと笑う。いたずらを思いついたときの笑みだ。

「その『体』では、『冒険』できないぞ？」
「わかっています」

一瞬志貴崎は驚きに目を見張るが、小さく微笑んで、今度こそ再生ボタンを押した。

嗚呼、アリス。

絵本を読むのを辞めて、どこに行くのかアリス。

ウサギを追っかけて、穴に落っこちるよアリス。

クッキーをお食べ。ティーはいかが？

それとも、ケーキが大好き？

アリス。

アリス。

僕のアリス。

僕だけの。

だから、テストをしよう。

さあ、扉を開けるんだ。

君が開けた扉だ。

また今度来るよ。Alice。

ケーキを持って。

必ず、必ず。

新しい接続を感知。

シークエンスを開始。

形成。形成。形成。形成

間話 1と0へと至る考察(前書き)

前話と一緒にするつもりでしたが、分けました。

間話 1と0へと至る考察

「んん……」

暗い部屋の中、上村は寝返りを打った。

あの後、結局鹿肉をそろえるために、白夜との色々なコンビネーションを試したり、ゴブリンを狩ったりすなどの寄り道をしていたら、良い時間になってしまい、村に戻り、宿を取ったのだ。

村に入る時に、狼を入れる事に上村は不安そうであったが、門番が普通に上村達を通し、さらに宿まで普通に取れて目を見開いていた。

ペット属性がついているため、AI達も特に狼に対して特別なアクションを取る必要は無かったためである。

もしも、ドラゴンなどを仲間（できるかどうかは不明であるが）にして、それで宿を取ったらさぞかし面白い光景になるに違いない。

女性らしいシルエットが、その薄い布地越しからうかがえる。控えめに膨らんだ胸が、ゆつくりと上下している。

カーテンは閉じられ、外の景色はうかがうことは出来ないが、その隙間から漏れ出る淡い光は、時刻がまだまだ深夜と言って良い頃合いだと感じさせる。

安定した呼吸を感じさせるその胸の動きとは対照的に、上村の顔は、若干ゆがんでいる。悪夢でも見ているのだろうか。

寝返りの回数も多く、熟睡、という状態にはほど遠いと言えそう

その様子を、ベッドの横で丸くなりながら寝ている白夜が、時折薄くまぶたを開けて確認する。

やはり、『AI』にすぎないと言った所でしょうか。

その様子を静かに観察していたirisは思考に沈む。

この狼の思考、動作と思考ルーチンは、明らかに上村と仲間になる前と後では違う。

少なくとも、上村の仲間になる前、この狼はまったく別の『信念』とも言うべき物に従い、上村と戦い、そして上村へと下った。

そしてその後、この狼の・・・白夜の行動を見てみると、従順に従っているように見えるが、そこには昨日森で威風堂々と上村を迎えた気高さはまったく別の、従者としての気品が感じられた。

恐らく、上村もそれを本能で感じ取ったのであろう。

子供狼の命を奪うという、常人にはあまりにも酷な選択を、彼はあの時ほぼ躊躇無く行った。

あれはつまり、ゲームと認識した上での『ロールプレイング』というアプローチで、彼が下した一つの『結論』にすぎなかったのだ。

それとも、それこそが彼の本質なのでしょうか。

もしも、子供狼を手にかけてことを、本当に心の傷として悲しんで、それでもなおその後、白夜と戦いながら笑って闘争を楽しんだとしたのなら……。

あまりにも、上村 圭という人物は『あやふや』で芯の通っていない人物ではないのか。

ずっと感じていた上村 圭という人物に対する違和感。

数十年前に、志貴崎と離れた内容を思い出す。

『上村 圭という人物は能力者ではないのか？』

能力者達は、必ず皆、どこかに傷がある。

それは、心にあるのかもしれないし、体にあるのかもしれない。とりあえず、あらゆる意味での『傷』だ。

それは、irisが長年連れ添った野谷を含めた、友人達全てに当てはまる。

傷があるからこそ、繋がりをとめて、

傷があるからこそ、隠して、

傷があるからこそ、全てを欲して、

傷があるからこそ、躊躇する。

とてもまともじゃ、居られない。

狂ってないと、まともになれない。

能力者は人とはまったく別物。

しかしそれは、『能力』を持っているからでは決して無い。

『能力』を持った人を見る周りの目が、彼らがそうあるべきだと認識して、接したからだ。

そしてどうなったか？

結果、彼らは孤独になり、自分で、自分を傷つけた。

irisの一番身近にいる、野谷でさえもそうだった。

そして、iris自身も。

それでも強い精神が、折れる事を許さなかった。だから、彼らは自分の意思で能力を公使する事ができ、そして笑い合うことが出来る。

そして、そんな彼らと一緒に笑う上村 圭という男。

上村 圭という人物を、このゲームで一緒に行動し、観察するうちに、irisはさらにこの男の事が分からなくなった。

この男はこのゲームに入った時に、大変に取り乱した。が、その後すぐに立ち直り、冷静に状況を分析。

すぐさま目的を自分に課した。つまり、『ゲームクリア』という目的を。

それは、『常人』が選択しうる目的なのでしょう？

irisは思考に沈む。自分の思考が、ひどく永遠にくるくる回る、解の出ない問に思えた。

n u l l .

n u l l .

n u l l .

自分のそんな思考のループに、irisは自嘲めいた気分になった。

その後、数回の戦闘を繰返し、『システムアシスト』という助けを得たていたからといって、限られたスキルを使い分け、効率的に体を動かしていた。

女性という、使い慣れない体で。

可能なのだろうか？ 実際。

女性と男性は、体のつくりそのものからして違っていて、内臓の位置すらも違う。

このゲームがどれほど『肉体の違いをシミュレート』しているのかは分からないが、少なくとも十数年使い慣れた体が、いきなり別の物に変わるのである。一日、いや、数時間であそこまで動けるようになるのだろうか？

それを考え始めると、irisが出会ってから、今までの『上村圭』という人物が取ってきた行動全てが、あまりにも不自然な物に思えてきた。

あまりにも、私たちにとって『都合』が良い。

ありえるだろうか？

偶然出会う事もあるだろう。

偶然友達になる事もあるだろう。

偶然何かに巻き込まれることもあるだろう。

良くある話だ。とても良くある話。

その程度なら、少し検索すればいくらでも出てくるありふれた小話にすぎない。

超大物スターと飛行機が一緒になったとか、

爆破テロと同じバスに乗り合わせたとか、

雷に100回以上撃たれたとか。

そうなる事に、本人の意思は関係無い。なるほど、運が極端に悪いのだろう。極端に良いのだろう。

きっと、上村圭という人物も、それだけの人物だという話なだけに違いない。

そうだろうか？

本当にただそれだけ？

なるほどなるほど。偶然能力者達と一緒にあって、毎日遊んで、

数日後には沖縄に行つて、数十日一緒の部屋で寝泊まりした。

凄いい幸運だと言える。いや、凄いい不運だろうか？

とにかく、凄いい何かに巻込まれても、彼は彼を失わずに笑う。

彼はいつだつて、iris達にとって『都合の良い』人物像であり続けた。

彼らの安全装置であり、彼らの導き手であり、彼らの保護者であり続けた。

そして、今度はまったく違う『何か』に巻込まれ、上村 圭という男はここで寝ている。

それだけの事が重なれば、『常人』はどうなるのだろうか。

いつだつて、彼は彼らしく振る舞いつつも、どこか『流され過ぎている』印象をirisに与えた。

すぐさま状況を受け入れて、それを自分の常識として行動する。

その彼の思考原理が、irisにとって何よりも異質な何かを感じさせる。

やはり、圭もどこかに……。

傷があるのだろうか。上村の心のどこかに、体のどこかに。

だからこそ、彼は状況に柔軟に対応して、皆の前を歩いて導く。

それは、別に野谷、志貴崎、山城、鬼谷達を上村が引っ張るといふ事では無い。

心を支え、彼らが好き勝手にするのを優しくリードするのだ。

「常人だろうが能力者だろうが、上村は上村だ。俺は信頼してるし、

皆も信頼している」

志貴崎の言葉をゆっくりと思い出す。

「どうやら、あまりにも圭と一緒に行動するうちに、『無駄な思考』を繰返していたようです。」

そう。良いでは無いか。上村 圭という人物は、そういう人物なのだ。

その起源を探す事に意味は無い。

彼は大切な友人であり、仲間であり、irisを含めた皆にとって大切な存在には変わりないのだから。

結局irisは、志貴崎が真つ先に辿り着いた結論に、遠回り遠回りしながらようやく自分も辿り着いた。

上村が上村でいてくれたならば、それで良いと。

「んん・・・」

また、上村が寝返りを打った。

布団がずれ、するりとむき出しにされた足が、カーテン越しから微かに差し込む月明かりに照らされて、単色に統一されたベットの上で淡く浮かび上がったようにも見える。

「フシュ」

それを感じ取り、物音を立てないように立ち上がった白夜が、布団を口でくわえて、上村の体が全て布団の中に入るように直してやる。

なるほど。良く出来た従者ですね。

その様子を確認しながら、irisもしばし、思考を止める事に
した。

さあ、また新しい今日が来る。

朝日とともに、新しい今日が。

昨日よりも刺激的な、きつと、楽しい今日が来る。

三話 迷宮で太陽を拝む？（前書き）

家に入る鍵を無くしました。

どこを探してもありませんでした。

結局鍵を壊し、新しい鍵を取り付けて貰いました。

ふて寝してしまいました。嗚呼、私のバカ。

ディンプルキーはコピーが大変なので、普通の板鍵にしてみました。10本くらいコピーする所存です。

三話 迷宮で太陽を拝む？

「はあっ！！」

気合一線、俺の片手剣が軽快な音を立てて敵を切りつける。

薄暗い廊下が延々と続く地下迷宮。等間隔で並んだランプ灯がぼんやりと怪しい光をちよろちよろと発し続け、分かれに分れる分岐は、まるで何かの生物の中に入っているようだと思わせる。

蜘蛛の巣が薄くかかった壁面は、人の息づかいを全く感じさせない。地面も壁もまったく同じ模様が延々と繰返すこの迷宮は、入った人の時間感覚と方向感覚を簡単に麻痺させる。

そんな中、俺は敵と遭遇していた。ミニマップには眼前の敵ただ一人。周囲には敵影無し。後からついてくる白夜もこいつ以外の敵を感知していないようだ。

俺の戦闘開始と共に、白夜は後で静かに身を落とした。

俺の動きを見守り、何か不備が入ってくるとすぐさま対応できるように体中を緊張させている。

「ギギイ！！！」

敵は人の形をしているが、その皮膚は青く、ランプの光を妖しくぬらぬらと反射させている。

薄暗い瞳は赤くららんと輝き、俺の攻撃を受けてもなお、憎悪を込めた眼力を弱めたりはしない。

そして、敵はぐぐもった声を出しながら大きく後退。距離を取って一度体制を立て直そうとする。恐らく『ステップ』を使ったのだ。そうはさせないと、俺もステップによって敵に肉薄しようとする。ガチャガチャと、俺の体の節々から金属音が鳴り響く。

「フシュッ！」

そのタイミングを読んでいたように、俺のステップの軌道に重なるようにして、横から殴りつけようとする別の気配が。

！？

内心困惑するも、俺は盾を敵に突き出し防御、新たな敵のインパクトと俺のスキル『パリイ』の発動タイミングが完璧に重なり、追加効果で敵が一時的にスタン。仰け反りながら静止する。

俺の体は『パリイ』の発動と共に、『ステップ』による体の駆動を強制的に止めて、その場に停止していた。

後退した敵は、まだ体制を整えていない事を横目に確認。一旦標的を、横入りしてきた敵へと切り替え、『パリイ』から派生する、仰け反った敵への追加攻撃特殊スキル『無防備への追撃』を発動する。

シャツ

俺の片手剣が、目にも止まらぬ速さで目標へと吸い込まれ、狙いを寸分たがわずに貫き通した。

鮮血の噴出エフェクトを、前から、後ろから美しく噴出し、腹の底から搾り出したような悲鳴を周囲に木霊させる。

まだ俺のスキルモーションは終了しない。このスキルは、敵の隙を突く大ダメージが期待できるカウンター技であるが、隙がかなり大きいのだ。

一瞬できる空白時間。その間に、俺は気配の名前を確認。

『レドラの暗殺者』、色は、白。

暗殺者。隠れていたのか？

冷静に状況を判断する。最初に俺が攻撃したのは『レドラの下っ端』、色は緑。おそらく俺があいつと戦闘を開始した時から、この『レドラの暗殺者』は隙をつかがっていたのだ。

そこまで考えたところで、俺のスキルモーションが終了。剣がするりと抜け、敵の動きも自由になる。慌てて後退しようとする『レドラの暗殺者』。

逃がすか！

好機と判断した俺は、即効で『斬撃』で敵に切りかかり、続いてスキル『タツクル』を発動。敵が動き出す前に敵の体制を再び崩す。そして、俺のできる限りのコンボを畳み込む。

『斬撃』『斬撃』『シールドアタック』『突進』

『シールドアタック』は、その名の通り、盾を敵へとぶち当てて『打撃』ダメージを与える効果があり、まれに敵をひるませる付加効果がある。

ガインー！！

鉄製の盾独特のなんともいえない音が鳴り響き、敵が若干吹っ飛ばす。

そして『突撃』。その名の通り、盾で体を隠し、剣を前に突き出して敵へと一直線に特攻する技だ。

ジャリイツ

俺の体がシステムのアシストを受けて勝手に突撃姿勢を取り、敵へと向かって一直線に走り出す、一つの鉄の塊と化す。

ダツガシヤア！

コンボによる連続攻撃を受けている『レドラの暗殺者』は、避ける事も適わず、剣がその体を貫き、盾にその体を押し付けられる。

ダダダダダッ

一瞬の衝撃後も、俺の体は力強く走り続ける。一步ごと、一步ごとと『レドラの暗殺者』のHPがガリガリと削れていく。そう、このスキルは継続ダメージを敵に与えるスキルなのだ。

そして、その向かう先には、先ほど後退した『レドラの下っ端』がいた。

「ギギッ」

『レドラの下っ端』は、俺の突進に目を見開いた。完全に思考が停止、呆然とするばかりである。

やっぱり！

『クールタイム』だ。全てのスキルには、次回そのスキルを使用するのに必要な待機時間がある。

俺の『斬撃』は、クールタイムほぼ0の連撃用スキル。モーシヨンが終わり次第次へと移れる。

しかし、どちらかというと緊急回避が目的の『ステップ』は、連

続で使用することができない。まあ、低レベルでは、という意味ではだが。

敵の色は緑、俺よりも一段階弱い程度。そして、俺は『ステップ』がまだ一回ずつしか行えない。高確率でこの敵にも使えないと思われた。

そして俺の『突撃』は、敵の攻撃からスタンや、のけぞりをほとんど無効化し無理矢理に突っ込む。

グシャア！

その結果、『レドラの下っ端』も俺の剣に串刺しとなり、廊下をひたすらに三人で仲良く走る。

出続ける出血エフェクトに、どこまでも高らかに響き渡る敵の声、削られていくHP。

しかし、そんな行進も、いつまでも続くわけでは無い。
このスキルのモーションは約5秒。

ダダダダダッ

そして、ついにそのモーションも終了する。

剣から解放される敵二体。

俺は『特攻』スキルのモーションが終了してもなお、一瞬の硬直時間が発生してしまう。なんとも焦れる一瞬である。

……一割か

これだけのコンボをたたき込んでも、敵のHPはあまり減ったようには見えない。自分の攻撃力のなさに涙が出てきそうだ。

俺は、白夜とやり合った日から、常に防御力関係のステータス、スキルにそのポテンシャルを傾けていた。

つまり、完全なる盾職化したのだ。

職業もその名もずばり『シールドナイト』。メインジョブ『剣士』に、サブジョブ『プリースト』の組み合わせの補助役職だ。

あらゆる種類の『盾』を使用したスキルを使いこなし、敵の攻撃を全て自分へと向かい入れるパーティーの要。

その防御力はまさに移動要塞とでも言うべき堅牢さで、膨大な数値のHPに、強固な防御力、そしてサブジョブプリーストの影響による自己回復能力。

デメリットは鈍足と言うしか無いほどに遅い足と、ガチャガチャと常に体中から鳴り続ける鎧の音がまず挙げられる。どのような隠密系スキル効果が付加された装備を身につけても、その音と気配を消す事は叶わないと思われる。

そして、もつとも表だって目立つこの職最大のデメリットが、攻撃力のなさだ。

まず剣による攻撃が『斬撃』以外ほとんど無い。そして装備できる剣の種類も限られている。

先の『斬撃』も、『片手剣』ジャンルではなく、『体躯』のジャンルだというへっぽこぶりだ。

さて、ここで『スキルジャンル』の解説をしよう。

このゲームで行使する事が出来る『スキル』というのは、片手剣のスキルなら『片手剣』のカテゴリ、体を駆使するスキルなら『体躯』というカテゴリという具合に、分類別されている。

そのカテゴリ、一つ一つが『スキルジャンル』だ。例えば、スキル『ステップ』は、スキルジャンル『体躯』に属している。

ステップを使用し続けることにより、スキルジャンル『体躯』の経験値が積まれていく。そして、それが貯まる事によって『体躯』がレベルアップする。

そうする事によって、『体躯』レベル2のステップが使用する事

が出来るのだ。

これらのスキルジャンル最高レベルは20。そのレベルに合わせて使えるスキルの幅が広がり、一つ一つのスキルの練度が上がる。

ついでに『職業』についても解説しておこう。

『職業』はメインジョブ、サブジョブを選択することによって決まる。

ゲームを始めた時は、初心者の変わりに無職を示す『旅人』があてがわれる。

大きな都市にある、職業紹介所を利用することによって、自分の好きな職業を選択することができるのだ。

メインジョブ、サブジョブをそれぞれ選び、自分の最終的な『職業』が決まる。

『レンジャー』と『アーチャー』で職業『森人』、『盗賊』と『ファイター』で職業『忍者』などだ。

それぞれ、独特なスキルジャンルを持ち、攻撃職、補助職、魔法職と色々なプレイスタイルを貫く事が出来る。

そして、職業にはもちろんレベルがある。

職業のレベルは、スキルジャンルに依存する。

例えば、『体躯』10『片手剣』10『補助』5のキャラがいたとすれば、そのキャラは職業レベル25となる。

そして、職業のレベルの最高値は50までしかなく、スキルジャンル全てを20にする事は無理だ。スキルジャンルのレベルを自分で調整し、自分だけの職業プランを作っていくのだ。

さてさて、そんな訳で、完全な純『盾職』を選択した俺な訳だが、勿論理由がある。

白夜の存在だ。

ガアッ!!

俺のコンボにより、かなりの距離を移動し、時間的にもかなりの間束縛された『レドラ』達は、即座に攻撃へと移ろうとする。

が、行動を移す前に、俺の後から猛烈な勢いで疾駆する白夜をその目で見た。

白夜の攻撃スキル『チャージ』だ。

腰を落とし、力を貯めて全速力で走り、その牙で敵を抉る。

力を貯めた時間と、疾駆した距離によってダメージが増大する、まさに時間稼ぎを得意とする俺との相性抜群のスキルだ。

『特攻』によって硬直している俺と完璧にスイッチする白夜。

ドグシャアッ

白夜の牙と、その強力なあごにより、一瞬にしてHPをほとんど空にしてしまう『レドラ』の下っ端『』。

そして、『チャージ』による体当たりにより、『レドラ』の暗殺者『は白夜の牙から逃れはしたものの、インパクトに耐えきれず吹っ飛んだ。』

まさに蹂躞、と言っべき攻撃であった。

ギギイッ！！

しかし、流石モンスターと言っべきか、それだけの攻撃を受けてなお、立ち上がり、俺達に憎悪の炎を絶やすこと無くにらみ付けてくる。

俺と白夜は、特に合図もする事無くアクションを開始した。

俺が『下っ端』へ、白夜が『暗殺者』へ。

そうは言っても、白夜の攻撃をもろに受けてしまった『下っ端』は、状態異常『出血』が発動しており、ずくずくとHPが減っているようである。

大ダメージを受けて怒ったのだろう。『下っ端』は、走り寄る俺を無視し、白夜へと特攻を仕掛けようとする。

発ッ！

俺は単体限定スキル『シャウト』を発動。

その瞬間、『下っ端』の首がぐりんと回りこちらを向き、その顔をあり得ないほどに歪めて憤怒する。

いつ見てもこの瞬間ってこええよ……。

内心ビビりつつも、『下っ端』を迎え撃つ。

盾職が盾職である所以、それが『ヘイト』管理である。

敵が誰に向かって攻撃を仕掛けるのか。

それは昨今の高性能なPCやゲームエンジンによって成長を続けてきた、高度なAIによる緻密な計算によって決められている。

それでも、昔から変わらない物もある。敵の持つ隠しパラメータ『ヘイト』だ。

このパラメータは、魔法使いが遠距離から攻撃してきたり、仲間をヒーラーが回復したり、大ダメージを与えたりで増減する。

今回、俺が微量なダメージに対して、白夜が大ダメージを敵に与えた。

これによって、『下っ端』が白夜に対して持っている『ヘイト値』が、俺よりも上回ってしまったのだ。

これでは、敵が白夜へと向かって言ってしまう。

そこで登場するのが俺の『シャウト』だ。敵を憤怒させ、俺への『ヘイト値』を一気に上昇させる。

憤怒した敵は、作戦もへったくれも無く、俺へと特攻してくる。下っ端が繰り出したナイフを、俺が『パライ』ではじく。

しまった！

そう、言いたそうな顔をする『下っ端』に向かって、俺はコンボを開始する。

どうやら、白夜の方も無難に敵を倒せそうだ。

「ふう……」

地面に崩れ落ちた敵から、収集品を回収しながら、ふと思う。

もう四日か……。。

俺がこのゲームに繋がれて、もう四日が過ぎた。

俺は日々黙々と掲示板で情報を収集、レベルアップの毎日を繰り返している。世間はまだまだこの『ゲームに取り込まれた』という事実を受け入れられない人々であふれており、冒険へと繰り出している人は少ない。

特に、俺のようにダンジョンに潜ってる人は、ほとんどいないと言っただろう。

>> 疲れましたか？ 圭 <<

irisさんの声が頭の中で響く。どうやら俺のため息が、疲れから来る物だと思っただらしい。

「いや、ここに来てもう四日目なんだなーって思っ

俺はもう、デスゲームではないという事を知っているため、精神的に追い詰められる様な状況にはなっていない。

しかし、何も知らずにここに落とされた人は今、何を考え、何を思い、何をしているのだろうか。

その絶望が、悲しみが、かなりの確立で無駄だという事を俺は知っている。

教えて回りたいが、恐らく効果は無いだろう。なら、一日でも早くこのゲームを終わらせる。

それがせめてもの、俺が出来る事だと思った……のだが。

「一人じゃきついなーって」

まあ、四日も強行軍で毎日狩りに狩りに狩ってきたのだ。精神的には疲れるわな。

「フンフン」

白夜が鼻息荒く俺の鎧をガチャガチャ甘噛みした。

仲間内での行動により、耐久値が減らない事は知ってるが、出来れば止めて頂きたいのだが。俺の稼ぎのほとんどがこの鎧のメンテナンスになってるんだからねっ！

「あーあー、白夜がいて寂しくないよ。大丈夫だよ」

「フンフン」

なだめても、どこか恨めしげに見上げる白夜。

>>人肌が恋しくなったのですね<<

「ひとはだ!？」

irisさんが突然とんでもない事を言い出した。いくらなんでもそこまで寂しくは無い。

「irisさんそれ使い方多分間違ってるからね」

>>そうなのですか?<<

なんでこの人は毎回変な所で、こつも変わっているのだろうか。

「う い!！」

そんなやり取りをしていると、突然遠くの方から何か叫び声が聞こえてきた。

「何だ?」

廊下の奥、曲がり角の一つが、何だかひどく明るい気がする。

「たい ばん い!！」

その光がどんどん明るくなり、

「太陽ばんざーい!！」

ついに、光の正体が露わになった。

「太陽ばんざーい!!」

そこには、光り輝くフルアーマーの騎士が居た。
騎士はずんずんと進んでくる。

どうやら俺の他にも、このダンジョンに挑んでいるプレイヤーが居たらしい。

白夜も特に反応を見せない。危険ではなさそう・・・かな？

「あ、あの一？」

「やあ！太陽万歳！」

訂正しよう。光り輝く変態が居た。

ひどくさわやかな声が鎧の奥から聞こえてくる。

俺の巻込まれセンサーがびんびんに反応している。間違いない。

この人、変な人だ。

三話 迷宮で太陽を拝む？（前書き）

50話です。今後もがんばって書いていきます。

太陽万歳！

三話 迷宮で太陽を拝む？

「た、太陽万歳・・・」

あまりにも光り輝く騎士が、俺に対して「太陽万歳」のコールを繰返すので、とりあえず返す。

俺の声を受けて、光輝く騎士は、さらに体を光らせて、

「太陽万歳！！」

と一層声を大きくして叫んだ。

「ちょ、ちよつと！声大きすぎですよ！！敵に気づかれますよ！」

今まで散々、ただでさえがしゃがしゃと五月蠅い鎧を着けているせいで、おっかなびっくり進んできたというのに、それが全て無駄になってしまう。

「おつと、すまん。こんな所で人が居るとは思ってはなくてな。つい嬉しくて」

どこの世界に、『つい』で光り輝いて叫びまくる奴が居ると言うんだ。・・・ここに居るか。

「ワフワフ」

光る鎧が珍しいのだろう、白夜が光り輝く騎士の鎧の鎧を甘噛みする。

「おお、人なつつこい犬だな！！よしよし！！」

光輝く騎士はそんな白夜を見て、豪快に笑いながらわしゃわしゃと白夜を撫でまくる。

そうしてる間にも、騎士は光の高度を上げたり下げたりと目に騒がしい。

「あの、何で光ってるんですか？」

あまりにも異質な光景過ぎて、そう聞かずには居られなかった。多分、俺の予想だとあまりにもアレな答えが返ってきそうで、大変不安なわけだが。

「んん？太陽だからな」

ほら、アレな答えである。

何でこう、俺が遭遇する人は高確率で変人なんだろうか。何かに取憑かれているのか？

「た、太陽ですか・・・」

「そうだ！！」

自信満々である。

「あの、そう言われても、あんまり良く分からないんですけれど」「む・・・そうだな・・・、では俺がなぜ太陽なのかの説明から始めよう。」

そう言って、彼は語り出した。あまりにもアレすぎる話を。というか何でお前が太陽なんだよ。

彼は元々、ある会社につとめる一人の社員であった。その会社はニューヨークにある超高層ビルの一つに居を構え、地上から離れて、高い位置で彼は仕事をしていた。

沢山の机と、沢山の椅子と、沢山のパソコン。全てが枠に区切られて、全てが統一間隔でおかれて、全ての人が、黙々と作業をしていた。

そして、彼も例外では無かった。その時までは。

ふと、窓の外を見る。

太陽である。

それ以外の説明はしようが無い。とにかく、太陽であった。

「美しい」

彼はその景色に感動した。何故かは彼自身にも分からない。

太陽の位置と雲の位置のバランスだろうか？

それとも、立ち並ぶビル群の合間からのぞき見る、太陽のその姿だろうか？

とにかく、その光景には何かがあったのだろう。

その時彼は、突如、猛烈な感情に襲われ、太陽を崇めた。

崇拜と言っても良いかもしれない。

彼は無神論者である。神など、この世に居るわけが無い。その考えは今でも変わらない。

宇宙に浮かぶ意識を持たない一つの光、太陽。

プロミネンスの灼熱に、彼は心の芯から溶かされた。

「太陽万歳！！」

彼は突然デスクから離れて立ち上がり、叫んだ。回りの目も気にならない。叫ばずには居られなかった。

彼がどんなに仕事をがんばろうが、彼がどんなに苦労しようが、わめこうが、太陽はそこにいた。

いつまでも変わること無く、その身を燃やす太陽に、彼は厚い信仰をその瞬間、突然感じたのだ。

「太陽万歳！！」

周りが、ついに多忙から壊れたのか、それとも何かの薬がキマってフラツシュバツクでもしたのかと啞然として、遠巻きに見つめる中、彼は叫び続ける。

「太陽万歳！！」

太陽。お前は美しい。嗚呼、太陽！太陽！！太陽万歳！！！！

あふれる涙が止められない。あふれる感情の濁流に、膝は震え、鳥肌が立ち、意味の分からない汗が全身から吹き出た。

「太陽万歳！！」

その間、二分ほどだろうか。

いつの間にか、彼の中に吹き荒れた嵐は収まっていた。

「.....」

彼はゆっくりと腰掛け、デスクに戻り仕事を再開した。

彼の中にある一つの”変化”、それがしかるべきプロセスを経過

して、今、彼に定着したのだ。

窓の外を見る。

太陽である。

「太陽万歳」

彼は小さく呟いて、いつも通り表計算ソフトを立ち上げ、数字を打ち込み始めた。

さあ、仕事は山ほどある。がんばらなくては。

その光景を見ていた周りの人々は、まさにキツネにつままれたと言った感じで、どう反応していいのか困惑したが、恐らく何かの罰ゲームか何かに違いないと判断した。

あまりにも突然すぎて、笑うというより恐怖を感じたが。

彼はそれから、いつも通に仕事をして暮らした。

特別な儀式も、習慣も必要無い。

彼のがめる太陽は、何も求めないし、何も恵まない。

だから、行為自体は何の意味も持たない。彼の胸の中にある揺るぎない信念、信仰、崇拜。それこそが太陽への彼の愛。

そうして彼は、太陽への信仰を持つ以外は、特に変わることも無く、日々を過ごしてきた。

そして四日前、彼はゲームへと束縛された。

ネットワーク上に存在する、星間飛行シミュレータで太陽の周りを回っている時の事であった。

太陽にリンクが有り、そこをたどった瞬間彼は意識を失った。

「ここは……」

森の中で目を覚ました彼は困惑する。
それにたたみ掛けるように、声が響いた。

「ようこそ、STAR・DUST・ONLINEへ」

その声を、意識の片隅で聞きながら、彼は天を仰いだ。

太陽であつた。

「太陽万歳」

彼は口を開いた。

「太陽万歳！」

嗚呼、太陽、お前は美しい。

「太陽万歳！！」

声がだんだんと大きくなる。

「太陽万歳！！！」

その時、彼の前にある草むららがさがさと揺れ動いた。
ゴブリンが一匹、顔を出した。
彼の声に誘われたのだらう。彼の姿を確認したと同時に、金切り
声を上げて、襲いかかってきた。

「太陽万歳！！！！」

彼は喉が壊れるかと思えるほどに叫び、腰のナイフを抜きはなつた。

ゴブリンの首がはじけ飛ぶ。

「太陽万歳！！！！」

既に悲鳴とも取れる声を張り上げ、涙を流しながら叫ぶ彼に、第二、第三のゴブリン達が気づいた。ゴブリンは群れで行動する。

彼はすぐにゴブリン達に囲まれる。

しかし、彼は動じない。その心に、太陽が燃えていた。

「こいよ！！」

彼は大声を張り上げ、ゴブリン達を挑発した。

ゴブリンがその声に反応し、棍棒を振り上げて彼へと襲いかかる。

「太陽万歳！！！！」

ナイフが宙を滑り、綺麗な半円を、彼を中心にして描いた。

「太陽万歳！！！！！！」

「その時俺は思った。心だけでも、太陽になろうと！！」

俺は、あまりにもアレすぎるアレな話を聞いて、頭がショートしていた。

まったく意味がわからない。

それで、何であんたは光り輝いているんだ？長々と話をしておいて、何一つ結局説明してないじゃないか！

何だよ！太陽になるって！意味わからなえよ！

はあ。もう疲れた。

もういいよ、それで。

「も、もうわかりました。貴方は太陽なんですね」

多分、この人の話は一ミリも理解できる日は来ないんだろうな、と自己完結、話を無理やりにたたむことにした。

「おお、そうだ。私は太陽だ」

「な、なるほどお」

しかし、ニューヨークって事は、この人は英語圏の人なのだろうか？

何で日本語で通じてるんだろうか。

もしかして、高性能な翻訳機能でも搭載されているのだろうか？

深く考えても、どうせ答えは出ないだろうから、後でirisさんと考えるか。

「・・・ああ、そうだ。この光っているのはだな」

「え？あ、はい」

どうやら、俺が一番聞きたい所にようやく着地したようである。

長い、あまりにも長かった。

この人の脳内どうなってるんだ？迷宮か？

「これは、聖騎士パラディンのスキルで、『ライト』という。剣や鎧を光らせ、暗い場所を照らすのだ」

光輝く騎士は、ぎしぎしと鎧をならし、万歳をする。

「それで、そんなに眩しくなるんですか？」

「そうだな。どうやら『神聖』ジャンルをレベル上げていくと、どんどん光量上がるようなのだ」

そう言いながら、彼は一段階明るさを上げた。

「それで何と！重ね掛けをする事によって、過剰に光るようなのだ。なので、こうしてクールタイムが終了するたびに、スキルを発動させている」

分かった。この人アホだ。

多分、MPを消費するであろうスキルを、延々使い続けているのだ。

きっと今、彼のMPは減ったり回復したりを忙しく繰り返しているのだろう。

「な、なるほど・・・」

「はっはっは！しかし、君も戦闘に忙しいだろう。すまない！邪魔してしまっただな」

さわやかに騎士が礼をする。

「い、いえ・・・」

俺もつられて礼をする。

「と、所で、貴方の名前は何と読むのでしょうか。あの、眩しくて見えないんですが」

そうなのだ。この騎士、光輝くせいで、すっかり名前が見えなくなっているのだ。

まったくもって目にうるさい人である。

「お！？おお。そうなのか。はっはっは。私の名前は^{インソ}insolia^{レイ}teと言つ」

>> 『太陽による影響』という意味の動詞ですね<<

頭の中でirisさんの声が聞こえる。

なるほど、まさに名は体を表すというか、名が体に表されたというか。

「keiと言います」

「うむ！君とはまた、会う気がするな！いやはや、それでは、私はこれで！」

インソレイトさんは、さわやかに万歳をして光を増し、廊下を歩いて行った。

「・・・疲れた・・・」

がりごりと精神を直接食べられたような疲労感を感じる。

インソレイトさんは、ずんずんと奥にすすで行き、適当な感じで曲がり角を曲がっていった。

しばらくして「太陽万歳！！」と小さく聞こえた。

「はぁ……」

結局叫ぶのかよ。もうしらねー。勝手にやってくれ。

>>色々な人がいますね<<

irisさんが淡々と呟く。

「……」

もう答える気にもならない。

インソレイトさんの相手をして、疲れた精神を癒やすためにも、少しこの場でじっとしていよう。

「……あ、そうだirisさん」

ついでに先ほどの疑問を聞いておこう。

>>なんでしようか<<

「いまの人って、日本人？」

>>どうでしょうか<<

「ニューヨークに居たんじゃあの人」

>>話を聞く限り、そうでしょうね<<

「じゃあ何で日本語喋ってたんだ？」

>>そうですね、かなり高精度な翻訳機能を、このゲームは持っているのかも知れませんが<<

まあ、高性能なAIを簡単に動かすくらいだ。言語の違いなど簡単に対応できると言う事なのだろうか。

>>しかしもし、そうだとして、大変興味深いのは、些細な言葉のニュアンスも、正確に翻訳できているという事ですね<<
「とうとうと?」

>>彼は、自分のこれまでの経緯を語っている時、いかに太陽が凄
いか語っていました。「ごうごうと燃える」とか、「メラメラと」
とか<<

「うん、確かにそうだ」

あの人が熱心に太陽の凄さを語っている時、確かにそういう話を
していた。

>>英語に、そのような音や様子を表現する言葉、いわゆる『擬音』
はありません<<

「何だつて?」

>>例えば爆発を表現するとき、圭はどう説明しますか?<<
「えっと?ボカンとかズドンとか、パンとかポンとか?」

言葉の微妙な違いで、その規模が大きく変わる、そのレベルによ
って言い方を変えていくのが普通だと思う。

>>英語の場合、『bomb』という単語以外に、爆発を擬音とし
て表現する単語はありません<<

「なるほど。その違いを正しく認識して翻訳してると?」

>>そうですね。もっとも、彼が本当に日本語を喋っていた可能性
はありますが<<

「考えてみましょうが無いか」

>>そうですね<<

確かめようも無いことを、延々と二人で話し合っても答えは依
然、闇の中だ。

と、話を切り上げてまた迷路攻略を再開しようとしたところ、遠くからこちらに近づいてくる音が。

・・・しゃ・・・しゃ・・・

最初は小さく聞こえるだけであったが、

がしゃがしゃがしゃ

だんだん音は大きくなり、

ガツシャガツシャガツシャ！

ようやく、この音は誰かが走っている音なのだと気がついた。

白夜が、戦闘態勢を取る。

「敵か!？」

「ウウウウウウウ」

白夜が小さくうなる。正体不明のようだ。

ミニマップにはまだ何の反応も無い。敵の気配を察知出来ない俺には、白夜だけが頼りだ。

何が起っても対処できるように、静かに盾と剣を構えて、白夜の横で腰を下ろす。

音のする方向、廊下の奥を静かに見据える。

ガツシャガツシャガツシャガツシャ！

音はどんどん大きくなる。そして、廊下の曲がり角の一つが、だ

んだんと明るくなって……

「嫌な予感しかしない」

>>予感、という物は私にはありませんが、状況証拠からいって、確信的な一つの結果が導き出されました<<

「……」

静かに俺はスキル『防御』を発動。

盾が淡く輝き、バリアのような物を張る。盾を構えれば構えるだけ、防御力がアップする効果がある。

ガツシャツガツシャガツシャ！！

そして、曲がり角の一つから、インソレイトさんが出てきた。

「たいようばんざーい！」

光を上げ下げしながら、全力疾走している。その後、各種『レドラ』を6匹ほど連れて。

はあ。何やってるんだよ。

「白夜、『チャージ』」

俺の声に、白夜は答えず、その身を低くした。

その次の瞬間、白夜が猛烈な勢いで疾駆。『レドラ』達へと突っ込んだ。

「インソレイトさん、避けてくださいね……」

「！？わ！わかった……」

万歳をしながら、また光度を上げるインソレイトさん。これが終わったら、止めてもらおう。

俺は防御体制を解き、白夜の後に続く。

グングン離されるが、まあ『レドラ』達もこちらに向かってきてるのだ、すぐ追いつくだろう。

『レドラ』達に白夜が突っ込むのを認識した瞬間、俺はスキル『突撃』を発動させた。

三話 迷宮で太陽を拝む？（前書き）

ろっくー！ろっくー！ろっくおーばーじゃばー
ループしまくりで聞いてます。
ろっくおーばーじゃばー

三話 迷宮で太陽を拝む？

「ガアア！！」

白夜が咆吼と同時に、敵を蹂躪していく。

爪が、牙が、『レドラ』達を次々に襲いかかり、HPをぐりぐりと削っていく。

「インソレイトさん！！怪我は！？」

「な、ない！！」

『チャージ』と『突撃』のコンボを決めて、敵の足止めと不意打ちに成功した俺達は、まず白夜をそのまま敵に突っ込ませた。

混戦の体をなす戦闘を冷静に眺めながら、次にどう動くかを必死に考える。

敵は六体。暗殺者3体に下っ端3体だ。

俺と白夜だけだと敵しい。

「足止めます！何か大技とかあります！？」

「あ、あるぞ！とっておきが！！」

恐らく、インソレイトさんも剣士系、それも攻撃よりのキャラに見える。高確率で、大きな隙が出来るが、大ダメージを期待できる技を持っていると思えた。

「何秒ですか！？」

白夜が飛んで、跳ねてと敵を攪乱しているが、じわじわとHPが

減っている。このままでは白夜が危ない。

「30秒貯める！」

「わかりました。白夜！！」

俺の呼びかけに、白夜が敵の中から飛び出してやって来る。

HPが二割ほど減っていた。

「良くやった」

あの敵の中、これだけのダメージしか受けていない。流石だ。

白夜がこちらに来たことにより、敵が俺達に向かってわらわらと走ってくる。

発っ！！

俺の発声スキル『プロテクトコール』が発動、俺を中心に、光が走る。

同時に、インソレイトさんと白夜にバフ『防御力上昇』がかかる。

バフとは、プレイヤーが受ける『良い状態変化』の事で、これが付くことによって、移動速度が上昇したり、攻撃力が上昇したりする。

発っ！！

さらに『ダメージコール』が発動。これは『攻撃力上昇』だ。

この二つの発声スキルは、それぞれ一分ずつしか効力をなさないが、MP消費が少なく、発動に使う時間も全くないのが特徴だ。

そして、いよいよ敵が白夜へと近づいてきた。

発っ！！

そしてダメだしの『サークルシャウト』。今までよりも広範囲に光が広がり、敵もその範囲に入る。

その瞬間、全ての敵の視線が俺を貫いた。

うっっ

これだけの数の目に見られるのは、軽い恐怖体験である。

俺はできるだけ冷静になるように、自分に言い聞かせて腰を落とす。

微かに震える手を押さえながら、盾を構える。淡く光るシールド。矛先を白夜から俺へと変えた『レドラ』達が、俺へと突っ込んでくる。手に手にそれぞれの獲物を持って。

「光よ……」

後からインソレイトさんの声が聞こえる。

そして、後から感じる暖かな光。

「光よ……」

それはさらに強くなる。光量も増している気がする。

そうしてる間にも、敵は俺へと突っ込んで来た。盾と、武器の音が重なる。

『パライ』をして弾きたい気持ちもあるが、敵は6体、それぞれの攻撃のタイミングが違う。

敵を二、三体同時に『パライ』でひるませたとしても、その後の

制止時間を他の奴らに攻撃されて終わりだ。今は防御に徹するしかない。

少しのダメージを受けつつも、どうにか大半の攻撃を俺は防いでいた。

時折囲まれそうになるも、『ステップ』を混ぜて距離を取る。

横目に白夜を確認、腰を落として力を貯めている。『チャージ』のクールタイムが終わったのだ。恐らくもう少しで、白夜の準備も完了する。

「光よ……！！」

背後からの光と熱が、凄まじい。

敵の目が、俺への憎悪を遠慮なしに投げかけ、武器を振るう。

右からの攻撃を盾で受けては、左からの攻撃をこの身で受け、左からの攻撃を盾で受けては、右からの攻撃をこの身で受ける。

その繰り返しの中で、確実に減っていくHP。

まだか……まだかっ！！

一応、回復アイテムや、回復スキルはある。

が、この戦闘自体がどれだけ続くのかは全く分からない。できるだけスキルやアイテムは温存しておきたい。

「光よ……！！圭、行ける！！」

後からインソレイトさんの声が聞こえる。

その瞬間、俺はインソレイトさんへ向かって後方へと『ステップ』

突然攻撃目標を見失った敵の攻撃は、空間をむなしく引き裂く。

俺は、『ステップ』の駆動が終わってからも、後向きのまま走る。

迫り来る敵。

鈍足、それに加えて後向きで走る俺は、すぐさま追いつかれそうになる。が。

その俺の横を、太陽が通り過ぎていった。

「太陽万歳！！」

既に尋常では無い発光っぷりになっているインソレイトさんは、俺と入れ替わりになって敵に立ちはだかった。

あまりのまぶしさに、敵がひるむ。

インソレイトさんの剣は、青く光って、その身を「ヴァーンヴァーン」とうならせていた。

「さあ、その身に刻め！！」

彼は、気合いと共に剣を振り下ろした。

その光景は、あまりにも眩しく、そして圧倒的だった。

インソレイトさんを中心に、光の渦が巻き起こり、敵達を飲み込んだ。

その光の中に居る敵達を、目視する事が俺には出来ない。敵のHPバーだけが光の中、ぽっかりと浮かんでいる。

がりがりと削れる敵のHP。継続ダメージだ。

光の濁流に、しばらく敵が受けるダメージ音とごうごうと光が吹き出す音だけが響く。

そして、光が止んだ。

インソレイトさんは、スキル『ライト』標準時の明るさまでに落ち着いた姿で、剣を構えていた。その眼前に、敵が6体。

健在である。

今の攻撃で、それぞれ4割ほどのダメージを受けたようだ。

かなりの大ダメージであるが、それでもまだまだ敵は余裕を持っている。

インソレイトさんは、大技を使ったため、しばしの制止時間が発生する。

そこを敵に攻撃されてはまずい。

「白夜!!」

俺が指示を出す前に、白夜は『チャージ』を使用し、敵に突っ込んでいた。なんと賢い仲間である。

「何やってるんですか」

「申し訳ない!!」

何とか敵を倒した俺は、とりあえずインソレイトさんを説教する事にした。

「他人に迷惑をかけるなんて、わかってるんですか!?!」

「いやあ、ははは・・・」

良い大人だろうに。典型的な『トレイン』なんてしゃがって。

『トレイン』もしくは『モンスタートレイン』は、文字通りモンスターを列車のごとく引き連れて走り回る事だ。

敵とむやみに何も考えずに戦っていると、自分の処理能力を超えた数の敵を相手にする事がたまにある。

そうなった時、人はどういった行動を取るのか。

大抵の場合、逃げる。

そして形勢されるのが、『トレイン』だ。

しかもここは、迷路のようなダンジョンだ。あても無く走っている間に、あの事態になったのだろう。

遅かれ早かれ、俺達に出くわすとして、もしあれ以上数が多くなつてたら・・・震えが止まらない。

「いや、本当に申し訳ない！あまりにもこう、光りがあつたもので」

フルフェイスの兜を、インソレイトさんはぽりぽりと掻くばかりである。

なんだ『光がい』って。

頭痛の種にしなければならないので、これについてはさっさと頭から追いやる。

「他人のプレイスタイルに文句言う気はありませんけどね！普通こいう所では光らないんです！目立たないように動くんです！！」

「そ、そんな！？」

何でそんなこの世の終わりみたいな声出すんだよ。

顔を覆うフルフェイス兜なので、表情は分からないが、その顔は絶望に沈んでるに違いない。

ちなみに、兜は俺も付けているが、表示していない。

オプションで表示／非表示の切り替えが可能なのだ。

「ど、どうにかならないのか！？」

今にも泣き出しそうな声で、インソレイトさんがすり寄ってきた。ええい、気持ち悪い。

「ちよ、ちよっと！落ち着いて！！」

「うぎぎぎぎ」

すり寄ってくるインソレイトさんを両手で押しやる。何だよこの光景。

「はあ。じゃあせめて、叫ぶの禁止です」

「そ、そんな」

「禁止です」

「はい……」

しょんぼりうなだれるインソレイトさん。
犬みたいな人だなこの人。

「はあ。もう良いですよ……」

「本当にすまなかつた」

改めて頭を下げるインソレイトさん。
基本悪い人じゃないんだろうな。アレだけで。

「しかし、君は女の子なのに強いなあ」

「は？女？……ああ、俺男なんですよ」

感心しきるインソレイトさんに、俺はつい言葉がぼろっと出てきてしまった。

この四日間、プレイヤーと交流という交流をしてこなかったので、自分が女キャラだと言う事を忘れていた。

俺の言葉を聞いて、インソレイトさんが停止する。

「ええ！？お、男なのにそんな格好を！？この鎧なんて胸の所盛り上がってるじゃ無いか！」

そんな事を言いながら、インソレイトさんは俺の胸をペタペタ触りだした。

鎧、しかも鉄製なので、特に感触とかは伝わってこないが、流石に気持ち悪いのでやめていただきたい。

「あー、止めてもらえませんか？」

「え！？ああ、すまない」

本当に条件反射で触ってしまったのだろう。
インソレイトさんは慌てて引き下がった。

「ここに来るとき、間違つて女選んじやったんですよ。そしたらこんな事態でしょ？」

「なるほど。いや、君も災難だなあ」

うんうんとうなずきながら、インソレイトさんは光を増した。

「いやはや。ここで会ったのも何かの縁。フレンド登録してもいいだろうか？」

そう言いながら、インソレイトさんは万歳する。いちいち動いたり、光ったりしていないと、死ぬとでも言いたいのか？この人は。しかし、このゲームを攻略しようとかんばっている人とは、一人でも多く知り合っておいた方が、後々プラスになるだろう。

「良いですよ」

俺は快く承諾。ウインドウを表示して、インソレイトさんをフレンド登録した。

「こちらもできた。いやあ。このゲーム初めてのフレンドだよ。はっはっは」

そう言ってインソレイトさんは万歳した。

「俺ですよ。何かあったら連絡しますね」

「そうだな！」

嬉しそうにウインドウを眺めるインソレイトさん。そんなにフレンドが出来たことが嬉しいのだろうか。

「そうだ、光る武器や防具を見つけたら是非連絡をくれ。気に入ったら買い取る」

ガバツと顔を上げて、インソレイトさんがそう言ってきた。

カラスかよ。なんだよその執着心。

さらに光るつもりか、自嘲しろ。

「え、ええ。わかりました・・・」

苦笑いしつつ、とりあえず了解しておいた。光る武器や防具なんて、目立ってしょうが無い。

基本的に小心者の俺には扱えそうも無いし、譲ってくれて人がいるのならば、その人にあげるのが良いだろう。

「俺も、何か見つけたらすぐに連絡をする！」

子供みたいに興奮しながら、インソレイトさんはそんな事を言った。

この人は純粹にこのゲームを楽しんでるんだな。と思い、俺も自然と顔がほころぶ。

「お、そうだ。これを上げよう」

インソレイトさんは、思いついたようにウインドウからアイテムを一つ取り出し、俺へと寄越した。

「ギルドバッチ？」

インソレイトさんから渡されたバッチには、『SUN ギルドバッチ』と書かれていた。

「俺のギルドだ」

嬉しそうにはしゃぐインソレイトさんを横目に見つつ、ギルドバッチをタッチ、情報が出てきた。

.....

ギルド長 : insolate

ギルド副長 ; なし

ギルド構成員 : 1

ギルドレベル : 2

.....

出来たばかりの、インソレイトさん一人だけしか居ないギルドのようだ。

コレを渡してくると言うことは……。

「あの、嬉しいんですけど、ギルドはまだ」

十中八九勧誘である。

まあ、ギルドには最終的に所属するつもりであるが、あいつらが来てから、となんとなく決めてもいた。

「いや、別に勧誘ではない。友好の証に、受け取って貰いたい」

気にする風もなく、インソレイトさんはそんな事を言ってきた。

「そ、そうですか。それでは」

俺はインソレイトさんのバッチを、そつとアイテムウインドウの一番右下、端に収納した。

これで間違つて落としたり、売ったりする事も無いだろう。

「そついえば、さっきの技何なんですか？」

さっきの光輝く大ダメージ技、まさに圧倒と言つべきスキルであった。

「ああ、あれはだな。力を貯めれば貯めるだけ、剣が光って、敵に打ちつけると範囲ダメージになる『ホーリーエクスプロージョン』という技だ」

「へえー……。あれ？剣が光る？じゃあインソレイトさん自体

が光ってたのは？」

「あれは『ライト』を重ね掛けに、重ね掛けをしていただけだな」

「……」

「ん？どうした？」

何でああも緊急事態で、この人は……はあ……。

NOYA : 圭？

>>圭<<

「っ！？」

「どうした？」

「すみません、通信が来ました」

「お、おう？」

疑問顔のインソレイトさんには申し訳ないが、今はそれどころでは無い。俺はウインドウをコンタクト画面に切り替えた。

素早く野谷さんの名前を打ち込んで返信。

kei : 野谷さん！？どこに居るの！？

NOYA : わからない。どこだろうここ

そういえば俺もここに入った時、ここがどこだか全く分からなかった。

野谷さんに指示を出し、マップを確認して貰う。

NOYA : イミルの森。他の皆もそこにいる。

!!!

俺がこのゲームに来たときとまったく同じ場所！！

kei : 皆も来てるのか。その森を出て、森の外周を回ると、村が見えると思う。

kei : エルアドの村って所。そこで待ち合わせしよう。俺もすぐ行くけれど、時間かかると思う。

NOYA : 了解。

ウインドウを速攻で閉じ、顔を上げる。

「インソレイトさん、すいません、用事ができたので戻りますね」

「お、おお、分かった。帰り道は分かるのか？」

未だ疑問顔ではあるが、インソレイトさんは俺の心配をしてくれているようだ。

俺は微笑んで白夜を撫でた。

「こいつが全部覚えていますよ」
「ワフ」

白夜は任せとけ、と言わんばかりに胸を張った。

さあ、皆に会いに行かなくては。

間話 悪意を狂気で塗りつぶして（前書き）

ぎゃああジャンル別ランキング8位です。ありがとうございます

間話 悪意を狂気で塗りつぶして

「おいおい、こんな所で一人っつのは、ちょーっただけねえんじゃねえかー？」

にやにやと、下卑た笑いを浮かべながら数人の男が、女性一人を取り囲んでいる。

ここは深い森の中。太陽の光すらも木々や葉に遮られて、その光を届かせる事は叶わない。

じめじめ、じとじととした雰囲気と、深い湿った土の匂いが、ひどく、鼻につく。

そんな中、あまり褒められた雰囲気を出さない男達に、しかし、女性は。

「……」

どのような反応も返すことは無く、じっと、男達を観察しているようだった。

「……」

対する男達も、あまりに彼女が無反応なので、お互いに顔を見合わせて疑問顔になる。

「おいおいー。何だよ？ねーちゃんよー。喋れないのか？あん？」

リーダー格だろうか、一人が腕を伸ばして女性のあごをつまむ。

高い身長、きりりと切れる目に、鋭くシャープなあご、結い上げたポニーテール。全てが女性を美しくまとめ上げていた。

「美人じゃねえかよ。お？何でこんな所で一人でいるんだ？俺達と一緒に遊ばねえか？」

リーダー格の声に同調して、後に控える他の男達もニヤニヤと下品な笑みを見せる。

「……それだけ？」

ようやく女性が喋る。

「は？」

「……」

女性はまた黙り込んだ。あまりにも女性が無口すぎて、何が言いたいのか男達にはわからなかった。

リノは内心ため息をついた。

リノは職業『忍者』を選択していたため、敵・味方・物・人をかたりの広範囲で探知し、さらに身を隠してその気配を完全に隠すことが出来ていた。

この森の中に入ってから、もう一人のリノと一緒に、色々なモンスターを狩っていたのだが、休息時間に「ちょっと周り見てくるわ」と言いながら（実際はもっと長く500文字くらいまくし立てていた）リノが離脱。

少し疲れを感じていたリノは、ついでに行かずに待機することにした。

その時、リノのスキル『気配探知』にこの男達が反応したのだ。

現在、まだまだこのゲームを攻略しようとプレイする人達は少ない。幸いリノも今は居ない。このゲームをあまり知らないリノは、何か情報交換できるのでは？と内心想い、待っていたのだが……。結局、こいつらは彼女の容姿を認めるなり下品な下心を丸出しにしてきた。

「おいおい、黙ってちゃわからねえんだよ！」

黙っているリノを見かねて、男が手をリノの腰に回してきた。ぐいっと抱き寄せられるリノ。

男の胸板に、むりやりリノの胸がおしつけられる。

リノの股に、男の足が無理矢理割り込んできた。

その感触を楽しむように、男はその顔を興奮に歪めた。

「おー？無反応って事は良いって事なのか？ん？」

にやにやと、醜い顔が眼前に。

どうしようかな……。

リノはそんな状況でも、冷静に事態が流れるのを、どこか他人事のように見守っていた。

リノは流れに逆らわない。

今までもそうしてきた。言われるように動き、言われるように考え、言われるように感じた。

今回もそう。

けど、ちよっとだけ嫌だな。と、その時は思っていた。

男の口が近づいてくる。

その様子を見ている周りの奴らもはやし立て、ヒューヒューと口

「ああ！？何だとは何だ！？糞が。ぶ○○○○すぞ！まじで。ガチで。言っておくが俺はマジ超はんぱねえハンターだぜ！？おいおいおいおい！！何だよてめえ。礼儀つてのがなつてねえぜ！！はっ！その顔もきつと神様がくれたギフトなんだろ！？え？アホみたいに口あけやがって！猿か！！糞が。まじ気分悪いぜ！糞が！」
「うるせーよ、おい、やれ」
「え！？でも」

男は、後に控えてた弓使いに指示を出す。
しかし、弓使いは若干腰が引けているようだ。それもそうだろう、プレイヤーを攻撃すると、名前が犯罪色となり、町や村の支援が受けられなくなる。

「よく見る。あいつ、レッドだ」
「え！？あ……」

弓使いが改めて木の上に立つリノを見る。その名前は、赤いプレイヤーキラーだ。
プレイヤーキラー。その名の通り、プレイヤーを殺す事。
普通のMMORPGでは、ロールプレイの一環として受け入れられるだろう。しかし、ここは違う。
ここで、人を殺すと言うこと。それは紛れもなく現実での殺人と変わらない。

「レッド……」

弓使いが、今度は青ざめた顔になる。

相手は人殺し、一つ間違えば俺も……。

そんな思いに捕らわれて、自然と足が震える。

「びびってんじゃねえ。一人じゃねえか。撃てよ」

「わ、わかった」

冷静沈着に指示を出すように見えるリーダー格も、その実内心動揺していた。

しかし、数の上では、1対4、近距離職二人に、後衛二人。勝てない相手ではない。そう、考えた。

弓使い矢を一つ放つ。

空気を切り裂き、一つの線と化した矢が木の上で喋くるリノへと吸い込まれる。

「お！？弓か！？何だ！？弓矢！？まじかよ！！！！は！！！！まじか！！！！糞が！！」

それを軽く避けようとするが、矢は方向修正、リノの足をかすめて少しだけそのHPを削った。

弓のスキル『ホーミングショット』だ。

矢の攻撃力が幾分削られる形となるが、その変わりに矢にホーミング性能が加わり、スキルレベルによってその性能は変わる。

「あ？何だ？おい、今の何だ？おい。糞が！ふざけてるのか？！おい。ああ！？そうだな。俺の名前が赤だから撃っても良いって思ってたんだな！？あ！？やるか！？おら。お前どうせ○○○○○○してる奴は誰でも○○○○○○して良いって思ってる奴なんだろ！？あ！？そういう奴、大嫌いだぜ俺は！？大抵愛せる俺にも限度って物があるんだよ。糞が。まじかよ！！！！！！死ねよ」

リノはそうまくし立てた後、跳躍。
完全に深い森の中、姿を消した。

「な!？」

焦る男達。

「糞!俺の気配探知でも見つけられねえ!！」

弓使いが叫ぶ。どうやら、彼は気配探知のスキルを持っているら
しかった。

「おいおいおい。まじかよまじかよまじかよ。は!どんな奴ら
かと思ったらこの程度かよ。何だよ。おい、なんだよなんだよなん
だよ!ありえねえぜ!！」

どこからともなく声が聞こえる。

その状況に、男達は身を寄せて全方位を警戒する。

どこから声が?

どこから仕掛けてくる?

「は!怖いか!?怖いよな!俺もそういうの、怖いぜ。やつぱ
りこう、どこから敵がくるかって分からないときつてのは『怖い』
よな!たぎるぜ!興奮するぜ!?!?な!そうだよな!分
かってくれるか!?あの気持ち!?!どうだ!?快感だろ!?!イッ
ちまつよな!は!?!まるで○○○○○○○○○○○○○○○○決
めちまつた時みたいに『フワフワ』するだろ!?!?なあ!おい!
なあ!?!なあなあなあなあなあなあなあなあなあ
」

リノの声は依然として、どこからともなく聞こえてくる。
その声は、左から、右から、前から、後から、どんどん移動して
いく。

その声につられて、右へ左へと視線をさまよわせる男達。
あまりにも異常な事態に、男達はガリガリと精神をすり減らす。

「なあなあなあなあなあなあなあなあなあ」

壊れたレコードみたいに、リノの声は単調に、いつまでも続く。
あまりにも異質。あまりにも不可解。

人は、不思議に恐怖する。

リノは、今、男達にとって恐怖そのものだった。

「おいおい、何だ？どうした？何でそんなに無反応なんだ？もしかして俺、時を止める時間とか得ちゃったりしちゃった！？まじか！
！まじかまじかまじかまじか！！」

突然、身を寄せ合う男達の中で、リノの声がした。

「っ！？」

男達は一斉に飛び退いた。

その中心に、リノ。

両手には、小さなナイフ。

「なあ！？」

リーダー格が、仲間達のHPを確認して驚愕の声を出す。男達全
員のHPが、3割ほど削られていた。
知らない間に攻撃されていたのだ。

職業『忍者』の『隠密』ジャンルに属する『不意打ち』スキルにより、気配を絶った状態で後方から攻撃すると大ダメージになる事を利用した、リノの先制攻撃であった。

音すらも、感触すらも無く、リノは男達を抉った。

「何だ。動けるじゃねえか。糞が！何だよ！？ぬか喜びか！？糞が！！あ？！もういいわ。もういいぜ。元からそんな能力持つてても、そんなの一ミリも必要ねえ。そうだろ！？なあ！？そうだよな！！どうせもってたって、女の子の部屋にこっそり忍び込んで○○○○○○○○するしか使い道がねえんだ！その後逃げられる訳じゃねえ。指紋とか血とか、色々残るんだろ！？知ってるぜ」

その声に答えず、弓使いが弓を引き絞った。震える狙いを、必死に抑える。

ギリギリと、引かれる弦を見たリノは、

「おいおいおい、それはもう嫌だぜ」

とだけ残してまた消えた。

「糞！またか！お前ら！！固まれ！！」

リーダー格が指示を出すのが、しかし、その頭にこの状況の打開策はない。

じわりじわりと、『死』という物が、ぬるぬるとテカる手を伸ばしてきているような、そんな想像が頭にこびりついて離れない。

「け、けどー」

「うるせえ！それしかないだろ・・・それしか！！」

半分、悲鳴の様な声を上げながら、男達は固まった。

「おいおいおい！！それは俺にでもわかるぜ！！『失策』って奴だ！！は！！だめだ。お前ら全然だめだ！！だめだだめだだめだだめだだめだ！！全然だめ！分かるか！？ダメって。分かるよな！？なあ！？0点だぜ！！0点。あ？何点満点中かだつて！？はあ！？はなまる満点中0点だよ！！糞が！当たり前だろ！小さい希望抱いてるんじゃないよ！！！」

既にもう、誰に喋りかけているのかも分からなくなったようなり
ノの声に、男達は完全に震え上がっていた。

こいつ、狂ってやがる。

人としての前提、基礎、根本、そのどれもがあいつには欠けている。そう思った。

狂ってるからこそそのPK。狂ってるからこそその殺人者。
本物の人殺し。

後の事は考えず、今だけを考えて、笑って、狂って、人を殺す。
そして、今、男達を狙って、狂った刃が牙を向けていた。

「た・・・助けてくれ・・・」

自然と、口から言葉が漏れた。

見えない敵にまくし立てられる恐怖。

それはあまりにも恐ろしく、男達に耐えられる物では無かった。

「助けてくれ！！」

男達は口々に叫び、涙を流していた。

「あ？助けてくれ！？なんだ？何の事だ？俺が？何を助けるんだ？意味がわからねえ。ちゃんと説明しろよ！？な。まじ意味わからねえぜ。何で泣いてるんだ？何から助かるうとしてるんだ！？人生か？神様にでも助けて貰うのか？おいおいおい。俺でも知ってるぜ。神様つてのは誰も救っちゃくれやしねえ。おいおいおい。だろ！？だってそんな事したら、俺がエミリーを○○○○○した事も、ローラの○○○○○を引きずりだしたのも、全部見られて今頃俺は地獄だ！！なあ！？そうだよな！？おい。何かいえよおい！！！」

ぐるぐる、ぐるぐる。

至る所から、狂った早口が、男達を囲う。

「もうしない！もうしねえから！！助けてくれ！！！」

もはや悲鳴となったお琴達の声。

「だから何をだ？わけわからねえ」

次の瞬間、また、男達の中にリノが現れていた。

一瞬にして減る男達のHP。

「ひいひい！！！」

散り散りになって逃げ出そうとする男達。

リノはそれを許そうとはしない。男の一人を適当に選び、歩き出す。

「おいおいおい。何で逃げるんだ？まるで俺が化け物みてえじゃね

えか。何だ？おい。おい！失礼だろ！？失礼だよな！？糞が！何だ！？まじでありえねえぜ！！俺は避けられるような事は何もやってねえ。おいおいお忘れたのかよ！まじかよ！仕掛けてきたのはそつちだぞ！？糞が！？何だ？俺は悪者か！？あ？ありえねえだろ。はっ！ありえねえぜ。糞が！！」

「……もう止めて」

「あん？」

リノが、静かに見据えていた。

「もう、満足でしょ？」

言われて、リノは一旦自分の精神状態を確認してみた。『スツ』とした気分であった。

「……おう。そうだな。もういいぜ。何かスッキリしたみたいだ！しかしリノちゃんよ！。嫌ならやるなよな！？まじで。何回目だよ！？あ！？そのたんびに俺がイラつくってなんか理不尽じゃねえ！？？」

「……」

「……」

「大抵はリノが悪い」

「え？まじで？」

実はリノの赤ネームの原因は殺人では無い。度重なるプレイヤーへの攻撃による物であった。人をひとたび攻撃すれば、名前がピンクになる。

しかし、ピンクになったとしても、数時間すれば元通りになる。一発や二発の攻撃なら、だが。

彼は散々プレイヤーを攻撃し、その名前を遂に赤く染め上げてし

まったのだ。

言葉が気に入らない、何となく、新技をためしてみたい、脅かしてみたい。

様々な理由で『とりあえず』攻撃した。

本当に殺しそうになる手前、危なくなる寸前にリノに止めてもらう。その繰り返しだった。

「ま、まあまあまあ！！わかった！悪かったぜ！！そうだな！悪いのは大抵俺だった気がしてきたぜ！！うん。そうだな！！俺が悪い。わかった！だからまあ、水に流そうぜ！？じゃじゃじゃーっつとよー！！」

まったく調子の良い男である。

「.....」

「.....」

二人の間に気まずい沈黙が流れる。

その沈黙に耐えられないかのように、リノがじれったそうに体を揺らしている。

「わかった、流す」

「よ、よし！そ、そうと決まれば続きやろうぜ！？続き！！！さ、さーて次はどのモンスターかなー？」

そして二人はまた狩りを再開した。

深い森の中、赤い名前と白い名前。二人が上村達と会うのは、まだまだきつと、先のお話。

間話 穴の底で（前書き）

本日二回目。

もしかしたらもう一話いけるかも？

間話 穴の底で

「……………うう？」

「……………皆いるか……………？」

「はいーはいー……………いるー……………」

「います……………」

メディアアファイルを再生した後気を失った山城、野谷、鬼谷、志貴崎は、上村が来たときと同じように、森の中で突っ伏して倒れていた。

「……………頭が少しがんがんする……………」

「ぼーっとします……………」

ゆっくりと山城が起き上がる。それに続いて、他の皆も続くようにゆっくりと身を起こした。

「ここがサーバーの中ですか？」

太陽の光が降り注ぐ森の中、四人はかなり近い位置で倒れていた。女性は全て同じ服装をしていて、唯一男の志貴崎もこれまた似たような服装をしている。

スカートとズボンくらいしか違いは無いだろうか？

皆は辺りを見回し、ここが今どういった状況で、どのような場所なのか、何かヒントは無いか探す。

>>皆、大丈夫ですか？<<<

「irisさん？」

皆の頭の中に、irisの声が響いた。

>> 現在、圭に起きたような脳の異常な活性化を皆に確認、恐らく正常なプロセスを経て、皆はここに接続されました。また、現在それぞれのコンピュータは、このサーバ以外との接続を完全に遮断されておりす<<

「ふむふむ」

半分もわかっていなさそうな志貴崎であるが、とりあえず頷く。

その横で、野谷は地面の土を手で掘ってみたり、服を伸ばしたり、辺りを見回して顔をかしげたり落ち着きが無い。

「iris」

>> 为什么呢ようか。卯月<<

「irisの声は全員に聞こえているの？」

>> そのようです。皆がこのサーバに接続された瞬間に、『私同士』が接続を開始、現在は完全に並列動作・並列思考が可能な状態にまでリンクされました<<

「けど、コンピュータ同士の接続はされていない」

>> はい。明らかです<<

「コンピュータのCPU、グラフィックボードもろもろ含めた使用率は？」

>> 監視できません。が、通信ログを見る限り、あまり処理を行っているようには思えません<<

「……」

そこで野谷は思考に沈む。

このリアルな地面、リアルな土の感触、匂い。木々の揺らめき、さえずりに、モデル化されてきわめて自然にモーションする鳥たち。この処理をPCが実際するのに、どれほど途方も無いスペックが

必要だろうか？

野谷のPCなら、可能かも知れない。が、他の皆のPCではどうだろうか・・・恐らく無理。

ゲームの基本構造として、まず、データ自体がPCにあるのが最低条件。それこそ、セリフの一つから、AI、モンスターの姿、モーション。そして木々の揺らめき、風、水のシミュレーター・・・まだまだ沢山の要素を含めた、『世界』を一つのパッケージとしてまとめたデータが必要だ。

そして、それを元にPCはサーバーに接続し、自分の座標データ、行動、アイテム取得などの簡単な情報だけを送信し、その結果をサーバーが返答してくれる。

それをPCが受け取り、上記のデータ群からサーバーからの返答を忠実に再現。魔法のエフェクトや、モンスターの出現、草木の揺らめきなどと要った『目に見える結果』として表現する。

その時のPCへの負荷は相当なものだ。

野谷達が普段プレイする『HALLOPOINT』は、そのポテンシャルをリアルな物理表現に大半を割いており、風で電線が揺れたりはしないし、密林でも音声ファイルで鳥たちの騒ぎ越えが再生されるだけだ。

だが、ここは違う。

野谷は自分が座り込む土をつかみ取って、手の平からこぼす。

少し湿り気を含んだ土は、ざらざらと小さな固まりとしてこぼれ落ちる。

そして、地面へと少しの弾力を持って跳ね上がり、他の土と混ぜて、もうどれがどれだか分からなくなる。

この圧倒的な重力による物理動作はどうだ。完璧に思える。

PCがこの処理をしていないとする。

なら、一体この処理をどこで？

そして、野谷達のPCにそれぞれ入っているであろうiris達の『リンク』。その事実が導く答えは……。

そこまで野谷が思考を巡らせたとき、声が聞こえた。

「ようこそ、STAR・DUST・ONLINEへ」

「わ！何何！？」

「じっ」

いきなり始まった、どこからともなく響く声に山城が驚くが、志貴崎がそれをすぐに制した。山城もそれ以上騒ごうとせず、押し黙る。

「貴方達はもうログアウトできません」

貴方達の肉体は朽ち、心だけがゲームに取り込まれました」

あまりにも唐突な文言に、しかし誰一人として心を乱すことは無い。

「どうぞ。お楽しみください。死んだら、生き返りません」

ここに来る前に、覚悟はとうにできていた。

ただ一つ、その心に浮かぶ物があるとすれば。

「ようこそ、STAR・DUST・ONLINEへ」

良い旅を。良い第二の人生を」

これを一人で、何の心構えを聞かないで聞いた上村の心情。

上村はこれを一人で聞いて、何を思ったのか。どういった反応をしたのだろうか。

あまり良い心境では無かっただろう。
泣いたかも知れない。わめいたかも知れない。
それを想像して、少し心が痛んだ。

「……早く圭に合流しないと」
「そうですね……」

山城と鬼谷の表情は硬い。

一方野谷は、依然考え込んだままだ。
志貴崎はそんな女性陣を静かに見守り、皆の答えを待った。

「圭にも、irisは付いてる？」
>>そのはずです<<
「はず？」

野谷の眉が上がる。何故？皆とirisは繋がっているのでは？

>>圭の方に要る私のコピーとの接続は感知できません。恐らく距離が関係しているのでは？<<
「……irisが圭に付いているのなら、圭はとりあえず安全だ
と思う。探すのは少し待って、まずこの状況を判断してからが良
い」

野谷は依然難しい顔をしている。その様子を見て、鬼谷と山城は
静かに頷いた。

VRゲームの鬼、PCに関する深い知識、irisの持ち主。野
谷の判断に任せるべきだと考えたのだ。

「……いくつか仮定を」
>>はい<<

「PC同士がサーバーに接続され、サーバー内でお互いにリンクし、ネットワークを持つてる可能性は？」

>>あり得ません。完全にサーバーとコンピュータとの経路以外認められません。また、他のPCへの暗号キーもありませんでした<<

irisが断言するのならば、そうに違いはない。

では、irisがこうやって相互並列で動作しているのは何故？
どこかでお互いのPCがリンクしているのは間違いない。

「逆転の発想。私たちの身体データが直接サーバーへと直結され、これらの土、鳥、木々の処理をサーバー自体がやっているとしたら？」

>>現在の技術で？<<

「そう」

>>ありえません。数人の接続ならば、あり得るでしょうが、恐らく何百人単位、しかもこれらの物理エンジンや、各種ソフトを全てのエリアで同時に処理できるマシン、この地球上にあるとは思えません。また、通信ログも、データ量はそこまで多くはありませんでした<<

「それに、このサーバーは十数時間毎に移動しています。レンタルのサーバーを使っているようです」

横から、鬼谷が補足を出してきた。なるほど。有り体であるレンタルサーバーでは確かに、それらの処理をする事ができるはずがない。

「何でそんな事を知ってるんだ？」

志貴崎が鬼谷に口を出す。心なしか、口角が上がり、鬼谷を探るような視線を向ける。

「……この事態……いえ、事件は、私がお手伝いしている警察の方が追っていたんです」

「事件？」

山城の目線が若干険しくなる。

責めているようにも見える。

「……ええ。VR接続にてファイルを開いた人が、サーバー内に取り込まれるという事件です。少し前に……irisさんにも相談していました」

その山城の視線を、正面から受け止め、冷静に言葉を返す鬼谷。しばらく険しい目線を見せていた山城だが、その表情を和らげた。

「そ。邪魔してごめん。続けて」

それだけ言って、土の上に体育座りをして話の再開を促す。志貴崎も肩を少し上げるだけで、満足したように口を閉ざした。

「じゃあサーバーでの処理は無し。……脳の使用率が上がった……」

>>そうですね……いえ、卯月、貴方以外は<<

その言葉を聞いて、野谷は確信的な一つの結論へと至る。あまりにも突拍子も無い結論。

ありえない！

そんな思いが駆け巡るが、しかし数ある状況証拠がその結論以外を許さない。

「……脳での処理」

>>……<<

irisは押し黙った。それこそが、最後の証拠に思えた。

野谷の脳は、PCに最適化しており、そのニューロンの繋がりは、人間とは明らかに違う。まさに生体コンピュータとも言うべき構造をしていた。その脳が、活性化せずにこの場に適応した。

それはつまり、野谷以外のここに接続された全ての人が、まさに野谷と同じように、脳を『作り替えられた』という事に他ならないのでは？

「PCからの接続はただの経路。実際の処理は脳。そしてサーバーの中で脳同士が繋がり、高負荷の処理を難なくやっつてのける」

>>それしかないでしょう<<

「なぜ、こんな途方も無い事が、表に出ず、しかも解決されてないの？」

野谷は鬼谷へと視線を向けた。

「……このサーバーに取り込まれた人は、記憶の混濁が見られました。……何も覚えてません。恐らく、切断されたときにも何かの処理が……」

「なるほど。ここに拘束される時間は？」

「約十時間」

「十時間？」

野谷は疑問に首をかしげる。

「iris、さっきの音声ファイルを」

>>はい<<

野谷の声に、すぐさまirisは返答。先の響いた声を再度再生させる。

.....

ようこそ、STAR-DUST-ONLINEへ

貴方達はもうログアウトできません

貴方達の肉体は朽ち、心だけがゲームに取り込まれました

どうぞ。お楽しみください。死んだら、生き返りません。

ようこそ、STAR-DUST-ONLINEへ

良い旅を。良い第二の人生を

.....

「.....たかが十時間拘束されるのに、この言葉、絶対おかしい」
「え?」

「十時間で拘束は解除されるのに、お前は死んだだの、生返らないだの、おかしいって話だろう?」

「あ

疑問符が浮かんでいる鬼谷に、志貴崎が助け船を出す。

そして鬼谷もようやく『十時間』の不自然さに気がついた。

しかし、その答えに辿り着く仮定を、誰も出すことが出来ない。

「iris、何かある?」

>>.....まだ確定ではありませんが、あります<<

「何？」

>>サーバー内での時間の進みが、異常に早い可能性です<<

「時間……」

「え？どういう事？」

さすがに話について行けなくなった山城が、解説を求めた。

>>例えば、ここでの一時間が、現実での一秒であるという可能性です<<

「へ？」

irisの例えを聞いて、山城は目が点になる。

しかし、他の三人は納得がいったというようにうんうんと頷いていた。

「ふん。なるほどな。それならば、先の言葉も理解出来る。死んだら終わりか。そうか」

「……しかし何故サーバーに取り込む必要が？」

「私たちがここに居る間、脳処理の余った部分で、何かの計算をしている可能性がある」

「実験？」

「かもしれない」

目を白黒させている山城を置いて、三人はどんと話を進めていく。

どうせ理解できないと判断した山城は、土をいじって皆の議論が終わるのを待つ事にした。そうだ、山でも作るう。そしてトンネルを掘ろう。

「だとすると、上村がここに来て、もう数日、いや、下手したら何

十日も経ってる可能性があるんじゃないのか？」

「うん」

「ええ！？じゃあもつどこか遠くに行ってる可能性もあるんですか！？」

「……これがゲームなら」

野谷はウインドウを表示して何か操作をしている。

山城はそれを横目に見ながら、湿った地面をならしていた。中々に造形のしやすい良い土である。良質の粘土なのかもしれない。

「圭との連絡が取れた。すぐ向かってくるらしい。この森の近くにある村に迎えと言ってる」

「おお！そうか！」

「安心ですね」

どうやらめどが付いたようである。

山城はそれを見ながらも土を盛る。そういえば皆腰にナイフを装備している。自分にもあるのだろうか。あ、あった。これで山に模様を付けよう。

「ふむ。とりあえずその村に向かえば良いんだな？……山城、どうした」

「……ふんだ」

山城はちよつと涙目になりながら顔を背けた。

「おいおい、何をいじけてるんだ？さあいくぞ」

志貴崎の大きな手が山城を優しく撫でた。

大きく、勇ましく、力強く、少しも遠慮の無い撫で方であるが、

それが少しも嫌じゃないな。と山城は思った。

「ふん。わかったもん。いいもん。私どうせあんまり頭良くないよ
」

「何だ？すねてるのか？はっはっは」

わしわしと、志貴崎の撫でにさらに遠慮が無くなる。

「ちよ！？髪が乱れる！やめて！」

ともあれ一向は移動を開始した。

さあ、ゲームを始めよう。

四話 再会、そして、初めまして？（前書き）

新年明けましておめでとございます。

ついにお気に入り100件突破。うれしいです。

PV65000、ユニーク5500を超えました。ありがとうございます。

これからもどうぞよろしく願います。

設定資料集を別にわけて作りました。各種設定が気になる、今後の
ネタバレおっけー！な人はそちらへどうぞ。

四話 再会、そして、初めまして？

どこまでも広がる暗く浅い草原の中、重い体を最大速度で疾駆させる。

がっちゃんがぐちゃと、鎧が激しい音を月夜に響かせる。

野谷さんから連絡を受けた後、俺はすぐさまダンジョンから抜け出した。とは言っても、ダンジョンから抜け出す途中に二回の戦闘を挟んでしまい、予想以上に時間がかかった。

外に出た俺の眼前には、今まさに沈もうとしている太陽が。

すぐに移動を始めないと日をまたぐ事になるぞ。

そう思った俺は、すぐさま移動を開始した。

村に入る鍵は初日に手に入れてあるため、夜が深くなっても何も問題は無いが、合流はやはり一秒でも早い方が良い。

走り出してすぐに太陽はその身を隠してしまい、辺りを真の夜の闇が覆う。

ちなみに、この世界には移動方法は何種類がある。

・徒歩

言わずもがな、徒歩だ。歩いて歩いて歩くのである。

・馬車

このゲームの中で、AIの人達も利用する長距離移動手段。だが、あまりにも日数がかかるため、プレイヤーは普通利用しないと思われる。

・スクロール^{巻物}

大きな都市の魔法雑貨屋に売っている、各都市への瞬間移動を可能にする魔法が書き込まれた、不思議なスクロール^{巻物}だ。

普通、そういったテレポータ的な物は魔法使いしか使えない。

が、このスクロールを使用する事により、誰にでも都市間を往来する事が出来る。

とは言っても、やはりそんな便利なものであるが、いささか値が張る。手を出すにはもう少しレベルを上げて、強くなって沢山稼がないといけないと思えた。

また、このスクロールによる移動方法では、大きな都市にしか移動ができず、エルアド村のような小さな村へ行く事が出来るスクロールは、店で売ってはいないだろう。

・魔法

魔法使いには、何種類か移動に使える魔法がある。

スクロール同様、瞬間移動による都市への移動。

そして、『ゲート』を作って、自分の行き先に他人も同行させる魔法もある。

この『ゲート』が使える人を、『ポータル』とか『ポタ子』と呼ぶらしい。

さて、それで俺が使う事になる移動手段。

それは勿論徒歩。

このダンジョンは、『王都』からほど近い森の中、ひっそりとその入り口を開けている。そして、俺はまだまだ低レベルな初心者と言っても、差し支えない身分だ。まだスクロールには手が出ないし、魔法も使えない。

そうなるともはや選択肢は徒歩しかない。

たださらに村に向かって走るだけだ。

幸いダンジョンの外は、超低レベル用のモンスターしか出てこない。

そういうわけで、こうして全力で体を動かし、豪快に鎧を鳴らして夜の草原を駆けているのだ。

「はあ！！はあ！！はあ！！」

激しく体を動かすも、どうだこの鈍足っぷりは。我ながら泣けてくる。

ちなみに、このゲームにスタミナゲージは無いので、いつまでも走る事ができる。それだけが唯一の救いだ。

俺の後を、全力にはほど遠いといった余裕の表情で、白夜が駆けている。

走りながらもウインドウを展開、マップ画面を表示させて、エルアド村までの大体の距離と方角を把握する。

現在俺は、『王都』を経由せずにエルアド村へ直接行くこうとしているので、道の無い草原での方角を知る手がかりを、何一つ無い状態で走っているため、定期的にこうやって方向があってるかどうか確認する必要がある。

その時、白夜が突然その走りの速度を速めた。

俺を瞬時に追い越して白夜が草原の中、一点へ向かって音も無く駆け込んだ。

次の瞬間、背の高い草の中から上がる断末魔。

どうやらゴブリンか何かが居て、俺の邪魔になりそうだからと、先回りして掃除したようだ。

これで足を止めずに済みそうだ。

仕事をやり遂げた顔をした白夜を、走りながら撫でくり、また視

線を地図に落とす。

さて、あと何時間でエルアド村に着くのだろうか……。

「やあ、久しぶりだね。嬢ちゃん」

「あ、お久しぶりです」

エルアド村に鍵を使って入った俺は、その足で宿屋へと入った。

月は既に俺の真上に昇っており、走り続けた俺は、しかし少しも疲れては居なかった。ゲームだから長時間の運動も、苦にはならないという事もあるが、それ以上に皆に早く会いたい。その気持ちが、長時間の移動による心労を忘れさせていた。

四日前と何も変わらない、誰もテーブルに着いていないエントランスには、おばちゃんが一人だけだ。

酒場へと通じるドアからは、相変わらず酒に酔った人々の喧噪が、ドアを通じて少しくぐもって聞こえてくる。

「あの、ここに四人くらいで宿を取った人はいませんか！？男が一人に、女が三人だと思っんですけれど！」

「あ、ああいるよ」

俺はテーブルに食らいつくのように、早口で一氣にまくし立てた。

その様子に面食らったのだろう、おばちゃんは少し腰が引けている。しかし、はやる気持ちを抑えられない俺は、なおもまくし立てる。

「あの、会いたいですけれど！友達なんです！どこの部屋ですか！？」

「それは教えられないね」

俺の勢いに圧されながらも、おばちゃんはきっぱりと俺の要求を拒否した。

「な!？」

>> 圭、落ち着いてください。相手はAIです。『ゲーム』から外れて、柔軟に対応できるわけがありません<<

そうか。

irisさんに言われて急激に頭が冷えてきた。考えてみればそうだ。いくら顔見知りだからと言っても、ここはゲーム。おばちゃんも高性能なAIを積んでいるからと言って、プライベート空間と化す『宿屋の部屋』へ、部外者を案内する訳が無い。

ここは、リアルすぎるほどにリアルであると同時に、どこまでもゲームの制約には絶対に縛られている。そんな当たり前でありながら、不思議な空間なんだ。

「じゃ、じゃあ、呼び出して貰っても良いですか?」圭が来ている』と、伝言を!」

「まあ、それなら良いよ」

俺の勢いに完全に圧されているおばちゃんは、ため息一つつきながら、階段を上に乗っていった。

俺はおばちゃんが階段を上るのを見届けた後、テーブルの一つに座って待つ事にした。

「はあ・・・」

今まで何時間も走ってきたのだ。体の疲れは無いが、今まで動い

ていた体がいきなり休息状態となり、節々の緊張が緩まるのが分かる。

「圭？」

階段の方から声がする。野谷さんの声だ。

俺は席から勢いよく立ち上がり、声のする階段の方向に駆け寄った。

そこには服装こそ俺がここに来た時と同じ、ゲームの初期装備を身につけた、俺の友達の一人、野谷さんがいた。

大きな瞳に、和製人形の様なつややかなショートカット。

四日間会ってなかったただけであるが、ひどく懐かしい気がしてくる。

「野谷さん！」

喜ぶ俺の声に、しかし野谷さんは疑問に眉を寄せる。

「・・・？」

その反応を見た瞬間、俺は自分が女の姿をしている事を思い出した。

「の、野谷さん！俺！圭だよ！圭！！」

「え？嘘」

「本当だって。ここに来るとき間違っただ女を選んだんだ！」

必死に俺が『上村 圭』であると説明をする。

しばらく、野谷さんは俺の周りをくるくる回って、本当に俺が『上村 圭』であるかどうか訝しんでいるようだったが、やがて納得

したようだ。

「わかった。ついてきて」

とだけ言って、階段を上っていく。

俺も慌てて野谷さんの後についていく。

「その犬……？は何？」

そこで、俺と一緒に着いてこようとした白夜に野谷さんが気付いた。

視線を向けられて、白夜は顔をかしげている。

「俺がここに来た時に仲間になった。凄い強いぞ。白夜って名前だ」
「そう」

そう言って、野谷さんは小さく笑った。そして白夜に歩み寄ってその頭を優しく撫でる。

野谷さんと白夜が並ぶと、白夜が巨体過ぎて、野谷さんがいつも以上に小さく見える。

「よろしく、白夜」

「ワフ」

そしてまた野谷さんは階段を上り始めたので、俺もついていく。階段を上りきり、廊下を歩く。

……何だか騒がしい。どこかの部屋で、客が騒いでいるようだ。

「……」

野谷さんが立ち止まって指さすドアは、まさにその『客が騒いでる部屋』であった。
嫌な予感しかしない。

野谷さんが扉を開ける。

ゆっくりと開くドア。

開くドアに同期して、くぐもってあまり良く聞き取れなかった声が、クリアに耳に飛び込んでくる。

「跪きなさい!！」

「ぶひいいいいいい!！」

「だから豚語はわからないんだよ!！」

「じゃ!じゃあどうしろと仰るんですか!！」

「私と同じ言葉を喋るんじゃないよ!！」

「ぎゃあああああ!！」

まあ、もう皆さんおわかりだろう。

何故か髪がぼさぼさになっていいる山城さんが志貴崎さんを跪かせて、その背に足を置いて、昂揚した顔で暴言を吐きまくっていた。

はあ。何でこいつらは俺が居ないところなるんだ?

再開の感動もどこかにふっとんだ俺は、とりあえず二人を止める事にした。

「ちょ、ちょちょちょ!!!山城さん!何やってるの!?!」

「ああん!?!誰だお前は!?!」

必死に山城さんの顔を見ないようにして止めに入る俺であるが、山城さんは女の姿の俺を、『上村 圭』と認識できないようだ。

圧倒的なプレッシャーを放ちながら、その演技を辞めようとはし

ない。

とりあえず俺が圭だと言つことをわかってもらわなければ!!

「俺だよ！俺！！圭だよ！！」

「ああ！？圭は男だよ！私を騙そうつたつてそうはいかないよ！！」

「女王様！もしかしたら、圭にも何か事情があつてこうな」

「黙れ！私と同じ言語を喋るなど言つたはずだよ！」

「.....」

ええええ！どうすんだよこの状況！！

志貴崎さんが、どうにか山城さんの足蹴になりながらも、俺が「上村 圭」かもしれないと言つてくれたが、興奮しきつて演技をしている山城さんは、受け入れようとはしてくれない。

「本当だつて！！！！」

「嘘だね！！もしそうなら、ちゃんと顔を見せな！！」

いやいやいや、無理だし！顔見せたら俺幻術かかつちまうじゃん！！無理！無理だつてー！！

しかし、頭と手ををぶんぶんと振り、必死に山城さんの要求を拒否する俺の行動は、山城さんの逆鱗に触れてしまったようだ。

志貴崎さんをガンつと一度踏みつけて（ひつでえ）、山城さんがこつちに来た。

ぐいっと俺のあごを掴み、一気に顔を引き寄せようとする。

山城さんの顔を直にみてしまう、その瞬間、俺の視界にちらりと映る人影が。

鬼谷さんだ。

どうやら、俺達のやり取りを静観し、どう決着がつくのか、とりあえず様子見をしているようだった。

「お、鬼谷さん!」

「は、はい?」

必死に目をつむって、山城さんの顔を見ないようにしながら、鬼谷さんに呼びかける。

突然声をかけられて、鬼谷さんがびっくりしたかのような声を上げたのが聞こえた。

「んん?何故に目を閉じる?私の顔を見る!」

山城さんが、俺の顔を両手で挟み、顔を近づけてくる気配。

息づかいが間近に聞こえて、彼女のやわらかい女の子の匂いが鼻腔をくすぐる。

「お、俺の頭の中覗いて!!それで俺が『上村 圭』ってわかるから!」

鬼谷さんは人の頭の中が覗ける。

それは俺がいちいち、自分で『上村 圭』であるという証拠を並べて説得するよりも、鬼谷さんに俺の頭を覗いてもらうだけで単純明快な証拠になり得る。

「え!?!ええ!?!」

「早く!!」

「は!はい!!」

突然の能力使用の指示に、面食らう鬼谷さんの声が聞こえてくる

が、今は一刻も争う事態だ。

山城さんの吐息が、俺の顔の肌をゆるやかに撫でる。近い！山城さん近いからー！

「……………上村さん？」

「へ？」

鬼谷さんの一言で、山城さんのプレッシャーが一気に霧散した。

「……………圭？」

「……………はい」

目を開けると、今にもキスでもしてしまいそうな位置に、山城さんの顔があつた。

「わあ！？」

あまりの近さに、思わず俺は山城さんから離れた。

「……………何で女の格好してるの？」

「えーっと、色々あって……………」

もう、こうなった経緯をいちいち説明するのが面倒くさくなった俺は、『色々』に全てを込める事にした。

「色々ねー。ふーん」

物珍しそうに俺の顔をじろじろと見る山城さん。

「へえ、こんな感じになるんですねえ」

鬼谷さんも近寄ってきて、山城さんと一緒に俺を見回す。
動物園にいる動物にでもなった気分だ。

「なんといいですか・・・」
「なんっていうかー」

二人同時に口を開く。

「普通たねですね」「
「うっさいよ！」

そして、まったく異口同音にそんな事を言ってきた。

そんなの俺が一番知ってるよ。普通だよ。ネタにもならないよ！！

ちなみに、志貴崎さんは山城さんの幻術に掛かりすぎたようで、
目を完全に回して気絶していた。

はあ、まったく俺がいないと、すぐに限界超えるんだから。

そう思いながらも、いつも通りなこいつらに、自然と頬が緩んで
しまった。

四話 再会、そして、初めまして？（前書き）

ぼっきゅっぼん!!それ!!ぼんきゅっぼん!!

四話 再会、そして、初めまして？

「やー、見れば見るほど、なるほどねー。圭が女の子になるところなるんだー」

じろじろと俺のアバターを見回す山城さん。

「ふふん。確かに、上村っぽい部分もいくつかちゃんとあるな」

気がついた志貴崎さんも、俺を見回す。

じろじろ見られていると、なんとも落ちつか無い気分になる。

「もういい？」

俺達の漫才が沈静化するのを待っていたのだろう。野谷さんは、床に座って俺達を見ていた。

「あ、ああ。もういいぞ」

俺も床に座る。白夜が俺の隣に来て丸まったので、自然に俺の手は白夜の頭を撫でる。

「あ、その子かわいい！！ペット！？大きい！」

「大きいですね」

山城さんと鬼谷さんは、白夜を気に入ってくれたようだ。毛並みを確かめたり、撫でたりしている。

「状況をちゃんと整理しようと思う。けど、その前に」

「ん？」

野谷さんは、俺の顔を見ながら、

「圭。これ、どうしたい？」

「……？」

これとは何を指しているのだろうか。どうしたい？と言われても何の事なのか分からない。

「これって？」

「このゲーム。遊ぶ？遊ばない？」

そこで俺は気付く。

野谷さんは今までと変わらず、俺達の『遊び』の一つとして、このゲームを遊ぶか、それとも辞めるか。俺に決めると言っているのだと。

この得体の知れない檻の中、捕らわれながらも、それを『遊び』だと断じる野谷さん。

敵わないな、と思った。

だから俺は、

「どうせなら、クリアしようぜ」

そう、答えた。

せっかく『ゲーム』なんだ。最後まで攻略しないと気持ち悪いだろ？

「わかった」

そう言って野谷さんは微笑んだ。

「じゃあ、状況をもう一度整理しよう。iris」

>>はい<<

「圭のirisと接続できた？」

>>はい。現在同期を行いました。並列思考、並列動作の段階まではまだ時間がかかります<<

「そう。じゃあ、圭の同期データも含めて、最終的なこの『世界』の考察をお願い」

>>了解です<<

そう言って、irisは今までの事を踏まえた最終的な『仮説』を述べ始めた。

まず、この『ゲームに取り込まれる』という状況であるが、このゲームの中で死に、現実に戻されたからと言って、何らかの脳障害が起る可能性はほぼ0。

その理由となるのはこの事件、実は鬼谷さんが探っていた事件で、その被害者達に何の影響も無かった事が理由となっている。ただ、このゲーム内での出来事をほぼ忘れてしまうという症状は起るようだ。

「じゃあ、俺達もここから出たら記憶がなくなる？」

>>わかりません<<

「？」

>>皆がこのゲームに接続される時、他の接続者とは違う点が一つだけあります。私の存在です<<

「ふむ？」

>>このゲームに接続される時、サーバーと、皆のコンピュータの間に私が割り込む形となりました。その影響により、サーバー側が

上手く皆をモニタリング出来ていない可能性があります。それによつて、最後の後処理、記憶の消去が上手くいかない可能性はあります。すくく

「あくまで可能性か」

>>そうですねくく

ともあれ、命の危険、脳への障害への不安はこれで拭えた訳だ。次に、モンスターや町を行き交うノンプレイヤーキャラについて彼らには高性能なAIが積まれている。一体何故？

このゲームが単純な脳の解明や、人の心理行動を探る実験なり、研究であるのならば、彼ら高性能なAIは必要無いのでは無いだろうか。

「……第二のiris」

「え？」

野谷さんが難しい顔をして、そんな事をぼつりと呟いた。

「脳自体のスキャン、それに加えて……脳自体を使用した……算処理。……使って擬似的に人……いや。新しい人……」

ぶつぶつと呟く野谷さん。節々しか聞き取れないが、かなり深く考えにはまっているように見える。

そつとしておいた方が良いのだろうか。

しばらく野谷さんは、うんうんと考え込んでいたが、まだ状況証拠が足りないのか、考えを途中で切り上げたようだ。

顔を上げてirisさんに次の問題に移るように指示した。

次に、この『ゲーム』自体について。

まず、基本となっているのは俺が昔やっていたゲーム、『スター

ダストオンライン』を元に行っているのは間違いない。しかし、そのゲームを構成している各種エンジン、モデル、テクスチャーは信じられない程に高性能・高密度となっている。

irisさんに言わせれば、「主のコンピュータでは処理が追いつかない」そうだ。

そこで出た一つの結論が、『脳を使った演算処理』。

プレイヤー 一人一人の脳を繋ぎ計算機とする事で、巨大なネットワーク・コンピュータと化し、それらを並列動作、この世界を増築しているという仮定。

それにより、各々のコンピュータがどんなスペックであろうと、最低限の身体情報、脳スキャンデータのやり取りのみで、このゲームをプレイすることが出来る。

なんとも途方も無い話だ。

そしてこの話は、『なぜ現実とゲームの中で時間の流れが違うのか』にも繋がる。

もちろん、『ゲーム自体の時間の流れを速める』事は簡単だ。全ての処理を二倍、三倍で処理すれば良い。クロックアップという奴だ。

しかし、その処理にプレイヤーが適応できるはずがない。太陽と月がくるくる回転し、一瞬で周りの人が行き交う中を自分一人置いてきぼり、のろのろと行動する事しかできない。

勿論、PCにその分多大な負担をかける事になる。それこそ、俺のPCではとうてい無理。

そこで『脳自体を計算機として動かす』というさっきの仮説。それが事実として、上記の『クロックアップ』も可能なはずだ。

脳の処理自体を加速して、加速して、加速する。

そうすることにより、脳そのものの時間も加速する。

なんとも単純明快。だがそれ故になんとも途方も無い、ばかげた技術の固まりに思えた。

>> 大変素晴らしい技術です。きっとこの技術を発明した人は、まさに『狂った』人なのでしょう。全ての順序があべこべです。論理破綻しています。ここまで途方も無い技術を作り上げ、しかもそれを踏み台にしてなおも、また何らかの研究の最中だと言うのです。大変素晴らしい<<

「irisさん落ち着いて」

単調な口調ながら、興奮するirisさんをなだめる。

ちなみに俺達の会話には、山城さんと志貴崎さんは入ってきていない。二人とも理解が追いついていなかったようだ。

実際、俺の脳も爆発寸前だが、この状況を理解しておかないと、という思いがあるわけだが・・・。

志貴崎さんなんて、もうベッドで寝ている。

山城さんもこっくりこっくりと船をこぎ出し、限界になったのだろう。志貴崎さんの横にするりと入り込み、完全に寝る体制に入った。

自由人達め。

俺は白夜の頭を撫でながら、ゆっくりと頭の中で整理をする。

一応このサーバーの意味、目的は分かってきた気がした。結論に入るとしよう。

「まあ、このゲームにまず、危険は無い事がまず分かった。脳をPCの代わりにしているのも分かった。目的も脳の研究か、何かの計算か、人の心理分析かもしれないという所まで分かった」

「ですね」

「ん」

>> そうですね<<

「それを踏まえて、俺はこのゲーム、クリアしたいが、皆はどうす

る？」

何かに利用されてるかもしれないが、それでも俺は白夜やインソレイトさんに出会えたし、まあまあこのゲームを楽しめてもいた。なら、このまま続けて最後までやってやろうじゃないか。そう思った。

「はいはい！私もやりたーい！」

寝てたんじゃないのか。山城さんがベッドから手を突き出して俺に同意してきた。

「ふふふ。このゲーム、魔法とかあるんですか？」

鬼谷さんも乗り気のようだ。

「私も遊びたい」

流石、ゲーム好きの野谷さん。目が輝いている。

志貴崎さんは寝ていて反応しないが、まああの人は、どうせこのゲームでも大暴れするだろうから、特に意見を聞かなくても良いか。

「それ圭の、戦士みたいなもんでしょ！？明日さっそく皆でそういうの決めてさー！ボスとか倒しに行こうよー！！」

「わ、わかった。けどボスはまだ早いだろ」

何故か、もの凄くテンションの高い山城さんに圧倒される。と、その時irisさんの声が頭に響いた。

>>・・・完全に同期が完了した段階で、私の存在がサーバーに検知されたようです。攻撃対象と認識される可能性があります<<
「ええ！？それ大丈夫なの！？」

irisさんは淡々とした口調であるが、それは大変まずい状況では無いのだろうか。

「・・・さっきの仮説通りなら・・・」

野谷さんは、冷静に考えを巡らせているようだ。

「iris」

>>はい<<

「擬似的に脳のパターンを構成。私の脳内マップ、各種身体パラメータの数値の使用を許可する」

>>認証を<<

「~~~~」

野谷さんが、俺には聞き取れない速度で『1』とか『0』を組み合わせて言葉を紡ぐ。

>>認証、完了しました。『野谷 卯月』機密レベル3までの情報を読み込む許可が得られました。これより卯月の各種パラメータ・バックアップより、コピー・構成を始めます<<

「許可。始めて」

「野谷さん？」

「・・・私の『クローン』が作れるレベルまでの情報データを、irisに与えた」

「へ？」

野谷さんのクローンが作れるレベルまでの情報提供。そして先ほどの二人の会話。

俺でも分かる。野谷さんは最高ランク5の能力者。その身体データは機密中の機密のはずだ。

それを、irisさんとはいえ第三者に渡す。

それがどんなに凄い事なのか。

「・・・今、irisは私の情報データを使って、擬似的な『私』を構成している。これによって、サーバーは『私』が二人居る様に認識して、攻撃対象にならないはず」

「でも、サーバーは脳を監視しているんですね？irisさんだとすぐにばれてしまっんじゃないですか？」

サーバーは脳を利用している。それならば、例え本物に限りなく近くても、すぐにばれるのでは？

「私は、脳の異常によって、現実で全てがスローモーションに見える能力者」

「うん？」

「・・・という事になっている」

「・・・」

野谷さんは今、俺達に、自分の秘密の一つを喋ろうとしている。そんな気がした。

「私の脳は、構造自体が『人』とは違う。PCに適合して、脳を計算機として使用する事が出来る。それによって、VR環境でも他人より深く『潜る』事ができる。私は脳自体の作りが違うのと同時に、リミッターも外れている。『二つの異常を持つ異常者』。」「

どうやら、単純に現実での能力が強すぎて負担になっているのが、VR環境ではその制限も解除されて、あの凄まじい動きとなるように思っていたが、実はそれとは別の能力として、彼女はあの動きを可能にしていたようだ。

あらためて、規格外な人達だと再確認。

「そして、この脳は、irisに簡単に適合する事が出来る。つまり、irisは完全に私の擬似的な体をVR上に再現する。サーバーを騙す事もたやすい」

「はあ……」

なんとも途方も無い話である。

>>構成中。プロセス完了まで20分<<

「結構早いもんだなー」

「ですねえ」

とりあえず、irisさんの『構成』というのが終わるのを待つ。

「ねね、irisさんのそれが終わったら、irisさんはどうなるの?」

「それもそうですね。どうなるんでしょう」

「私の体を擬似的に得る事で、『部屋』以外でもVR環境で行動できるようになる」

「えっと……という事はつまり……」

irisさんも一緒に、このゲームで遊ぶことになる!?

irisさんは普段、『部屋』でただの丸い発光体の姿をしている。

しかし、このゲームでは人型にならないと遊べない。それはつまり。

「え！？本当！わあ。irisさんも一緒かぁー楽しそう」

「どんな感じなんでしょうね」

「irisさん落ち着いてるからね。きつとこう、ぼんきゅっぼんって感じで色っばいお姉さんだよー！」

irisさんがどんな姿で現れるのか、山城さんと鬼谷さんはきやあきやあと想像を繰り広げている。

「ねね！圭はどんなだと思うー!？」

俺にも飛び火した。

しかし、正直興味しんしんである。

「うーん・・・どんなだろうなあ。野谷さんのデータを使ってるんだから、基本的に野谷さんと似てるんじゃないかな？」

「なるほどー。うんうんそうかもねー」

首を上下に振って、納得がいったような顔をしている山城さんであるが、ふと俺にニヤニヤと笑みを向ける。

「しかし圭は相変わらずあれだね、普通な答えだよね」

「うるさいよー」

良いじゃんか。別に、普通に考えたらそつだよな!?!な!

俺達のやり取りを見て、鬼谷さんもくすくす笑ってるし。くそつ。

>>構成完了<<

そうこうしているうちに、irisさんの準備が終わったようだ。俺達の中心に、ポリゴンの細かな粒がどんと出現し、集まり、人の形を取る。

そのシルエットは、しなやかな肢体を持った女性であると分かる。ポリゴンが細部を造形し始め、その細い指先、くびれた腰、ゆるやかな髪と、どんととシルエットがはつきりしてくる。

そして、完全にポリゴンは一人の少女を作り上げる。

「どうも。irisです。今後ともよろしくお願いします」

そう言っつて、少女は深く頭をたれた。

褐色の肌に、肩までは届かない短さの、柔らかそうな印象を受ける緩やかなウェーブを持つクリーム色の髪。

背は野谷さんより高いだろうか。それでもやはり、小柄な印象を受ける。

その顔は、野谷さんのデータを元にしたただけあってそっくりに見える。が、その瞳は、まるでワインのように赤かった。

「きゃー！かわいい！」

山城さんのテンションはもうマックスである。

髪をいじくられたり、ほっぺたを触られたりしているが、irisさんは気にする様子も無い。

「ほほづ。』そう』したのか」

志貴崎さんはいつの間にか起きていて、irisさんの姿を眺めていた。

「……どつでしようか？」

首をかしげるirisさん。

「ふふん。とても『かわいらしい』と思うぞ」

「ありがとうございます」

その表情を一切崩すこと無く、irisさんは小さくうなずいた。これで白夜も含めて7人のちよつとした大所帯になった俺達は、ようやくゲーム攻略を開始するのである。

まずは『王都』での職業選びからだ。

……若干嫌な予感がするが。気のせいだろう。……気のせいだよな？

間話 世界の裏側を覗く

まだ辺りが薄暗い早朝に起きた野谷は、そつと宿を抜け出した。

空の一边がゆっくりと明るくなってきていた。そろそろ朝日が顔を
を出すのだろう。

「.....」

小さく深呼吸をする。

暑くも無く、寒くも無い。

手を見る。

細部まで再現されているように見えるが、その指に指紋が無い。

間違いなく、ゲームの中である。

「.....」

野谷は、膝を抱えて地面に座り込み、手を地面へと染みこませた。
手は地面へと着いた瞬間、抵抗なくするりと、その手首を受け入
れたように突き抜けて、まるで野谷が地面の穴に手を入れているよ
うにも見える。

潜れる。

野谷には、この世界の構造が、まさに『手に取るように』触れる
事が出来ていた。

「……」
「卯月」

そうしていると、野谷の背後にirisが立っていた。

野谷とまったく同じ顔。しかし、二人は細部が少しずつ異なっている。まるで姉妹のようだ。

「何？」

野谷は特に振り向こうとはせず、地面に手を突っ込んだままirisに返事をした。

指先に、世界の裏側でうごめくスク립トの一つ一つを感じる事ができる。

AI処理、セリフシーケンス、魔法攻撃による追加隠しパラメータ……。ありとあらゆる情報が、彼女の指先に触れてはすり抜けていく。

「圭が、すぐに出ようと言っていたら、どうするつもりだったんですか？」

その声は、心配しているようにも、期待しているようにも野谷には聞こえた。

「……この世界を壊していたかもしれない」

ちょうど今、野谷の指先には、この村付近にある、ダンジョンのボスモンスターのスク립トが引っかかっていた。コレを引っこ抜いて壊すだけで、こいつは物言わぬ膨大なHPを持つだけの、でくの坊と化す。

「.....」

irisは野谷の答えを聞いて、押し黙る。

野谷は、しばらくそのスクリプトの繋がりを、指先でくるくると弄んでいたが、やがてそのスクリプトをそつと解放、流れに戻した。

「けど、圭はこのゲームを遊ぶと言った」

「そうですね」

「じゃあ、めいっばい遊ぼう」

そう言って、野谷は笑顔をirisへと向けた。

「そうですね」

無表情ながらも、irisも小さくうなずく。

「けど、何か起ったときのために、準備はしておかないといけない」

楽しい旅になりますように。

楽しいゲームになりますように。

悲しみも、苦しみも、『ゲーム』にはあるだろう。

けど、それら全部含めて『ゲーム』なのだ。

野谷はゲームが好きだ。

勿論、今の様にゲームの裏側を強制的に暴き、無理矢理終わらせる事は容易いであろう。しかしだからこそ、制限の中で、規則の中で遊ぶ『ゲーム』を、彼女は愛する。

もしもその規則や制限を超えて牙を剥く何かがあったら、きっと野谷は許さないだろう。

ゲームは、ゲームの理を超えてはならない。

それは、野谷の哲学の一つだ。

だからこそ、野谷は『ゲームのできる事』を決して超えない。勝負事は常にフェアに、自分の哲学と信念を持って、全力で彼女は遊ぶ。

そして、その理を曲げる事は、誰であろうと許さない。

そう。誰であろうと。

GMであろうが、制作者であろうが、原作者であろうが、神であろうが。

有象無象の区別無く、彼女は断罪する。枠を超えて、理を超えて。

彼女はまた、世界の裏側を指先でかき混ぜ始めた。

レアのドロップ率、行動パターン表、ラストボスのパラメーター変更値。

ふと、風に揺れる木々を見る。

そよそよと揺れる木々と葉を、美しいと野谷は思った。

「iris」

「はい」

「何の職にするのか、決めておいて」

「そうですね。どのような物があるのでしょうか」

irisは、そう言って野谷の横に座り込み、自身もその手を地面へと突っ込んだ。

データの海をさまよう二人の手。

「……………パティシエという職は無いのですね」

irisは心底残念そうに顔をしかめた。その変化は実際、微々たる物であったが、それでも基本無表情なので、その落ち込みようがうかがえる。

「……………生産系の職は無い。生産系のスキルは誰でも使えるからなるほど、そうでしたか」

一転元の表情に戻ったirisは、また地面をかき混ぜ始める。その速度は気持ち早くなったようにも見えた。

まるで姉妹にも見える二人の少女が、地面に手を突っ込んで何かをしている様は、なんとも愛らしく、ほほえましい光景であった。

「……………卯月」

「何？」

地面をかき混ぜながら、irisはぽつりと口を開いた。

「……………圭の事好きですか？」

「……………どういう意味で？」

突然のirisの質問に、野谷の手が完全に止まってしまった。

圭が好きかどうか。

野谷の頬が瞬時に赤みがる。

しかし、人が好きかどうか。irisがそんな事を聞いてくるとは。

野谷は内心かなり動揺しているが、それでもirisの真意が分からない以上、答える事はできない。

「男女の関係として、でしょうか？」

聞いてきたiris本人も、どういった意図で先の質問をしたのか、要領を得ないようである。あまり論理的な思考をしているようにも思えないが、それはここが特殊な環境のせいなのだろうか？それとも……。

「うん。好きだよ」

とりあえず、野谷は自身に嘘偽りなく答える事にした。

顔が真っ赤になるのが、自分でも分かった。

「圭は、私たちを導いてくれる。私たちと遊んでくれる。……
圭だけじゃない。ミキも、凧も、桜も、皆好き。大好き」

これはきつと、恋愛感情じゃ無いのかも知れない。

子供のただの好き嫌いに、皆を当てはめているだけなのかも知れない。

しかしあまりにも人と関わって来なかった野谷には、その区別がつかなかった。

皆好き、大好き。

野谷の、嘘偽りない本心だった。
皆のためなら、何だつてやっていけそうだと思った。

「・・・そうですか」

そう言つて、irisはなおも地面をかき混ぜ始める。

「何でそんな事聞くの？」

未だにirisの意図が分からない野谷は、irisに追求する。
しかし、irisの答えは、

「何故でしょう。私にもわかりません」

という物だった。

「わからない・・・？」

「はい」

「・・・そう」

iris自身がわからないのであれば、分からないのだろう。

彼女は、AIであると同時に『AI』なのだ。たまには、論理破綻した思考もするだろう。野谷はそう判断して、また地面をかき混ぜ始めた。

世界の裏を二人で覗く。

もしもの時のために。これからの時のために。

願わくば、この手がまた、世界の裏側に入れる事が無いようにと願いながら。

さあ明日が来る。新しい明日が。

朝日と共に、太陽と共に。

「私は弓矢を使おうかな」

「なるほど。卯月らしいですね。では私は、二刀流にしましょう」

姉妹は朝日を眺めながら、仲良く『明日』の相談をする。

さあ、明日が来る。

明日はきっと、『今日』よりも楽しい。

きつともっと、楽しいはずだ。

世界はこんなにも、美しいのだから。

五話 ギルド結成、名前はなに?? (前書き)

間違っ
て修正前の話をあげてしまいました。

五話 ギルド結成、名前は何に??

「なあ」

「んーなーにー?」

志貴崎さんは巨大な剣を肩に担ぎ、後方へと『ステップ』、詠唱中の山城さんに並び話始めた。

「そろそろギルドを作りたいんだが」

「ギルドって何ー?」

炎気と風気が、山城さんの周りで渦巻いている。その勢いは、詠唱が長引けば長引くほど増し、ごうごうと音を立てている。

そこに、志貴崎さんの横に音も無く野谷さんが駆けてきた。巨大なロング・ボウを抱えており、一定間隔でそのロング・ボウから弓を射続ける。

弓は全く同じ軌道を描き、綺麗な放物線を描いて空を切り裂いていく。

「私たちは今、パーティーを組んでいる。これで離れた場所でも皆とチャットできる。けど、パーティーを解散したらそれまで。」

ギルドは、パーティーと似たような物だけど、他のパーティーと組んでもギルドメンバーでチャットできたり、ギルド専用の倉庫が持てる」

野谷さんは、スキル『ワイドアロー』を時たま織り交ぜ、その射る弓矢の数を、5本〜10本に分裂させたりして、効率よく攻撃を繰返す。

「それは便利ですね。私そろそろ色々アイテムが貯まってきたんですよ」

さらに、山城さんの側、神聖詠唱中の鬼谷さんも会話に加わる。

「えー？そんなにあるー？私ポーションとかしか持ってないよー？」

「山城は要らない物何でもすぐに売ったり他人にあげたりするからな」

「えー？何で何でー？皆集めてるのー？」

「そりゃあ集めるだろう」

「椀は変なのばかり集めるからだよー。木の実とか石とか何に使っつていうの！」

「ははは。そりゃあ食べるためだ」

「ええええー……」

「ん、『プロテクト』」

その時、鬼谷さんの周りの聖気が霧散。『プロテクト』のバフ陣が広範囲に展開、俺達を包み『防御力上昇』の効果をもたらす。

「そうですね。そろそろ私もケーキやパイが倉庫にも入らなくなってきました」

「どんだけ……」

その話を聞いていたのだろう。二本のエペを器用に操り、まるで踊るように舞いながらirisさんが口を挟んだ。

「っっていうかお前ら戦闘に集中しろよな！？特に志貴崎さん！何で後に下がってんの！！」

「はっはっは！！MP切れだ！！」

「マナポーションあげたでしょ！？あ！！飲んだな！？」

「はっはっはっは。ソーダみたいな味がするのでつい！」

『はっはっは』じゃねー！！俺らの稼ぎのほとんどを食に費やしちゃがって！

俺の目の前には巨大なサイクロプス。一つ目の怪物だ。多分俺の身長の二倍くらいある。

乾燥した大地、どこまでも茶色が広がり砂塵舞う荒野で、俺達は戦闘をしていた。

「ガハア」

肺から空気を一気に絞り出し、サイクロプスが手に持った獲物を俺に振り下ろしてくる。

巨体であるサイクロプスの手には、これまた大きなハンマー。重圧を持って俺に迫る。
しかし。

「フンッ」

俺の盾は、それを難なく防ぎきる。わずかに減るHP。

「つあっ」

小さな声と共に、そのハンマーをはじき返す。『パリィ』成功だ。

サイクロプスはハンマーを抱えて数歩下がる。一瞬の間、止まる時間。

その隙を、白夜が見逃すはずが無い。

一瞬で茶色の地面を駆け抜ける白い弾丸と化した白夜が、サイクロプスへと突っ込む。

「ガアアアアアア！」

白夜が脇腹を抉り、サイクロプスのHPがガクンと減る。そして状態異常『出血：軽微』が発生する。

そして、白夜の後方を走っていた俺が、サイクロプスに攻撃を与える。

『斬撃』による単純な攻撃・・・50しかダメージを与えられない。とほほ。

自分の攻撃力のなさに悲しんでいると、俺の頭上を飛び越える二つの影があった。

irisさんと志貴崎さんだ。

志貴崎さんは自身と同じくらいの刃渡りを持つ両刃の剣を高々と構え、サイクロプスを一刀両断しにかかる。

その後を、ヒュンヒュンと風切り音を響かせ、二本のエペを高速で振り回しながらirisさんがサイクロプスに恐ろしい速度の剣劇を見舞う。

二人の攻撃により、サイクロプスのHPは凄まじい勢いを持って減る。

着地と同時に、志貴崎さんの鎧がガシャリと響き、irisさんの長いロングスカートがふわりと舞う。

irisさんは、長い袖と丈を持つ、エプロンドレスを着ているので(irisさん曰く『ヴィクトリアンメイド服』なのだそうだが)なんだろうヴィクトリアンメイドって)、こういう時に長い足が覗くと、どきっとしてしまう。

「皆どいてー！『ファイヤーストーム』！」

後方から山城さんの声に反応して、俺達は一斉に『ステップ』を

発動させる。山城さんのスペルに合せて巨大な火柱が上がる。

火柱は、一瞬でサイクロップスを包み込み、激しい風と共にその勢いをどこまでも高める。

「ガアアアアアアア！」

ワンパターンな悲鳴を上げながら、炎の中、サイクロップスのHPはがりがり削られる。

その間、俺達は攻撃する事が出来ない。立ち上がる火柱は俺達へダメージは無いが、それでもあの炎の中、視界が悪くてまともに攻撃目標が定まらないからだ。

ここぞとばかりに、野谷さんの弓矢が、雨とでも見間違うレベルでサイクロップスの居る辺りに降り注ぐ。

色んな特殊効果を持ったスキルを放ちまくっているのだろう。『麻痺』『毒』『猛毒』『火傷』など、色々な状態異常が付いたり外れたり忙しない。

容赦ねえ。

「『アップルパイ』とかどうだろうか。ギルド名」

「『チヨコレートケーキ』はどうでしょうか」

火柱を見ながら、irisさんと志貴崎さんはギルド名の相談をしている。

あんたらはケーキが食い物しか思いつかないのか。絶対あんたらにギルド名は決めさせないからな！と、心の中で静かに決意した。

「『ヒール』！」

遠くから鬼谷さんの声が響き、白夜が淡い光に包まれる。回復するHP。

先ほどの攻撃、サイクロプスからは攻撃は受けていないが、白夜のスキル『チャージ』の上位スキル『チャージングストライク』の副作用により、そのHPを削られていたのだ。

そうこうしている間にも、火柱の勢いが弱くなってきた。

火柱の高さがだんだんと低くなり、サイクロプスの頭が見えてくるその瞬間、俺は駆けだした。

スキル『シールドバレッジ』を発動させる。

俺の盾が青く輝き、鈍く振動。そのまま炎のエフェクトの中、サイクロプスへ圧力を持ってたたきつけた。

瞬間、サイクロプスの動きが止まる。

盾を使った打撲攻撃、効果はスタンとモーションキャンセル。『キック』と同様の効果であるが、『盾』ジャンルの技なので、俺にとってはこちらの方が効果大きい。

「iris！たたきつけるぞ！」

「わかりました」

攻撃を叩きつける俺の横を、二人がサイクロプスへと肉薄していった。

白夜も、二人の動きに合わせて自身も疾駆、鋭い牙と爪を持って、最後の畳かけが始まった。

一発一発のタメが大きいながらも、強大な攻撃力を持って敵を叩き折る志貴崎さんの巨大な剣。そして、もはや剣の残像しか見て取れなくなり、irisさんの周りに銀の蝶が狂い踊るようにも見える高速の舞による、二本のエペによる制圧の剣劇。

二人の攻撃がサイクロプスのHPを容赦無く削りに削る。

そして最後、白夜の牙がサイクロプスの中心を貫いて、断末魔を響かせながらその巨体を茶色い地面へと横たえさせた。

「ふいー」

「なんとかなるもんだねー」

巨大な宝石が付いた杖を地面に突き刺し、山城さんがため息をついた。

「圭が安定して敵の攻撃を弾くからな。何も問題はなかったな」

「大アリだよ！何だよ！マナポーシヨン飲みきるんじゃねえ！超焦つたんだからな！！」

「いやいやーまさかMPが切れるとは。はっはっは」

志貴崎さんは巨大な剣を一旦解除、手をぶらぶらさせて豪快に笑う。

「『はっはっは』じゃねー！！」

「所で、『シフォンケーキ』という名前はどつで」

「irisさんはちよつと黙ってて」

なおもケーキの名前で責めてこようとするirisさんを、一旦黙らせる。

軽く目眩がした俺は、頭を抱えた。

何でこいつらはもうちよつと集中して戦闘できないんだ？

「圭」

「ん？」

俺の鎧を、音も無く近寄った野谷さんが引つ張った。

野谷さんは、ボロボロのマントで体を包み、顔も口元まで隠している。いつも以上に小さく見えた。隠密効果と消音効果が付いているから、好んでその装備をしているらしいのだが、皆結構かわいい装備やかっこいい装備を付けてる中、そのチョイスはどうなんだ

？と思わ無くも無い。

まあ、野谷さんはゲームしている時は能力重視というか効率重視だから、野谷さんらしいと言われれば野谷さんらしいが。

「『イグチズムegotism』とかどう？」

「はい？・・・ああ」

どうやらずっとギルド名を考えていたらしかった。
どいつもこいつも・・・はあ。

「とりあえず、ギルド名は後で決めよう」
「ん」

俺は、自然と野谷さんの頭に手を置いて、彼女を撫でる。
気持ちよさそうに目を閉じる野谷さん。

所で、『egotism』とはどういう意味なのだろうか。

「irisさん、egotismってどういう意味？」

「自己中心的な、自分勝手なって意味ですね」

「皮肉か」

「ふふふ。私達らしいと言えば、私達らしいですね」

静かにやり取りは見て、鬼谷さんはくすくすと笑っている。

「とりあえず、ギルド作るんなら『王都』戻るぞ」

「はい」

「鬼谷さんお願い」

「はい」

鬼谷さんが詠唱を開始。

「『ゲート』」

その一声と共に、青く輝き平たく縦に伸びた魔方陣が、鬼谷さんの目の前に出現する。一人人が通れるようなそれをくぐれば、俺達の今の根城『王都』へと一瞬にして移動する事ができるのだ。

「これさー後から通るとどうなるのー？」

山城さんは『ゲート』の周りをくるくる回って、観察している。今まで何回もこのゲートをくぐってきたが、なるほど確かに、後から通った事は無い。

「試してみれば良いじゃ無いか」

「ほいほーい」

そう言うのが早いが、さっさと山城さんは後からゲートを通る。ちなみに、前とか後とか言っではいるが、『ゲート』の見た目は違いはまったく無い。

山城さんはするりとゲートに入り込み、そのまま反対側に突き抜ける事は無かった。

どうやら無事に『王都』へと行けたようだ。

「じゃあ、こっつるとどうなるんだ？」

志貴崎さんは山城さんの戯れを見て、イタズラ心がくすぐられたようだ。

ゲートの横、完全に平たくなっている所からずんずんと歩き入った。

「ふむ。これだと通れないようだな」

まるで志貴崎さんが真ん中から、両断されたような状態になっている。

なにやってるんだあんだ。

ため息一つつき、志貴崎さんを蹴る。

「ほら、ちよっとこの方向に動けば向こうにいくでしょ」
「む、何をす」

『ゲート』は出現時間が限られているのだ。あんまり遊んでいるとゲートが閉じてしまつて、次の発動までしばし待たないといけなくなる。

俺の蹴りにより、ゲートの対面方向へのベクトルが発生し、志貴崎さんに対して空間移動の処理が行われたのだろう。志貴崎さんの抗議は途中で途切れてしまった。

その様子を見ていた鬼谷さんがくすくす笑う。

「じゃあ、俺らもさつさと行こう」

「はい」

「ん」

「そうですね」

残った皆で、ぞろぞろとゲートへと入る。

次の瞬間、俺達の目の前には『王都』のごちゃごちゃとした町並みが広がっていた。

背後でシャリン、とでも言うべきか、清んだ金属音を立ててゲートが閉じる。

「ゲームなので気にする必要は無いのですが、ああも乾燥している

と、髪が傷まないのか気になります」

「あー、風髪白いもんねー。すぐ傷みそう」

「そうなんですよ。困ります」

「そう言いつつ鬼谷さんは、綺麗な銀髪に指を入れて、さらさらと二、三回梳いた。」

「さて、とりあえずギルド申請だが、どこでやるのか知ってるか？」

皆首を横に振る。

作りたい作りたい言っただ割には、誰も知らないのか。

さてどうしたもんか。ヘルプ画面には書かれているだろうが、読み直すのはちと面倒くさい。

そこで俺の脳裏に一つの案が浮かぶ。

あの人に通信するのは少し躊躇してしまうが・・・。

俺は、ウインドウを展開。『フレンド』の項目をタップする。

ずらずらと表示されるいろんな人の名前。

この沢山の名前は、俺達が冒険した中で、一緒に共闘したり、喋ったり、情報交換してくれた人達だ。

俺達がここに入って、既に約二ヶ月が経過しようとしていた。

プレイヤー達は落ち着き、その約半数が現在は冒険を続けているようで、各種攻略スレッドも活気に満ちている。

人々は協力し、各所のダンジョンに赴き、活発に情報交換をしている。皆、このゲームを楽しむ方向にスライドしたようだ。

驚いたことに、ここに捕らわれた人々の大半が、熱狂的なゲームのようだ。色々なサイトからメディアファイル、リンク、実行データを通じて彼らはここに着たが、いずれもゲーム関係のサイトに貼られていたようだ。

このゲームが攻略されればどうなるのか、誰にも分からない。そ

て買っ事にした。

五話 ギルド結成、名前は何に?? (前書き)

前話、ギルド結成、名前は何に??が、修正前の文章で乗ってしまいました。

この話は、4話の段階から二ヶ月ほど時間が経過しております。

タイトルを変更しました。自分のセンスのなさに脱帽です。嗚呼、センスを俺に下さい。

五話 ギルド結成、名前は何に??

kei : 太陽万歳

とりあえず返しておくことにする。

insolate : 太陽万歳!

kei : 太陽万歳

insolate : 太陽万歳!!

もしかしてこの人、俺が『太陽万歳』やめるまで繰返すつもりか?
もう無視して、本題に入る事にした。

kei : insolateさんって、ギルド作って

ましたよね?

insolate : そうだ。今は俺含めて三人になった。楽し

いぞ!

あのギルドに入る人が居るとは。会ってみたいような、会いたくないような。

insolate : しかし、久しぶりだな!二ヶ月ぶりくらい

じゃないか!?

kei : ははは、そうですね。すみませんレベル上

げとか忙しくて

kei : あの、分からないことがあってコンタクト

したんですけど、ギルド作るのって『王都』でもできます?

insolate : ほう?ついにギルドを作るのか。うむうむ。

ギルドはいいぞ。やり方は

インソレイトさんからの情報を、メモ丁を取り出してメモる。

kei
ありがとうございます！じゃあちょっと作
ってきます。

insolate : おう！作ったら、是非一度会いたい物だ。
新しい面子も紹介したい事だし

kei : ははは、そうですね。是非。

俺は、そこでインソレイトさんとのコンタクトを終了。
ウインドウを閉じ、皆に向き直る。

「わかったぞ。宿屋の裏にギルド申請所があるらしい」

「ほいほーい」

「わかりました」

「ふむ」

「ん」

ぞろぞろと皆で目的の場所へと、俺達は歩き出した。
さて、ギルド名、どうしようかな。
絶対食べ物の名前にはしないぞ。

「ようこそ、どのようなご用件でしょうか」
「ほえー」

山城さんが『ギルド申請所』のエントランスに入ると同時に、気
の抜けた声を出した。

まあ、それも無理は無い。

この施設に入った瞬間、俺達の鼻にインクと紙の独特な匂いがむつと立ちこめ、辺りは見渡す限り紙の山となっていた。

俺達に声をかけてくれた、受付嬢のお姉さんのデスクも、例に漏れず紙の山。

右を見ても紙、左を見ても紙、紙、紙、紙。

あげく俺達が踏みつけている床にまで、紙が散乱しまくっている。

「……凄い紙の量ですね」

「ふふふ。凄いでしょう？大陸中からギルドの活動報告が、こうして送られてくるのです」

俺達が紙に圧倒されている様子を見て、おねえさんは大変嬉しそうだ。一種の誇りにでもなっているのかもしれない。

しかし、そんな大事な活動報告を、こうして床にまでぶちまけても良いのだろうか。

そう思い、床に落ちてる紙を拾い上げようと……が、

「あれ？」

指でいくらつまもつが、こするうが、紙は拾い上げられない。

「圭、これはグラフィックだよ」

「なるほどなあ」

つまり『そういう設定』の場所なのだ。

ふつむ。施設の雰囲気を出すために、ここまで作り込む物なのか。大量の紙の束を抱えた人達が、俺達が要るエントランスのさらに奥、作業場のような場所で行ったり来たりと忙しく働いているのが見える。

……作業場があるのなら、何でお客さんが来るここまで紙の山に

なるんだらうか。

「で、どのような用件なのでしょうか？」

「あ、ギルドの申請をしたいんですけど」

完全に紙の山に目が奪われてしまい、ここに来た目的を忘れてしまっていた。

「新しくギルドを立ち上げるのですね？おめでとございます」

お姉さんは、両手の指を組んで最上級の笑みを俺達に向けた。

「あ、ありがとうございます」

「それでは、この紙にギルド名と、ギルドリーダーになる方のお名前を記入してください」

そう言っ、お姉さんは紙を一枚手渡してきた。

紙をタッチすると、自動でウィンドウが表示される。

「ギルドリーダーは誰にする？」

俺は半透明のウィンドウ越しに皆を見た。

と、皆変な顔をしている。

「え？圭でしょ？」

「圭だな」

「圭ですね」

「上村さんですね」

「ん」

皆して一様に俺を指名してきた。

なんだそのチームワーク。白夜も嬉しそうに一声小さく鳴くし。普段からそれだけ息がぴったりなら、俺の気も休まるというのに。

「はあ、分かった。じゃぁリーダーは俺で」

ため息を一つつき、俺の名前を記入した。どうせこいつらにリーダーやらせても、ろくな事にならない以上、どっちみち俺がやるしか無かったと今更ながら気がついた。

「さて、コレで残るはギルド名だけだな」

俺の言葉に、皆待ってましたと言わんばかりに自分勝手に案を出し始める。

「イワシ」

何だそれ。

「シユークリーム」

おい。

「SBB」

「なんだそれは？」

「『青春爆発バスターズ』だよ！」

だよ！ じゃねえよ。何だよ爆発バスターズって。二回爆発してるぞ。

「インモラルズ」

止める。変態の集まりじゃないかそれ。あながち間違いじゃ無いのがたち悪い。

「variety lollyはどうぞでしょう」

「意味は？」

「多様なキャンディ、と取れます」

かわいらしいが、結局食い物じゃねえか！

「脳天直下」

思いつきだろ。もはや。

「圭と愉快的仲間達」

野谷さんまで変な事言い出したぞ。

「マグロ」

何だよそのチョイス。食い物から離れる。

なおもギャーギャーと、思いつきでどうでも良いような名前を叫び続けるこいつらに、いいかげん俺も頭が痛くなってきた。

もういい。俺が決める。

そう思った俺は、irisさんに声をかける。

「irisさん、赤信号って何？」

「red lightですね」

「そうか」

それを聞いて、ギルド名をささっと入力する。

「という訳で、ギルドの名前は」
Rampage a Red
Light《RRR》だ」

「暴走する赤信号?」

「うん」

「えー!」

「異論は認めん」

不満そうな山城さんを見無視して、OKボタンを入力。
紙をお姉さんに提出する。

暴走する赤信号。

赤信号を見無視するわけではなく、止める方の信号が暴走する。自制が効かないこいつらには、ぴったりすぎるほどにぴったりな言葉だ。

「確かに、受理いたしました」

お姉さんの言葉と同時に、ログウィンドウから2000ほど俺の金が減少する。

「それでは、コレがギルドのリングです」

「これが……」

手渡されたリングには、飾り文字で『RRR』と掘られている。
金色でピカピカに輝くこの指輪が、俺達のギルド証明となる。
とりあえず、その指輪を装備。

俺の頭上に浮かぶ『k e i』の文字の横に、「RRR」の文字が加わった。

次に、ウインドウから『ギルド』を選択。

メニューの中から、『ギルドリング』作成を選択、リングが5個、俺のアイテムボックスに収納された。

「ほい」

それを各自に配布する。

「これを装備すればいいんだねー？」

「うん、そう」

皆がリングを装備し、それぞれの名前の横に「RRR」が表示された。

これで俺達は、晴れてギルドメンバーとなったわけだ。

「で、ギルド作ったのはいいけどー、これで何するのー？」

「ギルドを作るとー」

野谷さんの解説を、まとめたらこうなる。

・ギルドに加入すると、経験値とお金を少し上納する事により、ギルドのレベルが上昇する。

このギルドレベルが上昇する事により、ギルド倉庫や各種サービスの質が上がる。

・プレイヤーの倉庫の他に、ギルド倉庫を得る事ができる。

この倉庫は、ギルドに加入している物ならば誰でも利用する事が

出来る。

そのため、自分じゃ使えないアイテムを置いておいて、利用したい人がそれを取って利用する事が出来る。

・ギルドメンバーで討伐すると、経験値が沢山もらえたり、特殊なアイテムがもらえたりするモンスターがいる。

・ギルドメンバーで行う専用のクエスト、『ギルドクエスト』という物がある。

「色々できるんだねえー」

「早速ギルド倉庫にアイテムを移そうじゃないか」

意気揚々と、志貴崎さんは早速アイテムを移し替えるために外に出て行くこととする。

「ちょっと待て、勝手に行動するな」

「ぬっ」

少し気を抜くと、本当に勝手に動き出すなこいつらは……。

「えーと、お、あった」

紙の山の中、エントランスの一角に、俺の目的の物はあった。近づくとも自動でウィンドウが展開。

「ギルドクエスト？」

「おう。せっかくだし何かやろうと思って」

「いいねいいねー」

野谷さんと山城さんが、俺の横から顔を出して、クエスト一覧に目を通す。

「サイクロプス討伐：これさっきやったじゃん」

「良く見て、憤怒するって付いてるでしょ。多分さっきより強いのだよ」

「そっかー」

「ケンタウロス100匹討伐……」

あからさまに野谷さんが嫌そうな顔をする。

まあ、一匹一匹はどうって事も無いが、100匹ともなると、かなりの数になるだろうな。

やるかどうかは別として、とりあえず気になる物を適当にピックアップ。

その中で、一つ気になるクエストがあった。

「『ピラミッドの秘宝を探せ』か……」

「秘宝！」

山城さんが食いついた。

「きつと黄金だよ！黄金！！おーごーん！！」

「わかった、わかったから落ち着いて」

やたらとはしゃぐ山城さんを落ち着かせて、クエスト受諾。

山城さんって黄金、好きなのかな。

「金粉は食った事無いな」

「椀にも食べたこと無い物があるのですね」

「ああ、まだまだ沢山あるな」

「あんまり味、しないよ」

「何と！食べたことあるのか！羨ましい」

「歯について、嫌」

「なるほどなあ」

そして、どうでも良い話を始める三人。

「とりあえず、それをやるんですか？」

「あー、鬼谷さんどうしたい？」

「ふふふ、楽しそうじゃないですか」

「よし。じゃあとりあえずこれにしようか」

俺は、クエストウィンドウを開き、『ピラミットの秘宝を探せ』のクエストをメインクエストに選択。

続いてマップを展開する。これでクエストの目的地が地図上に表示される。

「鬼谷さん、『サラーサ』の近くだった」

「あ、ピラミットと言ったら砂漠ですよね」

そう言いながら鬼谷さんは髪を梳いた。恐らく、砂漠を想像して無意識に髪に手をやったのだろう。

『サラーサ』は、砂漠のオアシスに出来た巨大な町だ。砂塵と乾燥がどこまでも続く砂漠で、唯一潤いを提供するまさにオアシス。

「じゃ、ギルド倉庫の整理をしたら、『サラーサ』に行くなって事で
「「「「「おー！」「」「」

「あ、志貴崎さん、ギルド倉庫にあんまり土とか石とか、意味分からないの入れないでよね」

「な!?!」

志貴崎さんが、「何故知ってる!？」とでも言いたげな顔をしてるが、彼が道々で石や木の実、土などを頻繁に採取しているのは前から知っていた。

釘を刺して良かった。絶対入れるつもりだったなこの人。

「irisさんも、あんまりケーキ入れないでよ」

「……はい」

irisさんは心なしか落ち込んだように、顔を少しだけ下げた。どんだけケーキため込んでるんだこの人は。

「はぁ……」

どろしてろう、この人達は……はぁ。

間話 プロミネンスを見たか

インソレイトは上村と分かれた後も、迷宮を潜り続けていた。

太陽万歳

上村からの『叫ぶな』という言いつけを、律儀に守り心の中で太陽への祈りを紡ぎながら、体を光らせる。

「うーむ。もう四日かぁ」

がしゃがしゃと、彼の体を覆う鎧が音を立てる。その歩みは力強く、まだまだ元気である事がうかがえた。

インソレイトは何と、四日も既にこの迷宮をさまよいつづけていた。ほりくさい迷宮はどこまでも続き、ランプの怪しい炎が等間隔に延々と並んでいる。

いくつもの直角に折れた曲がり角に、広くはあるがよどんだ空気の廊下は、閉塞感を感じてしまう。

そんな中、彼は自身を光らせながら、歩きに歩いた。

迷ったわけでは無く、単純にこの迷宮がどこまでも地下へと続いているため、彼は階段を見つづけるたびに、下へ下へと降り続けてきたのだ。

彼はこの迷宮で通った道を、完全にメモにマッピングしており、戻るのには容易い……が。

これだけ深い迷宮である。何かしら最深部にはあるだろうという期待。

ここまで来たら戻れるわけが無い。

彼は、アイテムボックスから林檎を取り出してかじる。

いつまでも新鮮さを保つみずみずしい林檎は、その果汁をはじさせ、垂れた汁がインソレイトの手をきらきらと濡らした。

今日の寝床はどうしようか…… 太陽万歳

また光量を増しながら、心の中で思索する。

流星に一日中動き続け、時間の感覚が無くなり始めてきた彼は眠気を感じていた。

この迷宮は、基本的にモンスターが少ない。

いたとしても、既に四日間潜り続けている彼にとっては、取るに足らない雑魚モンスターであった。

叩かれて、その衝撃で目を覚ましてからの攻撃でも、十分に間に合う自信がある。

そして何度もモンスターと対戦するうちに、廊下と曲がり角の組み合わせからモンスターが出やすい位置と出にくい位置が、彼には感覚的に分かるようになってきていた。

ここで寝ても良いだろう。

経験測のみから、インソレイトはそう判断して、その場にござりと寝転がった。

太陽万歳

心の中で、祈りを一つ。

今、太陽は昇っているのだろうか、沈んでいるのだろうか。それを知る術を、彼は持たない。

だが、彼の胸に宿る太陽は沈むこと無くプロミネンスを放ち続け、彼を焼き尽くしていた。

その太陽を感じながらフルプレートの兜の中、目蓋を閉じる。

「この迷宮はどこまでも続いているらしい」

「んん？ どこまでも？ つーと何か？ 奥まで誰も行った事ない
つてのか？ お？ 何だよ！！ それなら話が早いぜ！！ 何だよ
何だよー！！ それならそうと早く言ってくれよ！！ マジか！！
じゃあ何？ お一人様限定のお宝とかあるんじゃねえか！？ お
いおいおい！！ テンション上がってきたぜ！！ マジか！ マジ
か！！ おいおいおいおいおいおいおい。俺、そういう
の好きだぜ！？ トレージャーハンティングっの！？ いや、
まじで。まじでまじでまじで！！！」

「……………」

oooooooooooooooooooo!!!

「うん、そう」

「お、おう」

それだけ言っつて、リノはポニーテールをなびかせながら、スタスタと歩き出す。

リノもその後をスキップしながら上機嫌で追う。

「ところでリノちゃんよー。何でここに来ようと思っただんだ？ 俺はまあいいぜ？ 楽しめればそれでハッピーさ！？ モンスターを倒すのもまあ楽しいし、こういった『遊び場』でローラと追いかけっこしたこともある。あれも最高の俺の思い出だぜ！？ あ？ エドレだったかな？ まあいいや。黒髪の綺麗なキューティクルした子だよ。ooooooooooooooooも綺麗なピンク色だよ。まだooooooooも一回も使ってなかった！ はあ。あんな子はもう二度と会えないぜ。おっと！？ リノちゃんも中々良い髪を

してるぜ！？ 大丈夫、俺はそんな見かけとかで人を判断するよう
な奴じゃねえ。しみつたれた母親も言つてたぜ。人は見かけに寄り
ません』……………あ！？ 違う！！ リノちゃんは見かけも超かわ
いいぜ！？ その大きなおっぱいも俺はあんまり好みじゃねえが！
！ 美人！ 超かわいい！！」

ポニーテールの揺れるのを見ながら、リノは一方的にまくし立て
る。

彼は基本的に始終こんな感じなので、リノは特に反応すること無
く、歩を進める。が、

「リノが楽しめると思ったから」

ぽつりとそれだけ呟いた。

「お、おお？」

その一言に呆気にとられたリノは、喋りを止めてしまった。
どういつ反応をして良いのか分からなくなり、ナイフの柄で頭を
ゴリゴリと掻く。

「な、なあんだ俺のためだったの！？ まじか！！ はあ！！ や
べえな。リノちゃんよー！！俺は嬉しいぜ！？ お、なんだよリノ
ちゃんよー。そんな事考えてくれちゃってたの！？ よ！！ エン
ターテイナー！ どこまでもついて行っちゃう！ 惚れる！ ヒュ
ーヒューー！！」

変な所に着地したテンションのリノは、ナイフを持ったまま彼女
の肩を揉んだり、周りをくるくる回ったり忙しない。

彼は、基本的にナイフを手から離さない。

我慢ならない。

「糞が糞が糞が糞が糞が糞が」

「リノ」

「あ？ああ？」

しばらく好きにさせていたリノであるが、それがいつまでも終わらなそうだと感じたので、声をかけた。

憤怒にその顔を歪めに歪めたりノの瞳が、彼女を貫く。

しかし、彼女は動じず、言葉を紡ぐ。

「遅くなる」

「ああああ？」

彼女のその一言に、リノは何の事を言っているのか分からなかったが、急激に頭の中が冷えていくのが分かった。

「……………ああ、そうだな。トレジャーハンティングしているんだっつた！ 悪い！ 忘れていたぜ！！ 俺とした事が。こんなので『遊んで』る場合じゃないよな！？ なんだよ！ は！ すぐ自分のする事がわからなくなる。まじで！！ サンキューなりノ！ いやいやー、まじ、すまなかつた！！ は！ おいおいおいー！ なんだよなんだよー！！ もうちょい早く言ってくれてもいいんだぜ！？ ん！？？」

いつもの彼に戻ったと判断したリノは、特に返事をする事もせず、また廊下を歩き出した。

もうリノも慣れたのだろう。スキップしながら彼女についていく。

「おほ！？　おいおい。階段だぜ！！　これはあれか。どこまでも
続いているってパターンだな！？　お！？　はあ！　テンションあが
るぜ！！　まじで！！　ひゃー！！　雰囲気出るじゃねえか！！
おいおいおい！！　いやあ！　いいね！　まじで！　これはいいぜ
！！！」

階段を見ただけでこのテンションである。

二人は、階段を下りて次の層へと向かった。

迷宮はまだまだ序盤、果たして二人はどこまで潜れるのだろうか。

「やあ！！！」

気合い一線、インソレイトは青く輝く剣を振り下ろす。

瞬間、ほとばしる光りと爆発。

薄暗い迷宮の中、インソレイトの『ホーリーエクスプロージョン』
の光りの渦が、どこまでも明るく照らしていた。

彼は、あれからさらに迷宮を潜り続け、遂に最深部であろうと思
われる扉を見つけた。

しかし、扉を開けようとした瞬間、突如奇妙な声と共に頭上から
巨大な物が降りてきたのだ。

すぐさま剣を抜いて戦闘を開始、今に至るのだが……。

「クルルルルルルル」

閃光の爆発の中から、インソレイトをにらみ付ける黄色いに光る
瞳。彼の必殺の一撃を、まったくもろともしていないようだ。

じわじわと、焦れるように敵のHPは減少をしている……が。

光りの渦が徐々にその光力を弱めて……消えた。

「むう、あまり効かないか」

ガシヤリと音を立てながら剣を構え直し、インソレイトはゆつくりと敵から距離を取った。

「クルルルル」

奇妙な音を立てて、インソレイトを睨む顔は……山羊。

しかし、その体は人、背中には大きな黒い羽が生え、身長もインソレイトを軽く追い越し、2mは超えるだろうか。まがまがしい巨大な鎌を抱えている。

名前は『レオナル』。最も有名な悪魔の一人。魔女達の崇拜を受けた、淫靡で卑猥に快感を振りかざす、憂鬱を司るサバトの使者。

「醜悪な……」

インソレイトは思わず、そう呟いた。

上半身には何も身につけておらず、筋肉隆々に盛り上がる体は男性の物、しかし、その胸には明らかに女性の物と思われる、たわわに実った二つの果実が。

体中に走る黒い血管が皮膚を透けて見え、荒い息づかいと共にその血の流れが浮き出では沈む。

体中には血が滴り照り、まるで今まで何かの儀式の最中をしていたかのようにも感じられた。

「五芒星ごぼうせいは持っていないぞ！」

そう叫びながら、インソレイトはレオナルの鎌に少しも気後れ

せず突っ込んだ。

「クルルルル」

レオナルドの筋肉が盛り上がり、その巨大な鎌を振り下ろしにかかる。

「太陽万歳!!」

重圧を持って鎌が迫るその瞬間、インソレイトの体が眩しい程に発光する。絶え間ない鍛錬により、既に『ライト』による重ね掛けは、まさに閃光と呼ぶにふさわしいほどのレベルに達していた。

「グルル」

インソレイトの輝きに、レオナルドは目測を誤り、その鎌を地面に打ち付けた。

重い衝撃音と共に、彼のすぐ側、地面が砕けてひび割れが発生する。鎌はその身を半分以上地面へと沈み込ませる。その様子から、かなりの攻撃力があると予想が出来た。

「であああ!!」

インソレイトは、それを気にする事無くレオナルドに肉薄。

そのぬらぬらと血に濡れた体を、すれ違いざまに切りつけた。

一ミリも減らないように見える敵のHPに、彼は内心舌打ちをした。

さて、どれだけ時間がかかるだろうか・・・

レオナルドの攻撃は単調だ。攻撃は強力に見えるが、遅い。名前の色はピンク、無理な敵ではないように彼には思えた。インソレイトは剣を高らかに構え、力を貯める。

「光りよ……」

彼の体と剣が、光りに包まれた。

「だあああ！」

それから、一時間ほどの時間が経った。

二つの影は、重なっては離れ、重なっては離れた。

『ホーリーエクスペロージョン』は隙が多い技だ。それでも、力を貯めながら敵の攻撃を避ける事さえ出来れば、確実に発動する事が出来る。

インソレイトは、レオナルドの攻撃をギリギリで避けては技を繰り出し、順調に敵のHPを削っていった。

それでも、長時間の戦闘は人の神経を削る。少しのミス、遅れ、不意を突かれ、彼自身もそのHPとMPを少しずつ減少させていた。

「はあっ！きついな！」

続く戦闘に、ポリゴンで構成されているはずの体は消耗し、新鮮な空気を欲していた。

息苦しい！

緊張に次ぐ緊張は、確実にインソレイトの神経をすり減らしてい

た。

「おいおいおい！ 何だ！？ 大丈夫か！？ おいおいおい！！
は！ すげーな！ かけー奴いるじゃねえか！？ おい！！ お
いおいおい！！ すげーな！！ おい！ 何だそれ！？ ボスか！
？ まじか！ まじかまじかまじか！！ 超イカスじゃねえか！！
何だよ何だよ。しょっぱーいモンスターしか作れねえと勝手に思
っていたが。中々良い趣味しているじゃねえか！ ひゅー！！」

その時、インソレイトの前方、レオナルの向こうから声が聞こ
えた。

「どうやら、彼と同じでこの迷宮をどこまでも下り続けてきたプレ
イヤーがいるらしい。」

「誰か知らないが、助けてくれないか！？ そろそろ俺は限界だ！」
「お！？ まじか！！ ピンチか！？ けどあれじゃね？ 途中で
割り込んだら、なんかこう、経験値が中途半端に減るとかなんとか
そういうのってあれだ。後になってトラブルになるんじゃないかな
？ 知ってるぜ？ そういうの。『口約束はするな』って俺のしみ
つたれた母親も」
「良いから、助けてくれ！！」
「お、おう！！」

レオナルが大きな鎌を振り上げる。

咄嗟にインソレイトは『ステップ』を発動、後に逃げる。

後へと駆動する体で彼は、レオナルの上空に二つの影を見た。

「ひゃー！！！！ なんだよなんだよ！ こいつ知ってるぜ！！
赤ん坊の○○○○○○とか○○○○○○とか○○○○○○とか蜘蛛とか
蛇とか○○○○○○○○して食う最高にイカした奴だぜ！！ ひゅう

！ まじかよ！？ おいおいおい！！ ははー！！ 良いね、最高だ。こういうのだよこういうの。なんだよなんだよーおい。なんだ！？ おい。あ！？ 何だ！？ え？ その目なんだよおい。糞が俺を睨むんじゃねえ！ おい！ 糞が！ ああ！？」

一方の影がまくし立て、両手に持つナイフを投擲。

新たな攻撃対象を認めて睨み付けるレオナルの眼球めがけて、軽快な音を立てて突き刺さる。

同時に発動する状態異常『盲目』。

「クルルツルウルルツツラアアア！！」

「ひゅう！ホールインワン！！！ それでいいんだよそれで！！ は！ 山羊が！ 二つ○○○○○○ついているのかしらねえが！ しらねえんだよ！ しらねえしらねえしらねえ！！ 糞が！ 死ね！ 全部死ね！ 死にきれ！」

まくし立てながら、影はレオナルに刺さったナイフをつかみ取り、そのまま頭から地面まで、ナイフでレオナルの腹を切り裂く。同時にもう一方の影も、こちらは背中を切り裂きにかかったようだ。吹き出る鮮血のエフェクト。

「これじゃ誰の血かわからねえな！！ あ？元からわかれねえか！？ は！ 最高だぜ！ お前最高だな！！ 気に入ったぜ！！ 久々に良い気分だ！ 糞が！ だから死ね！ すぐ死ね！ 今すぐ死ね！ 死ななくても死ね！ 死ぬか死ぬか選べ！ 選べ選べ選べ選べ！！ 死ね！ 糞が！ 糞が糞が糞が糞が！！」

体勢を立て直したインソレイトは、ようやく影の正体を見ることが出来た。どうやら二人のパーティーのようで、どちらも忍者のようだ。

どう考えても意味不明な言葉を吐き出しながら、凄まじい勢いでレオナルドにナイフを振るっている。

先ほどからなにやら『イカレタ』事をまくし立てている奴とは対照的に、もう一方はひどく無口らしい。

二人が攻撃を繰返しているが、そのHPの減りは微々たる物であった。どうやら、斬撃系の攻撃には耐性があるようだ。

そうとなれば……。

「光りよ………」

インソレイトは剣を掲げ、この戦闘何回目かもはや分からない『ホーリーエクスポートジョン』の準備に入る。しかし、今回はコレまでと違う。

最大の力で、最高の効力で敵に叩き付ける。

限界まで貯める。限界まで込める。

信仰を、心棒を、神聖を。

「光りよ………」

彼の体が光りに包まれる。

嗚呼、太陽。太陽万歳。

「光りよ………！！」

太陽万歳！太陽万歳！！ 嗚呼！ 太陽！！ 太陽万歳！！！！

「ひょー！ にいちゃんすげーな！ 何だその輝き！！ かつけえな！！ まじイカス！！！ まじか！！ すげーな！ やべー！ まじやべえ！！ 何だよそれ！！ 後で教えてくれ！！！！」

ナイフを振りながらインソレイトの方を見た男が、感嘆の声を上げた。

それを聞いた彼は、フルプレート兜の中、ニヤリと笑った。

「これはな……、太陽だ!!」

そしてインソレイトは駆けだした。光輝く鎧を持って、青く震動する剣を構えて。

嗚呼、太陽。お前は美しい。だから俺は太陽になろう。お前のような太陽に、心だけでも、気持ちだけでも。

太陽万歳！ 太陽万歳!!

「太陽ばんざーい!!!」

瞬間、轟音。

まさに強烈。まさに圧倒。

光りしか見えない。

光、光、光。

嗚呼、太陽だ。これこそが太陽。

光の中、ぽつかりと浮かんだレオナルドのHP。

じわじわとそれが減少していく。

減少、減少、減少。

しかし、光はまだ止まない。いつまでも吹き出る光の渦。

減少、減少、減少。

「あーあーあー。何もみえねえぜ。まじすげえ技だな。けどこれ倒しきれねえだろ!? なあ、ぎりぎりちよびつと、無理な感じだよな!? だが大丈夫!!! ヒャー!!! 俺だろ!? ここは俺の出

番だろ！！ ひゃー！！ 行け行け行け行け！！！！」

どうやら良く分からないが光の中、男はナイフを振り回してレオナルドを攻撃しているらしい。

何という非常識、何という無茶。

しかしその様子を見て、インソレイトは感動していた。

あの光の中を構わず動くとは！！

この光の渦の中、彼自身も目がくらみ、まったく身動きが出来ないのだ。

それをあの男は難なくやってのける。

恐らく敵のHPバーを目印にしているのだろうが、それでもなお、インソレイトには考えられないことだった。

光の渦がようやく収まりだす。

そしてついに、そのHPを削りきって地面に倒れるレオナルド。

「はぁ……終わった」

インソレイトは思わず地面へと膝を付いた。

「おっつかれー。おっおっつー。いやー中々へヴィーな敵だったみたいじゃねえか？ ん？ 太陽のにいちゃんよー。いやいや、最後の技まじ凄かったぜ。超クールだ！ 超いかしてたぜ！！」

「はは……ありが」

感謝の言葉を言おうとしたインソレイトであるが、言葉が途中で止まってしまっ。

「ん？」

その男の名前は『R i n o』、名前は……赤。

「っ!？」

一瞬にしてインソレイトの体が緊張状態へと移行。
体を跳ね上げ、剣を抱える。

「んん？ どうしたどうした？ ん？ 剣何か抱えてよー？ ん？
どうした？ ん？ どうした？ え？ おい？ ん？ どうした
どうしたどうしたー？」

「リノ、名前の色」

インソレイトが何故警戒しているのか分からないリノに、同じパ
ーティーだと思われるもう一人が声をかける。こちらの名前は『r
i - n o』、色は白。

「ああ？ おお、そうか。おお、すまん。色々と『お遊び』が過ぎ
ちゃってよ！ は！ 赤いけど気にすんな！ 別にPKしてるわけ
じゃねえ。いやいやー。むかつく奴多くてよ。気にせず殴ってたら
こうなってたぜ はははは」
「む、そうなのか、すまなかった」

インソレイトは剣を下げて謝る。

赤ネームを見て、その本人の弁解をすぐに信じる彼も彼であるが、
それが基本他人を疑う事を知らない彼らしいとも言える。

「ははは、良いつてことよ!! ヒャー! 最近俺の色見た瞬間、
どいつもこいつも攻撃してきやがる!! 俺が何したって言うんだ
!?! なあ。おいおいおい。まじで!!! ありえねえぜ! 糞が。

まじで！ 糞が！！！」

「ふむ。何故だろうな。忍者だからじゃないか？」

「な・・・んだと!？」

リノは愕然として自分の姿を改めた。

基本的に攻撃される理由は、リノの物騒な早口に100%原因があるのだが、インソレイトは彼を、『そういう役柄』としてロールプレイしている人と片付けているため、特に指摘する事もしない。インソレイトは、アイテムウインドウを表示、ギルドリンクを二つ取り出して彼らに渡した。

「本当に助かった。これも何かの縁だろう。良ければ受け取ってくれ」

「お？なんだコレ！？ お、ギルドって奴だな！ は！ なるほどなるほど……」

ぶつぶつと呟きながら、リノはその指輪を弄ぶ。文字を見たり、裏を覗いてみたり。

そして、ウインドウを表示して、そこに納めた。

その瞬間、リノの名前の横に「SUN」の文字が表示された。

「!？」

「ん？ どうした？ 太陽の兄ちゃん」

きょとんとした顔のリノに、インソレイトは心底驚いた。

「い、いや、別にギルドに入れて言ったのはなく、名刺代わりのつもりだったのだが……」

「あ？ そうなのか？ まあ良いじゃねえか。これも何かの縁だろ!？ な!! 仲良くしようぜ!! それに、この扉の奥、何かあ

るんだろ！？ そっちの方が気にならねえ！？ どうせギルドにならなかつたら俺らで争う事になるんじゃないかねえか！？ なら皆一緒にギルドで仲良しこよしでアイテム取ればいいじゃないかねえか！！ そうすりゃ万事解決だろ！！？」

「そういう事では無いのだが。」
「あー？」

インソレイトがどうしようか迷っていると、もう一人のリノも、ちやつかり頭に「SUN」と付いていた。

「よろしく」

そう、一言だけ呟く。

インソレイトは思わず兜を搔いた。

「まあ良いか。よろしく。俺の名前はインソレイトだ。そして太陽だ！」

「お？ 自己紹介か！？ いいね、そういうのは大事だ！ とても大事な事だよな！！ うんうん。俺の名前はリノだ！ ヒャー！！ 趣味は女の子を○○○○○○○○して○○○○○○○○○○する事だ。けど今は禁止されててもう○○○○○○○○○○抑えられねえまじホリック状態だ。つーわけですよろしくー！！」

「リノ」

そして、三人は扉を開けた。

その向こうに何があるのか分からない。しかし、三人の瞳は期待にきらきらと輝いていた。

六話 ビラミット、ソコ、唄ですよ？（前書き）

お正月休みが終わりました。

嗚呼、仕事です。

うぐう

六話 ピラミット、そこ、囃ですよ？

「いつきても雰囲気が暑いよここはー」

『ゲート』から出てきた山城さんが、砂漠の町『サラーサ』の光景を見てうんざりしながらそう呟いた。

オアシスにより以外と緑が多いこの砂漠唯一の町は、煉瓦造りの小さな家が軒を連ねて、沢山の人が行き交いとても活気に満ちている。

『ゲート』から出てきた俺達の周りを、誰も気にする風もなく通り過ぎていく。

「このゲームでは場所に関わらず、ほとんど温度の変化を感じない筈ですが？」

irisさんがクリーム色の髪を揺らし、首をかしげる。

「知っててもあーっーいー……気がするの!」

「そうですねえ」

ツインテールを跳ねさせてわめく山城さんに、髪を梳きながら鬼谷さんが同調する。

まあ二人とも、魔法職らしく暗色のローブに身を包んでいて、何とも暑そうな格好をしているのは確かだ。

「まあ確かに、FOODが減る速度は速いな」

そう良いながら志貴崎さんが林檎を嚙る。本当、いつでも何か食ってるよなこの人は。

「あ、りんごおいしそー」

「ん？ 何だ？ 食うか？」

そういいながら食べかけを渡そうとする志貴崎さん。
前にもこんな事があったような。

「ありがとー」

嫌な予感をバリバリ感じる俺をよそに、志貴崎さんの林檎を受け取った山城さんは囁り始める。

「んふふーおいしー」

上機嫌だ。

まあ、本人が良いのであればそれで良いか。

「すぐにピラミットに行く？」

野谷さんが俺を見上げてくる。

「どうしようかなー。クエスト掲示板でピラミットに関連するクエストがあればついでに受ける？」

「あ、そうだねー」

「そうですね」

「ん」

「その後でよろしいので、少し市場を回りませんか？」

「ん？市場？何かほしいのあるの？」

irisさんはウィンドウを開きながら何やら熱心に読んでいる

ようだ。

……掲示板かな？

「はい。最近ドラゴンフルーツが市場に出始めたようです。恐らく新しいレシピもあることでしょう」

「なるほど。新しい食材か」

「ドラゴンフルーツってなんなの？」

「サボテンの実ですよ」

「さぼてん！」

「ええ」

「ふむ。ドラゴンフルーツは美味しいぞ。最初は赤い汁に圧倒されるが、味の薄いキウイというか、なんともいえない触感が癖になってな」

「あーはいはい。わかったわかった。後で行くから」

志貴崎さんの食い物談義に付き合っていたら日が暮れてしまう。

そんなわけで、俺達は各自ピラミットに関するクエストを受注し、市場を軽く冷やかして町を出た。

町を出れば、そこはどこまでも広がる砂の海。

乾いた強風が吹き荒れ、砂が舞う。

所々に申し訳程度に顔を出す草と岩、それ以外は全部砂。

砂、砂、砂。

そんな中ぞろぞろと歩きながら、適当に雑談する。

「そう言えば、ピラミットは行ったことないなあ。定番ダンジョンらしいけれど」

「そだねえ」

「前来た時は単純に、『ゲート』の移動登録するためだけに来ただけですからね」

「そだっけ」

「そう。ミキが港からここまでで、暑い暑い繰り返すからすぐ『ゲート』で帰った」

「あら」

山城さんが舌を出して、『てへぺろ』した。綺麗に片目だけをつむったウインクを添えて。

「てへぺろ」

「口に出しやがった!？」

山城 ミキ、恐ろしい子!

「けど、あれって結構前だったよね。確か一ヶ月くらい前?」

「そうですね。なのでもしかしたら、適性レベルはかなり超えてるかもしれません」

「えーつまんなーい」

「連携の訓練になる」

「うむ。そうだな」

「狭い場所だと白夜の出番だし」

「ガウ」

白夜が嬉しそうに俺の周りを回る。

「むむ……」

irisさんの声があったので振り返ってみると、俺達に少し遅れて会話に入る事もなく、器用にウインドウを何個も出しながら、

難しい顔をしてボールで何かをかき混ぜている。
流石というか何というか。

「早速調理しているのか？」

それに気づいた志貴崎さんは、林檎を齧りながら歩を緩め、irisさんに並んで調理している物を覗き込んだ。

「ショートケーキの生地に、先ほど購入した『ドラゴンフルーツ』をオプシオンとして混ぜ込めば、どうなるかと思ったのですが……」

irisさんはボールから泡立て器を持ち上げて、志貴崎さんに混ぜている途中の生地を見せる。その色は……紫？それも少し蛍光気味の。

「……食欲をそそる色では無いな。だがまあ、緑のケチャップもある位だ。一つ作ってみてくれ」

「キャンセルしようと思いましたが、そうですね。どういう味になるのか大変興味深いです」

irisさんはまた、泡立て器でボールの中の生地を混ぜ始める。志貴崎さんは目をきらきらさせて、irisさんの少し後ろに回った。多分彼女の調理ウィンドウ、ゲージが満タンになるのを見るためだろう。

「どんだけ食欲旺盛なんだ。」

「あとどれくらいでつくんだっけー」

「『サラーサ』にかなり近い位置にあったと思いますよ、マップ見ますか？」

「私あんまりマップから距離読み取るの、できないんだよねー」

「ミキは適當すぎる」

野谷さんはそう言いながら手にロング・ボウを出現させ、『ワイドアロー』を発動して空中に射る。

一本の矢がパツと野谷さんの手元を離れた瞬間、大量の矢となって放たれる。

「敵ですか？」

「ん。雑魚」

矢はぐんぐんと上昇、しばらくして角度を急変させ、青白い光の尾を引きながら直下。

多方から敵の物だと思われる断末魔が上がる。

同時にG U Iに経験値獲得の表示。フィールドを歩き回る雑魚モンスターが。

「え？あの技あんな技だっけ？」

「この前レアを拾った。矢に一回だけ敵へと向かって角度変更する特殊効果がつくみたい」

野谷さんが掲げているロング・ボウはなるほど、やんわりと紫色のオーラエフェクトがかかっている、弓の先端に宝石らしき物がはまっている。

その宝石はよく見ると紫の目玉だった。

うわ、目が合った。

「え！？ そんなレアあったの！？ いいなー私も欲しい」

「矢つかわねえだろ」

「それにMPを1.5倍使う」

野谷さんは、ロング・ボウを消滅させた。

「げー」

MP命の魔法使いを選択している山城さんは、あからさまに嫌そうな顔をしている。

その割にMP消費を多くして、詠唱時間を短くするマジックリングを装備しているのだから、どっちもどっちじゃ？ と思わなくも無い。

「おお、出来たか！」

「ん？」

「うへえ」

「それは……」

後を振り向くと、珍しく複雑な顔をしたirisさんが俺達に追いついていて、その両手には皿にのったワンホールの……蛍光ピンのクの……ショートケーキ？ ……え？ これケーキ？

「ご丁寧にカットもされている。……食べと？」

俺の脳内危険信号が『逃ゲロ！』と叫んで止まないんですけど。

「ショートケーキです」

うん。口に出して欲しくなかったかな！

「何でクリームまで蛍光色なんだ？」

「作成する料理に入れる隠し味オプションは、全体に反映されますからね……」

予想以上にぶつとんだ出来にirisさんの表情は変わらないが、

とても寂しそうな声を出す。

「ふむ？ しかしまて。美味いかもしれないじゃないか」

志貴崎さんも、これまた複雑な顔をしてショートケーキを一片つまんだ。

そしてそのまま豪快に嚙る。

「……うーん。組み合わせとしては面白いと思ったが……これは……目をきよるきよるさせて、何と評して良いのか分からない様子だ。そんなに不思議な味がするのだろうか。」

「どれどれ？」

興味が出てきた俺も、皿から一片つまみ、食べてみる。

……なんだろうコレは……。

「何か、ドラゴンフルーツの風味がバニラを邪魔しまくってるな」「やはりそう思うか？ ふむ。不調和音とはまさにこの事だな。スポンジにも、ドラゴンフルーツの種が混じるとは……いやはや、このゲームの料理システムは凄いな」

感心する所が違う。

「そうですか……」

しょんぼりしている。

「あー！ 圭！ ダメなんだよ女の子にそんな事言ったら！」

ええ、俺のせいだよ。そもそも志貴崎さんが無理矢理作らせたんだろうに。

「あー、まあ。次はジャムが何かにして、パフエにかけたらどうだろ。そういう合せ方は、このゲームの物理演算だと可能なはずだよ」

例えばパンの上にジャムをかけると、ゲームのシステム上それは『パン』と『ジャム』があるだけであるが、高性能な物理エンジンのおかげで、ジャムはまさに現実と同じようにパンの上に広がる。味は別々に感じてしまうので、現実と同じようにならないが。

「っ！！　そうですねー！」

がばつと顔をあげて、目に活力が宿るirisさん。珍しく語尾が荒い。

「流石圭です。なるほど、そうですね。そうするとさらにバリエーションが増えます。ジャムの他にも、クッキーに混ぜてチョコレートをのせたりも出来るでしょうか。ああ！ ドレッシングも。なんという事でしょう。思考が定まりません。これでは記憶容量が足りません。こんな時に外部ストレージさえあれば・・・」

ぶつぶつと呟きながら、ああでもないこうでもないと思考に沈むirisさん。

首を傾げ、目を明後日に向け、指をあごに当てて、頭を振る。

そのたびに彼女のクリーム色の髪がふるふると揺れ、太陽光の下、健康的な褐色の肌がその影模様を変える。

「ねー圭、このままじゃギルド倉庫、色んなジャムとかで一杯にな

るんじゃない？」

「奇遇だな。俺もそれを今思った」

どうやら慰めるつもりだった俺の一言は、彼女のとんでもないボタンを軽く、「えいつ」と押してしまったらしい。

「ふふふ、倉庫用のギルドをもう一つ作りましょうか？」

「ギルド『バラエティー・スイーツ』とか？」

「あ、それは良いですね。アイスクリーム屋さんみたいです」

「にゃー！ アイスクリームとか言わないで！ 食べたくないー！
！」

「そうですねー」

女の子達はどのアイスが一番おいしいのかで盛り上がっている。

まあ、そういう話題は男の俺が口を出すのは何とも気まずい物があるわけで。

手持ち無沙汰になった俺は、また俺達から少し遅れだしたirisさんの方を振り返ってみた。

「ふむふむ……。イチゴとライチはあまり色が良くないですね……」

どうやら手持ちの食材で色々なジャムを作りまくっているらしい。どれだけ常備食材を持っているのか。

「……何やってるんだ？」

「ふあふいふあ？」

そしてirisさんの少し後、最後尾には志貴崎さん。口元を真っ赤に塗らして何かを食べている。

もごもごしながら喋るな。

俺は志貴崎さんの方に近寄り、食べている物を見た。
……ジャムだ。

「なんで食べてるんだよ？」

「やはりこういうのは、食べてみないと味が分からないだろう？」

『分からないだろう？』じゃねえよ。この筋肉。

「で、美味しいのか？」

「微妙だな」

そう言いつつ、志貴崎さんは手元の瓶からジャムをすく……。

「何種類あるんだよそれ!？」

彼の手には、沢山のジャム瓶が抱えられていた。全て色が違う。

「どんだけ食うつもりなんだよ!？」

「5種類くらいか」

赤、緑、ピンク、白、黄色。どれもこれも全然色が違う。

そのジャムを、志貴崎さんは手ですくって口に頬張る。

「そうか。口の周りが汚れていたのは、手で直接すくっていたせいなのか。」

「何でスプーンとかで食べないんだ？ 熊か？ プさんか？」

「ふあいやーすとーむ!!」

その時、前方から山城さんの大きな声が出たので、そちらを向く。それと同時に大きな火柱が轟音と共に立ち上がった。

「あははははは！！ 燃え上がれ ！！」

「な、なんだ！？」

慌てて駆け寄った俺に、鬼谷さんが少し困った顔を向けた。

「どうやら、雰囲気暑さにやられたようで」

「何だよ雰囲気にはやられたって！」

「ごうごうと燃え上がる炎の渦はとどまる事を知らない。

これ絶対最大まで貯めやがったな！？ いつもの威力が全然違うぞ！

「あーっーいー！！ あいすっっーいー！！！！」

山城さんの「アイス」がどこまでも砂漠に染み渡り溶けていく。

「あいすっっっーいー！！！！」

どうやらモンスターが居たらしい。経験値が加算されたという口グ表示が。恐らく炎耐性付きだったと思うのだが、それでも倒しきるとは。レベル差、恐るべし。

「あーはいはい。わかったわかった。このゲーム終わったら皆でアイス食べに行こう？ な？」

両手を掲げたツインテールの後姿に声をかける。

「本当！？ えへへー。私ねーミントアイスがいいなあー」

突然今までの暴走山城さんとは打って変わり、しなを作る。
遅いよ。色々と。

「私はラズベリーが良いです」

「チヨコ」

「何だ！？　アイスか？　俺はだな」

「はいはい。わかったわかった。とりあえず進むぞ。このままだと
いつまで経ってもピラミットつかねえぞ」

「……はい」「……」

「……黒い……これは流石に無いですね」

「はいはい、irisさんも料理一旦止めて」

「……わかりました」

本当。歩くだけでどれだけ時間かかるか分ったもんじゃ無いぞこ
れは。

「ワフ」

「あー、白夜。お前だけだよ黙って俺についてきてくれるのは」

俺は、今まで横を歩いていた白夜の頭を撫でた。

六話 ピラミット、そこ、畏ですよ？

それからしばらくして、俺達はピラミットへと到着した。

「あ、スフィンクスいないんだー」

山城さんが辺りを見回す。

「確かに、ピラミットと言えばスフィンクスだなあ」

俺達の目の前には、大きな入り口をぼっかりと開けたピラミットが一つ。近づいてみると分かるが、かなりの巨大さだ。

柱や壁などの遺跡後のような物も周りに特に無く、どこまでも砂漠が広がるだけでピラミッド自体もつるつると太陽光を反射する、肌色に近いマーブル柄の岩を組み上げて作られているようだ。

703

「大きいですねえ」

「ねね、何でエジプトじゃないのにピラミットあるの？」

「そんなに細かく考えてないんじゃないか？ 砂漠と言えばピラミットだろう」

「そんなもんなの？」

「砂漠があると、ピラミットのダンジョンがあるんじゃないかなって、期待するのは事実かな」

「綺麗ですね」

鬼谷さんがピラミットに積まれた岩の一つに手を当てる。

「つるつるしています」

「普通こういうのって、風化したりしてぼろぼろになってるはずじ

「や？」

「そうですね。現実にあるもつとも有名なピラミット『クフ王のピラミット』は、完成当時はとても色鮮やかな化粧がなされていたようです。しかし時間と共に風化し、その入り口も砂によって埋もれてしまいました。現在入り口として機能しているヶ所は、ダイナマイトにより爆破した穴を利用しています」

「ほえー」

「つまり、このピラミットは新しいと？」

「どうでしょうか。これは『ゲーム』です。椀が先ほど言ったように『そんなに細かく考えていない』可能性はあります」

「わかった！宇宙人の船だ！！」

突然山城さんが空高く腕を振り上げ、ぴんと人差し指で天を突く。

「……ないない」「……」

「えー」

さすがにそれは飛躍しすぎだ。

そもそもこれはファンタジーだ。そりゃあ最終的には太陽が落ちてきたり、星間移動したりSF色が少しはあったりするが。

「じゃあロボット」

「ろぼお？」

「ロボット……！」

やばい。山城さんが暑さ（の雰囲気）にやられて、段々アホの子っぷりが酷くなってきた。

「きつとどこかにコクピットがあって、そこから動かせるんだよ！

「……！」

「何で自信満々なんだよ」

アホの子が。

山城さんはピラミットの岩を登ろうとするが、岩の二つ二つは1.7Mくらいの高さがある。登るのは難しいと思うのだが。

「はいはい。アホな事やってないでさっさと入るぞ」

「アホって何よー!!」

「ほら、さっさと行くぞアホ」

「アホ言つな!ぎゃー!つまむなー!!」

「ふふふ」

「ミキ、かわいい」

志貴崎さんが一生懸命登ろうともがく、山城さんのロープ首根っこを掴んで持ち上げる。まるで猫だ。山城さんはしばらくじたばた暴れるが、無駄だと観念したのか、だらりと手足から力を抜いた。

皆でピラミットの中に入る。

ピラミットの中は薄暗く、外と同じ様な岩で覆われた廊下が奥まで延々と続いている。

所々に壁画のような物が踊り、怪しげな雰囲気抜群だ。

少し埃っぽいような、古臭いような匂いが鼻をくすぐり、ランプの火がてんと灯っている。

その光景は灼熱地獄の外と打って変わって、涼しげな印象を受ける。

「あー、何か涼しい気がするー」

「ミキは周りの雰囲気の影響されすぎ」

「いいじゃんいいじゃん。あー涼しいー(気がする)」

「ふふふ」

だらしない顔になる山城をよそに、irisさんが壁画を調べている。

気になった俺は、irisさんの横に並んで声をかけた。

「どうした？」

「この壁画は、キャプチャーした物ではありませんね」

「ん？」

「現実にある壁画の画像や資料をコピーした物ではなく、一から描いたテクスチャーを貼り付けています」

「ふーん」

「ここまで『こだわり』を持って作られているのに、どうして風化させたピラミットではなく、ここまで綺麗な状態で作ったのでしょうか。とても不自然に感じます」

「この場所自体に、何らかの役割がある、と？」

「可能性はあります。が、なんとも言えませんね」

irisさんは熱心に、壁画の細かい部分を調べている。

「何か分かりそうか？」

志貴崎さんも俺達に並んで壁画を眺める。恐らく、俺達の話聞いて気になったんだろう。

「……分かりません。現時点での私の処理能力では、これらの壁画に関連する物が何なのか、検討もつきません」

「irisが分からないのであれば、これは解く物ではないのだから」

「とうとうと？」

「時間の経過や、何かのクエストの要素として、このピラミットの謎が解き明かされるって事」

「うお!？」

いつの間にか野谷さんを含め、皆壁画の前に集まっていた。

「そういう事だ。これは俺達『プレイヤー』が解くものではない」

「なるほど」

「へえええ」

皆で地面から天井まで、びっしりと壁に描き込まれた壁画を見上げる。

鳥達が踊り、ラクダが歩き、よくわからない動物が寝そべっている。その周りを人々が取り囲み、焚き火をしたり手を上げたり。

象形文字のような物も所狭しと書き込まれ、何かの儀式とも取れるが、これが何なのかまったくわからない。

「雰囲気作りじゃないのー？」

「ふふん。こういうのはだな、映画とかでは大抵目の部分がスイッチになっただけだ」

「えー!? そうなの!？」

「良くありますよね、そういうの」
「ん」

志貴崎さんのなんとアナログな『映画お決まりあるある』に皆、頭を上下に振る。山城さんはあまりこういった物語を読んだり見たりしないようで、目をキラキラさせて壁画をべたべたと触りまくる。そんな様子を、皆でほほえましく見守る。

「ははは、山城さん。こんな入り口近くの壁画に、そんな都合良く

「あつた!」

「……え!?」「」
「流石ミキですね」

興奮した様子でツインテールを跳ね上げながら、山城さんが振り向いた。

近づいて見ると、確かにそこだけボタンのように盛り上がっている。変な動物の目の部分だ。他は多少の凹凸はあるものの、このヶ所以上に出っ張った所は他には無い。

「怪しい……」

根拠は無い。が、俺の『巻込まれ予感センサー』がびんびんに反応している。

『ダメダヨ押しチャダメダヨ』って言っている。

「怪しいですね」

「目立ち過ぎる気がする」

「何とも言えません。統計的なデータは外部への接続ができないので、提示できませんが」

皆でボタンを覗みながら、結論は一緒らしい。

……トラブルメーカーの二人を覗いて。

「えー!? 押そうよー! ねえ椀!」

「そうだな。こういうのは押してこそその花という物だ」

「何の花だよ」

山城さんは単に好奇心旺盛なだけだが、志貴崎さんは悪い予感を感じつつも、『その方が面白そう』だとあえて突っ込むタイプだからタチが悪い。

「こつこつのはだな、たいてい巨大な玉がおちてきたりだな」
「あーもうお母さん五月蠅い！ ぼち！」
「あー！！！」

山城さんが俺の話の話を聞かずに、指をピンと伸ばして突起を押し込む。

壁の中に埋まると同時にカチリという音、壁の中で何かガチガチと微かな振動。

「いやいやいやいやいー！！！」

「あらあらあら」

「そんな気はしてた」

「何が起るのでしょうかね」

「楽しみだな」

「ガフ」

慌てる俺をよそに、皆こつこつなる事を薄々感じていたようだ。既に興味は『何が起るか』にシフトしているらしい。

何でこつこつ皆、トラブルへの耐性値だけは高い！？

何が起っても対処できるように、この中で一番の反射神経を持つ白夜の首に手を回す。

こいつは筋力値STRがかなり高いので、咄嗟に飛び退いたとしても俺ごと移動する事ができる。

カチカチ、カチャカチャ。

「「「「「「.....」」」」」」

ガツチャンガツチャン、ちゃっきちゃっきちゃっき。

「何で閉じるのはそんなに早いんだよおおおおお………」

そして穴があった場所から聞こえる、くぐもった上村の声。どんどんフィードアウトしていった事から、もうかなりの深さまで落ちた事がわかる。

「いや、突っ込む所そこじゃないと思う」

山城が真面目な顔で上村のズレた突っ込みを指摘するが、恐らくその声は上村に聞こえない。

「ミキ、今はそんな事言ってる場合じゃないと思う」
「ええ！？ 上村さん！？ どとどとどすれば！？」

完全にパニックになる鬼谷。

「落ち着け。山城、もう一度押してみろ」
「はい」

冷静に指示を出す志貴崎に、山城が軽く答え、壁画へと再度向かう。が、

「あれ？ へこんだままだ」

壁画にあったボタンは完全に入り込んでいて、しばらく先ほどのように作動する事は無いように思えた。

「びびりしよー」

『てへぺる』する山城。

「えええええ!! 『どうしよー』じゃないです!! どうするんですか!？」

「テヘペロ」

「それ、気に入ったのか？」

「結構」

依然うろたえている鬼谷をよそに、志貴崎と山城は脱線し始めた。そんな彼らを横目に、野谷が思考に沈む。

「白夜」

「クウーン」

申し訳なさそうな声を出す白夜に、彼女は撫でながらしゃがんで顔を寄せる。

「大丈夫。白夜のせいじゃない。圭が油断しただけ」

そう。彼らは突然の事態に大小差はあったが、身構えていた筈だ。気を抜いた上村に落ち度がある。

「圭の居るところ、わかる？」

首を振る白夜。

「……………」

さて、どうしようか。

動物である白夜は上村のペットだという関係上、ゲームシステムによる見えない糸でつながれていて、ほとんどの場合どんなに離れ

ていても、ペットは主人の方向や位置が分るものだ。
それはもちろんプレイヤーの気配探知とは雲泥の差がある。
つまり野谷にも上村の探知は無理。

「iris」

「策、無しです」

野谷の質問にirisは先回りして口を開く。

「あの罫はゲームのシステム上、恐らく『別のマップへの移動ポータル』です。穴の途中に瞬間移動するポータルが設置されており、しらない間に隔離されたマップへと移動するのでしょうか」

「スクロールは？」

「移動スクロールは確かにダンジョン内で使用は可能です。しかし、この『罫』の『役割』

からして、無理でしょう。恐らくいかなる方法を持ってしても、外部へ移動をする事はできません。……たった一つを除いて」

「圭が自分で出口を探す」

「そうです」

ゆえに策無し。

静かに赤い瞳を向けてくるirisに、野谷は一つため息をついてウインドウを展開した。

「わかった」

そして『コンタクト』を開き、『kei』を選択。

魔法、スクロールによる移動は恐らく出来ないこと。

白夜が上村を感知出来ないこと、

一人でどうにかしないといけないこと。

マップのレベルから言っ、圭一人でも何も問題は無いと思われ
る。」

要点を完結にまとめて上村に送信。

しばらくして上村からメッセージが返ってくる。

「『がんばる^p^』って返ってきた」

「ふむ。大丈夫そうだな」

「そ、それは大丈夫なんですか？」

「何も問題はないでしょう」

不安げな鬼谷であるが、irisと野谷が検討した結果大丈夫だ
と言っのだから、信じるしかない。

「それよりも、上村がどこから出てくるのか分らない以上、最深部
まで行く必要があるな」

志貴崎がにやにやと、どこまでも続く廊下の奥を見据える。

「え？　なんで？」

きょとんとして彼の方を見上げる山城。

「そりゃあ、あいつの攻撃力では、もし何かの間違いで『ボス部屋』
にでも出てしまった場合、レベル差があっても倒すのが大変だから
だ」

「そうだね」

志貴崎に続いて野谷も、うつすらと微笑んで同意する。

「なるほどー」

「そうですね」

「は、はあ」

いざ、ピラミットの奥へ。ダンジョンはまだ入り口だ。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7712y/>

能力者は赤信号を認めない～彼らの遅すぎる青春～

2012年1月6日22時46分発行